5月23日（土）

ポスター発表・学生セッション（3号館　3-401，403，501）

	会場	3-401
	会場担当	大槻　知世，矢田　勉
	P-1　P.121	『日本語歴史コーパス 平安時代編Ⅲ 漢文系資料』の公開と活用―法華百座聞書抄・高山寺本古往来・尾張国解文の公開― 山本 久（京都大学），呉 子凡（総合研究大学院大学学生），田中 牧郎（明治大学），鴻野 知暁（大阪大学）， 小木曽 智信（国立国語研究所）
	P-2　P.127	『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅲ抄物』の公開 青木 博史（九州大学），村山 実和子（日本女子大学），渡辺 由貴（常葉大学），北崎 勇帆（大阪大学）， 古田 龍啓（九州産業大学），小木曽 智信（国立国語研究所）
	P-3　P.133	近代文語文への長単位形態論情報付与の試み―解析器Monakaの開発と形態論情報規定の検討― 近藤 明日子（国立国語研究所），尾崎 太亮（東京農工大学学生），浅田 宗磨， 小木曽 智信（国立国語研究所・総合研究大学院大学）
	P-4　P.137	形態素解析サービス「Web茶まめ」における文節・長単位解析機能の実装と公開 尾崎 太亮（東京農工大学学生），浅田 宗磨，近藤 明日子（国立国語研究所），堤 智昭（筑波大学）， 小木曽 智信（国立国語研究所・総合研究大学院大学）
	P-5　P.143	現代語コーパスを用いた長単位解析器の精度評価　佐藤 龍弥（筑波大学学生）
	P-6　P.149	VR空間における指示詞コソアの選択―現場との比較と通して―　岡崎 友子（立命館大学），藪野 光斗（立命館大学学生）
	会場	3-403
	会場担当	岡田　一祐
13:00 ｜ 14:00	P-7　P.155	日本語の二字漢語における準派生的構造の再検討　秦 周漢（総合研究大学院大学学生）
	P-8　P.161	児童作文における敬語形式―1950年前後に愛知県で作成された児童文集を資料として―　加藤 恵梨（愛知教育大学）
	P-9　P.167	現代日本語における新語・俗語の使用実態―データサイエンスに基づいた可視化手法を用いて― 谷口 ジョイ（静岡理工科大学），柴田 希隆（静岡理工科大学学生），山岸 祐己（静岡理工科大学）
	P-10　P.173	東京都新島における児童生徒の方言意識　西郷 太一（総合研究大学院大学学生）
	P-11　P.179	語から同一対象を思い浮かべる人の語の認識と呼称における地域差の検討―「バインダー」の連想・呼称・認識対象調査― 吉岡 花菜（大阪大学学生）
	会場	3-501
	会場担当	小出　祥子，堤　良一
	G-1	分類語彙表に基づく古典日本語比喩表現の自動検出の試み　ZHU HANG（東京農工大学学生）
	G-2	社内対面会議における疑問文の使用と発話効果―RWCP会議音声データベースを用いた分析―　田 雷（立命館大学学生）
	G-3	文字環境における仮名・漢字対立の印象と選択　髙野 真未（東京学芸大学学生）
	G-4	八重山語波照間方言の尊敬語oor―丁寧語化の萌芽的使用に着目して―　朴 校演（東京大学学生）
	G-5	『浮世風呂』における副詞の性差　霍 佳イ（関西大学学生）
	G-6	非情物主語ニ受身と視点　西畑 宏紀（大阪大学学生）
	G-7	古代日本語における素性接辞の痕跡と日琉祖語の分裂自動詞性　白鳥 詩織（京都大学学生）
	G-8	一字漢語サ変動詞における活用のゆれについて―コーパスに基づく計量的考察―　李 昕潔（九州大学学生）
	G-9	「逃げないんだ！」はなぜ禁止の意味を表せないのか？　劉 洋（学習院大学学生）
	G-10	ライトノベルにおける色彩語の修飾対象の分析―人物描写を中心に―　柴原 麻衣（和洋女子大学学生）
14:00 ｜ 14:15		フリータイム（15分）

会員総会・大会式典

会場	2号館　実学ホール
司会	会員総会：川瀬　卓　大会式典：高木　千恵
14:20 ｜ 15:00	会員総会 大会式典

シンポジウム

会場		2号館　実学ホール
15:10 ｜ 18:10	S p.213	シンポジウム **危機言語のデータベース―日琉諸語におけるデータベースのこれまでとこれから―** パネリスト　狩俣　繁久（琉球大学） CARLINO Salvatore（大東文化大学） 日高　水穂（関西大学） 指定討論者　三宅　俊浩（愛知学院大学） 企画担当　小川　晋史（熊本県立大学）　久保薗　愛（岡山大学）

7号館　THE CHARGING PIT & DINER

18:30 ｜ 20:00	**懇親会** 司会：有田　節子

5月24日（日）

口頭発表

会場	A会場（3-401）	B会場（3-402）	C会場（3-403）	D会場（3-501）
司会 （補助）	幸松　英恵　（中﨑　崇）	佐伯　暁子　（山本　佐和子）	田村　早苗　（永谷　直子）	堤　良一　（中澤　光平）
9:30 ｜ 10:10	A-1　P.1 日常会話における 例示の「たり」の 使用文脈に関する考察 三好　優花 （筑波大学）	B-1　P.31 変体漢文における助字「被」の 尊敬用法の成立 ―10世紀の古記録を中心に― 呉　子凡 （総合研究大学院大学学生）	C-1　P.61 新聞における指示詞の語形選択と 記事分野の相関構造 ―BCCWJ所収『読売新聞』の コレスポンデンス分析から― LYU　MENGTING （立命館大学学生）	D-1　P.91 新語「味変（あじへん）」の 使用増加要因 谷口　悠 （同志社大学学生）
10:20 ｜ 11:00	A-2　P.7 文末に希望表現を伴う ト条件文の成立 竹林　栄実 （東京大学学生）	B-2　P.37 「情報を整理して示す」 字音形態素「表」の定着 ―漢訳洋書の影響― 伊藤　真梨子 （学習院大学）	C-2　P.67 比喩の形式と出現分布の関係 ―肯定・否定の形式を中心に― 菊地　礼 （長野工業高等専門学校）	D-2　P.97 近現代日本語における 副詞ジョジョの展開 金子　春子 （筑波大学学生）
11:10 ｜ 11:50	A-3　P.13 接続表現「がてら」の意味と 構文的成立条件 ―類義形式「ついでに」 「ながら」との対照分析 ― 大北　まき （大阪YMCA学院）	B-3　P.43 「津波」成立史考 吉野　早穂子 （お茶の水女子大学学生）	C-3　P.73 評価成分における 程度修飾について 常　舒婷 （早稲田大学学生）	D-3　P.103 現代・近世日本語における イツ形指示詞の指示対象について 髙田　篤志 （立命館大学学生）
休憩	（70分）			
司会 （補助）	岡田　一祐　（小出　祥子）	山本　佐和子　（佐伯　暁子）	永谷　直子　（田村　早苗）	中澤　光平　（堤　良一）
13:00 ｜ 13:40	A-4　P.19 ハ行音の摩擦音化とパ行音の分布 高山　知明 （金沢大学）	B-4　P.49 中古和文資料に見られる 動詞連接の構造 加藤　咲子 （筑波大学学生）	C-4　P.79 ［形容詞語幹＋形容詞］型 複合形容詞における連濁 ―新奇表現を中心に― 趙　萱 （大阪大学学生）	D-4　P.109 北陸諸方言における主語・ 目的語の格標示 ―動作主性・有生性・主題性の 関与する示差的項標示― 松倉　昂平 （金沢大学） 米村　雪乃 （東京外国語大学学生）
13:50 ｜ 14:30	A-5　P.25 日本梵語音における -k入声をとおした ヴィサルガの受容 坂水　貴司 （広島経済大学）	B-5　P.55 動詞の自他対応関係の史的展開 ―「のびる」「のべる」 「のばす」を対象として― 平野　杏 （名古屋大学学生）	C-5　P.85 現代日本語におけるテミセルの 用法別の表記 堀越　颯斗 （筑波大学学生）	D-5　P.115 文政期備中の膝栗毛の 方言資料的価値と 「疑問詞＋仮定形」型 疑問文の成立 三宅　俊浩 （愛知学院大学）
休憩	（20分）			

ワークショップ

会場	A会場（3-401）	B会場（3-402）
会場担当	有田　節子	中﨑　崇
14:50 ｜ 16:20	W-1　P.185 少数言語・方言の 音声対話型AIの開発 ―AI時代における 低リソースデータの 可能性と課題― 坂井 美日　　中川 奈津子 宮川 創　　高道 慎之介 佐藤 なな子　高橋 哲朗 村留 陵弥	W-2　P.199 BCCWJ2の構築を通して コーパスの新展開を考える 山崎 誠　　呉 寧真 近藤 明日子　落合 哉人 小木曽 智信

日常会話における例示の「たり」の使用文脈に関する考察

三好（みよし） 優花（ゆうか）（筑波大学）

1. はじめに

日本語記述文法研究会（編）（2008）では，「たり」の用法について，「「たり」は複数の事態を例示的に並べて提示する。並べられている事態は全体の一部であり，ほかにも事態があることが暗示される。」（日本語記述文法研究会（編）: 273）と説明されており，さらに，「ほかの事態が想定されていない「たり」もある。その場合，「たり」は評価や意外感など感情的な意味を表す。」（日本語記述文法研究会（編）: 275）とも説明されている。本発表では，前者を「例示用法」，後者を「非例示用法」と呼ぶことにする。

例示用法の「たり」は，日本語教育現場において一般に初級レベルの学習者に教えられえており，日本語の教科書を見ると例えば以下のような例文が掲載されている。

(1) 休みの日はテニスをしたり，散歩に行ったりします。(『みんなの日本語 初級 I 』p.160)

発表者は，初級レベルの学習者に日本語を教える際は（1）のような例を提示しつつ，冒頭に示した日本語記述文法研究会（編）（2008）のような説明を行っていた。ところが，学習者から，これだけでは何のために「たり」を使用する必要があるのか，また，「〜て」とどのように違うのか，理解ができないと質問を受けた。そこで，本発表では，『日本語日常会話コーパス』（CEJC）（小磯他 2023）の用例をもとに，日常会話において例示用法の「たり」がどのような文脈で，何を伝えるために使用されているのか考察する。

2. 先行研究

「たり」について，寺村（1991）では，他にも例があることを含意する「一部列挙」であることや，「〜て」が並列された順に起こることを表すのに対し「たり」は順序を表さないことが指摘されている。また，森山（1995）では，「〜て」が並列された要素を共に満たす「交差的並列」であるのに対し，「たり」は「複数場面を結合させる」「結合的並列」（森山 1995 : 134）であると指摘されている。これに対し，中俣（2015）は，森山（1995）の「結合的並列」という指摘に関して，「複数の場面」を並列しているとは言えない場合があるとして，「ー網羅性」という用語を用いて統語的特徴を説明している。加えて，中俣（2015）では，意味の面では，「「たり」はあるテーマの異なる側面，すなわちテーマについて出現可能性をもつ事態の並列である」（中俣 2015 : 215）ことが指摘されている。また，従来指摘されてきた他にも例があることを含意するという特徴は語用レベルのものであるとしたうえで「たり」には「排他的推意」がないと指摘されている。これらの議論は，「たり」がどのような構文であるかを明らかにするものとして重要であるが，具体的に「たり」がどのような文脈で使用されるのかという点については議論されていない。その点に踏み込んだ研究としては，語用論的にどのような効果があるのかについて考察した大和（2010）や，具体的にどのような文脈で使用されるのかについて考察した陳（2022）が挙げられるが，これらは非例示用法に焦点が当てられており，例示用法の「たり」の使用文脈に関する

研究は十分ではない。例示用法を含めた「たり」の表現効果について示唆を与える研究としては，森山（1997）が挙げられる。森山（1997：60）は，「タリ構造は，全体の状況の一部として当該事態を取り上げるという意味をもつことになり，その背景にある事態をも問題にする時に使える」として，例えば，次の例が「「悪い父親だ」という一般的性質づけ（評価）」を伝えることができると指摘している。

（2）さっきは，しんのすけにどなったりして，悪い父親だ。（森山 1997：60）

この指摘は，「たり」の使用文脈を考えるうえで重要な指摘であるが，森山（1997）は「たり」構文の意味を明らかにすることと，そこからどのように「冗談」の用法（本発表における非例示用法に含まれる）が生じたのかを説明することに主眼が置かれており，例示用法の「たり」の使用文脈を整理することはなされていない。

以上の通り，先行研究では，「たり」の例示用法について，何をするために，どのような文脈で「たり」が用いられるのかが十分に明らかにされておらず，先述したように日本語教育現場で学習者に「たり」を何のために使うのかが伝わらないといった問題が生じ得る。そこで，本発表では，例示用法の「たり」について，CEJC の用例をもとに，日常会話において，どのような文脈で，どのようなことを伝えるために用いられるのかについて考察する。

3. 調査対象

次の方法で例示の「たり」を抽出した。まず，コーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて，長単位検索で検索条件をキーの語彙素が「たり」として検索した。その結果得られた 2239 例のうち，語彙素細分類が空欄のもの（「完了」「断定」ではないもの）2224 例[1]について，以下の条件で考察対象を選定した。

① 「たり」が複数使用されている用例を考察対象とする[2]。ただし，1 文（1 発話）の中ではなくても，次の例のように並列されていると判断できるものは「たり」が複数使用されているものとして扱う。なお，複数の「たり」をあわせて 1 つの用例として数える。また，言い直しなども 1 例としてカウントする。例えば，（3）は 1 例として数える。

（3）葉山「で近くの図書館から本借りたりあのま国会図書館に行けばあるんですけどこっから国会図書館遠いのでまずは買えるものは安いものはアマゾンでできるだけ買って（秋山：うん）であとオリオン書房ってゆうのはこの辺にある立川にある本屋さんなんですね（秋山：うーん）でまオリオン書房とかアマゾンとかで借りたりあ買ったり立川図書館から借りたり（下曽山：ふーん）あと法律の本が当たったらここ一橋大学が近いので一橋大学のほうにあの図書室借りてったり」（W005_001，215390）

② 「たり」が複数使用されている用例のうち，次のような反復用法[3]の用例は，一部の例を挙

[1] 中納言で語彙素細分類が空欄になっている例のうち，「完了」と思われる例（「してやったり」という例）が 2 例見られたため，それも除外した。

[2] 陳（2021）では，タリが 1 例しか出現しないものについても，他の要素が想定できるかどうかという基準で例示用法か否かを判断しているが，判断に迷った「保留」とされている例もある。本発表では，客観的に判断できる基準として，まずはタリが複数使用されているものを考察対象とすることとした。

[3] 岩田（2007）は，「行ったり来たり」のような例について，他の動作が暗示されているわけではなく，「並列される 2 つの動作が繰り返し交互に行われることを表している」（岩田 2007：98）として，「例示」とは

げているとは見なせず，例示用法とは異なるため考察対象外とする。

(4) 塚田「なんかさっきも点いたり消したり点いたり消えたりなってたんだよ」

（T007_004，30240）

上記の基準で用例を整理した結果，用例数は 1830 例となり，うち 1523 例が「たり」が 1 つのみの用例，51 例が反復用法，256 例が考察対象の例示用法の用例であった。

4. 調査結果

本発表では，「たり」で並列されている例が何の例になっているのか，何を伝えるための例なのかという観点から用例を分析し，表 1 に挙げる 10 のタイプを抽出した。表 1 に挙げているのは，5 例以上の用例が見られたタイプである。以下，用例数が特に多いタイプを中心に，例を挙げながら具体的に説明する。

表 1　用例のタイプ

タイプ	説明	用例数
評価	何らかの評価を述べるもの。	67
体調	体調について述べるもの。	9
場所の描写	どのような場所なのか述べるもの。	8
過ごし方	どのように過ごしているのか，生活のスタイル等を述べるもの。	45
手段	何かをする手段について述べるもの。	32
ものの説明	聞き手が知らないものについて，それがどのようなものなのか説明するもの。	20
多様	様々なものがあること自体を述べるもの。	14
時	主節で述べられている事態がどのようなときに起こるのかを述べるもの。	9
要因	ある事態が起こった要因について述べるもの。	7
手順説明	何かの手順を説明するもの。	6
その他		39
計		256

① 評価タイプ：67 例

最も用例数が多いのは，評価を述べるタイプであった[4]。例えば，次の例では，新潟が楽しかったことを述べている。

(5) 聡太朗「新潟ですか　あ　いやー楽しかったですよ　ほんとになんかいろいろなんかなんかあとごちそうさしてごちそうもらったりとかね（紀子：うん　んんんん）なんかあと鉄道博物館連れていってもらったりとかね」（K004_022，2010）

(5) では，「たり」を使ってしてもらったことを列挙することで，他にもしてもらったことがあることを示唆しつつ新潟の楽しさを効果的に伝えていると考えられる。

次の例では，女性がいかに大変であるかを述べる文脈で「たり」が用いられている。

(6) 北村「子供産んだりね（そう）掃除したりね」

岡崎「産めないもんね　うん　掃除」

奥野「掃除したり洗濯したりご飯作ったり」

区別して「反復」と呼んでいる。

[4] 中俣 (2015) でも，「同評価」というタグが付与された「たり」の用例が多く見られている。中俣 (2015) におけるタグは意味論レベルで，要素が並列される動機について考察するためのものであり，本発表の「評価」とはレベルが異なるが，重なる部分もある。

岡崎「掃除は男の人あー洗濯したり大変」　　（T017_005c,8180）

ここでも，「たり」を使ってやることがいかに多いのかを伝え，大変さを表現している。

以上の 2 例は「楽しかった」「大変」のように評価を表す言葉が発話に出現している。こうした例は評価タイプ 67 例のうち 40 例であり，その他の 27 例は次の例のように評価を表す言葉が明示的に現れない例であった。(7) は，フェスへの出店について話している場面である。

(7) 杉田「あと結構よっしーはなんかフェスとかに出して何万円も払ってその日二日ぐらい出すとかなんかそうゆうイベントに絡んでたけど（優子：うん）それもなんか当たり外れがあったりとかするでしょ（優子：そうだね）雨が降ったりとか」

（K002_010，46890）

(7) では，評価語は使われていないが，「たり」で例示されていることやそれに類することが他にもあることを暗示し，フェスへの出店の難しさを伝えている。

また，「体調タイプ」(9 例)，「場所の描写タイプ」(8 例) も，ある種の評価付けを行うものであり，「評価タイプ」に近いタイプ，あるいは，「評価タイプ」のうちの一部であると言える。例えば，次の例は，「場所の描写タイプ」の例で，職場について説明する文脈での発話である。ここでは，「たり」で並列された要素をもとに，職場がどのような場所なのか聞き手に伝えている。

(8) 理代子「図書館てゆうかこう岸和田センターってゆうすごいおっきい図書館とあとこうなんか貸しスタジオみたいのあったりなんかいろんなこう社会教育生涯教育のなんかいろんなことできたりとかするところので働いてるんですけど」(K008_016, 64550)

② 過ごし方タイプ：45 例

「評価タイプ」の次に多かったのは，次のように，過ごし方について述べるものである。

(9) 友澤「俺きょう朝からウインナーしか食ってないけど」

江袋「寝たり寝たり風呂入ったり酒飲んだりだからでしょ」(K009_019，19910)

(9) では，「たり」で並列された要素から，友澤のこの日の過ごし方について，例えばあまり活動的に過ごしていないなど，どのような 1 日だったのか読み取ることができる。

③ 手段タイプ：32 例

手段タイプの例としては，先に挙げた (3) が挙げられる。(3) では，本を入手する手段としてどのような手段があるのかを「たり」を用いて説明している。

④ ものの説明タイプ：20 例

「たり」の用例の中には，次の例のように聞き手がよく知らないものについて「たり」で例を挙げることによって説明しているものが見られた。

(10) 溝口「フォークダンスじゃなくてねフォークソングってあのフォークソングって何かってゆうとうーんまあ人々の歌ってゆう意味だよね（中略）フォークソングってゆうのは例えばアマアメリカの真似なんだけども　ジョーンバエズとかピートシーガーとか（中略）そうゆう人たちが自分の生活を歌ったり（真由美：ふんふん）（田

辺：はい）から命の大事さ歌ったり　で戦争反対の歌を歌ったり公害の問題を告発するような歌を歌ったりするってゆうことを自分の言葉で自分のあの演奏でやるってのがまあそれがフォークソソングだったわけですよ」（T013_013，86700）

（10）では，フォークソングをよく知らない人に説明する際に，直訳（人々の歌）だけでは分かりにくいことから，「たり」によって例を挙げることでイメージができるようにしている。

⑤ 多様タイプ：14 例

「多様タイプ」とは，次の例のように，様々なものがあること自体を述べる用例である。

（11）美津子（発表者注：保育園について）「みんなと仲良くなりましょうじゃなくてそん中には自分と合わない子がいたりこの子あかんなと思う子がいたりこの子素敵やなって思う子がいたりいろんな子がいる」（T021_008，83010）

（11）では，「たり」を使って保育園にどのような子供がいるか述べることで，ここに挙げられている以外の子供もいることを示唆しつつ，様々な子供がいることを伝えている。

5. 考察

本節では，なぜ「たり」が 4 節で見たような文脈で用いられるのかについて，先行研究で論じられてきた「たり」の意味・構文的な特徴をもとに考える。

「評価タイプ」が多く見られた要因については，森山（1997）で，「事態を全体状況の一部としてとらえるというとらえ方は，同類的なグループをいわば表現の背後にもつという意味になり，そこから質を問題にするような文脈で多用される」（p.60）と指摘されている。さらに，森山（1995）では，「たり」について，「個別の事態を結合的に並列しつつ，「～たり～たりする」という構造自体は，全体として，それらからなる，より大きな事態を示すことになっている」（p.136）とされている。つまり，「たり」は，並列された例と，類推される同類のその他の例とをまとめ上げて何かを伝える表現なのであり，その伝える内容が，「評価」や「体調」，「場所」，「過ごし方」，「ものの説明」等になり得るのだと説明することができる。1 節で述べた日本語教育上の問題について考えると，「たり」で挙げた例を通して伝えたいことが分かるような例文の提示・練習ができるよう工夫すると「たり」の表現効果を伝えられるのではないだろうか。

上記のタイプに対し，「多様タイプ」は，「たり」で並列された例をまとめ上げて 1 つの評価等を述べるのではなく，様々な例があること自体を述べるものであった。このような述べ方は，寺村（1991）等でも言われているように，「たり」が他にも例があることを暗示する表現であるという特徴から生じたものであると考えられる。「たり」を使うことによって，挙げきれないほど様々な例があることを効果的に述べることができるのである。また，このような述べ方が可能となるには，中俣（2015：202-203）で指摘されているように「たり」が「一網羅性」の表現であり，「ある個体は P だが，ある個体は Q である」という「複数個体読み」や，「ある場合には P だが，ある場合には Q である」という「別時間読み」が可能であることもかかわっている。例えば，（11）は，ある子供は自分と合わないが，ある子どもは素敵だと感じるという「複数個体読み」に支えられていると解釈できる。

6. おわりに

本発表では，何を述べるために「たり」が用いられているのかという観点から CEJC の「たり」の用例を観察することで，「たり」の使用文脈のタイプを抽出した。その結果，「たり」で並列された要素をまとめ上げて「評価」，「体調」，「場所」，「過ごし方」，「物の説明」等を伝えるタイプのほか，他にも例があることを示唆するという「たり」の特徴をいかして様々な例があることを述べる「多様タイプ」が抽出された。このように使用文脈を整理することは，日本語教育において何のために「たり」を学習者に教えるのかを考えるための示唆を与えうる。

一方で，特に日本語教育への応用のためには，「～し」などの他の並列表現との使用文脈の違いを明らかにすることも必要となる。また，本発表では，教科書の例文を出発点に例示の「たり」の使用文脈について考察を行ったため，「たり」が複数使用される例を調査対象としたが，中俣（2010）では，母語話者のコーパスでは「P たり Q たりする」という形で使われることが少なく，「P たりする」などのバリエーションが見られることが指摘されている。本調査でも，「たり」が 2 回以上出現する用例よりも「たり」が 1 回のみ用いられている用例のほうが多かった。今後は，「たり」が 1 回のみ使用されている用例にも調査範囲を広げ，考察を進めていきたい。

引用文献

岩田美穂（2007）「例示を表す並列形式の歴史的変化―タリ・ナリをめぐって―」青木博史（編）『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香（2023）「『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」『国立国語研究所論集』24

陳玉（2021）「話し言葉における接続助詞「たり」の使用傾向についての一考察」『国際文化学』34

陳玉（2022）「連続テレビドラマの会話文に見られる助詞「たり」の使用―非例示用法を中心に―」『ことば』43

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

中俣尚己（2010）「現代日本語の「たり」の文型―コーパスからみるバリエーション―」『無差』17

中俣尚己（2015）『日本語並列表現の体系』ひつじ書房

日本語記述文法研究会（編）（2008）『現代日本語文法 6　第 11 部　複文』くろしお出版

森山卓郎（1995）「並列述語構文考―「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐって―」仁田義雄（編）『複文の研究（上）』くろしお出版

森山卓郎（1997）「「うどんにマヨネーズかけたりして」―並立の意味―」『言語』26(2)

大和啓子（2010）「例示の助詞タリ，ナンカの語用論的効果」『表現研究』91

資料

国立国語研究所『日本語日常会話コーパス（CEJC）』データバージョン 2023.03，中納言 2.7.2

スリーエーネットワーク（編著）（2025）『みんなの日本語 初級 I　第 3 版 本冊』スリーエーネットワーク

文末に希望表現を伴うト条件文の成立

竹林栄実（たけばやしえいみ）（東京大学大学院生）

1. はじめに

現代語において、(1) が成り立たないように、順接条件を表すト条件文の文末には希望表現を伴いにくいことが知られ（北条 1964、宮島 1964 等)、これは条件文におけるモダリティ制約の一つに数えられることがある（ソルヴァン・前田 2005)。

(1) 春に｛なったら／なれば／??なると｝国へ帰りたい。(北条 1964 (6) 改変）[1]

それに対し、(2) のように、ト条件文の文末に希望表現を伴う場合があることを指摘した先行研究も存在する。

(2) ああ、こう暑くなると、ビールが飲みたいなあ。(小竹 2014 (29))

文末に希望表現を伴うト条件文が成り立つ場合もあると指摘した先行研究は少なく、成り立ちやすくなる場合についても、以下に示すように、それぞれ大きく異なった説明となっている。

村松（1992）……前件を焦点化したもの ((3))、後件の動作・行為の主体を主題化したもの ((4))。

(3) 冷たいものじゃないと飲みたくない。(村松 1992 (6))

(4) ??私は、横浜へ行くと中華料理が食べたい。(村松 1992 (46))

奈良（2012）……前件に「こう」が現れ、話し手と聞き手が共有している程度が著しい状況の中で、話し手の希望を述べつつ聞き手の意思を確認するもの。

(5) こう寒いと温泉行きたいよね。(奈良 2012 (33))

小竹（2014）……前件の事態の成立によって即時的・反射的に生じる感覚を表すもの。

(6) ああ、こう暑くなると、ビールが飲みたいなあ。((2) 再掲)

しかしながら、発表者が実際に用例を調査した結果、先行研究の説明では文末に希望表現を伴うト条件文の成立するケースを十分に説明し尽くしているとは言い難いのではないかという疑問が生じた。そこで、本発表では、文末に希望表現を伴うト条件文を網羅的に調査・分析し、その成立範囲を示す。

2. 調査結果

2.1　文末に希望表現を伴うト条件文の調査結果

用例は、国立国語研究所の各種コーパス（詳しくは稿末〔調査資料〕）から幅広く収集した[2]。

---

[1] 先行研究に挙がっている用例や収集した用例を示す際、句読点を付すなど読みやすいよう改めた箇所がある。なお、出典を記載していない例文は発表者の作例である。

[2] 用例の検索方法は以下の通りである。

キー：語彙素を「と」、品詞を「接続助詞」に指定。後方共起（文末・節単位末・発話単位末から 10 語以内)：語彙素を「たい」、活用形を「終止形」に指定。

なお、(ⅰ) のように前件が固定化された表現である例や、(ⅱ) のように話し手の希望でない例は分析の対象から除いた。

(ⅰ) でも、どちらかというと彼とイタリアで暮らしたいわ。

収集した用例を整理すると、以下の①～④に分けられる。①～③は、話し手の現在の希望を表す例であるという点で共通しているが、④は現在の希望を表しているわけではないという点で異なる。

①前件が既実現の事態である例（36 例）

（7）……日曜日の 3 時に亡くなって、朝の。で、ま、いろんなことを考えると、その、月曜日にお通夜にして火曜日にお葬式にしたい。（NUCC data008 194930）

②前件が未実現の事態である例（2 例）

（8）基本的な考え方は今先生がお話しをいただいたとおりでありまして、そういう趣旨を踏まえて、この審議をしていただいておりますが、可決をいたしますと人選に直ちに入りたい。

（BCCWJ OM31_00008 22680 国会会議録）

（9）そこで、併設した場合、場所作り（土地）は町で所有する条件になると思われる。ハード面は県がするとしても、ソフト面での管理を町の責任でやることになると、一般的には官主導での成功例が少ないだけに、主体となるＪＡの意見を第一に話し合いに臨みたい。

（BCCWJ OP83_00001 55640 『広報やかげ』）

③前件が名詞や形容詞で場合分け（「～の場合」の意）を表す例（6 例）

（10）（海外旅行の交通費について）それじゃ九万だと行きたいね。（CEJC K002_016 56150）

④文全体として一般・恒常条件的な内容を表す例（「～たくない」のみ）（4 例）

（11）苦しかったことで一番やだったのは雨ですね。雨が降るともう起きたくない、もう仕事したくない。（CSJ S02M0934 22570）

このうち、②は国会会議録や広報誌といった特定の資料に限定的に見られ、③④は用例数が限られているといった点を考慮し、本発表では①を分析対象とする。①の前件は既実現の事態であるが、その中でも特に、（12）～（16）に示すように、現在まで続いていることや体感していることなど、比較的現在に近い既実現の事態である。①は、さらに下位分類として、思考タイプ・視覚タイプ・到達タイプの 3 種に分けられる。思考タイプは、前件に「思う」「考える」等の思考を表す動詞が現れ、前件のように頭のなかで考えを巡らせたことで、後件の希望が生じたことを表す。視覚タイプは、前件に「見る」が現れ、現在の見るという行為の中で後件の希望が生じたことを表す。到達タイプは、前件に「なる」や「くる」が用いられ、前件である段階への到達を示し、その到達後の状況において後件の希望が生じたことを表す。用例数は、

（BCCWJ LBp9_00115 13360 内館牧子『愛しすぎなくてよかった』）

（ⅱ）あー、うちの子は、自分で作ったのを壊すよりもね、人がきれいに並べてると崩したくなるみたいでね。うーんそういうデパートの遊び場とか行くと、並んでるものはとにかく崩したい。

（NUCC data051 95480）

また、（ⅲ）のように、後件が否定形である例（「～と……たくない」）も併せて扱う。

（ⅲ）人気薄で皐月賞を連対した馬がダービーで好走できるかどうか不安だ。まあ、3 着くらいならありそうだが、コンゴウリキシオーやペールギュントにすら負けていることを考えると、どうも買いたくはない。（BCCWJ PB57_00098 37980 上戸ともひこ『週末の 2 日間で生活する男の馬券術』）

用例の検索方法は以下の通りである。

キー：語彙素を「と」、品詞を「接続助詞」に指定。後方共起 1（文末・節単位末・発話単位末から 10 語以内）：語彙素を「たい」に指定。後方共起 2（文末・節単位末・発話単位末から 10 語以内）：語彙素を「無い」に指定。

思考タイプ 22 例、視覚タイプ 5 例、到達タイプ 9 例である。

・思考タイプ

(12) ……日曜日の 3 時に亡くなって、朝の。で、ま、いろんなことを考えると、その、月曜日にお通夜にして火曜日にお葬式にしたい。((7) 再掲)

(13) お前にサラリーもらってたおかげで、こんな目にあうかと思うとその頭の皮をムイてやりたい。(BCCWJ LBp9_00104 35750 山田風太郎『棺の中の悦楽』)

・視覚タイプ

(14) では私はどのように死にたいか、死の直前までどのように生きたいか。母を見ていると、自然の大きな枠の中で、人間の分をわきまえながら、規則正しく暮らしたい。
(SHC 昭和・平成-雑誌 80M 文春 2005_01056 11970 櫻井よしこ『各界著名人 58 名が望む理想の死に方　ピカソ、カザルス、宇野千代』『文芸春秋』)

・到達タイプ

(15) 天ぷらはやや揚げすぎではあるけど、香ばしくて美味しかった。こうなるとエビも食べてみたい。(BCCWJ LBj2_00046 33380 波勝一広『スリランカで午後の紅茶を』)

(16) (ゲームのスロットについて) A ボタン押せばすぐなんだけど当たった余韻を楽しんでますｗでもさすがに長すぎる……ここまでくるとオール 7 の三百万枚当てたいな～。
(BCCWJ OY14_18396 2540 Yahoo!ブログ)

2.2　文末に「ほしい」を伴うト条件文の調査結果

文末に「ほしい」を伴うト条件文についても、文末に「たい」を伴うト条件文と概ね同様である。本調査の範囲内における用例[3]はかなり限られるが、本形容詞「ほしい」2 例、補助形容詞「～てほしい」2 例が存在し、それらは基本的に前件が「考える」であり、思考タイプである（補助形容詞「～てほしい」の 1 例を除く)。

(17) 最後に旨いものも食っときたい。やっぱり江戸っ子だから寿司が食いたいねえ。マグロ、中トロ、ウニ……。いけねえ、よだれが出てきた。そういうことを考えると、やっぱり死ぬ前に三日ぐらいは余裕が欲しい。(SHC 昭和・平成-雑誌 80M 文春 2005_01053 3340 岡野雅行『各界著名人 58 名が望む理想の死に方』『文芸春秋』)

(18) 朝礼が始まるのが 8 時 15 分。家から自転車で、5 分とかからないので～教室まで行く時間を考えると……ゆとりを持って 8 時には出かけて欲しい。
(BCCWJ OY14_41027 780 Yahoo!ブログ)

---

[3] 用例の検索方法は以下の通りである。
キー：語彙素を「と」、品詞を「接続助詞」に指定。後方共起（文末・節単位末・発話単位末から 10 語以内)：語彙素を「欲しい」、活用形を「終止形」に指定。
　なお、否定形の用例の検索方法は以下の通りであるが、対象の例はなかった。
キー：語彙素を「と」、品詞を「接続助詞」に指定。後方共起 1（文末・節単位末・発話単位末から 10 語以内)：語彙素を「欲しい」に指定。後方共起 2（文末・節単位末・発話単位末から 10 語以内)：語彙素を「無い」に指定。

3. 考察

3.1　形容詞文との並行性

希望を表す「たい」は感情形容詞との共通点が多い。従来、「たい」は話し手の主観を表すためにモダリティ形式とされ、意志表現や命令表現と同様のカテゴリーに属するものとして扱われてきたが、活用の点では形容詞型であることに加え、意味的にも話し手が何かを希望する感情を表し、「嬉しい」のような感情形容詞に近いものと捉えられる。

感情形容詞で言い切る文は、基本的に主語が一人称に限られるという人称制限がある（山岡 2000 等）が、それは希望を表す「たい」の文においても同様である（仁田 1991 等）。

(19) {私／*あなた／*お父さん} は嬉しい。

(20) {私／*あなた／*お父さん} は酒が飲みたい。(仁田 1991 (27))

加えて、格構造の点でも類似しており、(21) (22) のようにどちらも二重主語文になる。

(21) 私は犬が怖い。

(22) 私は水が飲みたい。

文末に形容詞が言い切りで現れるト条件文は、形容詞の時間的性質により成り立ちにくい。

(23) ??酒を飲むと、顔が赤い。(小竹 2014 (2a))

しかし、成立する場合が 3 タイプある（竹林 2026)。それは、「発生」((24))「認識開始」((25))「判断の成立」((26)) を表す場合である。

(24) (展望台から街を見下ろして) こんなに高いところに立つと、怖い。(竹林 2026 (17))

(25) アイアンを見ると、びっくりするほどグリップが太い。(竹林 2026 (21))

(26) この状況を鑑みると、日本の将来は明るい。(竹林 2026 (32))

「発生」の例である (24) は、「高いところに立った」時点で新たに「怖い」という感情が発生したことを表す。「認識開始」の例である (25) は、「アイアンを見た」時点で「グリップが太い」という前件成立前から存在していた事態を認識したことを表す。「判断の成立」の例である (26) は、「状況を鑑みた」時点で「日本の将来は明るい」という判断が成立したことを表す (明るい将来そのものが発生したわけではない点で「発生」とは異なる)。このような場合に文末に形容詞が言い切りで現れるト条件文が成立するのは、前件の実現時点と後件の発生時・認識時・判断の成立時が時間的に隣接し、前件と後件が時間的関係で結ばれるためである。

文末に希望表現を伴うト条件文は、このうちの「発生」と並行的に捉えられる。たとえば、(15) は、「こうなった」時点で「エビも食べてみたい」という希望が発生したことを表す。(12) も、「いろんなことを考えた」時点で「月曜日にお通夜にして火曜日にお葬式にしたい」という希望が発生したことを表す。(12) は一見すると「判断の成立」に近いように思われるかもしれないが、後件の「月曜日にお通夜にして火曜日にお葬式にしたい」という希望そのものが実際に生じている点で「判断の成立」とは捉えられない。「判断の成立」を表す例である (26) は、後件の「日本の将来は明るい」という事態そのものは実際には生じていない点で、(12) と異なるのである。

3.2　価値判断を表す「たい」

（12）が竹林（2026）の分類カテゴリーにおける「判断の成立」に当てはまらないということは、この文がいわゆる当為のニュアンスを帯びていることとは別の話である。これに関しては、益岡（2006）に指摘がある。益岡（2006）は、（27）のような「たい」の意味が願望から価値判断（「事態実現の必要性を表現している」（p.66）もの）に拡張した例がある[4]とする。

（27）手をこまぬいておればとても達成できるものでないが、本四公団はもちろんのこと、地元自治体や国も協力して利用促進に知恵を絞りたい。（益岡 2006（3））

また、（28）のような例について、益岡（2006）は、「基本的には、忘れたくないという願望の意味を表しているが、単なる願望ではなく、忘れるべきではないという価値判断の意味も併せ持っている」（p.70）と述べている。このことを踏まえると、（12）は、益岡（2006）に従えば、願望の表現ではあるが価値判断の意味も併せ持つ例であると言えよう。

（28）近年、治水・砂防事業がすすんでいるので心配なさそうだが、かつての惨事は忘れないでいたい。（益岡 2006（26））

3.3　文末に希望表現を伴うタラ条件文との比較

文末に希望表現を伴うト条件文と、文末に希望表現を伴うタラ条件文とを比較すると、文構造が異なることが分かった。たとえば、（1）は、希望している内容が、条件節を含んだ「春になったら国へ帰る」全体であるのに対し、（14）は、「自然の大きな枠の中で、人間の分をわきまえながら、規則正しく暮らす」という条件節を除いた部分である。

すなわち、文末に希望表現を伴う条件文にはAパターン（（29）～（31））とBパターン（（32）～（34））のように異なる構造を持つ2種のパターンが存在し、タラはその2種のどちらにおいても使用可能である（ただしAパターンが典型的である）のに対し、トは基本的にBパターンのみ使用可能であると整理することができる。

・Aパターン　〔春になったら国へ帰る〕たい

（29）こんな連中を相手にしたなど、本当にはずかしい。穴が｛あったら／*あると｝入りたい。
（BCCWJ LBf2_00058 27170 小松茂朗『陸軍の異端児石原莞爾』改変）

（30）リタイア｛したら／*すると｝子育てを応援したい！
（BCCWJ OP56_00001 35030「広報しずおか『静岡気分』」改変）

（31）華は、大きく｛なったら／*なると｝プログラマになりたいな。（BCCWJ LBs5_00020 1444 0　伊東知代子・山田あゆみ『お母さんが安心して子どもにパソコンを使わせる本』改変）

・Bパターン　母を見ていたら〔自由に生きる〕たい

（32）将来のことを｛考えたら／考えると｝、ちゃんと勉強をしたい。

（33）オリンピックの映像を｛見ていたら／見ていると｝、なんだか体を動かしたい！

（34）競争はさらに激しくなるけど、ここまで｛きたら／くると｝チャンピオン獲りたいです

[4] 益岡（2006）は、価値判断を表す「たい」の特徴として、①希望者の判断が問われるような文脈であること（読み手へのアドバイスを目的とする文章、社会に向けた提言を行う文章）、②1人称主語が非表示であること、③「たい」が基本形で用いられていること、を挙げている。

よ。(BCCWJ PM11_00728 37660 雑誌『週刊プレイボーイ』改変)

つまり、文末に希望表現を伴うタラ条件文は、前件が未実現の事態であり、「たい」のスコープに入るものが中心であるのに対し、文末に希望表現を伴うト条件文は、前件が既実現の事態であり、「たい」のスコープに入り得ないのである。

4. おわりに

本発表では、文末に希望表現を伴うト条件文が成り立つ場合について明らかにし、文末に形容詞が言い切りで現れるト条件文との並行性を示した。従来、文末に希望表現を伴うト条件文は、条件文におけるモダリティ制約の一部として議論されてきたが、本発表では、文末に形容詞が言い切りで現れるト条件文との類似性を手がかりに、前件と後件の時間的関係に着目することによって説明を試みた。また、タラ条件文との文構造の違いも指摘した。

〔調査資料〕

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(Ver.2021.3) https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/

国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス』(Ver.2018.1) https://chunagon.ninjal.ac.jp/csj/

国立国語研究所『日本語日常会話コーパス』(Ver.2023.3) https://chunagon.ninjal.ac.jp/cejc/

国立国語研究所『昭和話し言葉コーパス』(Ver.2022.2) https://chunagon.ninjal.ac.jp/ssc/

国立国語研究所『名大会話コーパス』(Ver.2022.10) https://chunagon.ninjal.ac.jp/nuc/

国立国語研究所『現日研・職場談話コーパス』(Ver.2018.3) https://chunagon.ninjal.ac.jp/shokuba/

国立国語研究所『昭和・平成書き言葉コーパス』(Ver.2023.5) https://chunagon.ninjal.ac.jp/shc/

〔参考文献〕

小竹直子 (2014)「ト条件文の帰結に形容詞が言い切りで現れる文」『日本語文法』14-1, pp.71-87

竹林栄実 (2026)「文末に形容詞が言い切りで現れるト条件文の成立―前件と後件の時間的関係に着目して―」『日本語文法』26-1, pp.69-85

奈良夕里枝 (2012)「日本語の条件表現における後件のモダリティー制約」『フェリス女学院大学文学部紀要』47, pp.129-138

仁田義雄 (1991)『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

ハリー, ソルヴァン・前田直子 (2005)「「と」「ば」「たら」「なら」再考」『日本語教育』125, pp.28-37

北条淳子 (1964)「条件の表わし方」『日本語教育』4・5, pp.73-80

益岡隆志 (2006)「「～タイ」構文における意味の拡張―願望と価値判断―」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編)『日本語文法の新地平 2 文論編』くろしお出版, pp.63-76

宮島達夫 (1964)「バとトとタラ」『講座現代語 第6巻 口語文法の問題点』明治書院, pp.320-374

村松由起子 (1992)「「と」条件表現におけるモダリティ」『雲雀野』14, pp.67-78

山岡政紀 (2000)『日本語研究叢書 13 日本語の述語と文機能』くろしお出版

接続表現「がてら」の意味と構文的成立条件
― 類義形式「ついでに」「ながら」との対照分析 ―

大北（おおきた） まき（大阪 YMCA 学院）

1. はじめに

接続表現「がてら」の意味記述をめぐっては、従来、「機会」や「目的」といった言葉を用いて前件と後件を「主か従か」の関係で示す記述が多く、資料間で主・従の逆転が生じるなどの混乱が見られた。これに対し梶川（2012:120）は「～がてら」句＋後件の意味を「後件行為をする過程で、前件で表される話者が望ましいと考える状態が実現することを期待して、あるいはその実現のための行為ができると期待して、後件行為をする」と記述し、「がてら」を「目的性」と「付帯状況性」を併せ持つ形式として位置づけた。この定義は、従来の主・従関係の議論を超えて本形式を包括的に説明し得る点で大きな意義を有する。また、先行研究においては「がてら」と代表的な類義形式である「ついでに」「ながら」との差異を説明する上で「計画性」と「目的性」の両側面に関する重要な指摘がなされている（佐治 1989、小池 1998 等）。しかし、これらの両側面は十分に区別されず、また、実際の文においてそれらの意味的特徴がどのような構文的条件と対応するのかについては、必ずしも明らかにされていない。そのため、日本語教育の現場においても、類義形式との使い分けに関する判断基準が明確に示しにくく、学習者の理解や教師の指導に困難が生じる場合がある。本研究では、梶川（2012）による意味記述を踏まえつつ、コーパスに基づく用例分析を通じて、「がてら」と類義形式との言い換え可否を検討する。その結果をもとに、言い換えが困難となる条件を抽出し、「がてら」の意味的特徴と構文的条件との対応関係を明らかにする。これにより「がてら」が二事態をどのような関係として結びつける形式であるのかを示す。

2. 研究方法

本研究では、国立国語研究所「現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）」を用いて用例を収集した。「がてら」については、抽出された全 190 例[1)]を目視で確認し、接続表現以外の 1 例を除外した 189 例を分析対象とした。また、類義形式「ついでに」についても 433 例[2)]を抽出し、「がてら」との比較を行った。なお、「ながら」については、同時動作を表す形式としての先行研究の知見を踏まえ、参照枠として位置づけた上で、「がてら」の用例のうち「ながら」との言い換え可否が問題となるものを抽出し、検討した。

3. 「ついでに」との対照

3.1. 「がてら」と「ついでに」の言い換え可否を左右する条件

抽出した用例を一文ごとに言い換え可能性の観点から分析した結果、言い換え困難[3)]は「ついでに」から「がてら」に言い換えた場合に顕著であり、一方向的に現れることが確

---

1) 検索条件式は次の通りである。「キー: 語彙素="がてら"」

2) 検索条件式は次の通りである。「キー: 語彙素="序で" AND 前方共起: (品詞 LIKE "動詞%" OR 品詞 LIKE "助動詞%" OR 品詞 LIKE "名詞%") ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素="に" ON 1 WORDS FROM キー」「キー: 語彙素="序で" AND 前方共起: 語彙素="の" ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: 語彙素="に" ON 1 WORDS FROM キー」これにより抽出された全用例 465 件を目視で確認し、「～とき、ついでに」「～なら、ついでに」「～ので、ついでに」のような単独の副詞的用法の「ついでに」32 件を除外した。

3) 本研究における「言い換え困難」とは、言い換えることで非文となるか、あるいは著しく不自然で容認困難と判断される場合を指す。その判定に際しては、接続法の差異による非文性を除外し、意味解釈の比較が可能となる範囲で最小限の形式調整を行った。

認された。さらに、その要因として、意志性、時間関係、主語の一致性の三点が認められた。以下、この三点について順に検討する。

3.1.1. 事態の意志性

「がてら」「ついでに」はいずれも意志的な行為を結びつける場合に用いられるとされており、先行研究でもその点が指摘されてきた。梶川（2012）は、「がてら」の前件は人間が自分の意志で行う行為または行為の効果であり、後件も同様に意志的行為を表すと述べている。実際に BCCWJ の「がてら」用例には、非意志的な事態を表すものは見られず、前件、後件ともに全て意志的な行為を表す用例であった。一方「ついでに」では、全 433 例中、意志的行為の用例が 9 割以上と大半を占めるものの、非意志的な事態を表す用例も 35 例確認された。特に、前件で成立した談話を契機として、後件でそれに関連する内容を付加的に述べる文脈展開的用法が一定数見られる。例として(1)を示す。

(1) ハリー・ポターの話が出たついでに書くと、ハリー・ポターに登場する「ディメンター」という仕掛けと、この作品に登場する「スペクター」はとてもよく似ていて、どちらも、人間の身体から意識や魂を吸い取る妖怪である。

（BCCWJ, OY13_02235, 『Yahoo!ブログ』）

(1)の「話が出る」を「話が出がてら」とすると非文となり、意志性のない自動詞と「がてら」の結合が困難であると分かる。さらに、(2)(3)のように、より偶発的かつ自然発生的な事態を表す例も見られる。

(2) 「…ア、アリガト…ワタシとしたコトが、ついついアマい妄想に…溺れるついでに、ほんとに溺れるとこだたヨ」。（BCCWJ, LBi9_00121, 丘野ゆうじ『破界戦士』）
(3) げっぷが出た。げっぷのついでに、食べたものが食道を逆流しそうだった。

（BCCWJ, PM31_00549, 馳星周『週刊ポスト』2003 年 10 月 31 日号）

加えて、非意志的事態を含む「ついでに」の用例には、後述する前件と後件での時間関係の不一致（3.1.2 節）や主語の不一致（3.1.3 節）を伴うものが含まれており、言い換え困難性が複合的な要因によって生じている例も見られた。ただし、非意志的事態を含む全ての用例がそれらの不一致を伴うわけではなく、(2)のように前件・後件で主語・テンスが一致したまま非意志的事態が接続される例もある。このことは、「ついでに」が意志性に関して独立した制約を持たず、「がてら」とは異なる柔軟性を有することを示している。なお、梶川（2012）等では「ついでに」についても、前件・後件ともに意志的な行為を表すとしている。したがって、非意志的事態を含む「ついでに」の用例が確認されたことは、先行研究の指摘に反して、意志的行為限定という制約が「ついでに」においては必ずしも絶対的なものではないことを示唆する。

3.1.2. 前件と後件の時間関係

発話時点を基準にして前件が既に実現しており、後件が未実現であるという時間関係をもつ場合、「ついでに」を用いることはできるが、「がてら」で言い換えるとそのような関係を表すことができない。これは、両形式の接続形式に由来する統語的性質の違いに起因するものである。「がてら」は前件でテンスを示せないが、「ついでに」は従属節（前件に

あたる部分）が主節（後件にあたる部分）のテンスに拘束されず、互いに独立した時間関係にある出来事を表すことができる。BCCWJ では、前件と後件でテンスが一致せず、発話時点において前件が既に完了し、後件が未実現である時間関係をもつ「ついでに」の用例が 433 例中 43 例確認された。代表的な例として(4)(5)を示す。

(4) 「食は命なり」と言うのは、食べものこそが赤血球となるからであり、食の正邪によって、赤血球の生命力と運命の正邪が方向づけられ、人間自身の健康や幸福や運命の度合が決定づけられるからである。食べものが食物モネラとなり絨毛となり赤血球となることを記したついでに、もう一歩踏みこんだ考察をしてみたい。
（BCCWJ, PB34_00095, 石田英湾『食べもので病気は治せる』）

(5) 「あのぉ・・・お見舞いはいいですよ。(＾__＾；) 随時、経過報告はさせてもらいますので。」「ダメダメ。こっちに来たついでに顔を見にいくだけだからさ。遠慮しなくていいよ。」（BCCWJ, OY05_02032, 『Yahoo!ブログ』）

このようなものは、「がてら」にすると前後文脈との整合性が損なわれるため、言い換えができない。つまり、「がてら」の文では発話時点における前件と後件の実現／未実現が統一されていなければならないということである。それに対して、「ついでに」は、前件で事態の実現を述べ、これから新たに行う未実現行為を後件として発話時点で付加することが可能な表現である。このような特徴自体は、その接続形式から文法的に予測可能なものであるが、実例が 43 例確認されたことは、理論上の可能性にとどまらず、実際の言語使用において一定の存在感をもつことを示す。

さらに、本研究で確認されたテンス対立を示す 43 例のうち約半数（21 例）は、(4)の「記したついでに」のように、前件で成立した談話を契機として、後件でそれに関連する内容を付加的に述べるという、文脈展開的な機能をもつ用例であった。こういった用例が一定数まとまって確認されたことは、「ついでに」において、ある程度慣用化された用法である可能性を示している。

3.1.3. 前件と後件の主語の一致／不一致

梶川（2012）は、南（1993）の従属句分類に基づき、「がてら」「ついでに」をいずれも従属節内部に独自の主語が現れない形式として位置づけている。したがって、理論上は両形式ともに前件と後件の主語不一致を許容しないとされる。

分析の結果、「がてら」は全 189 例において前件と後件の行為主体が一致しており、この制約と整合的であった。一方、「ついでに」については、前件に独自の主語を持つ用例が 20 例確認された。これらは大きく二つのタイプに分けられる。

第一に、前件が自然発生的事態（例：(6)）である場合や文脈展開的表現（例：(1)）である場合であり、意志的な行為主体を明確に想定しない非意志的な事態として提示されることにより、結果として主語不一致の構文が生じているタイプである。16 例存在する。

(6) ミクロネシアの海への廃棄物の海洋投棄を日本が試みた話はよく知られた話だが、あまり知られていないのは、もっと危険な高濃度の核廃棄物を日本がエニウェトック環礁に捨てようとした話である。どうせよごれているのだ、よごれついでに―というわけなのだろう。（BCCWJ, LBk3_00125, 小田実『激動の世界で私が考えて来たこと』）

第二に、受動態や授受表現など構文上の理由により、表面的には主語が異なるが、実質的には同一の行為主体に基づく[4)]タイプである。4 例存在する。例として(7)を挙げる。

(7)「通天閣の両側にある寄席を二軒買うて貰うついでに、あの真ン中に突っ立っている通天閣も、一緒に買うてくれはれしまへんか」(BCCWJ, PB59_00469, 山崎豊子『花のれん』)

「ついでに」は非意志的事態や談話的機能と結びつくことで、主語一致の制約を部分的に緩和し得るのに対し、「がてら」は主語の一致を一貫して要求する。

3.2. 構文的条件の厳格さと事前構想

以上の分析から、「がてら」の成立には意志性・テンス・主語の一致という三条件が強く求められることが明らかになった。これは、事態成立後に付加的な接続を行い得る「ついでに」とは異なる。本研究では、これら表層的条件の厳格な一致こそが、「がてら」の意味的本質である「一体的な事前構想」を裏付ける客観的指標であると考える。以上の構文的条件は、二事態が結びつく段階、すなわち前件と後件がどの時点・どの契機で結びつけられるかという「結合」に関わる条件を示すものである。一方、次章で扱う「統合」は、それらの二事態の事態構造、すなわち、結合の結果としてどのような一まとまりの活動として提示されているのかに関わる。

4. 「ながら」との対照

4.1. 非同時的接続

「ながら」が時間的同時性を必須とするのに対し、「がてら」は、非同時的な接続を許容する。BCCWJ では、前件が後件の移動過程と時間的に重ならず、移動の着点到達後に実現するタイプの「がてら」の用例が 32 例確認された。(8)のような例が挙げられる。

(8)「3 カ月たったら、途中経過を見せがてら、続きの薬を取りに来てください」
(BCCWJ, PB24_00228, 野邨学『男も女もみるみる髪が生えてきた！』)

(8)において、前件「途中経過を見せる」は、後件「薬を取りに来る」に伴う移動過程と同時に行われるのではなく、移動の着点（病院）に到着した後に実現される行為である。これを「見せながら」と言い換えると、病院への移動中に見せる行為が並行しているという、原文とは異なる不自然な事態解釈が生じる。このように「がてら」は、時間的同時性が認められない二事態であっても、行為者の構想においてそれらを一つの活動として統合し提示する形式である。

4.2. 単一行為構造

「ながら」が行為の複数性を必須とするのに対し、「がてら」は、実際に遂行されている行為は後件のみである「単一行為構造」を許容する。これらの用例では、前件が後件と

[4)] なお、形式的に前件と後件の主語が異なり、行為主体の不一致と解釈し得る例も下記の 1 例確認されたが、授受動詞「賜る」の意味構造上、行為主体の設定については解釈に揺れがある。このため、当該例は現代語の一般的傾向を示すものとは言い難く、本研究では独立した類型としては扱わない。
「二条の后が東宮の母である御息所と呼ばれていた時、藤原氏の氏神である大原野神社に参詣した。その供の中にいた翁が人々が禄を賜るついでに、御息所のお車から禄を頂戴してその時奉った歌という話になっている。」(BCCWJ, LBm9_00100, 瀬戸内寂聴『「源氏物語」を旅しよう』)

は別個の行為を表すのではなく、後件行為によって実現する効果[5)]や、後件行為が担う機能・役割を述べていると解釈できる。このようなタイプの用例は、BCCWJ において 65 例見られた。

(9) 秋の天気のいい日は、散歩がてら大手町や竹橋の駅から日比谷、銀座あたりまでぶらぶらして新橋から帰ることが多かった。(BCCWJ, LBn3_00047, 大小原公隆『裏切り』)

(9)で実際に行われているのは「ぶらぶらする（歩く)」という行為であり、「散歩」はその行為に付与される様態的な意味あるいはその行為から生じる効果として解釈される。

4.3. 移動行為を前件とする「がてら」文の統合様態

前節までに見たように、「がてら」は非同時的接続や単一行為構造を許容するなど、「ながら」とは異なる柔軟な統合様態を示す。特に、前件が移動行為である場合には、後件が前件の進行過程に挿入される構造が観察される。例を(10)(11)に示す。

(10) そのあと、ベッドに戻りがてら、窓ぎわを見ると、カーテンの端がわずかに白んでいる。(BCCWJ, OB3X_00022, 渡辺淳一『別れぬ理由』)

(11) 「あ、あの。わたし、お掃除をしておりました。これで、失礼いたしますっ」そそくさと、部屋を出ていく。出ていきがてら、アンに、ひとなつこく、合図する。アンも、にっこりと合図を返すが、シアラに睨みつけられて、しゅんとする。
(BCCWJ, LBd9_00048, 氷室冴子『レディ・アンをさがして』)

これらの用例では、前件である移動行為の進行過程の中で後件行為が実現しており、「移動の途中で挿入された行為」として理解される。このような事態構造をもつ用例は、後件行為の過程の中で前件が実現することを前提とする梶川（2012）の定義に照らせば、事態の展開方向が逆転した非典型例と言える。

しかしながら、このような用例は必ずしも例外とみなす必要はなく、二事態の統合のあり方の差異として捉えることができる。こういった統合が可能となる背景には、移動行為がもつ事態構造があると考えられる。移動行為は、「起点→経路→着点」という連続的な過程から成り、とりわけ「経路」は時間的・空間的に可分であり、他の行為を挿入しやすい性質をもつ。このため、後件行為が移動の経路上で実現することにより、時間的には前件の進行中に後件が入り込む構造が可能となる。後件行為が経路上で実現することは「ながら」的な同時動作の解釈を可能にし、また、梶川（2012）が「ついでに」の成立条件として述べる「前件に時間的な余剰があること」は、移動行為の経路が他の行為を挿入可能な区間とする構造と符合し、「ついでに」への言い換えの自然さを支える要因となる。

以上のように、移動行為を前件とする用例では、「ながら」や「ついでに」に近い解釈が可能となるが、これらは移動行為の事態構造に由来するものであり、二つの事態を一体の活動として提示するという「がてら」の根本的な統合性は維持されており、むしろ、移動という特定の事態構造のもとで異なる統合様態として実現されていると捉えることがで

---

5) 本研究でいう「効果」とは、梶川（2012）が「ついでに」との比較において用いた概念に基づき、前件が後件行為に付与される意味的役割を表す場合を指す。この概念は比較する形式に依存するものではなく、「がてら」の文において前件と後件が単一行為構造を形成することを示すためのものである。そのため、「ながら」との比較においても同様にこの語を用いる。

きる。

5. 考察：厳格な結合条件と柔軟な統合様態

まず、「ついでに」との対照からは、「がてら」は意志性・時間関係・主語の一致という条件を一貫して要求することが明らかになった。これは先行研究で指摘されてきた「計画性」という意味的特徴が文の表層にどのように現れるかを示す具体的指標として機能する。この条件は、二事態が行為開始前の段階で不可分な活動として企図されていること、すなわち「一体的な事前構想」を反映したものである。この点において、事態成立後に便宜的な接続を許容する「ついでに」とは決定的に異なる。「ついでに」が計画性の有無に関わらず使用可能であるということが、「がてら」の結合条件への厳格さを相対的に際立たせていると言えよう。

一方で、「ながら」との対照からは、「がてら」は時間的同時性や行為の複数性を必須とせず、非同時的接続や単一行為構造、さらには移動行為の経路への挿入といった多様な統合様態を許容することが指摘できる。このことは、「がてら」の統合が物理的条件ではなく、行為者の構想に基づいて二事態を一体として提示するか否かに関わることを示す。すなわち、先行研究が言及してきた「目的性」は、本研究において、二事態がどのように一体の活動として意味づけられるかという統合のあり方として捉え直される。

以上より、「がてら」の意味は単一の観点では捉えきれず、結合条件と統合様態という二つの次元を区別することによって初めて記述可能となることが分かる。「がてら」は厳密に事前構想を要求する一方で、二事態の統合がどのような事態構造として表れるかについては一義的に定まらない形式であり、この結合の厳格さと統合の柔軟さの組み合わせという両面性によって「ついでに」「ながら」といった類義形式とは異なる独自の意味機能を担う形式であると位置づけられる。

6. おわりに

本研究は、「がてら」の意味記述を、観察可能な構文的条件に基づいて再整理し、主観的な主・従関係に依拠しない記述の可能性を示した。これは、梶川（2012）が提示した包括的な意味記述に対し、構文的条件との対応関係を示すことで、その記述を形式的観点から具体化したものである。その中で、「がてら」は、結合条件と統合様態という異なる次元に関わる性質を併せ持つ形式であることを示した。今後の課題としては、話し言葉データの検証や、母語話者による容認度判断の実証的検討が挙げられる。また、本研究で示した文の表層から観察できる条件に基づく整理は、「がてら」と類義形式の使い分けを日本語学習者に提示する際の客観的な指標として応用可能であり、日本語教育における説明の明確化にも寄与し得ると考えられる。

【用例の出典】

BCCWJ：国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（バージョン 2021.03，中納言バージョン 2.7.2）https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/

【参考文献】

梶川 克哉. (2012). 複文表現の意味的カテゴリー―「目的」「付帯状況」をめぐって―. 名古屋大学大学院博士学位論文.／小池 ユリ. (1998). 「がてら」の意味と用法をめぐって―「花見がてら歩いていこう」―. 國士舘大學教養論集, 47, 61-78.／佐治 圭三. (1989). 勉強しがてらラジオを聞きます：誤用例の分析. 同志社女子大学日本語日本文学, 1, 1-10.／南 不二男. (1993). 現代日本語文法の輪郭. 大修館書店.

ハ行音の摩擦音化とパ行音の分布

高山 知明（金沢大学人間社会研究域人文学系）

1. 本発表の趣旨

現代語のパ行音は外来語、オノマトペアを除くと、実質的に語中に限られ、漢語も含めてその大半が(1)(2)のように促音または撥音に続く位置に現れる。同時に、原則として促音、撥音の後にはハ行音が現れない（「三方向」「穏健派」等の複合語を除く。「前半」のような例外あり）。

(1) 促音の後：モッパラ、ヒッパル<動詞>、サッピク<動詞>、シッポ、…〔漢語〕シュッパツ（出発）、テッポウ（鉄砲）、…

(2) 撥音の後：スカンポ、…〔漢語〕レンパク（連泊）、キンピン（金品）、…

本発表では、①後部形態素の頭が p となる語の形成と②語頭ハ行音の摩擦音化との年代の前後関係を再検討し、今日につながるパ行音の分布が、どのような歴史的過程を経て形成されたかについて議論する。考察対象にし得る僅かな資料からこの問題を可能な限り明らかにする。相対的に①が②に先んじ、それによりハ行とパ行とが本格的に分岐したことを主張する。なお、本発表ではオノマトペアのパ行音は直接の考察対象から除く（それについては高山 2024, 2025 を参照）。

2．ハ行子音の摩擦音化の要点

先行研究の検討に入る前にハ行子音の変化に関する要点を整理する。この変化は歴史的な弱化 weakening, lenition（Bybee 2015 等）と言える。弱化とは、呼気流を完全に閉止する音声からそうでない音声へと、段階を追って呼気流の妨害の程度を弱める一連の傾向で、環境条件としては語頭に比べて母音間で起こりやすい。そのことは歴史的には一般に(3)のように現れることが予測される（高山 2024, 2025）。

(3) a. **変化の有無**：母音間で発生しても、語頭で発生するとは限らない。

b. **変化の時期**：母音間と語頭の両方で発生するとすれば、相対的に母音間の方が語頭より早く発生する。

c. **変化の程度**：母音間と語頭の両方で発生するとすれば、弱化の程度は同じであるか、母音間の方が大きくなる。

これをハ行音の変化に照らし合わせてみよう。両唇破裂音 p の摩擦音化（p > ɸ, f）であるが、まず、(3a)については、語頭に破裂音を保持する方言が琉球諸島に見られる。それに比べて母音間は日琉すべての方言で w に変わっている（接近音化の前に摩擦音化がある）。このように、母音間ではすべての方言で起こるが、語頭では必ずしも起こっておらず、予測に一致する。(3c)についても、母音間では摩擦音化から更に弱化が進み、接近音 w に至るのに対し、語頭では変化しても無声摩擦音に留まっており、この点でも予測通りである。

残る(3b)は、直接それを裏付ける証拠を欠くと考えられているが、このような相対年代差は当然予測し得る（従来もそう予測されてきた）。

畿内方言に関しては、文献を手掛かりに変化の時期をある程度、絶対年代として位置づけられる。ハ行音の摩擦音化に関連して最も確実なのは、仮名の混乱から立証可能なハ行転呼音の変化 ɸ > w であり、これがほぼ 11 世紀頃であることから、少なくとも母音間の摩擦音化はそれ以前とされた。語頭も含め、橋本(1928)は変化の時期を慎重に検討し、不明としながらも、(4)の円仁『在唐記』にある「皆加唇音」の解釈等から 9 世紀には既に摩擦音であったと推定し、母音間、語頭の両方とも（相対的に母音間、語頭の順で）奈良時代かそれ以前には摩擦音になっていたとした。

(4) pa（梵字）　以本郷波音呼之　下字亦然　皆加唇音

これ以降、「奈良時代かそれ以前」とする点が説として広く受容され、パ行音分布の形成もそれを前提に考えられるという研究史の流れになった（橋本 1928 の受容については肥爪 2015 の批評を参照）。

３．パ行音の分布に関する先行研究の検討

有坂(1955)は、漢語における促音、撥音の直後にあるパ行音を、「恐らく古く一般にハヒフヘホの頭音として用ゐられていた{p}音が、一般には{F}に変じた後までも、或特殊の音韻結合の中に保存されたもの」（572 頁）とし、これをハ行 p の「名残」と見て、「十方{ʒippoo}執筆{ʃippitsu}のやうな場合の{-pp-}を{-FF-}又は{-FuF-}から変化したものと考えるのは、少しく不穏当と思われる」と述べている。その年代は中国から文献が渡来して講じられた時点に遡り、「応神天皇の代」と言う。今、その時期の当否は別として、後代のパ行音の分布を、ハ行音がまだ「{p}で始る音節」だったことの現れとする点は改めて顧みる価値がある（この捉え方は上田 1903 と同様）。

橋本(1928)は、アハレに対するアッパレは、ハ行子音が p であった時代に強めて言われたものが、「p でなくなった後も、かような場合のみ、孤立して、もとの p 音が伝はったもの」（44 頁）とする。

これに対し、濱田(1954)はこうしたパ行音は「古いハ行子音の、復活乃至名残では決してない」との立場に立つ。促音の発生が平安初期頃であるとすれば、ハ行転呼音の発生までの間に、「『もはら』『あはれ』などの語に強調の目的を以て、促音が挿入されることがあったとすれば、それは当然[moɸɸara][aɸɸare]の様な形で実現されたと考えざるを得ない」（77 頁）とし、後の時期に[ɸɸ]から[pp]に移行したと述べる。なぜなら、「促音音韻の本質」が「発音運動の突然の停止」（有坂 1959）にあるとすれば、促音に後続する子音は無声破裂音ないし破擦音が「最も理想的」（73 頁）であり、理想とのずれを解消しようとして移行が起こったと説く。同様の傾向はサ行子音にも「オトッツァン（お父様）チッチャイ（小さい）<以下略>」のように散発的には見られるが、サ行と違って、ハ行が促音後で全般に p に転じたのは、音韻体系上の空位を埋めるようにして p が新しく音韻として発生したた

めであると言う。しかし、促音の捉え方、ɸ から p に全面的に変った点の説明には疑問が持たれる。迫野(1989)も同様に後代に p が発生したとの見解で、「促音・撥音の後という条件のもとでは、どうして p 音が保たれやすかったのかという点がいま一つ明確でない」(114頁）と述べる。特に漢語に焦点を絞り、ɸ から p への移行には、舌内入声 t の短促性が遅くまで保持されたことが関わったとし、撥音後でもそれが生じたのは促音と撥音との「音韻的相関」に因るとする。しかし、舌内入声の保持がどのようにして ɸ を p に変える契機となったのか、また、「引っ張る」等の和語の p はどのように考えられるかは十分に説明されていない。柳田(1985, 2015)は、p > ɸ 以前に日本に入った、韻尾-p、-m の漢字に p が続く漢語を除き、他は ɸ から p が新しく発生したと述べる。その契機は音便発生に伴う促音、撥音の成立であるとする。以上、有坂(1955)、濱田(1954)、迫野(1989)、柳田(1985, 2015)はいずれも、p > ɸ を奈良時代かそれ以前とする橋本(1928)を前提とした議論である。

４．ハ行子音摩擦音化の時期の見直し

第 2 節(4)『在唐記』の梵音に関するテクストを分析し直した林（1998, 2001）は、9 世紀におけるハ行子音の音価を後続母音の違いを問わず p であったとする。これにより p > ɸ の時期推定も大きく変わることになるが、すでに林（1992）は、ハ行転呼音は p の摩擦音化に連動した、母音間で不可避的に生じた環境同化であり、p の摩擦音化と発生の時期、原因を異にする独立した変化ではないと述べ、p > (ɸ) > w のような弱化プロセスと考える（ɸ の期間は非常に短期の過渡的状態に過ぎない)。これによれば、時期から見て、アッパレ、モッパラを濱田(1954)のように考える必要はなくなる。漢語の促音、撥音後の p についてもこれに準じて考えることができそうで、促音、撥音の後で摩擦音化が起こらないのは[pp][mp]では両唇閉鎖の持続時間がより長く、それだけ弱化が起こりにくい条件にあり、音声学的に容易に説明がつく（高山 2002)。

ところで、(3c)の相対年代差からは語頭の変化がより遅れることが期待されるが、林(1992)は「音韻論的には、語頭で p、語中・語尾では w という、ɸ を欠いた分布は考え難いので、ɸ の w 化は、語頭においても p の摩擦音化が終了し、あるいは終了しつつあることを意味している」（115 頁）とし、「語頭に先んじて進行した語中・語尾の ɸ 化が、連続してその ɸ に w 化を発生させ、それと並行して語頭の ɸ 化も進んだ」と考えている。全体を動的に捉えた魅力的な議論だが、母音間と語頭の変化を一体的に捉える必然性がどこまで認められるかという点に疑問が残る（高山 2024)。なお、語頭の変化が遅れた可能性への言及には木田（1989, 2000)、小倉（2000）がある。

５．語頭の変化の時期と p の分布

語頭 p > ɸ が 11 世紀よりも遅れたと考えると、促音、撥音後に p が来る音配列則の形成がより説明しやすくなる（高山 2025)。また、本来的には子音群で弱化が阻まれると見るのは音変化の捉え方として定石でもある。高山（2025）では見落としていたが、同様の推定が既に Frellesvig（2010）にあり、その時期を 13 世紀以降の Late Middle Japanese の時代

とする。なお、橋本(1928)が東禅院心蓮『悉曇口伝』(12 世紀後半) の発音の説明 (ハを「以唇内分」、マを「以唇外分」とする) はハ行が摩擦音であることを示すとする点に関しては、Frellesvig (2010) はその証拠性に懐疑的である。

複数の形態素から成る語で、前部形態素の末尾が促音もしくは撥音で、ハ行音が続く場合、その語が、語頭 p > ɸ の完了よりも先に形成されたとすると、そのハ行音は p のまま残るはずである。言い換えると、この過程でハ行音がパ行音から分岐する。同時に以降のパ行音の音配列則が形成されることになる。ただし、摩擦音化と言っても、それなりの長い期間、/p/の音声実現の中に破裂音と摩擦音が現れる態様が続いたと見るべきで、その間も、促音、撥音の後では[p]の実現が優勢であったことが想定される。

6．p を持つ語の検証

本発表では和語を中心に検証する (漢語を一部含む)。変化の時期を考える上では和語がより有効だからである。従来の報告と資料は変わらないが、ローマ字綴を判断材料にせざるを得ないため、『日葡辞書』の見出しを抽出し、それをもとに考察する (併せて国立国語研究所「日葡辞書見出し語データ Ver.202510」を利用)。また、用例に関しては同『日本語歴史コーパス (CHJ)』、『日本国語大辞典 (第二版、オンライン版)』等を利用する。

まず、後部形態素が和語となる例で、先行形態素が撥音を持つ例を掲げる。(7)を除くと先行形態素は漢語となり、しかも語数はごく少ない。

(5) Binpigue.（鬢鬚）　(6) Bimpima.（便隙）　(7) Vonpacaxe.（御佩かせ）

このうち、偶々(5)(6)はともに意味上興味深い特徴を持つ。(5)は「鬢と鬚」、(6)は「便と隙」のように並列的な二語の構成を持っている。これは、ヤマカワ (山川)、ツキヒ (月日)、アサヒル (朝昼) のような、連濁が起こらないタイプの複合である。パ行音への交替と見ると連濁の一種のように捉えられそうだが、明らかに連濁とは異なり、並列であってもパ行音になり得る点が注意される。なお、(5)のヒゲは 2 音節目に濁音を持ち、鼻音後の濁音化が生じる条件になく、連濁した b が無声化して p となったとも考えられない。

(8) Bin.（便）　（例）Binuo vcagŏ. l, bin, fimauo vcagŏ. （便、隙をうかがう）

(9) Bimpima. 〔=(6)〕（例）Bimpimauo nerŏ. l, vcagŏ. （便隙をねらう、うかがう）

(8)は「便」の項目であるが、その例は興味深く、「便」「隙」とは切り離し可能で、(9)と見比べると、結合させたり切り離したりすることが可能である。そのような関係の二語を結合させたときにパ行音が現れ得ることは見逃せない。「便隙」の結合形が歴史的にどこまで遡れるかという問題は残るが、連濁のような語形成ではないかたちで「発生」したことが間接的にうかがえる。同じことは(5)「鬢鬚」についても当てはまる。「鬢鬚」は『平家物語』『宇治拾遺物語』に用例があるが、仮名表記からでは「びん、ひげ」「びんひげ」「びんぴげ」のいずれかは明らかにできない。なお、漢語にもアンプ (安否)、ジップ (実否)、ヒンプク (貧福) のように、意味的に並列の関係を持つ語が見られるものの、漢語では和語のように連濁しないため、(5)(6)と同一に取り扱うことは控えなければならない。

(10) Ixxinpuran, または, ixxinfuran.（一心不乱）、 Ixxinpuranni.（一心不乱に）（例）
Ixxinpuranno teide atta.

(10)は二字漢語どうしの結合で、先行の撥音後に p が現れる珍しい例である。「一心不乱」は『阿弥陀経』「若一日、若二日、若三日乃至七日一心不乱」の名号執持の語でもあり、称名においてひとまとまりに区切られず唱えられ、先行の「心」と連続した形であったため、摩擦音化をすり抜けたことが考えられる。

次に、時期を探る上で無視できないものとして、引ッ張ル、追ッ払ウのような接頭辞を持つ一群の動詞がある。『日葡辞書』から抽出できるパ行音を持つ語は次の通りである。

(11) Fippari, ru, atta. (12) Voppanaxi, su, aita. (13) Vopparai, ŏ, ŏta. (14) Voppuxe, suru, eta.
(15) Vppogaxi, su, aita. (16) Yoppiqi, qu, ijta. (17) Tçuppari.（名詞）

このうち、比較的古い用例が見出せるのは(11)と(16)で、いずれも『平家物語』『平治物語』『保元物語』にある。このうち、「引く」に由来する接頭辞を持つ動詞には、(11)の他に、(18)のように「ヒッ」、(19)のように「ヒン」となる語がある（(18)(19)は『日葡』の例を連体形の語形で示す）。

(18) ヒッカウル（替）、ヒッカエル（返）、ヒッカエス（返）、ヒッカカル、ヒッカクル、ヒッカナグル、ヒッコム、ヒッコモル、ヒッククル、ヒックム、ヒッカガミ<名詞>、ヒッサバク、ヒッサグル、ヒッサク、ヒッソバムル、ヒッソロウル（揃）、ヒッスクムル、ヒッスグル（選）、ヒッタクル、ヒッタツル、ヒッタオス、ヒッチガウル、ヒッツカマウル（捕）、ヒッツクル（付）、ヒッツツム、ヒットク、ヒットル

(19) ヒンバウ（奪）、ヒンダス（出）、ヒンマク（巻）、ヒンマワス、ヒンヌグ（脱）、ヒンヌク

これらは、接頭辞の後続語の先頭の子音を二重子音化するという規則で形成されている（濁音は、前鼻子音なので二重子音化すると鼻音部分が延長される）。もし既に語頭のハ行子音が摩擦音化を終えた後であれば、サ行と同じく摩擦音の二重子音[ϕϕ]になるはずである。この段階では既にモッパラ、アッパレのような語に[pp]が現れるが、これは単純語の内部であり、形態素の境界が直前にある条件とは異なる。今日のように、促音が来るからと言って自動的に p に交替する理由は見出せない。用例は『平家物語』『平治物語』にあり（また、逆に『日葡』に非掲載の語には『平家物語』の「引っ据う」がある）、その証拠性は慎重に見極める必要があるが、目印としては 13 世紀ということになる。その存在はこれよりも過去に遡るはずであり、絶対年代を更に絞り込むことは容易でないものの、日常会話でこれらをさかんに用いた層があって、そこに語頭 p > ϕ が起こったと考えることはそれほど非現実的ではない。なお、これ以降の文献であってもこれらの語群は軍記物以外の和文には現れることがほとんどない。書き言葉に現れにくい語であることは間違いない。

７．まとめ

第 6 節において、検討に供し得る材料は僅かであるが、先行要素末尾の促音、撥音に続

く形態素の頭にパ行音が現れる分布は、語頭 p > ɸ の変化をすり抜けるかたちで形成されたと考えられることを示した。おそらく漢語についても和語に準じて考えることができるだろう。小松(1981)が示唆するように漢語における促音、撥音後に現れるパ行音が複合指標の機能を持つとすれば、それは、こうした音変化の過程を経て獲得されたと考えるべきである。また、「引っ張る」等にパ行音が現れることについて小松（1981）は、そこにパ行音が代用され、音象徴的効果が発揮されたとするが、当初はそうでないと考える。そこに音象徴的な印象があるとすれば、上に述べた過程でハ行とパ行とが分化し、促音の後でパ行が現れるという音配列が一般化した結果得られたものだろう（音象徴の問題については高山 2024 も参照）。

漢語については、『日葡辞書』にはイッピョウシ（一拍子）、サップウケイ（殺風景）のような三時漢語の例があり、これらをどう考えるかという問題も残されている。

参考文献

有坂秀世（1955）『上代音韻攷』三省堂
有坂秀世（1959）『音韻論　増補版』三省堂
上田萬年（1903）「Ｐ音考」『国語のため　第二』冨山房
小倉　肇（2011）『日本語音韻史論考』和泉書院
木田章義（1989）「Ｐ音続考」『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』桜楓社、415－429 頁
木田章義（2000）「国語音韻史上の未解決の問題」『音声研究』4－3
小松英雄（1981）『日本語の世界７　日本語の音韻』中央公論社
迫野虔徳（1989）「撥音の後のパ行音―Ｐ音の発生と展開―」『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』桜楓社（迫野虔徳（1998）『文献方言史研究』（清文堂）所収による）
高山知明（2002）「日本漢語の史的音韻論的課題」『音声研究』6-1
高山知明（2024）「規則性・自然性から見たハ行音の変化―オノマトペア分裂説の再検証―」『音声研究』28-2
高山知明（2025）「弱化としてのハ行音の変化―母音間・語頭の違いとオノマトペアの摩擦音化―」『日本語学』44-4
橋本進吉（1928）「波行子音の変遷について」（橋本進吉（1950）『国語音韻の研究』橋本進吉博士著作集第四冊（岩波書店）所収による）
濱田　敦（1954）「ハ行音の前の促音―Ｐ音の発生―」『国語学』16（濱田敦（1983）『続朝鮮資料による日本語研究』（臨川書店）所収による）
林　史典（1992）「「ハ行転呼音」は何故「平安時代」に起こったか―日本語音韻史の視点と記述―」『国語と国文学』827
林　史典（1998）「音韻資料としての円仁『在唐記』」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院、15-31 頁
林　史典（2001）「九世紀日本語の子音音価―日本語音韻史における文献学的考察の意味と方法―」『国語と国文学』929
肥爪周二（2015）「ハ行子音の歴史―多様性の淵源―」『日本語学』34-10
柳田征司（1985）『室町時代の国語』東京堂出版
柳田征司（2015）『日本語の歴史下　音便の千年紀』武蔵野書院
Bybee, Joan. 2015. *Language Change*. Cambridge University Press.
Frellesvig, Bjarke. 2010. *A History of the Japanese Language*. Cambrigde University Press.

国立国語研究所（2025）『日葡辞書見出し語データ Ver.202510』
国立国語研究所（2026）『日本語歴史コーパス』バージョン 2026.3

〔付記〕本稿の内容は JSPS 科研費（21K00556）による成果の一部を含む。

日本梵語音における-k 入声をとおしたヴィサルガの受容

坂水貴司（広島経済大学）

1. 本発表の目的

サンスクリットには語末位置に立つ「ヴィサルガ」が存在し、ローマ字では*-ḥ* で表記される[1]。発音は典型的に[-h]であるものの、「舌は直前に発音された母音の位置を保つ」（辻, 1974: 8）とされるため、現代のサンスクリット概説書では *aśvaḥ*「アシュヴァハ」、*patiḥ*「パティヒ」などと仮名転写される（上村・風間, 2010）。この*-ḥ* は漢訳仏典において*-k* 入声字で音訳された（Maspero, 1920: 43）。現在の日本の陀羅尼[2]読誦でヴィサルガは「日本語と全く違はない」もので（橋本, 1966: 34）、「一律に（その先行する母音の如何に拘らず）常に「ク」とよまれ」るという（堀内, 1961: 162）。たとえば「浄地真言」の *rajo 'pagatāḥ sarva-dharmāḥ* は「囉儒波誐哆薩婆達莫」（種智院大学密教学会編, 2015: 578）のように和語の/ku/と同じ音で読むようである。

しかし『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』石山寺蔵寛平元 (889) 年点（以下「石山寺本『金剛界儀軌』」とする）は、音訳漢字に「涅槃点「：」を加えて、原音の-ḥ を示している」（沼本, 2023[1986]: 157）という。涅槃点とは𑖌𑖽: (*aḥ*) のように字の右傍に付して*-ḥ* を示す悉曇文字の記号である。石山寺本『金剛界儀軌』ではこれを転用して「哆:」のように表記してヴィサルガを示す。

ヴィサルガを書き分けた文献があるという指摘は石山寺本『金剛界儀軌』以外管見に入らず重要であると考える。ただし沼本は涅槃点が「原音」を示すとするものの、涅槃点だけでは音価推定の手掛りがないため、実際の発音は現時点で不明である。

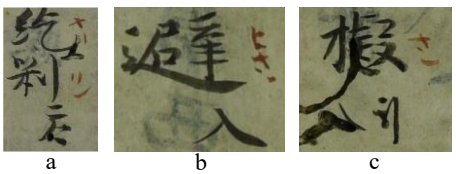
そこで本発表はヴィサルガを書き分ける訓点資料が石山寺本『金剛界儀軌』以外にもあったことを示し、さらにその音価推定を行うことを目的とする。

なおヴィサルガは日本梵語音において入声以外で受容されることもある。しかし本発表の主眼は*-k* 入声をとおしたものなので、入声以外で把握された例は本発表の対象としない。

2. 九大本『金剛界儀軌 A』における特殊記号

2.1. 特殊記号の概要

『金剛頂経蓮華部心』九州大学附属中央図書館蔵平安後期写本（目録名『金剛頂経供養部心念誦儀軌』。以下「九大本『金剛界儀軌　A』」とする）では、特殊記号が使用される。この特殊記号は右上に跳ね上げる図 1-a のような「∨」形を典型とし、図 1-b のような「ヽ」に近い形、さらには図 1-c のような横棒のような形がある。しかし形状は異なっても機能の差はないと考えられるので、以下ではいずれも「∨」で翻字する。



a　b　c

図 1　九大本『金剛界儀軌 A』の特殊記号

a：「∨」形（14 オ 8「キリク∨」）

b：「ヽ」に近い形（35 ウ 4「ヒキ∨」）

c：短い横棒のような形（28 ウ 8「キ∨」）

いずれも「九大コレクション　金剛頂経供養部心念誦儀軌」https://hdl.handle.net/2324/2348550（2026 年 4 月 7 日確認）より部分

「∨」でヴィサルガ以外の音を示した例は①漢字音*-n* 韻尾「旋(セ∨)-轉」（4 オ 4）ほか 4 例、②梵語音*-t*「勿(ヒ∨)[微一反]」（4 オ 8）[3]ほか 2 例、③梵語音音節末鼻音「滿(マ∨タ)駄」（6 ウ 1）ほか 58 例、④和語 *m* 音便（両唇的撥音）「杈(ク∨テ)」（1 ウ 8）ほか 2 例、⑤漢字音*-m* 韻尾「瞻(セ∨ト)覩」（6 オ 3）[4]のように分

---

[1] 本発表でのサンスクリットのローマ字表記は辻（1974: 1-5）による。ただしアヌスヴァーラは *ṃ* で転写する。悉曇文字の転写もここに挙げられたものに準じて行う。

[2] 本発表での「陀羅尼」は陀羅尼や真言などの呪文に加えて梵語讃などの讃歌をも含めることとする。

[3] 「勿」に対応するサンスクリット形は *viḥ* でありヴィサルガをもつ音節である。しかし反切の「微一反」によって*-t* 入声相当で読んでいると考えてここに分類した。

[4] *m* 音便と*-m* 韻尾の例にはいずれも歯茎音が後接する。「∨」で同化した[-n]を表記した可能性もある。

類でき、いずれも「特殊な音」を表記していると考えられる。この分類は複数種の筆跡（朱点・墨点・薄朱点）を区別せずに挙げている。区別しても結論に影響はない。

2.2. 「∨」がヴィサルガを示す例

「∨」が付された例のうち、2.1.で挙げたヴィサルガ以外の音を示したことが明らかな例を除いたものが以下のものである。以下の例のうち「種子」とは「仏・菩薩などの尊格を象徴するとされる梵字」（中村ほか編, 2023: 511）である。サンスクリット形は八田（1985）により、八田（1985）でサンスクリット形が得られない場合には適宜参照した文献を示す。

【種子の例】

①サンスクリット形 ***hrīḥ*** : 紇唎二合（14 オ 8）、紇哩二合（16 ウ 8[「キリ」虫損]）、紇哩二合（26 ウ 1[「∨」に「ク」を重書]）、紇哩二合（26 ウ 7）、嚫唎二合引（30 オ 7）、嚫唎二合引（30 ウ 4）

②サンスクリット形 ***trāḥ*** : 怛嚕（14 オ 7、30 オ 6）、怛嚕二合（26 ウ 6）

【「入」注記が付される例】（一部に種子も含まれる）

擬引入（28 ウ 8[「入」注記虫損]、*gīḥ*）、迦囉迦嚕入（36 ウ 1、*kara kara*）、吉哩入吉哩入（36 ウ 3、*kiri kiri*）、矩盧矩盧入（37 オ 2、*kuru kuru*）、波引羅密多引避入（35 ウ 4、*pāramitābhiḥ*[栂尾, 1935: 384]）、僧儗魚以反引底丁以反避入（36 オ 4、*saṃgītibhir*）[5]

【その他】

惡乞芻二合鼻藥二合（26 オ 8[「∨」に「ク」を重書]、*akṣobhya*）、阿斛引蘇佉（31 ウ 3、*aho sukha*）、素嚩多引儗魚积反（32 オ 5、*su-gandhāṅgi*）

以上の例のうち、【種子の例】はサンスクリット*-ḥ* に対応する箇所で「∨」が使われているため、ヴィサルガを「∨」で表記したと考えられる。

【「入」注記が付される例】にはサンスクリット*-ḥ* に対応していないものもある。しかしこの「入」注記は入声以外の音訳漢字でヴィサルガを示す際に付され（堀内, 1961: 165）、「入」注記にもとづいて、ヴィサルガであると認識されて「∨」が用いられたと考えられる。

【その他】はサンスクリット形が*-ḥ* でなく種子でもない。さらに「入」注記も付されていないため、ヴィサルガと考えられる条件がないように思われる。しかしここで使われる「惡」「斛」「儗」字はいずれもヴィサルガを含む種子に使われる漢字であるため（ハイネマン, 1985）、類推によってヴィサルガとして理解されて「∨」が付されたものと考えられる。

よって以上の例は①種子である、②「入」注記が付されている、③種子に使われる漢字による類推、のいずれかであり、いずれもヴィサルガを「∨」で示していると考えられる。

2.3. ヴィサルガ箇所に加点される音注

次に八田（1985）で*-ḥ* で表記される箇所を対象とし、サンスクリット*-ḥ* と九大本『金剛界儀軌 A』の*-k* 入声字が対応する箇所でどのような音注が加点されるかを調査した。その結果が表 1 である。ただし 2.2.で挙げた例は八田（1985）のサンスクリット形が*-ḥ* でなくても含めた。八田（1985）で*-ḥ* で表記されていても*-t* 入声の可能性がある「勿」字は除外した。

表 1　九大本『金剛界儀軌 A』のヴィサルガ表記

	∨	ク∨	キ∨	ク	キ
用例数	5	11	2	66	2

表 1 から以下のことが確認できる。まず「∨」について「∨」単体の例は 5 例、仮名「ク」「キ」と用いられる例は 13 例なので仮名とともに使うのが典型的用法と考えられる。また仮名について見ると、「ク」を使う例が 77

[5] 「儗」字の反切は原本「以魚反」で顛倒符が付されているため、顛倒符にしたがって修正した。

例で中心的であるものの、「キ」を使うものも 4 例ある。この点は「一律に（その先行する母音の如何に拘らず）常に「ク」とよまれ」る（堀内, 1961: 162）現代の陀羅尼読誦とは異なる。

2.4. ヴィサルガと「ク」「キ」の表記の違い

九大本『金剛界儀軌 A』でヴィサルガが「ク」「キ」と書き分けられているか確認するため、漢字音*-k* 入声や和語・漢字音・梵語音「ク」「キ」に「∨」が用いられるか調査した。用例を以下に挙げる（用例中の■は判読不能の例。以下同）。

- 漢字音*-k* 入声：客(ク)塵（12 オ 4）、擲(チヤク)す（27 オ 1）、鉤(コウ■ク)索（27 ウ 2）、ほか 2 例
- 漢字音「ク」：塵(ク)垢（1 オ 6）、恐(ク)怖（7 ウ 3）、加持句(ク)（45 オ 5）、ほか 2 例
- 漢字音「キ」：起(キ)印（1 ウ 8）
- 和語「ク」：置(オ)ク（4 オ 3）、如(クス)（4 オ 4）、摧(クタ)ク（8 オ 5）、唇(クチヒル)（45 ウ 3）、ほか 113 例
- 和語「キ」：掣(ヒ)キ（6 ウ 3）、覆(ウツフ)キ（31 オ 4）、脇(ワキ)（33 ウ 5）、被(キ)テ（15 オ 1）、ほか 15 例
- 梵語音「ク」：倶(ク)嚕(ロム)吽（16 ウ 5）、矩(ク)盧(ロ)矩(ク)盧(ロク∨)（37 オ 1）、ほか 4 例
- 梵語音「キ」[6]：紇(キリク∨)唎（14 オ 8）、訖(キ)哩二合吒（29 オ 1）、娑引乞(キ)栖(ス)二合怛（18 オ 8）、ほか 28 例

このように漢字音*-k* 入声と和語・漢字音・梵語音の「ク」「キ」には仮名のみが使われ「∨」は全く用いられない。一方 2.2-3.で見たとおりヴィサルガには「∨」が用いられる。そのため、九大本『金剛界儀軌 A』でヴィサルガは「ク」「キ」と書き分けられているといえる。

3. ヴィサルガを表記し分けたと考えられる類例

『毛詩』東洋文庫蔵本の紙背には治安元（1021）年写の『両部儀軌』が書写されている。この『両部儀軌』には朱点の音注が加えられている。『両部儀軌』の音注には「唎(レイ)引」(6) のような仮名注や、「瑟(之)跢」(68) のような類音注（「⏜」型の記号が加えられる）が用いられる。

このような音注のうち、以下の 2 例のみ朱筆の悉曇文字で注された例がある。小書きのローマ字転写によって当該の漢字に付された悉曇文字を示すこととする。

嚩日囉二合縛引制引斫 *jaḥ ?*入（14）[7]、羯迷迦囉迦囉 *raḥ*入（16）

この 2 例は「入」注記が付されておりヴィサルガが想定されるため、『両部儀軌』ではヴィサルガをもつ字のみに悉曇文字が使用されていると考えられる。ヴィサルガであっても「三摩地避(ヒク)入」(7) のように悉曇文字でなく仮名注が付されるものもあるものの、これは九大本『金剛界儀軌 A』で「∨」を使用する例と使用しない例があったことと共通する。

ただし悉曇文字表記は 2 例と少ないため確実な例とはいえない。類例をさらに探したい。

4. 音価の推定

以下ではヴィサルガの音価推定を試みる。音価の推定にあたっては確実にヴィサルガを表記し分けたと考えられる九大本『金剛界儀軌 A』にもとづいて行う。九大本『金剛界儀軌 A』は平安後期の写本とされており、また仮名字体からも遅くとも院政期ごろまでの文献であると考えられるので、音価推定にあたっては平安後期～院政期ごろを想定する。

4.1. 「∨」と仮名が併記されることの解釈

「∨」は仮名「ク」「キ」とともに用いられる例が中心的であった。訓点資料での特殊記

[6] 「キャ」は除いた。またサンスクリットの対応箇所が有声音のものも除いた。ただしサンスクリットの *h-*は有声音とされるものの、日本梵語音においてカ行で受け入れられるため用例として数えた。

[7] jaḥ に形が近いものの、修行点のような点がない。涅槃点は明確に確認される。

号は通常、仮名と併用せず用いられる。九大本『金剛界儀軌 A』では「ク」「キ」とともに使用されるため、ヴィサルガは音節/-ku, -ki/をとおして把握される音であったと推定される。

また仮名の「ク」「キ」とともに用いられることは、発音がサンスクリットの*-ḥ* そのものでなかったことを示す。当時の日本語のハ行子音は両唇音であったと推定されるため、後ろ寄りの子音をもつカ行音節の仮名で表記されることは首肯される。しかしサンスクリットの*-ḥ* と同じであれば、「舌は直前に発音された母音の位置を保つ」（辻, 1974: 8）ため、*trāḥ* を「タラカ」とし、*hoḥ* を「コヨ」とする例が出てくることが期待される。しかしそのような例はないため、サンスクリットの*-ḥ* そのものであったとは考えにくい。

4.2. 悉曇学書におけるヴィサルガと入声の関連

陀羅尼の読誦は悉曇学の研究対象であるため、悉曇学書の記述も音価推定のために参照する必要がある。悉曇学書ではヴィサルガを漢字音の*-p, -t, -k* の入声と関連づけて述べることがある。たとえば安然『悉曇十二例』には「涅槃三音 *kaḥ* 革掲劫是」（671-5）とある。ヴィサルガの *kaḥ* が「革」（*-k* 入声）、「掲」（*-t* 入声）、「劫」（*-p* 入声）と関連づけられて述べられているため、音価推定の際にも「入声らしい」音を想定するのが望ましいと考えられる。

3 種の入声のうち*-p* 入声は和語の語頭以外における「フ」と同様に[-ɸu]から[-u]への変化を経験し、平安後期ごろには*-p* 入声字にこの変化を反映する字音注が出現するという（沼本, 2023 [1986]: 232）。また*-k* 入声も平安後期ごろには[-k]に添加された母音が発達して開音節として独立し、和語の「ク」「キ」と同様になっていたと考えられる（沼本, 2023 [1986]: 135、肥爪, 2019: 407, n8）。このように*-p, -k* の入声は和語と同様の発音であり、「入声らしさ」がない。

一方*-t* 入声は室町時代ごろまで音節/-tu/（～/cu/）と異なっていたとされる（橘本, 1961[1928]: 262-263）。*-t* 入声の推定音価は一様でないものの、日本呉音で時代とともに、仮名表記が先行母音と連動して「―チ」から「―ツ」に移行するため、添加される微弱な母音が変化したとされている（林, 1980: 60-67）。また仮名表記の推移とキリシタン資料の表記などから、*-t* 入声を[-tu̥, -ti̥]のような無声化母音を添加したようなものとする推定がある（肥爪, 2019: 405-406, n3）。

4.3. ヴィサルガの推定音価

以上をまとめると次のようになる。

・/ku, ki/をとおして把握されるような音で、かつそれとは異なる音である。
・サンスクリット*-ḥ* の発音そのものではない。
・漢字音の入声らしい音である。
・*-t* 入声には [-tu̥, -ti̥]のような音が推定される。

これらの条件を満たすものとして、ヴィサルガには[-ku̥, -ki̥]のような音価が推定される。このような音価であれば/ku, ki/をとおして把握でき、また [ku, ki]のような音声とも区別できる。また*-t* 入声の推定音価にも近く、「入声らしさ」をもつ音であるといえる。

ただし声明譜の分析によって、漢字音の*-k* 入声は「非母音付加形の状態で保存されていたと見られる」状態であったという推定もある（浅田, 2000: 98）。「非母音付加形」を本発表の「無声化母音添加形」に読み替えるとすると、漢字音*-k* 入声とヴィサルガはともに[-ku̥, -ki̥]が推定されることになり、両者の区別ができないことになる。

しかし同時に*-k* 入声は「非母音付加形の衰退が進んでいた」（浅田, 2000: 90）とされる。*-k* 入声の母音は常に無声化するわけではない一方、ヴィサルガは特別に把握されると「無声化母音を常にターゲットとする」と考えれば*-k* 入声とヴィサルガとの区別は可能だと考える。

以上の音価推定は類例になる可能性があるとした『両部儀軌』にも適用可能であると考え

る。『両部儀軌』ではヴィサルガが悉曇文字で注記される例の他に仮名「―ク」でも表記される例があるため、[-kṷ]とする推定は矛盾なく説明できると考える（[-kį]は不明）。また沼本が指摘した石山寺本『金剛界儀軌』でも、ヴィサルガを涅槃点で表記する以外に類音字「託」でも表記しているようなので（沼本,1997: 804）、ヴィサルガを[-kṷ, -kį]と発音したと考える本発表の音価推定と矛盾しないものと考える。

このヴィサルガの[-kṷ, -kį]はサンスクリット*-ḥ* の発音と異なるため、日本語母語話者が漢字音の知識によって生み出した音であると考える。インド僧から直接サンスクリットを学ぶ機会を得られた日本語母語話者の僧侶はごく限られていたため、経典の音注を参考に漢字音の知識を用いて「正しい」音を作り上げたのであろう。

5. ヴィサルガと下降調

4.3.でヴィサルガに[-kṷ, -kį]を推定した。しかし多くの文献の陀羅尼ではヴィサルガに対して特殊な表記が行われていないことから、多くの場合無声化しない形であったであろう。

このように無声化せず母音がピッチをもつ場合、前部拍が高く後部拍が低い下降調であったと考えられる。それを示す用例を単字で挙げる。〔墨〕は声点が墨点であることを示す。

『金剛頂瑜伽蓮華部心念誦儀軌』九州大学附属中央図書館蔵長承 2（1133）年移点
藥ヤ〔墨〕（上）ク〔墨〕（平）（入軽）（41 ウ 2）、噁ア〔墨〕（上）ク〔墨〕（平）（入軽）（41 ウ 4）

『大毗盧遮那成佛神變加持經卷第二』九州大学附属中央図書館蔵天承 2（1132）年移点[8]
噁ア（上）ク（平）（35 オ 1）、嚩ラ（上）ク（平）入（36 オ 4）、ほか 7 例

『大毗盧遮那成佛神變加持經卷第二』佼成図書館蔵延慶 2（1309）年写本[9]
噁ア（上）ク（平）（188）、嚩ラ（上）ク（平）（208）、ほか 8 例

『大日経広大成就儀軌』東寺蔵康平 2（1059）年・延久 2（1070）点（馬渕, 2006：234）
却キ（上）ヤ（上）ク（平）、折タ（上）ク（平）、ほか 30 例
噱■■ク（平）（一部判読不能の例）

上平～上上平の声点パターンが複数の文献で得られ、「字」全体の音調は下降調と推定される。下降してヴィサルガ箇所を低くすることで/ku/の母音の聞こえを弱くできる。「4. 音価の推定」で推定した [-kṷ, -kį]も母音を無声化し聞こえを弱くしていたため、母音の無声化と下降調はともにヴィサルガ箇所の聞こえを弱くする点で共通する方法であるといえる。

一方で例外的に上上の声点パターンで表記される文献もある。

『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』大東急記念文庫蔵延久 2（1070）年点
*aḥ*ア（上）ク（上）（4 オ 4）

『大楽金剛不空真実三摩耶経』高山寺蔵鎌倉期点
*āḥ*ア（上）ク（上）（56）、*hrīḥ*キ（上）リ（上）ク（上）（85）、*haḥ*カ（上）ク（上）（153）

ヴィサルガを示す*-k* 入声字には入声軽点が加点されることが一般的に行われ、たとえば

[8] この文献においてここで平声点とした点は「ク」の最終画の下に加点される。一方「ク」と同じく最終画が長い「チ」は最終画の先端に平声点が加えられる。また「入」注記と入声軽点が加えられた「郝」の仮名音注の下に「カク・」（6 オ 2）のような声点と認定できない点があることからも、ここで平声点と認定した点はヴィサルガを示す記号である可能性もある。しかし次に挙げる佼成図書館蔵『大毗盧遮那成佛神變加持經卷第二』でもほとんど同じ箇所に平声点が加点されるので、ここでは平声点として扱った。もしヴィサルガ専用の記号と言えるならば、この文献はヴィサルガを書き分けた文献として挙げられる。

[9] この文献には大治 3（1128）年、建仁 3（1203）年、正応元（1288）年、延慶 2（1309）年の書写・移点に関する識語があり、最終的な書写・加点を延慶 2 年と見ておく。

先に見た『金剛頂瑜伽蓮華部心念誦儀軌』九州大学附属中央図書館蔵長承 2（1133）年移点本でも「斛（コク）（入軽）」（41 ウ 2）のように入声軽点が加点される。漢字音の入声軽点の示す音調は高平調と推定されているので（金田一, 1952: 699）、入声軽点にあわせて高平調をとったと考える。

5. まとめ

以上をまとめると次のとおりである。

- ヴィサルガを表記し分ける文献として石山寺本『金剛界儀軌』に加えて九大本『金剛界儀軌 A』が挙げられ、東洋文庫蔵『毛詩』紙背『両部儀軌』も類例の可能性がある。
- 日本梵語音におけるヴィサルガは[-kṳ, -kį]のような無声化した狭母音をもつ音節であったと考えられる。
- ヴィサルガに添加された母音が無声化せずピッチをもつと、「字」全体としては下降調として把握された。この下降調はヴィサルガ箇所の母音の聞こえを弱くする点で、無声化と類似した効果をもつ方法であった。

ただし、なぜヴィサルガの書き分けがある文献において、なぜ一貫して特殊な表記が行われないのかということについては、現時点で明確な答えを持たない。類例をさらに集めた上で考えたい。

［付記］原本をお見せくださった九州大学附属中央図書館、大東急記念文庫、佼成図書館の皆様に心よりお礼申し上げます。またヴィサルガについては川村悠人氏にご教示いただきました。記してお礼申し上げます。本発表は JSPS 科研費 JP25K00465 の助成を受けたものです。

対象資料（URL はすべて 2026 年 4 月 7 日確認）:『金剛界儀軌』延久 2（1070）年点（24-107-876）、大東急記念文庫蔵:原本調査。所在は丁数・表裏・行数で示す／九大本『金剛界儀軌 A』平安後期写本（国文/10O/31）:九大コレクション（https://hdl.handle.net/2324/2348550）、原本調査。所在は丁数・表裏・行数で示す／『金剛頂瑜伽蓮華部心念誦儀軌』九州大学附属中央図書館蔵長承 2（1133）年移点（国文/100/44）: 九大コレクション（https://hdl.handle.net/2324/2348547）。所在は丁数・表裏・行数で示す／『悉曇十二例』: 馬渕和夫編（1985）『影印注解悉曇学書選集　第一巻』勉誠社。所在は複製本の頁数と行数で示す／『大毗盧遮那成佛神變加持經卷第二』九州大学附属中央図書館蔵天承 2（1132）年移点（国文/10O/42）: 九大コレクション（https://hdl.handle.net/2324/2348549）。所在は丁数・表裏・行数で示す／『大毗盧遮那成佛神變加持經卷第二』佼成図書館蔵延慶 2（1309）年写本（古 96／貴 1-5E）: 原本調査。所在は行数で示す／高山寺蔵『大楽金剛不空真実三摩耶経』（重文第 1 部 297 号）鎌倉期点：沼本克明（1983）「高山寺蔵理趣経鎌倉期点解説並びに影印」鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究』第 6 輯、武蔵野書院、pp.181-216。所在は行数で示す／東洋文庫蔵『毛詩』紙背『両部儀軌』治安元（1021）年写（貴重書 一-A-3）: *Toyo Bunko Media Repository*（https://app.toyobunko-lab.jp/s/main/document/977f940a-8bd4-3110-0ba2-680e78633ecf）。所在は行数で示す

参考・引用文献：浅田健太朗（2000）「声明資料における入声音」『国語学』51(3)、国語学会、pp.88-102／上村勝彦・風間喜代三（2010）『サンスクリット語・その形と心』三省堂／金田一春彦（1952）「日本四聲古義」寺川喜四男・金田一春彦・稻垣正幸編『國語アクセント論叢』法政大學出版局、pp.627-703、1954 年の再版による／種智院大学密教学会編（2015）『新　梵字大鑑　上　実践編』法藏館／辻直四郎（1974）『サンスクリット文法』岩波書店／栂尾祥雲（1935）『祕密事相の研究』高野山大學出版部、1943 年の第 3 版による／中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士編（2023）『岩波仏教辞典　第三版』岩波書店、初版は 1989 年／沼本克明（1997）『日本漢字音の歴史的研究――體系と表記をめぐって――』汲古書院／沼本克明（2023）『日本漢字音の歴史　新装版』東京堂出版。原著初版 1986 年／ハイネマン, ローベルト（1985）『漢梵・梵漢ダラニ用語用句辞典』名著普及会／八田幸雄（1985）『真言事典』平河出版社／橋本進吉（1961）『橋本進吉博士著作集　第十一册　キリシタン教義の研究』岩波書店、原著は橋本進吉（1928）『文祿元年天草版　吉利支丹教義の研究』東洋文庫／橋本進吉（1966）『橋本進吉博士著作集　第六册　國語音韻史（講義集一）』岩波書店／林史典（1980）「呉音系字音における舌内入声音のかな表記について」『国語学』122、国語学会、pp.55-69／肥爪周二（2019）『日本語音節構造史の研究』汲古書院／堀内寛仁（1961）「音譯字に於ける入聲の用法について」『日本佛教學會年報』26、日本佛教學會、pp.157-174／馬渕和夫（2006）『悉曇章の研究』勉誠出版／Maspero, Henri.（1920）. Le dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang. *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient* 20. pp.1-119.

変体漢文における助字「被」の尊敬用法の成立
―10 世紀の古記録を中心に―

呉子凡（ゴシハン）（総合研究大学院大学）

1. はじめに

本発表は、変体漢文における助字「被」（る・らる）の尊敬用法の成立過程を明らかにするため、10 世紀から 11 世紀初頭にかけての古記録三資料（『貞信公記』『小右記』『御堂関白記』）に見られる「被＋動詞」構文を各資料につき 100 例ずつ調査し、「被」の尊敬用法の成立時期と、主催用法（吉田 2019）から派生した可能性について分析する。

「被」（る・らる）の尊敬用法は、受身用法・自発用法よりも遅れて文献に現れるとされており、その成立についても、受身起源説・自発起源説などが提案されている。ただし、これらの説には、格配置の違いなどの点について説明が難しいという問題がある。

(1) 二度表、使邦基朝臣（藤原）奉之、中使俊蔭朝臣（藤原）被返表章
(914:貞信公記:延喜 14.9.15)

(2) 叙位儀、依老人星賀被行云々　(987:小右記:永延 1.1.6)

古記録における「被」には、(1)(2)のような受身・自発ではなく、一般尊敬とも解釈しがたい例が存在する。桜井（1966）ではこれを「公尊敬」、尾上（2003）・川村（2012）では「非人称催行」と呼び、尊敬用法の中でも特殊な用法と位置付けている。吉田（2019）は、このような構文の主語が直接的な行為者ではなく、行為を主催する立場にあるという特徴に着目し、これを独立の「主催用法」と呼んだ。また、この主催用法が、中古において尊敬用法へと拡張したと主張している。

本発表では、こうした指摘を踏まえつつ、「被」の用例が多く見られる 10 世紀の変体漢文古記録に対象を限定し、その内部に見られる「被」の用法変化をより詳細に検討するとともに、主催用法の位置づけについて考察する。

2. 調査資料と方法

本発表で扱う資料は、『貞信公記』（907-925・940-945）、『小右記』（987）、『御堂関白記』（1000・1004）である。東京大学史料編纂所の古記録フルテキストデータベースを利用し、各資料から「被＋動詞」構文を各 100 例（ただし『小右記』は 103 例）抽出して調査した。また、読み下し文の確認および該当箇所の「被」字の用法の判定には、摂関期古記録データベースおよび倉本（2009・2015）を参照した。

用例調査にあたっては、動詞・名詞として用いられた「被」を除外したうえで、本調査の対象範囲内において各資料に見られる助字「被」の用法および例文の文構造を検討し、分類を行った。本調査で確認された「被」の用法は、受身・主催・尊敬の三種類である。

また、「被＋動詞」構文に用いられる動詞について、本発表は吉田（2019）を参照し、「介在者の存在が想定されるか否か」「主語が特定できるか否か」という観点から、表 1 に示す三類型に分類した。これに基づき、対象とした三資料における「被」の用法を検討

し、通時的な用法変化の有無およびその具体的な変化の過程を考察する。

表 1　「被＋動詞」構文に用いられる動詞の種類

		タイプ	動詞の性格
介在者の存在が想定しえない		A	移動動詞、存在動詞
介在者の存在が想定しうる	主語が特定できる	B	伝達動詞、授受動詞、政務・行事を行う動詞
	主語が特定できない	C	

タイプ A の動詞は、主語自身の行為を表すものであり、主に移動・存在を表す動詞（参・座・候など）が見られる。（3）の動詞はタイプ A であり、左府が摂政のもとへ参上することを表しており、ここにおける「被」は尊敬用法と考えられる。

タイプ B・C の動詞は、介在者の存在が想定され、主語が介在者を通して間接的に行為を実行するという意味を表す。（4）はタイプ B で、中宮が極楽寺において祭事を行うという意味であるが、中宮自身が動作主であるのではなく、主催者の立場にある。（5）はタイプ C で、主語が明示されていないが、政務のような公的活動は、天皇のもとで行われるものと解される一方、実際の行為者が天皇ではないという点で、タイプ B と類似した用法である。

なお、（1）のように、主語が明示されていないが、「中使」が天皇からの使者であることから、主語が天皇であると読み取れる例もある。そのため、タイプ B・C は必ずしも明確に区別していない。ただし、主語が間接的な行為者であるという共通点を持つことから、本発表では「被＋タイプ B・C 動詞」を一括して主催用法として捉える。

（3）昨日左府為一位（従一位）賀被参摂政殿　（987:小右記:永延 1.1.10）

（4）八日、丙午、中宮（藤原穏子）於極楽寺被修前坊（保明親王）周忌御態　（924:貞信公記:延長 2.3.8）

（5）弘遠朝臣云、昨日被定蔵人云々　（987:小右記:永延 1.1.9）

また、本発表ではタイプ B・C として扱う例の中には、主催用法と尊敬用法のいずれとも解釈しうる例が存在することに注意する必要がある。

（6）十七日、太上皇（朱雀）・大后（藤原穏子）共御栢殿（柏梁殿）有遊覧之興、然間除書出来覧之、急急還御本殿、被閇御門云云　（946:貞信公記:天慶 9.9.17）

（7）主人出居、被羞飲食於公卿及殿上人　（987:小右記:永延 1.1.19）

（6）の主語は太上皇と太后であるが、「御門を閉じる」の動作主は彼らではなく、宮中に仕える者と考えられる。（7）についても、主人が命令を下し、従者が飲食物を供した状況が想定される。主語が介在者を通して行為を実行するという点から、いずれも主催用法と解することができる。

しかし一方で、このような文脈において介在者が省略されることにより、後続の動詞が主語自身の行為として解釈される余地もある。この場合、「被」は尊敬用法としても解釈しうる構文となる。このような構文は、「被」の主催用法から尊敬用法への拡張を促した重要な契機であった可能性がある。

本発表では、主催用法と尊敬用法の両方に解釈しうる例については、単純な主催用法と

は区別したうえで、主催用法として数える。また、変体漢文では格助詞が基本的に用いられないため、それによって受身と判断しうるものについては、主催・尊敬用法の検討から除外し、受身用法として扱う。尊敬用法と認定するのは、文脈から尊敬と解することが妥当と考えられる例に限る。

3. 結果と分析

3.1 古記録における「被」の尊敬用法の出現時期

まず、各資料における「被」の用例数を用法別にまとめたものを表 2 に示す。主催用法と尊敬用法の両方に解釈しうる用例数は括弧内に示した。

表 2　各資料における用法別の「被」の用例数

資料	受身	主催	尊敬
貞信公記	18	75(8)	7*
小右記	14	51(24)	38
御堂関白記	12	58(24)	30

ここでまず注目したいのは、『貞信公記』では『小右記』『御堂関白記』に比べて尊敬用法の用例数がかなり少ない点である。実際の用例を見ると、7 例のうち 3 例は忠平の長男である実頼の私記箇所に見られるものであり、1 例は判読が困難な箇所の補読である。したがって、残る 3 例が尊敬用法の確実な例となるが、いずれも 930 年以降のものである。

(8)　廿六日、昨今左閤（藤原仲平）始除目儀〔議〕、而今日称有所労不被参入
(939:貞信公記:天慶 2.12.26)

(9)　早朝左丞相入坐、被告西国兵船多来、備中軍逃散之　(940:貞信公記:天慶 3.1.20)

(10) 深夜中使伊尹（藤原）来、賜尚侍（藤原貴子）正三位位記、而依被忌犬死穢不被物
(945:貞信公記:天慶 8.1.9)

(8) は「被＋タイプ A の移動動詞」であり、今回の調査範囲で確認された尊敬用法の最古例である。(9) の動詞「告」は伝達動詞であり、古記録においては人を介して伝言する場合が多いため、通常はタイプ B・C に属するものとみなされることが多い。しかしここでは「早朝左丞相入坐」とあることから、対面での伝達場面であったと考えられる。そのため、ここでの「告」は主語の直接的な行為で、「被」は尊敬用法と解釈できる。(10) については主語が明示されていないが、前日の条によれば宮中に犬死の穢があったため、「忌」の主語は天皇と考えられる。この点から、ここでも尊敬用法と解釈できる。

『貞信公記』では、尊敬用法として解される「被＋移動・存在動詞」はこの 1 例のみであった。これに対し、『小右記』『御堂関白記』では尊敬用法の用例数が多く、その中でも移動・存在動詞が多くみられる。表 3 に、三資料における尊敬用法の「被」の後続動詞とその用例数を示す。

表 3　尊敬用法の「被」に後続する動詞とその用例数

資料	動詞とその用例数
貞信公記	参入(1)、告(1)、忌(1)
小右記	参(16)、参入(8)、候(4)、

	過(1)、仰(1)、説(1)、向(1)、出(1)、相遇(1)、談(1)、着(1)、拝(1)
御堂関白記	仰(6)、座(5)、来(3)、行[く](2)、参(2) 加(1)、会合(1)、坐(1)、初(1)、申(1)、罷出(1)、夢(1)、命(1)、立寄(1)、令(1)

このように、「被＋移動・存在動詞」は『貞信公記』では930年以降に現れ、10世紀後半の『小右記』『御堂関白記』では一般的に用いられるようになることが確認された。他の動詞が尊敬用法の「被」に後続する例も見られるが、①その数が移動・存在動詞に比べて少ないこと、②「被＋移動・存在動詞」における「被」は確実に尊敬用法と解釈できること、の2点から、本稿では「被＋移動・存在動詞」の初出を古記録における「被」の尊敬用法の確実な成立を示す指標とみなし、その出現を930年頃に位置づける。

吉田（2019）は、平安期の古記録における「被」の尊敬用法の出現を示す目安として、11世紀初頭の『小右記』において心理描写を表す動詞が用いられる例を提示している。しかし、今回の調査を通して、古記録における尊敬用法の出現時期は、実際にはそれよりも早く、930年頃まで遡る可能性があることが確認された。

3.2 主催用法から尊敬用法への拡張可能性

次に、調査結果を踏まえ、古記録における「被」の用法が主催用法から尊敬用法へと拡張した可能性について検討する。

堀畑（2007）は、中世の「（サ）セラル」が「使役＋尊敬」から尊敬用法へ派生する過程において、被使役者の存在が次第に希薄化し、後続する動詞が主語自身の行為として把握されるようになることを指摘している。吉田（2019）は、「る・らる」の尊敬用法の成立についても、介在者が想定されうる動詞文において、その介在者の行為がより上位にある主催者の行為として読み替えられることによって成立したと述べている。

両者に共通するのは、主語が間接的に行為を実行する場合、行為者が文脈上省略されることで、当該の行為が主語自身の行為として読み替えられるという現象である。今回の調査では、実際に10世紀の古記録に見られる「被」においても、このような現象が生じていたことが確認された。

表4は、各資料における主催用法に用いられる動詞とその用例数（2回以上のもの）を示したものである。

表4　主催用法の「被」に後続する動詞とその用例数

資料	動詞とその用例数
貞信公記	仰(13)、行[ふ](12)、定(10)、修(4)、奉(4)、定行(4)、問(4)、祈(2)、申(2)、奏(2)、返(2)
小右記	下(5)、定(5)、奉(5)、行[ふ](4)、修(4)、仰(3)、付(3)、止(2)、奏(2)、任(2)、訪(2)、立(2)
御堂関白記	仰(10)、定(6)、行[ふ](5)、任(5)、申(4)、奏(4)、延(3)、下(2)、修(2)、奉(2)

主催用法の「被」には、①伝達動詞（仰・問・奏・申）、②授受動詞（奉・下・付）、③行事や政務を行う意味の動詞（行[ふ]・定・修・任）などが多く用いられている。前述のとおり、これらの動詞が表す行為には介在者の存在が想定しうるため、実際の行為者で

ある介在者が文脈上省略された場合、動詞の表す行為が主語の行為として解釈されやすくなる。このような文は、「被」が尊敬表現の標識として再解釈される素地となっていると考えられる。とりわけ、その傾向は、(4) および (11) (12) のように、主語が主催者の立場にあることが明らかな文において認められる。(12) の主語は文中には明示されていないが、文脈から摂政であると推定される。

(11) 後太上天皇（醍醐天皇）御国忌法事、中宮（藤原穏子）被修天台西塔院
(931:貞信公記:承平 1.9.16)

(12) 廿日、辛亥、今日於摂政第被修仁王講云々 (987:小右記:永延 1.6.20)

ただし、これはあくまで、主催用法が尊敬用法へと拡張しうる可能性を示すものであり、その変化の過程そのものを直接示すものではない。そこで注目されるのが伝達動詞「仰」である。吉田 (2019) は、「仰す」のような伝達動詞について、同じ動詞であっても、動作主の読み替えによってタイプ B からタイプ A へと解釈が転ずることがあり、それが「被」の尊敬用法成立の契機になったと述べている。今回の調査でも、このような転換の前後を示すと考えられる用法上の違いが、10 世紀前半の『貞信公記』と、後半の『小右記』『御堂関白記』との間に確認された。

今回調査した『貞信公記』の範囲では、「仰」が 13 例使用されており、そのうち 8 例では、介在する伝言者が明示されている。

(13) 十五日、頭朝臣 (平伊望) 等来、被仰定御誦経使 (926:貞信公記:延長 4.12.15)

(14) 使朝忠朝臣（藤原）有被仰之事 (939:貞信公記:天慶 2.10.2)

(15) 使中将（藤原師尹）賜忠文（藤原）朝臣表、被仰可定申之状
(945:貞信公記:天慶 8.9.1)

(16) 又造山崎橋使事、使敦敏被仰 (945:貞信公記:天慶 8.12.1)

ほかに、(17)のように介在者が明示されていない例も数例あるが、文脈上、これを直接的な発話の場面と断定できる根拠は乏しい。したがって、『貞信公記』における「被仰」は、介在者を伴う間接的な発話に用いられることが多く、「被」を積極的に尊敬用法として認める根拠も乏しいことから、ここにおける「被」は主催用法と考えられる。

(17) 十四日、中使敦敏（藤原）来云、中宮（藤原穏子）被仰内親王（康子）付〔殊〕可給近江国五十戸之状 (946:貞信公記:天慶 9.7.14)

一方、『小右記』『御堂関白記』では、主催／尊敬のいずれとも解釈しうる用例もあるが、明らかに介在者が存在しえない直接的な対話場面と考えられる例が多く見られる。

(18) 四日、丁卯、依喚参殿、被仰宮遷御雑事 (987:小右記:永延 1.1.4)

(19) 早朝参摂政御宿所、良久候御前、被仰雑事 (987:小右記:永延 1.5.22)

(20) 参中宮御方、来月可有行幸由被仰 (1000:御堂関白記:長保 2.2.14)

(21) 候御前、被仰雑事次 (1004:御堂関白記:寛弘 1.3.9)

これらの例はいずれも話者と聴者が対面する場面と考えられ、「被仰」は上位者（話者）の行為に対する尊敬表現として解釈される。このような資料間に見られる用法上の違いは、

「被」が 10 世紀の古記録において主催用法から尊敬用法へと拡張したことを示唆するものである。また、(9) が示すように、「被＋伝達動詞」が直接的な対話場面に用いられる例は、後期の『貞信公記』にもすでに現れている（今回の調査ではこの 1 例のみである）。したがって、このような用法上の違いは、単なる資料間の差異や記主ごとの書き癖としてではなく、通時的な変化として理解するほうが妥当である。

なお、10 世紀後半になると、「被」の尊敬用法は一般化する一方で、構文上はなお介在者を伴う主催用法と認められる例が存在する点には注意が必要である。

(22)　又於神泉苑、以内供元真被行請雨経法云々　　(987:小右記:永延 1.5.24)

(23)　内御読経、依有労所、申障不参、以四十二口僧、於清涼殿被修不断

(1004:御堂関白記:寛弘 1.5.17)

4.　まとめ

以上の内容を踏まえ、10 世紀の古記録における主催用法と尊敬用法の関係を整理する。10 世紀初頭には「被」の尊敬用法の用例はまだ確認されず、主催用法の例が多く見られる。その中で、介在者が想定される動詞が主催用法の「被」を伴って用いられ、かつ介在者が省略される場合には、動詞の表す行為が主語自身の直接的な行為として読み替えられる傾向が生じる。古記録では、この種の主催用法の主語が上位者である場合が多く、その結果、「被」が尊敬表現の標識として再解釈される素地があった。

930 年以降になると、従来は間接的な対話場面で用いられていた「被＋伝達動詞」に、直接的な対話場面で用いられる例が現れるようになり、「被」が主催用法から尊敬用法へと拡張したことが示唆される。同時に、「被＋移動・存在動詞」の用例も出現し、「被」の尊敬用法の成立を示すものと考えられる。

10 世紀後半になると、「被」の尊敬用法の例が一般的に見られるようになり、その用法が定着する。一方で、主催用法もなお存続しており、11 世紀初頭には両用法が混在する状態に至る。

以上の結果から、古記録における「被」の尊敬用法は、主催用法を基盤として成立したものと考えられる。なお、「被」の主催用法を他の用法とどのように統一的に位置づけるかについては、他の用法も視野に入れた、より広範な資料調査が必要であり、今後の課題としたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 25H01243 による研究成果の一部である。

【参考文献】吉田永弘（2019）『転換する日本語文法』和泉書院／川村大（2012）『ラル形述語文の研究』くろしお出版／堀畑正臣（2007）『古記録資料の国語学的研究』清文堂／辛島美絵（1991）「古文書における「る・らる（被）」の特色」『語文研究』71／桜井光昭（1966）『今昔物語集の語法の研究』明治書院／尾上圭介（2003）「ラレル文の多義性と主語」『月刊言語』三二巻四号／倉本一宏（2009）『藤原道長「御堂関白記」（上）全現代語訳』講談社／倉本一宏（2015）『現代語訳小右記 1』吉川弘文館

「情報を整理して示す」字音形態素「表」の定着――漢訳洋書の影響――

伊藤真梨子, ITO Mariko （学習院大学 非常勤講師）

1. はじめに

「一覧表」「時刻表」のように、「表」は情報を整理しわかりやすく示すために欠かせないものである。字音形態素「表」は「表面」「表現」「辞表」のように複数の意味を表し使用頻度も高いが、日本でいつ頃から「様々な情報を整理して示した形式」の意味で使用されるようになったのか、はっきりとはわかっていない。本発表では、近世の天文学や和算の資料を調査し、「情報を整理して示した形式」を意味する字音形態素「表」の日本での定着に中国初期洋学書[1]の『崇禎暦書』[2]由来の「八線表」の輸入が関係していることを示す。（※以下、「情報を整理して示した形式」を意味する字音形態素・一字漢語「表」を《表》という形で、また、名称に関わらず「表形式で情報を整理し示すもの」を【ヒョウ】という形で記述する。）

中国語で書かれた西洋の知識についての書物が、近世から近代の日本語に影響を与えたことはよく知られており、中国初期洋学書の影響についての研究は、『職方外紀』松井利彦（1983）、『職方外紀』『西学凡』『坤輿図説』『西方要紀』佐藤亨（1983）、『天経惑問』渡辺敏夫（1986）、『物理小識』杉本つとむ（1998）、『西学凡』など吉田忠（2004）、『医学原始』舒志田（2020）、伊藤（2026）などがある（※取り上げた書名・研究者名・発表年の順で記す）。本発表で取り上げる「表」と同じく暦学・数学分野では『暦算全書』の影響にふれた藤原松三郎（1960）の「楕円」や奥山光（2026）の「点」の研究がある。これらの研究では、やはり新語の輸入や語の意味・用法の更新に注目されていることが多いが、本発表では中国初期洋学書の影響による語の交替を取り上げる。このタイプの変化例に前記藤原（1960）の「側円」から「楕円」への交替があるが、これは数学史の文献であることもあって、字音形態素としての変化や他分野への影響などは論じられていない。本発表では、中国初期洋学書の影響の一つの形として、「立成」から「表」への交替が起き、さらにそれが《表》の活性化へと繋がり、現在の日常的な語彙へも影響を及ぼしていることを具体的に提示する。

2. 字音形態素「表」の研究状況

《表》は現代では日常的なものであるためか、それを特別に取り上げた研究を見つけることができていない。『日本国語大辞典　第二版』（※以下、『日国』とする）の単語「表」のブランチの(3)は「事柄や数値の関係を簡潔に理解できるように列をそろえて並べて書き表わしたもの。年表、一覧表、数表、図表など。」となっていて、用例は『軍制綱領』（1875）、『吾輩は猫である』（1905-06）、『史記-太史公自序』のものが挙げられている。また、「～表」の形で「情報を整理して示した形式」を意味している漢語は『日国』に 102 語立項されているが、日本の用例があるものは 46 語で、用例なし 54 語、補注に使用状況が記されているもの1語、中国の用例のみのもの1語であって、半数以上はいつ頃から使用されているのか用例から辿ることができない。『日国』で日本の用例がある 46 語中、『史記抄』（1477）の「諸表」「年表」以外は全て 1870 年代以降のものであるため、《表》が近代に増えたと考えることもできるが、西洋から自然科学知識が輸入された近世の用例が全くないという結果には疑問が残る。ただ、この問題を解明する

[1] 佐藤亨（1983）では「西儒」（中国に来ていたヨーロッパ人）が漢訳（著）した資料群を「中国洋学書」とし、「幕末から明治初期にかけて移入された」ものを「中国後期洋学書」、それ以前のものを「中国初期洋学書」としている（p.13, p.24）。本発表ではこの定義に加えて、中国人の手による西洋知識を扱った書物も含め、中国洋学書として扱う。

[2] 『崇禎暦書』は明代にイエズス会士の協力によって作られた暦書であり、佐藤（1983）でも「「西儒」とその主要著（訳）書」（p.16）の一つとして挙げられている。

手掛かりも『日国』に存在する。それが「八線表」である。『日国』の「八線表」には用例は示されていないが、語義として「和算における三角関数表。正弦、余弦、正接、余接、正割、余割、正矢（せいし）、余矢の八表から成る。（後略）」（※下線は発表者による。以下同じ）と記述されている。八線表は享保 12 年（1727）に中国から輸入されている。

※以下、引用文中の漢字は原文の字体に近いものがない場合は新字体に変更した。また、書籍の名称は参照時の便宜を図るため、当該資料の所蔵先での表記を優先した。

3. 八線表輸入とその影響

3－1. 八線表輸入の経緯

八線表の輸入について、藤原（1960）に「割圓八線表は崇禎暦書巻 109, 110 より入つたものと, 蘭書から入つたものとの二つの系統がある. 」（p.456）とある[3]。その輸入の経緯については小林龍彦（1990, 1991, 2002, 2007, 2011）に詳しく述べられている。今その概略を示すと、享保 11 年（1726）に梅文鼎の『暦算全書』[4]が輸入され、徳川吉宗の命を受けて建部賢弘と中根元圭が訓点和訳を行った（実際に訓点和訳を行ったのは中根）が、その『暦算全書』には八線表が含まれていなかった。建部と中根による訳本『新写訳本暦算全書』（享保 13 年訓点和訳終了、享保 18 年献上）には『割円八線之表』が含まれているが、この八線表は『暦算全書』のものではなく、享保 12 年に輸入された「『崇禎暦書』の「割円八線之表」を本源とする（中略）順治 2（1645）年に刊行された『西洋新法暦書』から取られたもの」（小林（2002）p.31）を写し取ったものであるという。享保 11 年輸入の『暦算全書』にない八線表が急ぎ輸入された理由として、小林（1990）では「三角比を利用する限りは, 割円八線表を欠くことはできない. ここに, 八線表の輸入を必要とする大きな理由があったとみてよいだろう. 」と述べている。小林（1990）に引用されている宮内庁書陵部蔵『新写訳本暦算全書』の『割円八線之表』は枠線内に正弦、余弦などの数値が記載されたもので、現在イメージされる【ヒョウ】である。（※発表時に「八線表」の例を映写予定。）

3－2.「立成」から「表」へ

3－1でみたように、享保 12 年に輸入された「八線表」は【ヒョウ】と「表」が結び付いている例である。しかし、【ヒョウ】がそれ以前に日本になかったわけではない。ただ「立成」という名称だった。「立成」は中国から輸入された、暦を作成するための計算表のことであるようで、中山茂編（1982）には「西暦 729 年, 唐では麟徳暦にかわって大衍暦が施行された. （中略）日本には天平7年（735）早くもその暦法を示す大衍暦経1巻と, その計算表である立成 12 巻が入ってきた」（p.214）とある。「立成」の例として、例えば東北大学附属図書館所蔵の関孝和（1640 ごろ-1708）輯著・淡山尚絅（1686-1749）筆の『授時暦經立成』のファイル3コマ目左頁には「太陽立成」と題された【ヒョウ】があり、同じコマの右頁には「紀法圖」として六十干支の一覧表のようなものも掲載されている。（次頁画像1）

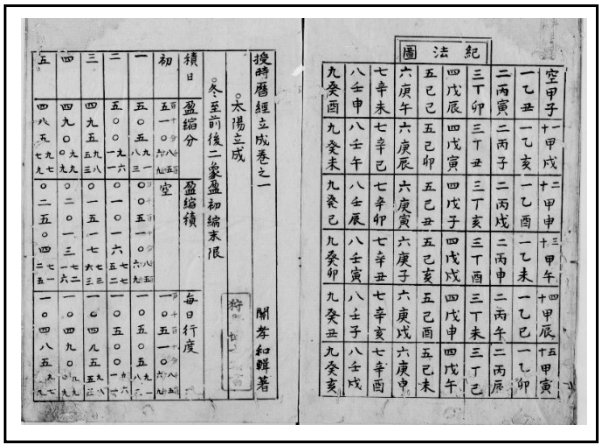
この「立成」と「表」の関係について、『暦算全書』の訓点和訳を行った中根元圭（1662-1733）の『八線

---

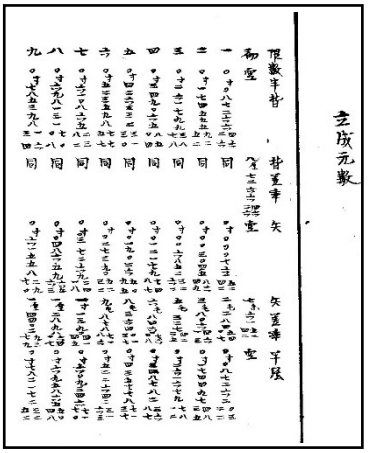
3 蘭書からの割円八線表の輸入は藤原（1959）によれば本多利明による。本多利明（1743/1744-1820/1821）は江戸時代中期から後期の経世家。

4 雍正2年（1724）版の『兼済堂纂刻梅勿菴先生暦算全書』。小林（2007）に「『暦算全書』は清朝中期を代表する暦算家梅文鼎（1633-1721）の没後, 孫の梅穀成が編纂し刊行した天文学・暦学・数学に関する一大全書であった. 当時の中国にはイエズス会宣教師の手によって科学革命以前の西洋の天文学や数学知識が伝えられていたが, 梅文鼎はそれら新来の知識を中国の伝統的思考様式に取り込んで吸収した, と言われる. したがって『暦算全書』には新旧両様の数理知識が混在していた」（p.4）とある。

画像1 『授時暦經立成』請求記号:7/31645/1



画像2 『弧背術』(『弧率』)請求記号:写 0084



※いずれも
東北大学
附属図書館
所蔵

表算法解義』(東北大学附属図書館所蔵、ファイル5コマ目左頁2行目)には「表ハ古ニ所謂立成ナリ」と書かれている[5]。数学史の方面では「立成」が現代でいう「表」であるということは自明のことなのだろうが、日本語学でこれが指摘されたことはないようである。「立成」は『日国』には立項がなく、『大漢和辞典修訂第二版』には立項されているが、【ヒョウ】の意味は記載されていない。上掲の中根の『八線表算法解義』は成立年が不明だが、小林(1990)では「『八線表算法解義』は中根元圭が『新写訳本暦算全書』を書き上げた後の比較的早い時期の著作物で,それは明らかに『暦算全書』と『崇禎暦書』の「割円八線之表」の影響によるものと判断するに至った.」と述べられている。このようなことをふまえると、八線表の輸入が契機となり「立成」から「表」へと用語が変化していったということが考えられる。

3−3. 日本における三角関数表

八線表、つまり三角関数表自体は享保 12 年以前に日本にも存在していた。藤原(1956)では『暦算全書』の訓点和訳に関わった建部賢弘の著作『弧率』について、「本書における正弦,正矢の表は1度毎の 11 桁表である.これは賢弘が歴術の必要から自から製作したもので,西洋の三角函數表が中國を通じてわが國に入つたものに據つたものでないことは,本書の記述と,表の體裁から明らかに推論し得られる」(p.350)、同じく建部の『算暦雑考』について「ここに西洋流の1度毎の矢および弦の表を初めて製作し,(中略)實にわが國における三角函數表の初めである.」(p.358)と述べられている。『弧率』と『算暦雑考』はいずれも成立年は不明だが、先行研究からすれば享保 12 年の八線表の輸入以前に書かれたものと思われる[6]。では、それらの三角関数表は「表」と題されているのだろうか。東北大学附属図書館所蔵の『弧背術』(岡本則録旧蔵、藤原(1956)p.336 の記述から、内容は上掲『弧率』のものと判断される)と『筭暦雑考(算暦雑考)』を確認したところ、『弧背術』のファイルの 37 コマ目には「立成元數」という題の後に、枠線のない【ヒョウ】がある(上掲画像2)。この部分について藤原(1956)では「「設歴術無如用立成法」とあつて,徑1尺の半圓周を90等分したものを1限と名づけ,その倍数を2,3,…,限といひ,これらの弧を半背とする弧の半弦および矢を求めて,これを表(立成)に作つてゐる.現在の言葉をもつ

[5] 加藤平左エ門(1955)では「表ハ右ニ所謂立成也」(p.114)と翻字しているが、東北大学附属図書館蔵本と早稲田大学蔵本を参照し、「右ニ」ではなく「古ニ」とした。

[6] 小林(2007)には、「建部賢弘は,自著「弧率」や「算暦雑考」(成立不詳)において,1度ごとの弦の長さを求めている.(中略)享保 12 年に伝わった三角関数表と比較してみると,数値精度は建部のほうが遙かによい.しかし,舶載された三角関数表は1分ごとの正弦,正切,正割線,余弦,余切線,余割線の表になっていた.使い勝手は輸入本のほうがいい.」(p.5)とある。

てすれば，1度毎の正弦，正矢の表である．」(p.347)と説明している。『筭暦雑考』にも【ヒョウ】があるが、その前に題は書かれていない[7]。このように、【ヒョウ】や三角関数表に当たるものは八線表の輸入前から日本に存在していたが、「表」という名称は用いられていなかった。このような状況と3－2に引用した中根の「表ハ古ニ所謂立成ナリ」という言及から、『八線表算法解義』が成立した当時、「立成」と「表」とを結び付ける意識が生まれていたことと、まだ「表」が何であるのか説明する必要があったことが窺える。

3－4．八線表輸入後の受容

3－4－1．八線表についての研究状況

八線表輸入後の影響について藤原(1960)では中根の『八線表算法解義』をさらに注解した『八線表解儀術意』(享保17年(1732))を挙げ、さらに「八線表の用法および計算法について述べた書」(p.458)として会田安明(1747-1817)『八線表用法』、戸板保佑(1708-1784)『八線表解并八線再考』(天明元年(1781))、越智通礼(河野通礼)『八線表根新術』(享和2年(1802))等を挙げている。また小林(1990)では、高橋至時(1764-1804)が享和元年(1801)に津軽藩の天文家穴沢宇多太に宛てた手紙を取り上げて「ここでも高橋は，天文・測量にとって八線表は不可欠なものであり，そして『暦算全書』は暦学第一之入用と強調し且つ宜しき書としてこれの学習を薦めている．和算家及び暦算家の『暦算全書』についての論評は多くない．しかし，当代随一の天文学者であった高橋の『暦算全書』に対するこのような評価は，周辺の天文学者に少なからずの影響を与えたと断言してよいだろう．」(pp.89-90.)と述べられている。このように八線表が輸入後に、和算や暦学の分野で研究されていたということをふまえると、《表》の定着に八線表が関係していると考えることは、そう無理のあることではないのではないだろうか。

3－4－2．類義語「立成」「図」との関係

無論、八線表の輸入後すぐに【ヒョウ】が全て「表」と呼ばれるようになったわけではない。「国書データベース」で著書名に「立成」を含み、著者等から成立時期が推定できるものを見ると、国立天文台図書室所蔵『弧矢弦立成裸算及草稿』(草稿は文化11年(1814)成立)が一番後のもので、その頃までは「立成」も使用されていたものと思われる[8]。また、東北大学附属図書館所蔵の松永良弼『方円算経』(書写年不明、「引」に「元文四」(1739)とあり、松永貞辰[9](1751-1795)写)では、「首巻　率引　第四章　率原」(ファイル 10 コマ目左頁)に「圖解」と題された【ヒョウ】があり、「捷術立表　第三　求距面弦」には「元法之圖」と題されたものもある(ファイル81コマ左頁～82コマ目右頁)。その一方で、「目録」には「巻尾　立表」とあって、上述の「捷術立表　第三　求距面弦」には「距二弦立表」と題されたものなど複数の【ヒョウ】が掲載されている(ファイル 79 コマ目右頁等)。同じ本の中で【ヒョウ】の呼称に「図」と「表」が使用されているため、この時点では《表》の指す範囲は現在よりも狭い可能性がある。前頁画像1『授時暦經立成』の「紀法圖」も一覧表を「図」としていて、このような「図」は現在も「五十音図」のように使用されている。

---

7 『筭暦雑考』のファイルの 19 コマ目右頁7行目には「右一限ヨリ四十五限ニ至テ矢及弦ヲ求テ表トス四十六限ヨリ九十限ニ至ルヲ裏トス」のように「表」という字が出てくるが、ここは「おもて」の意味と解釈される。

8 「国書データベース」で「立成」を著書名に含むものを調べると、1800 年以降成立のものでは他に、『応天暦立成補』(文政 10 年(1827))、『改旋暦太陽立成』(弘化年間(1845-1848))がある。ただ、「応天暦」は中国宋代の暦であり、「改旋暦」は川谷薊山(1706-1769)の著作と考えられる(高知県立高知城歴史博物館　企画展「星を見る人～日本と土佐の近世天文暦学～」展示リスト参照)ため、これらは 1800 年以降の「立成」の用例としては扱えない可能性がある。

9 松永貞辰は新庄藩出身の和算家。(『新庄百選』(1985)p.53 による)

さらに、陰陽頭だった土御門泰邦著『暦法新書』[10]（国会図書館所蔵、「叙」の日付は宝暦4年（1754））の「目錄」には「巻之十一　乾坤表」「巻之十三　五星立成」「巻之十四　四餘立成」という表現が見える。この「巻之十一」の冒頭には「表」と題された文章があり、その中で「立成即表也名稱異而其實一矣臣今以乾坤表為諸立成之根」（1オ6～8行目）と述べられている。中根の『八線表算法解義』の「表ハ古ニ所謂立成ナリ」と同様に、この時点でもまだ「表」と「立成」が同じものであると説明する必要があったと考えられる。なお、「目錄」では「四餘立成」とあるが、巻之十四の本文では「四餘表」と題されていて、本書においては「表」と「立成」は実際に同じものとして扱われているとみられる。この土御門泰邦著『暦法新書』によって「宝暦暦」が行われており、そのような重要な書物において「表」と「立成」が同じものだと記述されている意味は決して小さくないだろう。

3－4－3. 蘭学での「表」の使用

以上のように、享保 12 年（1727）の八線表の輸入後に【ヒョウ】の名称が「立成」から「表」へと徐々に変化していったことが推測され、また「表」という用語を使用することについて、当時かなり注意が払われていたと考えられる。暦学や和算でのこのような《表》の使用は高橋至時著『ラランデ暦書管見』（1803）の「此表ハ又地球ヲ橢円トナシタル数也。」（『洋学下』日本思想大系 65 岩波書店 p.169 下段）にも見られる。そして、医学分野でも『解体新書』（1774）巻之四　16　オ8行目には「〇筋ノ四-表」という表現があり、16 ウから枠線はないが筋の名称や場所などが整理されたものが掲載されている。

翻訳表現としての《表》について、『講談社オランダ語辞典』（1994）の「tafel」の項に「『解体新書』の翻訳原書を『ターフルアナトミア』というが，そこでいうターフルは「表」の意で，本多利明[11]が『西域物語』（1798）で明らかにしている．」と記されているが、『西域物語』で『ターフル　アナトミア』を挙げて、「ターフル」が「表」であると説明している箇所は見付けられていない。しかし、『日本経済叢書』巻十二収載の『西域物語』巻上には「エールステよりアクトステに至る、（中略）相距度南北緯度、東西經度の三數を擧て表{右ルビ:ターフル}と名て、渡海船舶の用とす、」（p.152 l.14-p.153 l.1.）という例がある。注3にあるように本多は蘭書からの割円八線表の輸入に関わっているため、その影響で「表」を使用している可能性もある。対訳辞書の早稲田大学図書館所蔵『Nederduits woordenboek』（『ハルマ和解』（江戸ハルマ））（1796）と『道訳法児馬』（ドゥーフハルマ）（1822　年以前[12]）を見ると、前者では「tafel」の語義は「食卓」「書モノ彫モノナトスル盤」「目録書冊ノ紙號」であったが、後者では「tafel」の語義は「卓子又机又臺」である一方、「tafelen der tydrekeninge door petau opgesteld　ペタウが拵らへたる暦術の表」「tafelen der aardbeschryving door Sanson by Zyne landkaarten gevoegd.　サンソンが己が世界の圖に添へたる地理の表」（「早稲田大学古典籍総合データベース」7冊目8カット右 20-24 行）という表現があり、この頃には蘭学の方でも《表》の使用が一般的になっていたのではないかと考えられる。ここまでの「表」「立成」「図」等の使用状況の抜粋を次項〔表1〕に示す。

4. まとめ

「情報を整理して示した形式」を表す字音形態素「表」は、中世から「諸表」「年表」の形で存在した。し

[10] 『暦法新書』と呼ばれる書物には他に高橋至時等によるものがあるが、それとは異なる。
[11] 注3を参照。
[12] 杉本つとむ（1974）『和蘭字彙』第Ⅴ分冊「解説」によると、本書は 1822 年以前に書写されたものによっているという。

かし、その用法の活性化の一つの契機は享保 12 年(1727)の中国初期洋学書『崇禎暦書』由来の「八線表」の輸入だと考えられる。従来初期洋学書の影響については、新語の輸入や語の意味・用法の更新に注目した研究が多く、語の交替についてはあまり言及されてこなかったが、本発表では、暦学・数学分野で「立成」が「表」に変わっていき、他分野でも「表」が使われるようになったことを提示した。初期洋学書による影響のパターンの一つとして、語の交替が起き、それがさらに字音形態素の変化に繋がり、現在の日常的な語彙へも影響を及ぼしているという一連の流れを示すことができたと思う。暦学・数学分野での語の輸入や交替は、専門語が中心であるとしても、その後の西洋科学知識受容の基礎となったものであり、中国初期洋学書が日本語の語彙に与えた影響について、さらに探究していきたい。

〔表1〕「表」「立成」「図」等の使用状況

西暦	資料名	使用例
	授時暦經立成	「太陽立成」「紀法圖」
	弧率	「立成元數」
1726	八線表の輸入	
	八線表算法解義	「表ハ古ニ所謂立成ナリ」
1739	方円算経	「圖解」「元法之圖」「距二弦立表」
1754	暦法新書	「立成即表也名稱異而其實一矣」「乾坤表」「五星立成」「四餘立成「四餘表」
1774	解体新書	「〇筋ノ四-表」
1798	西域物語	「東西經度の三數を擧て表{右ルビ:ターフル}と」
1803	ラランデ暦書管見	「此表ハ又地球ヲ橢円トナシタル数也。」
1814	弧矢弦立成裸算及草稿	
1822 以前	道訳法児馬	「暦術の表」「地理の表」

◇使用資料類(※以下、改行部分には / を挿入して改行を略した。[ ]内は請求記号) **●国立天文台図書室 「貴重資料データベース」**田中万春・田中政徳『弧矢弦立成裸算及草稿』**●「国会図書館デジタルコレクション」**安倍泰邦『暦法新書』[ゑ-46]/杉田玄白ほか訳『解體新書』(1774)[わ 490.9-15]/滝本誠一編(1915)『日本経済叢書』巻十二日本経済叢書刊行会収載『西域物語』[330.8-N685-T]**●「東北大学総合知デジタルアーカイブ」**關孝和輯著・淡山尚絅筆『授時暦經立成』[7/31645/1]/建部賢弘『筭暦雑考』[MA/131]、『弧率』(制作者中根彦循旧蔵者岡本則録『弧背術』で登録されている)[写 0084]/中根元圭『八線表算法解義』[林集/919]/松永良弼著・松永貞辰写『方円算経』[林集/664]**●「早稲田大学古典籍総合データベース」**中根元圭『八線表算法解義』[ニ 02 00708 0033]/Halma, François 著・稲村三伯訳“Nederduits woordenboek”(『ハルマ和解』(江戸ハルマ))(1796)[文庫 08 C0513]/Halma, François 原著・Doeff, Hendrik 編著・吉雄権之助ほか訳『道訳法児馬』(ドゥーフハルマ)[ホ 10 01749] ●広瀬秀雄・中山茂・小川鼎三校注(1972)日本思想大系 65『洋学下』岩波書店収載『ラランデ暦書管見』(1803) **◇辞典・事典等** ジャパンナレッジ版『日本国語大辞典第二版』(2000-2002)小学館/『日本人名大辞典』(2001)講談社/『日本大百科全書』(1994)小学館/『大漢和辞典 修訂第二版』(1989-1990)大修館書店/『講談社オランダ語辞典』(1994)講談社/「国書データベース」 **◇参考文献** 奥山光(2026)「形式名詞「点」の成立の二つの要因――類別詞用法との連続性およびpointの多義性の引き受け――」『日本語の研究』22(1)pp.1-16.日本語学会/加藤平左エ門(1955)『和算ノ研究』 [第 3] 第 2 (雑論 第 2)日本学術振興会/高知県立高知城歴史博物館 企画展 2019 年 6 月 28 日～2019 年 9 月 2 日「星を見る人～日本と土佐の近世天文暦学～」展示リスト https://www.kochi-johaku.jp/wp-content/uploads/2019/03/e55ccd3e4de1dfac9aebe44067306edc.pdf(最終閲覧:2026 年 3 月 22 日)/国立天文台「暦 Wiki」https://eco.mtk.nao.ac.jp/koyomi/wiki/(最終閲覧:2026 年 3 月 22 日)/小林龍彦(1990)「『暦算全書』の三角法と『崇禎暦書』の割円八線之表の伝来について」『科学史研究』第Ⅱ期第 29 巻(No.174)pp.83-92.日本科学史学会編岩波書店/小林龍彦(1991)「享保 12 年伝来の『割円八線表』をめぐって」『数学史研究』通巻 129pp.1-6.日本数学史学会/小林龍彦(2002)「紅葉山文庫に収蔵される梅文鼎の著作について」『科学史研究』第Ⅱ期第 41 巻(No.221)pp26-34.日本科学史学会編岩波書店/小林龍彦(2007)「建部賢弘と中根元圭が見た漢籍暦算書」『数学文化』8 pp4-5.日本数学協会編日本評論社/小林龍彦(2011)「『暦算全書』の訓点和訳と序文について」『科学史研究』第Ⅱ期第 50 巻(No.259)pp.174-178. 日本科学史学会編岩波書店/佐藤亨(1983)『近世語彙の研究』桜嵐社/舒志田(2020)「『医学原始』の語彙について――日本の洋学への影響を中心に」『或問』38 pp.39-54.近代東西言語文化接触研究会編白帝社/新庄市企画課編(1985)『新庄百選』新庄市/杉本つとむ解説(1974)『和蘭字彙』第Ⅴ分冊早稲田大学出版部/杉本つとむ(1998)『杉本つとむ著作選集2近代日本語の成立と発展』八坂書房/中山茂編(1982)『天文学史』現代天文学講座第 15 巻恒星社厚生閣/藤原松三郎著日本学士院日本科学史刊行会編『明治前日本数学史』第2巻(1956) 第3巻(1957) 第4巻(1959) 第5巻(1960)岩波書店/松井利彦(1983)「近代日本漢語と漢訳書の漢語」『広島女子大学文学部紀要』18pp.35-51.広島女子大学/吉田忠(2004)「イエズス会士系著訳書の受容」『日本思想史学』36pp.60-71. 日本思想史学会編日本思想史学会/渡辺敏夫(1986)『近世日本天文学史』上(通史)恒星社厚生閣/伊藤真梨子(2026)「「近代科学によって捉えられたしくみ」を表す「機」の成立と定着」『東洋文化研究』28pp.1-35.学習院大学東洋文化研究所

「津波」成立史考

吉野 早穂子（お茶の水女子大学大学院生）

1. はじめに

災害を表す語の史的研究は、気象の語などに比べて立ち遅れてきた。そのため、身近な「津波」という語であっても、その語史は明確ではない。本発表ではこれを問題点とし、津波を表す語の史的変遷を明らかにする。加えて「津波」については【港を表す「津」に「波」を後接させた】という語源説が現在具体的な根拠もなく広まっているが、果たしてこの説は妥当なのだろうか。この点も問題点として検証する。以下、《　》は語形、「　」は表記を表す。

2. 先行研究と問題点の所在

2.1　先行研究

天候に関係する語彙の史的変遷については方言も含めて広く研究がなされている一方で（木部（2024）など）、自然災害に関する語彙についての先行研究は管見の限りでは見当たらない。特に「津波」は方言の調査（例：『日本言語地図』）も行われていない。

一方で、歴史学においては、盛本（2016）が「津波」という語の使用開始時期について以下のように指摘している。

> 1)『日本国語大辞典』[1]を引く限り『甲陽軍鑑』が初出であるが、それ以前の「津波を記した初見史料」は、『王代記』の享徳三（1454）年と思われる。
>
> 2) 戦国時代以降「津波」の語を用いるように変化した背景には、戦国時代に津や津波に関する観念に何らかの変化があったと予想されるが、今後も追究が必要である。

しかし、盛本説で「津波」の初出とされる『王代記』は「窪八幡（現大井俣窪八幡神社）の別当上之坊（普賢寺）の住僧らが書継いだ」[2]性質を持つ資料である。このことから、書写者が代々書き継ぐうちに書き記す語が当初から変化した可能性もある。加えて盛本は「言うまでもなく、津波は波に津が加えられてできた言葉」(pp.214-215) と述べているが、これは現在巷間に広まっている語源説を無批判に支持していると言わざるを得ない。

2.2　語源説

「津波」の語源は主に以下の説がある（『日本語源大辞典』小学館, 2005, p.774「つなみ」項参照）。

> ①「ツヨナミ（強波）」説（日本語原学〔1932〕・林甕臣著）
>
> ②　津波＝「港を襲う波」（ツ（津）＝港）説（語源大辞典〔1988〕・堀井令以知著）
>
> ③「旋波」説（蘿月庵国書漫抄〔1800 年代成立か〕・尾崎雅嘉著）

一方、杉本（1987）では「”つ”は津を宛てている点で船着場を指す津と同じように考えられるが、事実とは一致しない。おそらくそれとは別の意で、興味津津（しんしん）というように、『あふれる』の意が津にある点で、津波を宛てたと思われる」(p.76) とある。しかしいずれの説も具体的には未検証・未検討である。

以上の問題点を踏まえ、古辞書（平安～昭和戦前期）・文学作品（上代～明治時代）・古記録（平安～戦国時代末期）を用いて通時的調査を行い、「津波」の語形・表記・語源の変遷を明らかにする。

3. 調査対象語・調査資料

調査対象語として、「つなみ（津波／津浪）」「たかしほ（高潮／高塩）」「たかなみ（高波／高浪）」「おほなみ（大波／大浪）」「海嘯（かいせう/かいしょう）」「海溢（かいいつ）」「洪波（こうは/こうは）」「洪濤（こうたう/こうとう）」「おきつなみ」を選定した。これらの語彙は、『日本国語大辞典 第二版』で語義を確認してから選び出し、また類語・別語形等がないか確かめるために『大漢和辞典』と『漢語大詞典』も調査した上で選定した。

調査資料には、平安時代から昭和戦前期までに成立した古辞書 43 点、また、国立国語研究所提供『日本語歴史コーパス』（以下、CHJ）[3]、『新編日本古典文学全集』『日本古典文学

---

[1] 初版かと思われる。
[2]『日本歴史地名大系 第 19 巻（山梨県の地名）』（平凡社, 1995）, p.792「王代記」項より抜粋。
[3] 国立国語研究所（2026）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2025.3, 中納言バージョン 2.7.2, 2026 年 1 月 8 日最終確認）。短単位検索で語彙素読み「ツナミ」を検索したほか、同じく短単位検索で、検索条件を書字形または書字形出現形に設定し、調査対象語をそれぞれ検索した。またいずれの検索方法でも、検索対象は、奈良時代編・平安時代編・鎌倉時代編・室町時代編・江戸時代編・明治・大正編とした。

大系』『噺本大系』を中心に、上代から明治時代までに成立した文学作品を調査した[4]。このほか、古代中世地震史料研究会提供「[古代・中世] 地震・噴火史料データベース (β 版)」[5] (https://historical.seismology.jp/eshiryodb/) で、先に挙げた調査対象語を列挙して文字列検索し、資料信頼度 A[6]の古記録を 20 点参照した。以下、引用における下線・太字は全て稿者注である。

4. 調査結果

4-1. 上代

上代の漢文体資料では、津波現象を叙述的に表現する方法 (以下 (1)) がとられる。一方、和文資料においては「おきつなみ」の語で表現する例 (以下 (2)) が見られる。しかし、現在の「津波」のような特定の用語に限定した形での表現はしていない。

(1) 庚戌 土佐国司言 **大潮高騰 海水飄蕩** 由是 運調船多(原文ママ)船多投失焉

訓読：庚戌に、土佐国司の言さく、「大潮(オホシホ)高く騰りて、海水飄蕩(タユタフ)。是に由りて、運調(ハコブ)船多く投失(チリヌ)。」

(『日本書紀』巻第二十九_天武天皇十三年 十一月)

(2) 百師木乃 大宮人之 踏跡所 **奥浪** 来不依有勢婆 不失有麻思乎
(ももしきの 大宮人の 踏みし跡所 **沖つ波** 来寄せざりせば 失せざらましを)[7]

訳：(ももしきの) 大宮人(おおみやびと)が 残した足跡のこの地 沖の波さえ 来なかったら なくならなかったろうに

(『万葉集』巻第七 雑歌 (就所発思旋頭歌) 1267 番)

(1) の『日本書紀』では、白鳳地震 (694 年) で土佐国に津波が押し寄せたという土佐国国司の報告が記述されている。

他方、『万葉集』の用例 (2) については、影山 (2024) が興味深い論を展開している。影山は、歌中で動詞「ウス」(失) が共起していること、そして『万葉集』の挽歌には自然物の消散によって人の死を暗示するという論理があることから、「沖つ波来寄せざりせば」の部分を「無常の摂理の譬喩とは受け取らず実体的自然現象を叙したもの」(p.11) と捉えることを提案する。その上で「かかる自然現象『沖つ波』が何に相当するかというと、考えられるのは津波をおいてほかにあるまい」(p.11) と述べる。つまり影山は、用例 (2) の「おきつなみ」は津波現象を指し示す語と解釈するのである。この論に従うならば、(2) は上代から「おきつなみ」＝人身に被害を齎す波という表現があった例と言える[8]。

4-2. 中古

漢文体資料では依然として「驚濤涌潮 洊回漲長」(『日本三代実録』) のように津波現象について叙述的に表現する用例がある他に、「洪水高潮」(『日本紀略』)・「大波浪」(『中右記』) といった語を用いる例も見られる。一方、和文資料では津波現象は記録されない。ただし広義の「人身に被害をもたらす波」を「たかしほ」で表現する例はある (以下 (3)・(4))。

(3) **たかしほ**といふものになむ とりあへす人そこなはるゝとはきけと……(『源氏物語』_須磨)

(4) **たかしほ**におちて この比 むすめなとは をかへのやとにうつしてすませけれは
このはまのうちに 心やすくおはします (『源氏物語』_明石)

(3) は、雨が降って海面が雷で照らされ大いに荒れる中、船に乗る人々が「高潮という人損が出る現象があると聞くが……」と憂慮し、恐れる場面である。

(4) は、光源氏が明石に行った際に滞在した、入道の館についての描写である。(3) と異なり、前後に雨の描写もないことから、津波と高潮、どちらの現象を表しているかは不明である。しかし、「たかしほ」を恐れて娘を内陸に住み替えさせる入道の行動・描写からは、中古において「たかしほ」＝海から押し寄せる災害級の波と認識されていたことが分かる。

4-3. 中世

中世成立の漢文体資料及び和漢混淆文体資料においては津波現象を叙述的に表現する用

---

[4] このほか、『抄物資料集成』『室町時代物語大成』『明治文学全集』『新聞集成明治編年史』『官報』(1883～1912 まで) も参照した。
[5] 当該データベースは、古代中世地震史料研究会によって「日本の古代・中世の地震と噴火および関連事象に関する既刊の文献史料 (文書・記録・典籍に記された記事) のすべてについて、史料学的・理学的検討を加えて、検索の便に供する」目的で作成されたデータベースである。
[6] 「古代・中世に発生した地震・噴火について記述のある同時代の記録・文書または古代・中世の編纂物で根拠のある記録等に基づいて作成されたと判断されるもの」(同データベース,「構成と使い方」〔https://historical.seismology.jp/eshiryodb/manual.html〕より抜粋)。
[7] 『万葉集』の書き下し・現代語訳は『新編日本古典文学全集』に拠る。
[8] 人身に被害を齎す波という認識を補強する例として、『万葉集』巻十五 3675 番歌 (下掲) もある。
於吉都奈美 多加久多都日尓 安敝利伎等 美夜古能比等波 伎吉弖家牟可母 (沖つ波 高く立つ日に 遭へりきと 都の人は 聞きてけむかも)
訳：沖の波が 高く立つ恐ろしい日に 遭ったと 都の妻は 聞いたであろうか

例（以下（5）、『方丈記』）のほかに、「洪水」（以下（6）、『平家物語』）・「大浪」（『後法興院記』）・「高潮（高塩）」（『内宮子良館記』）の語で表現する例が見られた。また和文資料においては、上代・中古で見られた「たかしほ」や「おきつなみ」が御伽草子にも見られた[9]。

（5）……山ハクツレテ河ヲウツミ **海ハカタフキテ陸地ヲヒタセリ**……
（大福光寺本『方丈記』〔1212〕）

（6）（稿者注：元暦二（1185）年 7 月 9 日、地震の後）**洪水**みなぎり来らば……
（高野本『平家物語』巻十二_大地震〔鎌倉前期成立〕）

またここで、この時期の「おきつなみ」の表記例を押さえておく。以下（7）（8）は、特に津波現象とは関係がない記述であるものの、連体助詞「つ」を「津」で表記している点で注目すべきである。

（7）……今ハ心ヲ**奥津浪** 立寄方モ無儘ニ……　（天正本『太平記』_巻十一〔1368-1375 年間成立か〕）

（8）……磯山嵐 **澳津波** 牙ニ響ヲマシヘツツ……　（天正本『太平記』_巻二十六〔1368-1375 年間成立か〕）

一方、同時期成立の古辞書類には以下の語が掲載される。しかし、いずれの資料においても語の掲出のみで語義の記述がないため、語が意味する対象は不明である。

- 『倭玉篇』（室町時代、四十二裏）――― タウ濤　〈ナミ／ヲホナミ〉
- 『塵添壒嚢鈔』（1532、巻十二 三表） ― …… 洪濤（コウタウ） 忽ニ挙（アカリ）テ……
- 『落葉集』（1598、三十四丁裏）――― ○ 洪（こう）・…… ―波（は）
  （おほひなり）　（なみ）

しかし、特に『落葉集』掲載の「洪波」は、既に『太平記』において軍勢が押し寄せる様を描写する際に比喩的に用いられる（下掲（9））ことを考えると、中世中期における「押し寄せてくる波」の表現としては「洪波」もあったと考えて良いだろう。

（9）……十万余騎ノ兵共 **洪波** 滔（ヒタシキ）レ天ニ……　（天正本『太平記』_巻四〔1368-1375 年間成立か〕）

「たかしほ（高潮）」「おほなみ（大波）」はいずれも『日葡辞書』に掲載されるが、「洪波」「おきつなみ」の掲載はなく、未だ《ツナミ》の語も見られない。そして、『日葡辞書』掲載のこの二語はいずれも、以下 A・B に示す通り、災害級の波の意で用いられる語であったかどうかまでは読み取れない。

A）**Tacaxiuo**　Agoas viuas das marés que às vezes ba com conconjunções（〔原文ママ〕） da lúa. Tacaxiuoga ſaſu. Encher a maré cõ agoas viuas.（『日葡辞書』, p.468）
邦訳：「高潮　月の運行の関係で時として起こる大潮. 高潮がさす. 大潮の潮が満ちて来る.」
（『邦訳日葡辞書』, p.597〔原本 264 丁裏〕）

B）**Vônami**　Grandes ondas. 邦訳：「大波　大きな波.」
（『日葡辞書』, p.562〔原本 281 丁裏〕 /『邦訳日葡辞書』, p.714）

4-4. 近世

近世でまず言及すべきは、前代と異なり、《ツナミ》の語が『甲陽軍鑑』〔1621 年以前成立〕を初出に、僅かながらも文学作品上で現れるという点である（以下（10）・（11））。加えて、この時期より「高潮」「洪水」といった語は津波現象の表現として用いられなくなる上、津波現象を叙述的に表現する方法もほとんど見られなくなる。

（10）……信玄公の諸勢 道具を**津なミ**にひかれ候へども……（甲陽軍鑑_巻十二〔1621 年以前成立〕）

（11）ふだらくの岸に**津浪**や打ぬらん　（蚊柱百句〔1674 年頃成立〕）

また、同時期の古辞書においては、『書言字考節用集』（1698）に「洪波（タカナミ）」「高潮（タカシホ）」「洪波（ツナミ）」が掲載される（下掲）。この「洪波（ツナミ）」が古辞書類における語形《ツナミ》の初出である。

- 巻一 二十五表 ―― 洪波（タカナミ）〈出／津〉・高潮（タカシホ）〈洪波／義全〉
- 巻一 三十表 ――― **洪波（ツナミ）**〈又云高／潮。出レ太〉

その後『雑字類編』（1764-68）にて「洪波（ヲホナミ）」（巻之二、八裏）・「海笑（ツナミ）〔原文ママ〕・―嘯・―哨」（巻之三、十五

[9] この他、抄物に用例がないか確かめるために『抄物資料集成』の索引を参照したが、津波現象を表す調査対象語は、全て掲出が無かった。

裏) が掲載され、『雅言集覧』(1826-49) には「たかしほ」(巻之七〔1849〕, 五十六表) が掲載される。

ここで、語形《ツナミ》の表記に注目してみると、この時代においては《ツナミ》の漢字表記は一定していないことが分かる。これは文学作品においても同様で、以下に示す通り、「海嘯」「洪濤」「洪波」などが見られる (以下 (12) (13))。

(12) ○**海嘯　江嘯　つなみ**は大風地震の節…… (『鹽尻』_巻十一 〔1697～1733 年間に執筆〕)

(13) ……行人 (稿者注：宝永噴火で) ……海上**洪濤**来るかと立さわきのゝしり……
(鹽尻_巻二十六〔1697～1733 年間に執筆〕)

(14) ……虬ありて 常に風雨を起し**洪波**を致し…… (『椿説弓張月』_上_前編巻之三〔1807 年〕)

以上より「津波」という語は、音形《ツナミ》が先行して成立したと言える。そしてこれらの漢字表記はあくまでもあて字であり、そのために表記に揺れが生じていると考えられる。そしてこの点に関して注目すべきは『和訓栞』前編・中 (1805) の記述である。

つなみ 津-浪の義にや草木子にいふ海-嘯之といへり…… (『和訓栞』巻之十六 二十丁表裏)[10]

ここでは、発音形《ツナミ》と書字形「津浪」が一致している。しかし「津-浪の義にや」という記述からは、この漢字表記を推して宛てつつも未だ不審に思う様子が窺え、現在広く知られる【津波＝港の波】という語源意識がまだ希薄であったことを示していると見られる。

4-5. 近代

明治期に入ると津波現象を叙述的に記述する方法はとられなくなる。また、小説・新聞等の媒体にかかわらず、津波現象は《ツナミ》の語形を安定的に用いるようになる。

ただし、辞書類における《ツナミ》表記に着目すると、右【表 1】に示す通り、「津波 (津浪)」以外にも、「海嘯」「突海」「海溢」等の表記が見られる[11]。そして、現代語のような、音訳漢字「津波」の形での表記に固定化されていくのは、『言海』初版 (1889 年) 以降であると言える[12]。

【表 1】　近代辞書における《ツナミ》漢字表記

書名 (成立年・時期)	《ツナミ》漢字表記
『和英語林集成』初版(1867)・第二版(1872)・第三版(1886)	海嘯
『訓蒙雑字類編』(1880)	突海、海溢、海嘯、沓潮
『言海』初版(1889)・再版 (1891)	**津浪**
『日本大辞書』(1892-93)	**津浪**
『和漢雅俗いろは辞典 訂 2 版』(1893)	洪波、高潮、たかなみ、海溢、海嘯、滔潮、逆浪、突波
『大言海』(1932-35)	**津浪**

このような表記の揺れは、先述の通り、《ツナミ》の語形が先行して成立し、そこに漢字を宛てるという手順を経る必要があったために生じたものと考えられる。加えて、このような表記がさまざまある状態を見るに、現行の語源説で言われる「港の波」であるから「津波」と表記する意識は、前代から引き続いて近代においても希薄であったと言える。

5. 考察

以上の調査結果を踏まえて、「津波」の語形・表記・語源について考察する。

5-1. 語形――「おきつなみ」から「つなみ」の析出へ――

前章より、《ツナミ》は近世期以降に現れたこと、またそれ以前の和文資料では「おきつなみ」や「たかしほ」などの語で人災を齎す海からの波を表していたことが明らかになった。では《ツナミ》という語形はどこから生じたものだろうか。稿者は、中世の『太平記』の例 (先掲 (7)・(8)) などから推すに、《ツナミ》は「おきつなみ」から析出された語ではないかと考える。

「おきつなみ」は中古以降に歌語となっていくが、中世に至っても和歌や謡曲、俳諧などで頻繁に用いられており、近世になっても戯作の地の文に現れる。そして興味深いことに、その表記には、「奥つなみ」「沖津波」などがあり (下掲 (15) ～ (17))、語形《ツナミ》や表記「津波」を析出しやすい構成になっていたことが注意される。

---

[10] 谷川士清撰述, 大友信一監修, 木村晟・三澤成博編, 『版本和訓栞 前編 中』, 大空社, 1998, pp.173-174 を参照した。
[11] 中でも特に「海嘯」は、津波現象及び高潮現象の記述で用いられることが多く、特に『官報』や新聞といった媒体ではこれが顕著であった。また、小説や雑誌・随筆では「海嘯」に《ツナミ》の振り仮名を付して用いる傾向にある。
[12] 例えば、『広辞苑』初版 (1955, p.1447) では「津波」と「海嘯」が併記され、『新明解国語辞典』初版 (1972, p.742) では、「津波」を見出し語にした項の末尾に「〔津浪・海嘯とも書く〕」とある。

（15）**奥つなみ** たちわかるとも 音にきく なかゐの浦に ふなとゝめすな
（宮内庁書陵部本〔155・36〕『久安六年御百首』離別 1275 番〔1150 年〕）

（16）**沖津波** あはれをかけよ 和歌のうらの かせにたつさふ たつのゆく末
（内閣文庫本〔201-0372〕『五社百首』鶴題 84 番〔1190 年〕）

（17）**奥津浪** いそ松かせも うらふれて 夕ゐる雲に 鳴く千鳥かな
（『草根集』第五冊 五十八表〔冷泉家時雨亭叢書 第九十四巻（室町時代写）, p.123〕）

『万葉集』では「奥浪」（巻十五, 1267 番）や「奥津波」（巻七, 1206 番）と記されていた「おきつなみ」が、中世以降になると連体助詞「つ」を「津」で明記することが増える。連体助詞「つ」を「津」の字で表記するのは、近世の戯作に加え、他に、嘉禄二年本『古今和歌集』（1226）に「渡津海」（巻第七, 344 番）、『古今和歌集』写本（1547 年頃写）に「奥津しら波」（巻七, 360 番歌）、『百人一首頼常聞書』（室町後期写）や『百人一首抄』（室町末写）に「天津風」（12 番）「奥津（沖津）しら浪」（76 番）が見える[13]。

このように中古・中世以降、連体助詞《ツ》を「津」で独立して表記されることが通例となることは、「津」が《ツナミ》表記に用いられる基礎として重要であると考える。また、このような表記変化により、次第に語構成が以下のように異分析されたと見られる。

名詞「おき（奥・沖）」＋連体助詞「つ」＋名詞「なみ（波）」
↓
名詞「おき（奥・沖・興）」＋名詞**「つなみ（津波）」**

この異分析を生じさせた背景には、近世に「時津波」「瀧津波」という類字語形が存在した[14]ことが大きいと見られる（下掲（18）（19））。いずれにも「津波」が含まれることから、「沖／時／瀧＋津波」という異分析が生じやすかったと推定される。

（18）……正体いかなる物ぞ 此治れる**時津波**…… （『武道伝来記』〔1687 年〕）

（19）……岩巖石（がんぜき） 枯木（こぼく）の根（ね）ざし**瀧津波**（たきつなみ）…… （『国性爺合戦』〔1715 年〕）

5-2. 「津波」の表記・語源

《ツナミ》は、その漢字表記が、現行の「津波」に最初から固定化されていたわけではないことは先に示した通りである。特に《ツナミ》において問題となるのは《ツ》の漢字表記になぜ「津」が選ばれたのか、という点である。「津」が選ばれたことにより、「ツナミは港に押し寄せる波」という語源説まで生じることになったことを考えれば、なぜこの漢字が選ばれたのかという点を考える必要がある。

万葉仮名における清音の《ツ》は、「都」「豆」「頭」「川」「州」「通」「追」「途」「菟」「屠」「突」「徒」「覩」「図」「闘」「津」の 16 字がある[15]。しかし、下掲【表 2】に示す通り、中世から近世にかけて成立した古辞書・節用集[16]を参照するに、全ての資料に掲載のなかった「覩」以外の 15 字はいずれも、①一字の場合は基本的に訓読みを用いる、②音読みを用いる場合は前後に他の字音が付く形である、という特徴が見られた。また、特に①において、一字のみで《ツ》と訓む字は「津」のみであった（以下、掲載のなかった「覩」は考察から除外する）。

【表２】中世成立の節用集類における万葉仮名「つ」表記使用字

字	一字での読み	二字熟語	字	一字での読み	二字熟語
都	ミヤコ	都合（ツガフ）・都鄙（トヒ） など	菟	ウサキ（ウサギ）	烏兎（ウト）・玉兎（ギヨクト）
豆	マメ	豆子（ヅス）・伊豆（イヅ） など	屠	ホフル	屠維（トユイ（トヰ））
頭	カシラ	頭巾（ヅキン）・頭頂（ヅチヤウ）	突	ツク	額突（ヌカヅク）・鑓突（ヤリヅキ） など
川	カハ（カワ）	洛川（ラクセン） ほか、各地の川名	徒	ウツル	凶徒（ケウト）・徒党（トタウ） など

[13] 以下、嘉禄二（1226）年本『古今和歌集』・『古今和歌集』注釈書・『百人一首頼常聞書』・『百人一首抄』の、書誌情報を記す。
- ［紀友則ほか撰］ほか『古今和歌集：嘉禄二年本，古今和歌集：貞応二年本』，朝日新聞社, 1994, p.22〔嘉禄二年本 五十四裏〕
- 紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑撰『古今和歌集[注] 20 巻』（天文 16 (1547) 頃写, https://dl.ndl.go.jp/pid/2532254, 2026 年 4 月 2 日最終閲覧）
- 冷泉家時雨亭文庫編，『冷泉家時雨亭叢書 第百巻 百人一首 百人一首注 拾遺（三）』，朝日新聞社, p.68・p.95
- 経厚，『百人一首抄』，室町末期写（https://dl.ndl.go.jp/pid/2541078, 2026 年 4 月 2 日最終閲覧）

[14] このほか、『和訓栞』「つなみ」項に「**山つなみ**といふハ五雑俎にいふ出−蛟の類也」とある。

[15] 『日本国語大辞典 第二版』 第九巻, p.196 掲載の、「つ」の「五十音の仮名字音表」より引用。

[16] 『温故知新書』『伊京集』『黒本本節用集』『饅頭屋本節用集』『天正十八年本節用集』『易林本節用集』を調査した。

州	クニ・ス	紀州（キシウ）・珠洲（スズ） ほか地名	覩	（掲載なし）	
通	トホル（トヲル）	通夜（ツヤ）	図	ハカル	相図（アヒツ）・絵図（エヅ） など
追	ヲフ	追加（ツイカ）・追善（ツイゼン） など	闘	タタカフ(タタカウ)	闘諍（トウジヤウ）
途	ミチ	一途（イチヅ）・途方（トホウ）	津	ツ	津名（ツナ）・中津（ナカツ） などの地名・津液（シンエキ）

また上に加え、【表 2】より、「津」を除く 14 字は、中世以降、以下の条件のために清音《ツ》を表記し得ない状態であったと言える。

- 濁音《ヅ》になる（「豆」「頭」「途」「図」）
- 《ツ》以外の、別の読みを用いる（「川」「州」「追」「通」「都」「菟」「闘」）
- 動詞語幹部分の表記を担うため、送り仮名も併記される（「通」「追」「屠」「突」「図」「闘」）

つまり、「津」を除く 14 字は、非自立的な字音形態素である一方、「津」は、それ単独で成立可能な和語形態素であるということになる[17]。

換言すると、中世までに《ツ》の音を一字で表すことのできる表記は、「津」のみに限定されていたということである。これはすなわち、【語形《ツナミ》の表記を行う際に、《ツ》には「津」の字を用いるしかない】という消極的選択をせざるを得ない状況であり、一般に広く知られる語源説のように、この字で積極的に港を表していたわけではないのである。

これを裏付けるように、近世に至るまで「津波」と港を結びつけた語源説の類は見当たらない。また、繰り返しになるが、『和訓栞』の「つなみ　津-浪の義にや」という言及は、この語の語源や漢字表記について疑問を抱いており、1700 年代当時、《ツナミ》は「港の波」の意味である、という語源意識では用いていなかったことを示唆している。

以上から勘案するに、「津波」＝「津（港）に来る波」説は、管見の限りでは堀井令以知（1988）以降の論と言わざるを得ず、このような説が生じたのは、「津波」の字面から「港の波」と推測・理解するようになったためと思われる[18]。

6. まとめ

以上より、本稿では、語形・表記・語源の面から「津波」成立史を検討した。

①《ツナミ》という語形は特に近世初頭にかけて見られるようになるが、この語形成立過程には、「おきつなみ」の異分析があったものと考えられる。

②「津波」表記はあくまでも《ツナミ》のあて字であり、特に「津」の字が採用されたのは、中世ごろまでに 1 モーラの清音《ツ》を単独で表記できる漢字が「津」のみに限定されていたことが理由として挙げられる。

③ ①②より、「津波」＝「港の波」説は、現代において字面から推測されたものである。

【調査資料】《辞書類》石川雅望集・関豊脩補『雅言集覧』, 〈江戸〉須原屋伊八ほか, 1849 刊（https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/300082375/481?ln=ja, 2026 年 4 月 6 日最終閲覧）／石川雅望集・中島広足補『増補雅言集覧 中』, 広益図書, 1903／大槻文彦編『言海:日本辞書』第 1-4 冊, 大槻文彦, 1889-1891／大槻文彦編『大言海』第一巻～第三巻, 富山房, 1932-34／岸本恵実解説・三橋健書誌解題『フランス学士院本羅葡日対訳辞書：付参考文献目録』, 清文堂出版, 2017／行誉［ほか］撰ほか『塵添壒嚢鈔・壒嚢鈔』, 臨川書店, 1979／宮内庁提供「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」所収『類聚名義抄（法（前半部）残欠・別本）』（https://shoryobu.kunaicho.go.jp/Toshoryo/Detail/1000629270000, 2026 年 1 月 8 日最終閲覧）／柴田昌吉著『附音挿図英和字彙』, 日就社, 1873／昌住著『新撰字鏡：12 巻 巻五－巻六』, 六合館, 1916／杉本つとも著『ライデン大学図書館蔵落葉集影印と研究』, ひたく書房, 1984／高橋五郎編『和漢雅俗いろは辞典 訂 2 版』, いろは辞典発行部, 1893／谷川士清撰述・大友信一監修・木村晟・三澤成博編『版本和訓栞 前編 中』・『版本和訓栞 中編 上』, 大空社, 1998／谷川士清著・伴信友加筆・井上頼圀・小杉榲邨増補『増補語林倭訓栞』, 名著刊行会, 1968／天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編『天理図書館善本叢書』和書之部第 33 巻, 天理大学出版部, 八木書店, 1976／土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』, 岩波書店, 1980／『日葡辞書』, 岩波書店, 1960／橋爪貫一編『訓蒙雑字類編: 4 巻』巻之 2, 須原鉄二, 1880／福島邦道解説『キリシタン版落葉集』, 勉誠社, 1977／槇島昭武著『和漢音釈書言字考節用集 10 巻』[1]・[2], 勝村治右衛門ほか, 1860／正宗敦夫校『倭玉篇』, 日本古典全集刊行会, 1936／村田了阿編著『俚言集覧』中, 近藤出版部, 1924／明治学院大学図書館デジタルアーカイブス提供「デジタル和英語林集成（各版検索）」（https://mgda.meijigakuin.ac.jp/waei, 2026 年 4 月 6 日最終閲覧）／山田美妙編『日本大辞書』第 3 巻・第 6 巻・第 9 巻・第 10 巻, 日本大辞書発行所, 1892-93／藁科勝之著『雑字類編』影印・研究, ひたく書房, 1981 **《文学作品》**岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成』, 清文堂出版, 1971-1976／国立国語研究所（2026）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2025.3, 中納言バージョン 2.7.2, 2026 年 1 月 8 日最終閲覧）／新聞集成明治編年史編纂会編『新聞集成明治編年史』, 林泉社, 1936-1940／『新編日本古典文学全集』, 小学館, 1994-2002／内閣府, 『官報』, 内閣府, 1883-1912 まで／『日本古典文学大系』, 岩波書店, 1957-1969／松本隆信編『室町時代物語大成』, 角川書店, 1973-1988／武藤禎夫・岡雅彦編『噺本大系』, 東京堂出版, 1975-1979／『明治文学全集』, 筑摩書房, 1965-1989／**《古記録》**古代中世地震史料研究会提供「［古代・中世］地震・噴火史料データベース（6 版）」（https://historical.seismology.jp/eshiryodb/ , 2025 年 2 月 17 日最終更新, 2026 年 1 月 8 日最終閲覧）／**以上については、各資料の底本も別途参照。**

【参考文献】影山尚之（2024）「巻七「就所発思」旋頭歌」,『萬葉研究誌 美夫君志』第百九号, 美夫君志會, pp.1-14／杉本つとも（1987）『「宛字」の語源辞典：なるほど！そうだったのか』,日本実業出版社, pp.75-76／曽睿（2024）『字音形態素から見る語構成と節構成の研究』（佛教大学研究叢書, ミネルヴァ書房）／竹村明日香（2017）「月経を表す「手桶番」の語源―上方落語『鮑のし』の語源説を起点として―」,『国語語彙史の研究』36, 国語語彙史研究会, pp.285-303／前田富祺監修（2005）『日本語源大辞典』, 小学館, p.774／盛本昌広（2016）「津波という言葉の使用開始時期」, 日本史史料研究会編『日本史のまめまめしい知識 第 1 巻』収録, 岩田書院, pp.209-215

[17] 字音形態素については、曽睿（2024）『字音形態素から見る語構成と節構成の研究』（佛教大学研究叢書, ミネルヴァ書房）を参照されたい。

[18] この類例には竹村（2017）がある。月経を表す「手桶番」は経血が火を汚すというところから火消し役（手桶番）を忌語として用いたものだったが、近代になって消防法が変化し、火消し役が消えた後は、手桶番を「手桶の番人」と字面から理解する語源説が出回ったことを指摘する。

中古和文資料に見られる動詞連接の構造

加藤咲子（筑波大学学生）

1. はじめに

本発表では、中古和文資料に見られる動詞連接[1]の構造について、その前項・後項となり得る要素を、語彙的なアスペクト・ヴォイスの観点から分類することを通じて、量的に検討することを目的とする。中古和文資料における「複合動詞」構成要素間の関係を語彙的な「意味的関係性」の側面から論じた研究としては大島（1996）があるが、調査対象資料が『源氏物語』と『紫式部日記』とに限られており、中古和文資料に見られる動詞連接の全体像は捉えられていない現状にある[2]。そこで、本発表では、『日本語歴史コーパス』から収集したデータを基に、石井（2007）の方法を参考として、中古語の動詞連接の前項・後項となり得る要素をアスペクト・ヴォイスにかかわる語彙的な意味によって分類し、その量的な分布傾向について検討する。

2. 動詞のアスペクト・ヴォイスにかかわる分類と複合動詞の構造—石井（2007）

石井（2007）は、「現代語の「既成」の複合動詞、すなわち、〔中略〕語彙的な複合動詞を対象に、「動詞＋動詞」型の複合動詞が形成されるそのしくみを、基本的なモデルとして「解釈」する」（石井 2007:30）ことを目指して、複合動詞の造語成分を、主体／客体の動作／変化や自他といった「アスペクトおよびヴォイスにかかわるカテゴリカルな語彙的意味」（石井 2007:37）によって (1) のように分類し、その分布やくみあわせを調査した。

(1) アスペクト・ヴォイスにかかわる語彙的意味にもとづく造語成分の分類

①	状態動詞	…主体の状態を表す、自動詞
②	主体動作自動詞	…主体の動作を表す、自動詞
③	主体動作他動詞	…主体の動作を表す、他動詞
④	主体動作客体変化動詞	…主体の動作と同時に客体の変化をも表す、他動詞
⑤	主体変化動詞	…主体の変化を表す、自動詞
⑥	再起動詞	…主体の変化が伴う主体の動作を表す、他動詞

（石井 2007:35，表 5 より）

その結果、「複合動詞においては、《主体の動作》を表す動詞を前項に、《主体ないし客体の変化》を表し得る動詞を後項にするくみあわせが代表的であることが明らか」（石井

[1] 阿部（2011）に則って「動詞連用形＋動詞」の形式を包括的に「動詞連接」とする。阿部（2011）および阿部（2018）・阿部（2019）は、二つの動詞が連続した「動詞連用形＋動詞」の形式を総称して「動詞連接」と呼び、「動詞連接」には前項と後項が一体化せず二つの動詞として機能している「非一体化動詞連接」と、前項と後項が一体化して機能している「複合動詞」とがあるとしたうえで（阿部 2011:1）、上代語における動詞連接前項の接頭辞化について論じ、複合動詞、さらには前項が接頭辞的に機能する接頭辞型複合動詞が上代から存在していたことを示した。

[2] 大島（1996）は、「二語の和語動詞の連接について「複合動詞」と呼ぶことにしたい」（大島 1996:26）としており、動詞連接全体を対象とした検討を目指す本発表とは異なる立場をとる点にも留意が必要である。

2007:37）であったところから、複合動詞の語構造について、「《主体の動作》を表す動詞を前項とし、《主体ないし客体の変化》を表す動詞を後項とするくみあわせを土台として、複合動詞が全体として表すひとまとまりの運動の、前項がその〔過程〕面を、後項がそれによって【実現】される〔結果〕面を、それぞれ、分担して表す、（他動的・自動的・再帰的な）［過程結果構造］というべき語構造をつくりあげていると解釈」（石井 2007:49）する「複合動詞形成の《アスペクト・ヴォイス》モデル」（石井 2007:50）を提案している。また、「必ずしも《主体の動作》を表す動詞と《主体／客体の変化》を表す動詞とのくみあわせでないものにも、［過程結果構造］をつくりあげているタイプを少なからず見ることができた」（石井 2007:49）ことや、「複合動詞構成要素の接辞化という現象を、［過程結果構造］からの派生として説明できる可能性がある」（石井 2007:50）ことについても言及されており、特に後者については、語彙的な接頭辞・接尾辞による「語彙＝派生的な複合動詞」の語構造も、文法的な接尾辞による「文法＝派生的な複合動詞」の語構造も、それぞれ［過程結果構造］から派生すると解釈できることが主張されている（石井 2007:71-88）。

3. 調査

『日本語歴史コーパス』平安時代編で、「仮名文学」に含まれる中古和文資料 16 作品[3]を対象に、短単位で (2) のような検索を行い、動詞連接の前項・後項となる要素を収集した[4]。

(2) a. 非接辞型動詞連接の前項 …用例数（延べ語数）45,133、語彙素数（異なり語数）1,187
〈キー：品詞が「動詞」・活用形が「連用形」、後方共起：品詞が「動詞」〉
b. 接頭辞型複合動詞の前項（接頭辞）
…用例数（延べ語数）3,273、語彙素数（異なり語数）4
〈キー：品詞が「接頭辞」、後方共起：品詞が「動詞」〉
c. 接尾辞型複合動詞の前項 …用例数（延べ語数）52、語彙素数（異なり語数）21
〈キー：品詞が「動詞」・活用形が「連用形」、後方共起：品詞が「接尾辞-動詞的」〉
d. 非接辞型動詞連接の後項 …用例数（延べ語数）45,133、語彙素数（異なり語数）848
〈キー：品詞が「動詞」、前方共起：品詞が「動詞」、活用形が「連用形」〉
e. 接頭辞型複合動詞の後項 …用例数（延べ語数）3,273、語彙素数（異なり語数）382
〈キー：品詞が「動詞」、前方共起：品詞が「接頭辞」〉
f. 接尾辞型複合動詞の後項（接尾辞）
…用例数（延べ語数）52、語彙素数（異なり語数）2
〈キー：品詞が「接尾辞-動詞的」、前方共起：品詞が「動詞」、活用形が「連用形」〉

なお、(2) によって抽出したデータの品詞「接頭辞」には語彙素として「相」「打ち」「御（おおん）」「掻き」「さ」「差し」「生」「仄」「御（み）」「以て」「物」の 11 種が、品詞「接尾辞-動詞

[3] 『竹取物語』『古今和歌集』『伊勢物語』『土佐日記』『大和物語』『平中物語』『蜻蛉日記』『落窪物語』『枕草子』『源氏物語』『和泉式部日記』『紫式部日記』『堤中納言物語』『更級日記』『大鏡』『讃岐典侍日記』である。
[4] 検索条件の前方共起・後方共起はいずれも「キーから 1 語」のみとした。

的」には語彙素として「兼ねる」「立(だ)つ」「ばむ」の 3 種が、それぞれ含まれていたが、動詞連接について調査するという目的から、(2b)・(2e) では「相」「打ち」「掻き」「差し」を前項とする用例のみ[5]、(2c)・(2f) では「兼ねる」「立(だ)つ」を後項とする用例のみを計上した。

4. 分析・考察

4.1 データの整理と概観

(2a) 〜 (2f) のデータについて、表計算ソフトのピボットテーブル機能を用いて「語彙素 ID」によって整理・集計したうえで、『日本語歴史コーパス』の統合語彙表から抽出した中古語の動詞語彙に対して石井（2007）に基づく分類情報のアノテーションを行ったデータ[6]との対応づけを行うとともに、石井（2007）で示された現代語のデータと比較した。

まず、用例数（延べ数）を基準に検討すると、前項となる要素に関しては、(2a) では「思う」「見る」といった③主体動作他動詞をはじめとする主体の動作を表すものが用例数の上位を占めており、石井（2007）の主張するように主体の動作を表すものが前項となりやすい傾向が認められた。ただし、(2a)・(2b)・(2c) の各項目で上位を占める要素の重なりは少なく、(2c) では主体の動作だけでなく客体の変化をも表す「定める」「慰める」といった④主体動作客体変化動詞にあたるととれるものが見られた。また、項目ごとの用例数と語彙素数とを考え合わせても、(2a) と (2b) とで上位に位置する各要素の用例数の多さは注目に値するものであった。特に、接頭辞「打ち」の用例数は 2,145 であり、前項となる要素全体の中でも「思う」（3,914 例）・「見る」（2,730 例）・「聞こえる」（2,076 例）といった主要な動詞と並んで上位 3 位以内に入るほど多く、その生産性の高さがうかがえた。

一方、後項となる要素に関しては、(2d) では敬語の補助動詞として用いられる「給う」「侍る」「奉る」などが上位を占めており、特に「給う」は 16,035 例で群を抜いていた[7]。敬語の補助動詞以外の要素に着目すると、(2d) では「出でる」「来る」といった⑤主体変化動詞をはじめ、主体／客体の変化を表すものが用例数の上位を占めており、石井（2007）の主張するように主体／客体の変化を表すものが後項となりやすい傾向が見られた。各項目で上位を占める要素の重なりについては、(2d) と (2e) とでいずれも「出でる」が高い用例数を示したほか、「置く」「入れる」も両項目で上位に入っていた。また、(2e) では、「泣く」「笑う」のように②主体動作自動詞や③主体動作他動詞として主体の動作を表す要素も用例数の上位を占めており、石井（2007）の主張との相違がうかがえた。

---

[5]「相」を動詞由来の接頭辞と見るべきかという点についてはさらなる検討が必要であると思われるが、東辻（ほか）（編）(2003)『平安時代複合動詞索引』でも特段の注などを付さずに採録されていることを踏まえるとともに、動詞「合う」「会う」の連用形である「合い」「会い」が接頭辞化したものが含まれる可能性を考慮して、ここではデータに含めることとした。

[6] 中古語の動詞語彙に分類情報をアノテーションしたデータの構築の詳細に関しては加藤（2025）を参照。

[7] 今回の調査では「動詞連用形＋動詞」の形の用例をすべて動詞連接として収集している一方で、各用例における前項と後項の関係性を精査していないため、このような結果となった。こうした敬語の補助動詞は、東辻ほか（編）(2003)『平安時代複合動詞索引』でも、凡例で「依拠した索引の見出語が上述の（発表者注：敬語等の）補助動詞・助詞や助動詞を介在・下接させた形となっている場合には、それらを除いた形で採集した」（東辻ほか（編）2003:iii）とされていることから、動詞連接の構成を検討するうえでは取り除くべき要素であるといえる。しかし、動詞連接の前項と後項の関係性の判断や、各要素の本動詞としての用例と補助動詞としての用例との判別には慎重を期すことが求められるため、今後の課題としたい。

先述した (2c) およびここで述べた (2e) の様相からは、接辞に接続する要素の傾向は非接辞型の動詞連接と異なる可能性があるといえる[8]。

4.2 前項および後項に見られる要素の分布状況

次に、動詞連接の前項および後項に見られる要素で、①～⑥の各分類に該当するものを語彙素（種類）ごとに集計すると表 1・2 のようになった。なお、自他両用などの理由により 1 つの要素を複数の分類に重複して算入した場合があるため、各項目における要素の数の合計は (2) において示した語彙素数（異なり語数）と一致しない場合がある。また、表 1・2 には、比較のために、石井（2007:36，表 6）をもとに算出した現代日本語の複合動詞の前項および後項に見られる各分類に該当する要素の数も付した。表中では、各項目の中でもっとも割合が高いものに濃色の網掛け、次に割合が高いものに淡色の網掛けを施した。

表 1　動詞連接の前項となる要素の分類情報（単位：語）

	①	②	③	④	⑤	⑥	計	備考
中古語	10	182	353	279	449	64	1,337	語彙素数：1,212
	0.75%	13.61%	26.40%	20.87%	33.58%	4.79%	100.00%	（延べ語数：48,458）
石井（2007）	2	63	198	78	158	31	530	前項動詞＋両項動詞
	0.38%	11.89%	37.36%	14.72%	29.81%	5.85%	100.00%	（調査語数：2,494）

表 2　動詞連接の後項となる要素の分類情報（単位：語）

	①	②	③	④	⑤	⑥	計	備考
中古語	16	177	324	348	457	60	1,382	語彙素数：1,232
	1.16%	12.81%	23.44%	25.18%	33.07%	4.34%	100.00%	（延べ語数：48,458）
石井（2007）	0	29	95	158	180	22	484	後項動詞＋両項動詞
	0.00%	5.99%	19.63%	32.64%	37.19%	4.55%	100.00%	（調査語数：2,494）

表 1 に示した動詞連接の前項となる要素の分類情報を見ると、中古語の動詞連接前項では⑤主体変化動詞の割合がもっとも高く、次に③主体動作他動詞の割合が高いのに対して、石井（2007）の現代語の複合動詞の前項では③主体動作他動詞の割合がもっとも高く、次に⑤主体変化動詞の割合が高いというように、異なる様相が見られる。ここから、中古語の動詞連接前項と現代語の複合動詞の前項では、③主体動作他動詞と⑤主体変化動詞の割合が高いという点は共通しているが、その分布傾向には相違があるといえる。

一方、表 2 に示した動詞連接の後項となる要素の分類情報を見ると、中古語の動詞連接後項と石井（2007）の現代語の複合動詞の後項とのいずれにおいても、⑤主体変化動詞の割合がもっとも高く、次に④主体動作客体変化動詞が続くという類似の様相が見られる。中古語では現代語と比べて⑤主体変化動詞・④主体動作客体変化動詞といった変化を表す動詞の占める割合が全体として低く、③主体動作他動詞・②主体動作自動詞といった動作を表す動詞の割合が全体として高いというように、詳細な点では違いがあるものの、中古語の動詞連接後項と現代語の複合動詞の後項とは、大勢としては類似しているといえる。

[8] この点については、今回の調査で収集した接頭辞型複合動詞の前項となる接頭辞は 4 種、接尾辞型複合動詞の後項となる接尾辞は 2 種といずれも種類が限定的であるため、それぞれの中で過半数を占める特定の接頭辞・接尾辞に接続する要素の傾向が表れているとも捉えられるが、なお議論の余地がある。

ただし、中古語の動詞全体に対して同様の分類情報を対応づけ、その分布の様相を分析した加藤（2025）において、中古語の動詞の分布の様相として、⑤主体変化動詞が 4 割弱を占めてもっとも多く、次いで③主体動作他動詞や④主体動作客体変化動詞が各 2 割程度、②主体動作自動詞が 1 割強、⑥再帰動詞と①状態動詞とは各 1 割未満であるという指摘があったことを踏まえると、表 1・2 に見られる中古語の動詞連接において前項・後項となり得る要素の分布傾向は、中古語の動詞の分布の様相を反映したものであるとも捉えられる。

4.3 前項と後項とのくみあわせの分布状況

さらに、中古語の動詞連接における前項と後項とのくみあわせは、表 3 のようになった。なお、表 1・2 では、収集したすべてのデータを使用し、複数の分類に該当する要素については重複を許して集計を行ったが、表 3 では、くみあわせの傾向を観察するために、前項・後項とも『日本語歴史コーパス』において品詞が「動詞」と認定されており、かつそれぞれの分類が一意に定まる要素に限定して集計を行った。表中では、頻度が高い 2 項目に濃色の網掛け、これらに続いて頻度が高い 2 項目に淡色の網掛けを施した。

表 3　中古語の動詞連接における前項と後項とのくみあわせ（単位：語）

前項／後項	①	②	③	④	⑤	⑥	計
①	1	0	2	1	6	0	10
②	19	77	140	62	208	5	511
③	75	122	642	754	416	67	2,076
④	64	36	387	265	92	30	874
⑤	115	101	346	95	769	11	1,437
⑥	15	10	66	74	47	13	225
計	289	346	1,583	1,251	1,538	126	5,133

表 3 より、中古語の動詞連接における前項と後項とのくみあわせとしては、⑤×⑤と③×④とが多く、続いて③×⑤と③×③とが多いという様相が見られることがわかる。この結果を、表 1・2 に示したような語彙素（種類）基準の集計結果と比較すると、中古語の動詞連接の前項となる要素の異なり数としては⑤主体変化動詞が③主体動作他動詞を上回るのに対して、くみあわせとして見た実際の動詞連接の異なり数では③主体動作他動詞を前項とするものが⑤主体変化動詞を前項とするものよりも多いといえる。これは、③主体動作他動詞の後項としては③主体動作他動詞・④主体動作客体変化動詞・⑤主体変化動詞といったように動作を表す要素と変化を表す要素とのいずれもが見られるが、⑤主体変化動詞の後項は⑤主体変化動詞のような変化を表す要素に偏るためであると考えられる。また、石井（2007:36-37）によると、現代語の複合動詞では③×④がとくに多く、⑤×⑤、また④×④や③×⑤も多いという様相であり、前項としては③主体動作他動詞、後項としては④主体動作客体変化動詞・⑤主体変化動詞が圧倒的に多いとされるが、表 3 を参照すると、中古語の動詞連接においては、前項・後項とも比率は異なるもののそれぞれ③主体動作他動詞・④主体動作客体変化動詞・⑤主体変化動詞に分散しており、圧倒的に多いといえる

分類は見られない[9]。このことは、中古語の動詞連接の構造が現代語の複合動詞の構造と異なることを示唆している可能性がある。

5. おわりに

本発表では、中古和文資料に見られる動詞連接の構造について、石井（2007）の方法を参考として、その前項・後項となり得る要素を、語彙的なアスペクト・ヴォイスの観点から分類することを通じて、量的に検討した。結論としては、次の 2 点が指摘できる。(i) 中古語の動詞連接において前項・後項となり得る要素の分布傾向は、特に前項において、現代語の複合動詞と異なる。(ii) 中古語の動詞連接における前項と後項とのくみあわせの分布傾向は、現代語の複合動詞と異なる。また、これらの点から、中古語の動詞連接の構造は現代語の複合動詞の構造と異なることが示唆される。こうした差異が生じた原因については、青木（2013）などにおいて指摘されている、古代語の動詞連接における前項・後項の非緊密性（非語彙性）がかかわる可能性があり、詳細な検討は今後の課題である[10]。さらに、一方が補助動詞化ないし接辞化している場合も含めた動詞連接の前項と後項との関係性について、語彙的な「意味的関係性」の観点のみならず、小田（2015）において並立型・補助型・修飾型・融合型・打消型の 5 分類として整理されたような統語的な「意味的関係性」の観点からも精査することや、特定の動詞あるいは接辞に接続する要素の特徴を記述することなども行いながら、中古語の動詞連接の構造について検討を進めたい。

【参考文献】青木博史（2013）「複合動詞の歴史的変化」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて―』，pp.215-241，ひつじ書房.／阿部裕（2011）「上代日本語の動詞連接「トリ－」について―複合動詞の存否を中心に―」『名古屋言語研究』5，pp.1-14，名古屋言語研究会.／阿部裕（2018）「上代日本語における接頭辞を前項とする「ウチ－」」『名古屋言語研究』12，pp.1-14，名古屋言語研究会.／阿部裕（2019）「接頭辞型複合動詞の上代における様相」『名古屋言語研究』13，pp.1-14，名古屋言語研究会.／阿部裕（2023）「古代語複合動詞の現代語への継承について」『名古屋言語研究』17, pp.1-14，名古屋言語研究会.／石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』，ひつじ書房.／大島悦子（1996）「「複合動詞」構成要素間の関係性について―『源氏物語』における「複合動詞」の場合―」『早稲田日本語研究』4, pp.26-38，早稲田大学国語学会.／小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』，和泉書院.／加藤咲子（2025）「中古語の動詞語彙に対するアスペクト・ヴォイスにかかわる分類情報のアノテーションの試み」言語資源ワークショップ 2025 口頭発表原稿．https://clrd.ninjal.ac.jp/lrw/lrw2025/o02s.pdf.（2026-01-28 確認）／東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明（編）（2003）『平安時代複合動詞索引』，清文堂出版.
【調査資料】国立国語研究所（2025）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2025.11，中納言バージョン 2.7.2）．https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/.（2026-01-28 確認）

[9] 後項となる要素として③主体動作他動詞が多く見られる点に関しては、用例数（延べ数）が多い敬語補助動詞「給う」が③主体動作他動詞に分類されていることの影響が現れている可能性もあるが、この点を考慮しても、④主体動作客体変化動詞・⑤主体変化動詞が圧倒的に多いのではなく③主体動作他動詞・④主体動作客体変化動詞・⑤主体変化動詞に分散しているという現代語との違いは指摘し得る。

[10] 青木（2013）は、古代語の動詞連接の非緊密性（非語彙性）に関する部分の注で、「石井（2007）で示される「過程結果構造」は、「V1 連用形＋V2」が「一まとまり」であることを意味的観点から説明したものであると思う。〔中略〕古代語でこうした意味構造に当てはまる「複合動詞」は、むしろ少ない」（青木 2013: 238，注 5）としているが、こうした指摘に対する量的な検証も含めて検討を行う必要がある。また、大島（1996）も、古典語「複合動詞」と現代語複合動詞とでは構成要素間の語彙的な「意味的関係性」に差異が見られるとしたうえで、このことが古典語「複合動詞」の結合度と関係する問題である可能性を提起しており、こうした可能性を視野に入れて検討を行うことの重要性は高いといえる。古代語の複合動詞の現代語への継承について東辻ほか（編）（2003）および石井（2007）を利用して異なり語の観点から検討した阿部（2023）における議論なども参考にしたい。

動詞の自他対応関係の史的展開
―「のびる」「のべる」「のばす」を対象として―

（平野杏（ひらのあん）　名古屋大学大学院生）

1．はじめに

日本語には、形態的・意味的に対応する自動詞と他動詞の組がある。多くは一対一で対応するが、一部はそれ以外の対がある。そのうち自動詞一対他動詞二からなる動詞の組には、第二の他動詞が「ス」を語尾に持つ動詞（以下ス語尾動詞）である一群が存在する。

例：自動詞　　－ 他動詞①　　／ 他動詞②　ス語尾動詞
　　回る（四段）　－ 回す（四段）
　　伸ぶ（上二段）－ 伸ぶ（下二段）／ 伸ばす（四段）
　　絶ゆ（下二段）－ 絶つ（四段）　／ 絶やす（四段）

上記のような動詞の組は複数存在する。また、これらの動詞の組の歴史を確認すると、他動詞①が先に存在して自動詞と意味的な対応を保持しており、その後他動詞②が新たに派生して自他対応の中に組み込まれるという流れが、複数の動詞の組においてみられる[1]。

上記の一対一でない動詞の組の存在は、動詞の自他対応関係を、形態・意味的に安定した、固定的なものとして捉えるだけでは説明しきれない。発表者はこの現象を、動詞の組の中での自他対応関係の変化によるものと考え、特に、時代が下ってからまとまって出現したス語尾動詞に注目してその様相を記述することを目標としている。

本発表では上記のうち、自動詞「のぶ（上二）＞のびる（以下のびる）」と他動詞「のぶ（下二）＞のべる（以下のべる）」「のばす」を観察する。

2．先行研究と問題の所在

2．1．三語の対応の歴史

三語の歴史を概観して記述したものに『日本語文法大辞典』がある。同辞典では、三語の自他対応関係が時代によって変化することを指摘する。「のびる」「のべる」が二段活用であったころは両語が自他対応関係にあり、その後室町から江戸時代にかけて「のばす」が「のびる」の他動詞として用例を増やしたと指摘する。同時期「のべる」は「まとまった内容を順序立てて話す」意味の用例が増えて自他対応の中心を外れ、その他特定の場面（「床をのべる」「のべ板」等）でのみ使われるようになる（p.624）。

また、『時代別国語大辞典上代編』（1967）は、「のぶ（下二）」の伸展と叙述の意味を同項目として立項し、古い仮名書きがないためノの甲乙は不明であるとする（p.566）。

現代語における自他対応を記述したものには寺村（1982）がある。自他対応のある動詞対として、「のびる」「のばす」を「ik*i*-ru－ik*as*-u」に類する組に含める（p.315）一方、「のべる」の記述はなく、自他対応関係のある動詞の組としていない。現代語共時態では、三語すべてにまたがる自他対応関係は認めにくいようである。

2．2．活用との関係

佐々木（2010）は、二段活用の一段化による語の安定化と自他対応の関係を考察している。「のびる」「のべる」等、活用の種類により自他が対応する場合は自動詞の一段化率が

[1] この現象がみられる動詞の組については、名古屋言語研究会第 205 回例会「ス語尾動詞史研究の方法論の提案　－対象語群と語彙項目の選定－」（2025）において発表している。

高いとする。その中でも「対応を二段活用に持つ自動詞」（のびる等）は、終止・連体・已然形で、対応する他動詞（のべる等）との形態上の差異がなくなる動詞であり、これらは一段化率が高いと指摘する。一方で「対応を二段活用に持つ」他動詞（のべる等）を含め、他動詞は自動詞に比べて一段化率が低いことも指摘する（p.51）。

２．３．問題の所在

先行研究により「のびる」「のべる」「のばす」の三語の歴史は示されている一方で、個別の意味と語同士の対応関係の変化の相互作用や、文法史との関連については提示されていない。また、動詞の活用の歴史に関しては、一段化の進行状況について明らかな一方で、語の意味や語ごとの変化と一段化の関わりは示されていない。加えて、今回の調査対象である三語について言えば、「のばす」を対象に含めた考察もなされていない。

以上を踏まえ、本発表では、奈良時代から江戸時代までの三語の用例をもとに、まず、それぞれの動詞の意味の変化を記述する。その上で、ス語尾動詞「のばす」を中心に、三語の自他対応関係を検討し、活用を含む日本語文法史との接点を考える。

３．調査方法

『日本語歴史コーパス』を用いて奈良時代から江戸時代の用例を収集し、用例数の少ない室町時代については、『土井本太平記』の用例を併用した。得られた用例について、自動詞文はガ格相当、他動詞文はヲ格相当の名詞句を確認して分類し、変化や傾向を記述して三語の歴史を比較検討した。また、全ての用例について、「のびる」「のべる」「のばす」に実線を、その他の注目すべき部分に波線を、それぞれ私に付した。また、紙幅の関係上、一部用例を中略した例がある。分類は以下の通りである。

・空間：具体物の伸展を表す。例：皺をのばす
・時間：日程や期間の延長を表す。例：開催日をのばす
・心情：心理的な緊張の緩和を表す。「叙述」と重なりが見られる（後述）ため、分類では「心」「思（ひ）」がガ格・ヲ格にくるものは機械的に「心情」とした。例：心がのびる
・叙述：言語での表現を表す。例：罪状をのべる
・その他：上記にあてはまらないもの、分類のしにくいもの。

４．調査結果

４．１．「のびる」（上二「のぶ」を含む）

表１　「のびる」用例数

	空間		時間		心情		叙述		その他		総計
奈良											0
平安	3	8%	32	84%	3	8%					38
鎌倉	13	20%	49	75%	3	5%					65
室町	13	19%	53	77%	2	3%			1	1%	69
江戸	15	50%	13	43%	2	7%					30
総計	44	22%	147	73%	10	5%	0		1	0%	202

全体を通して「時間」の用例が多くみられる。特に『土井本太平記』は「時間」の用例に偏り、「時間」が 40 例と、「空間」7 例と比較して多くみられる。

(1) 三条院位につかせたまふ年にて、大嘗会などの延びけるをぞ、「をりふし」と、世の人申しける。（20-大鏡 1100_01009, 2520）
(2) 三河守は、つと延びにけり。（30-平治 1246_01014, 45080）

「空間」の例も一定程度見られ、時間的または空間的な広がりを表す用例がある。
(3) 例の、見たてまつるに皺のぶる心地して（20-源氏 1010_00047, 114280）
(4) しばらくありて、曲れる脛はたとなりて延びぬ。（30-宇治 1220_12006, 3380）

また、「心情」の用例もみられる。上記で確認した、空間的・時間的な広がりの意味と関連[2]し、心が緩んで穏やかになるさまを表していることが推測される。
(5) 大将軍の、御心ののびさせ給ひたる程（30-平家 1250_05011, 28810）
(6) 市之進の物好き、心が伸びて面白い（51-近松 1717_24001, 84090）

後述する「のべる」に出現する「叙述」の用例はない。また、同様に後述する「のべる」の用例では、「叙述」の用例と近くなり「叙述」の意味を表す「心情」の用例であるが、「のびる」については、これらの用例を「心の内を言葉にして叙述する」という意味として取る積極的な特徴はみられない。用例も少ない。

関連して、以下は「陳状」をヲ格相当にとるが、「叙述」の意味にならない用例である。
(7) 御中和平したまふべき由を祈請申すばかりなり。（中略）左府の申状顕然のあひだ、勝尊が陳状も延びざりけり。（30-保元 1223_01007,4920）

複合動詞の用例は多くない。敬語以外の複合動詞の用例は、前後に接続する動詞により「のべる」の意味の識別が容易になっているものが多い。
(8) 父は是をうち捨てて、十余町こそ逃げのびたれ。（30-平家 1250_08008,23740）
(9) 日々に、物をひきのぶるやうにおよすけたまふ。（20-源氏 1010_00034,343490）

その他、使役を表す「さす」「させる」「しむ」との共起がほとんど見られない。「させたまふ」をはじめとする敬語の用例があるほか、『土井本太平記』にのみ２例みられる。
(10) 義貞朝臣、御方の軍勢を落ち延びさせんために（土井本太平記，巻 16）

その他、『土井本太平記』に１例、ヲ格と共起する用例が見られた[3]。
(11) 力無くしばらくの命を延びて、宮の御供にぞ候ひける。（土井本太平記，巻 7）

４．２．「のべる」（下二「のぶ」を含む）

表２　「のべる」用例数

	空間		時間		心情		叙述		その他		総計
奈良					3	75%	1	25%			4
平安	3	7%	13	31%	10	24%	15	36%	1	2%	42
鎌倉	29	29%	22	22%	11	11%	39	39%			101
室町	49	57%	7	8%			28	33%	2	2%	86
江戸	7	16%	5	11%			31	70%	1	2%	44
総計	88	32%	47	17%	24	9%	114	41%	4	1%	277

「空間」「時間」の用例がみられ、空間的または時間的な広がりを表す。用例数につい

[2] 『時代別国語大辞典上代編』にある「のべる」の意味と同様の推測が可能である。「③（稿者注：申し述べる。詳しく語る）は②（稿者注：気持ちをゆっくりとさせる。心を晴らす）を媒介として、①（稿者注：延べる。長くする）の意味がひろがったものであろう」の推測通りだとすれば、「心情」「叙述」と「時間」「空間」の用例には関連性があると言える。

[3] 『日本語歴史コーパス』で収集した用例についてもヲ格と共起する用例が４例見られたが、全て二段活用の「のぶる」であったため、「のべる」の用例である可能性を鑑みて今回は計上していない。

て、室町・江戸時代は「時間」の用例が他の時代と比較して割合が低く、特に『土井本太平記』において「時間」は一例のみであり、「空間」46 例と大きな開きがある。江戸時代は「空間」の用例についても割合が減少している。

(12) 金銀七宝を鏤めて，瑠璃を伸べた（nobeta）宮の内へ（40-天平 1592_04028, 28670）

(13) 彼岸のころほひ渡りたまふ。一たびにと定めさせたまひしかど、騒がしきやうなりとて、中宮はすこし延べさせたまふ。(20-源氏 1010_00021, 227000）

(14) 昔南陽県の菊水、下流を汲んで齢を延ぶ。(土井本太平記，巻 2）

また、「叙述」の用例が奈良時代からみられ、どの時代にも安定して存在している。「叙述」の用例は他と関連がないように思われるが、言叙述には時間的な幅が必要であるという点で、他の用例との共通点が指摘できる。また、そのほかに以下のような例がみられ、言葉の時間的・空間的な広がりを表す点で、他の用例とのつながりが指摘できる。

(15) 大師の教に、能く敷き演ぶ（20K 西金 0830_01001, 8580）

次のような例は「心情」と「叙述」の連続的な例と言える。「叙述」の用例と他の用例との繋がりとして指摘できる。

(16) うき世にはあらぬところをもとめても君がさかりを見るよしもがなと、なほなほしきことどもを言ひかはしてなん、心のべける。(20-源氏 1010_00050, 245500）

(17) 月の前に思ひをのぶといふこころをよみ侍ける　いつとてもかはらぬあきの月みればただいにしへの空ぞ恋しき（20W 後拾 1087_15016, 11520）

江戸時代になると、心情に関する名詞をヲ格にとりながらも、「心をゆっくりさせる」という意味に取りにくい例が見られる。

(18) 親の心に身を恥ぢて、姉につど／＼言ひ交し思ひを述べて立ち出づる（51-近松 1722_21002, 56330）

その他、複合動詞の用例は少ないが一部みられる。前後に接続する動詞により「のべる」の意味の識別が容易になっているものが多い。

(19) 能く他の爲に演べ説き、若しは心に隨喜をも生し、(20K 西金 0830_01001, 34790）

(20) 此の人、木の端を取て、縷の様なる肱を指し延べて、土に書を見れば、(30-今昔 1100_11011, 16120）

(21) かはほりのえならずゑがきたるをさし隠して見かへりたるまみ、いたう見延べたれど、目皮らいたく黒み落ち入りて（20-源氏 1010_00007, 92540）

4．3．「のばす」

表 3　「のばす」用例数

	空間		時間		心情		叙述		その他		総計
奈良											0
平安											0
鎌倉			6	100%							6
室町			1	100%							1
江戸	21	50%	19	45%	1	2%			1	2%	42
総計	21	43%	26	53%	1	2%	0	0%	1	2%	49

「のばす」の用例は鎌倉時代から出現し、「時間」の用例が初めにみられる。鎌倉時代には説話 3 例、軍記 3 例の計 6 例、室町時代には、『土井本太平記』に 1 例用例がある。

(22) 乗りたる馬、いとかしこしとも見えざりつれども、いみじき逸物にてありければ、い

くばくも延ばさずして捕へたる所に、(30-宇治 1220_01018, 10520)
(23) 次男源大夫判官兼綱、(中略)、父をのばさんとかへしあはせかへしあはせ、ふせぎたたかふ。(30-平家 1250_04012, 9830)
(24) 勢の攻め寄せんずる程を待ちて、わざと事を延ばさんとす。(土井本太平記, 巻 29)

江戸時代になると「時間」以外の用例がみられるようになる。
(25) 何か苦になる物あんじ。丸めた皺をのばしては。(53-人情 1851_07006, 880)
(26) 国を出で、髪を伸ばし女となり十九歳の九月より、(51-近松 1704_06001, 67770)

「のばす」には「叙述」の用例はない。「心情」の用例が一例のみ存在するが、これは「叙述」の用例と同じく叙述を表す例として認める積極的な理由はないと考える。
(27) 今では人に少々の銀貸すやうに、儲け溜めても辛い目ばかりに日を半日、心を伸ばすこともなく死なうとせしも以上五度 (51-近松 1722_21003, 63190)

5. 考察

5. 1. 意味的側面

辞書記述・用例観察から、平安時代には「のびる」「のべる」間に、おおむね自他対応関係が成立していたといえる。

鎌倉時代になると、ス語尾動詞「のばす」が出現する。鎌倉・室町時代の「のばす」は「時間」の意味を持ち、この点で「のびる」との対応がみられる。その後、江戸時代には「空間」「心情」の用例が見られるようになり、「のばす」は意味を拡張していく。こうして、時間の用例から発達した他動詞「のばす」は、江戸時代までにおおむね自動詞「のびる」との対応が形成されることがわかる。

ここで、『土井本太平記』の用例は、「のびる」は「時間」、「のべる」は「空間」に偏って出現していることがわかる。『土井本太平記』では、「のびる」「のべる」の「時間」「空間」の意味の対応に非対称性がみられ、「のべる」が担いにくかったと考えられる「時間」の用例に、新しい語である「のばす」が出現する余地があったことがわかる。

以上より、三語は「時間的な幅をもつ現象」を表す意味を、三語すべての意味変化の基盤として共有することを指摘したい。この意味は最頻用法ではなく、中心的な意味とも異なるが、具体物の伸展の意味や、叙述の「述べる」等、三語が持つ複数の意味同士を繋ぐ基盤であるといえる。出現当初（鎌倉時代）の「のばす」が時間の延長を表すことも、この意味の基盤の存在を裏付けると考える。

また、三語のうち「のべる」だけが、叙述に関わる意味を通時的に保持しており、他の二語とは異なるふるまいを見せる。「のべる」は平安時代には「叙述」以外の意味において「のびる」との自他対応を保持していたが、時代が下るにつれて「叙述」の用例を増やし、その意味を担う動詞として役割を特化させていく[4]。ス語尾動詞「のばす」が必要とされた背景の一つに、この「のべる」の意味の特化が考えられる。

5. 2. 形態的側面

本節では主に活用の変化を中心として述べる。

今回取り扱った三語について、古くは「のびる」「のべる」がともに二段活用「のぶ」

[4] 明治時代以降の『日本語歴史コーパス』における用例を確認すると、明治時代では 89%、大正時代では 96%に叙述の意味を表す字があてられている。昭和の教科書では、すべての漢字表記が「述」であり、明治時代以降、漢字表記が整備されることで「のべる」の意味がより固定化されていくことが考えられる。

であり、終止・連体・已然形で同形であった。その後、二段活用の一段化により、それぞれが「のびる」「のべる」に変化したことで、すべての活用形において形態の重複がなくなり、両者の形態的な区別が容易になった。一段化により「のびる」「のべる」の二語は独立性が高まったといえる。こうして独立性が高まったところに、「のばす」が「のびる」に対応する新しい他動詞として定着する余地が生まれたのではないかと考えている。

一方で、一段化により二語の独立性が高まってからも、「のびる」「のべる」は形態的には対応が連想されやすいことから、完全な排除には至らず、現代語においても一部の固定化した表現に残されている可能性がある。

ここで、前述した佐々木（2010）において、自動詞「のびる」は一段化が早い一方で、他動詞「のべる」は比較的一段化が遅いことも指摘されていると二節で確認した。このことを踏まえ、発表者は、「のぶ（上二）－のぶ（下二)」の対応と、「のびる（上一）－のばす」の対応がそれぞれ存在していたという仮説を立てたい。一段化が比較的遅い「のぶ（下二)」が、「のぶ（上二)」との意味的な対応を保持し続けたことで、「のびる－のべる」と「のびる－のばす」の対応が重なって存在した時代があるのではないかと考える。

また、先行論と本発表の関係について、佐々木（2010）は二段活用の一段化について、動詞の自他が一段化の進行にもたらした影響を記述しているのに対し、本発表では、特定の動詞の組における自他対応関係に、二段活用の一段化がもたらした影響を指摘したい。

6．まとめ・今後の課題

本稿では、自動詞「のびる」と他動詞「のべる」「のばす」の三語を一つの動詞の組とし、奈良時代～江戸時代の用例に基づいて自他対応関係の変化を観察した上で、意味的・形態的な側面からの考察を行った。意味的には三語が共通して「時間的な幅を持つ現象」を表すという基盤があることが確認でき、形態的には三語の対応に二段活用の一段化が深く関連している可能性を指摘した。

今後の課題としては次の観点から問題を精緻にしていくことが挙げられる。

・「のべる」がなぜ意味特化したのか。同様に他動詞①が意味特化して生き残った例がある[5]ため、ス語尾動詞を含めた動詞の自他対応のあり方の記述に重要である可能性がある。
・三語は「時間」の意味を基盤としていることを述べたが、「のばす」が時間→空間の意味変化を辿ったことも含め、他に言えることはないか。
・「のびる」の使役の例が少ないことと、「のばす」の出現に関連はないか。

また、本研究は個別語彙に基づいたものであるが、ス語尾動詞の語彙的ヴォイスとしての特徴について再考することを大きな課題としている。他の語との比較検討の中で改めて「のびる」「のべる」「のばす」の三語について考えたい。

参考文献

国立国語研究所（2025）「コーパス検索アプリケーション『中納言』」
https://chunagon.ninjal.ac.jp/auth/login （2025/11/12 最終閲覧）
国立国語研究所（2025）『日本語歴史コーパス』（バージョン 2025.3，中納言バージョン 2.7.2）
https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/（2025/11/12 確認）
佐々木淳志（2010）「自動詞・他動詞と二段活用の一段化」『愛知教育大学大学院国語研究』18、pp.56-43
上代語辞典編修委員会（1967）『時代別国語大辞典　上代編』三省堂
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味１』くろしお出版
西端幸雄ほか（1997）『土井本太平記 本文及び語彙索引』勉誠出版
山口明穂ほか（2001）『日本語文法大辞典』明治書院

[5] 「生きる－生ける／生かす」は、「生ける」のみ火や植物など一部の非情物をヲ格にとる用例を持つ。

新聞における指示詞の語形選択と記事分野の相関構造
―BCCWJ 所収『読売新聞』のコレスポンデンス分析から―

ロ　ムテイ
立命館大学・LYU MENGTING

１．研究背景

日本語の指示詞は、指示系列と「-レ・-コ・-ノ」等の語尾からなる体系を持つ（佐久間 1936）。これまで盛んに議論されてきた用法研究に対し、語形側面の記述（庵 2007, 劉 2011）は十分ではなく、学習者の習得上の困難（迫田 1998）からも精密な記述が求められる。また、指示詞の語形選択には、時代やジャンルによってその機能に応じた一定の出現傾向が認められる（ロ 2025, 2026, 吕 2026, 劉 2015）。そのため、現代語においてもジャンルごとの具体的な実態を解明することは、指示詞体系の全体像を捉える上で重要な課題である。そこで本研究は、BCCWJ 所収『読売新聞』を対象に、語形選択と記事分野の相関構造を計量的に分析する。多岐にわたる記事分野において、指示詞の語形選択がどのように異なるのかを明らかにすることが本研究の目的である。[1]

２．先行研究

語形に着目して複数ジャンルを考察した近年の研究には、明治・大正期を対象としたロ（2025,2026）が挙げられる。ロ（2025）は、童話と小説において共通してソ系（特に「ソノ」）が多用される一方、次いで多用される語形は童話では「ソレ」、小説では「コレ」とジャンル間で差異があることを明らかにした。また、ロ（2026）は国定国語教科書（第 1-3 期）を調査し、「ソノ」の多用や、特定の期に偏って現れる「コレ」の存在を指摘している。吕（2026）は創刊から 1925 年までの『読売新聞』を調査し、一部の例外（1875 年）を除き、語形選択として「ソノ」が最多であることを報告している。一方、現代の報道ではコ系（特に「コノ」）の多用が指摘されている（庵 2008,劉 2011）。庵（2008）は、新聞では「コノ」が「ソノ」の使用を上回るという小説との対照的な実態を示したが、その要因については詳述していない。これに対し、劉（2011,2015）は指示系列の選択における談話ジャンルの重要性を説き、ニュース、物語、日常会話等の上位範疇として「情報伝達モード」、「語りのモード」と「対話モード」という談話モードを提唱した。同氏は、ニュース報道におけるコ系（特に「コノ」）の多用について、話し手のみがアクセス可能な情報領域を利用しながら言語文脈領域の対象を指すという、「情報伝達モード」の特性に起因すると説明している。ただし、同研究が認める通り、報道内には情報伝達モードの典型例ではない記事も存在する。こうした記事分野と語形選択の関連性はまだ十分な検討がなされていない。なお、高頻度語

[1] 本研究の調査対象は、「コレ・ココ・コノ」等の計 9 語形である。用語の定義について、「コレ」を例に説明する。個別の語を一意に指す場合は「語形」、語頭（コ・ソ・ア）の共通性に基づく分類を「指示系列（系）」、語尾（レ・コ・ノ）の共通性に基づく分類を「語型（型）」と称する。なお、指示詞の表記は、用例を除き原則としてカタカナ（語彙素読み）で統一する。

形の「コノ」、「ソノ」を含む語形と、記事分野との相関構造を研究する余地がある。そこで、本研究はこの相関構造を解明した上で、劉（2015）の知見をに基づき、新聞記事における語形選択の説明枠組みの精緻化を図る。

３．調査資料・調査方法

調査資料には、BCCWJ（「中納言」Ver.2.7.3、形態論情報 2021.03）に収録された全国紙『読売新聞』（延べ語数 128,597 語）を用いた。分析対象として、指示詞 9 語形（コレ・ココ・コノ・ソレ・ソコ・ソノ・アレ・アソコ・アノ）を抽出し、併せて「分類語彙」等の形態論情報を取得した。[2]また、記事データベース「ヨミダス」を参照し、記事面名や付与された分野タグに基づき記事分野情報を整理した。さらに、抽出語には人称代名詞的用法、接続詞的用法、感動詞的用法、慣用表現等が含まれるため、金水（1999）他により判断した。

４．調査結果

前節の方法に基づき、抽出した指示詞の出現頻度の集計結果を表 1 に示す。

表 1　指示系列・語型・語形の実数頻度

	レ型	コ型	ノ型	小計
コ系	（コレ）119	（ココ）29	（コノ）207	355
ソ系	（ソレ）67	ソコ）19	（ソノ）192	278
ア系	（アレ）3	（アソコ）0	（アノ）16	19
小計	189	48	415	（合計）652

表 1 に示すように、新聞記事全体では、指示系列ではコ系、語型ではノ型が最も多く、語形ではコノの出現頻度が最も高い。

この結果は、新聞におけるコ系指示詞（特にコノ）の多用を指摘した先行研究（庵 2008、劉 2011）と整合的である。ただし、表 1 は全 14 分野の合算であり、分野ごとに語形選択の傾向が異なる可能性がある。そこで、分野別の指示詞語形の頻度を表 2 に、構成比率を図 1 に示す。

表 2　分野別の語形の頻度

記事分野	延べ語数	コレ	ココ	コノ	ソレ	ソコ	ソノ	アレ	アノ
社会	42628	0.73	0.23	1.62	0.47	0.21	1.60	0.00	0.12
		31	10	69	20	9	68	0	5
経済	16248	0.92	0.18	1.54	0.62	0.06	1.54	0.00	0.12
		15	3	25	10	1	25	0	2
スポーツ	15843	1.07	0.25	2.40	0.63	0.06	0.88	0.06	0.06
		17	4	38	10	1	14	1	1
国際	11376	1.05	0.00	1.58	0.18	0.09	1.32	0.00	0.00
		12	0	18	2	1	15	0	0
政治	8874	1.58	0.00	1.24	0.68	0.11	2.03	0.11	0.11
		14	0	11	6	1	18	1	1
生活	8709	0.69	0.80	1.15	0.80	0.11	1.49	0.00	0.23
		6	7	10	7	1	13	0	2
科学	6481	1.70	0.31	0.93	0.15	0.31	1.23	0.00	0.00
		11	2	6	1	2	8	0	0
解説	3729	0.00	0.00	1.34	1.34	0.54	1.61	0.00	0.00
		0	0	5	5	2	6	0	0
文化	2795	0.36	0.36	3.58	0.36	0.00	2.50	0.00	0.72
		1	1	10	1	0	7	0	2
その他	2757	1.09	0.36	0.00	0.00	0.00	0.73	0.00	0.00
		3	1	0	0	0	2	0	0
健康	2505	1.60	0.00	2.00	0.00	0.00	0.40	0.00	0.00
		4	0	5	0	0	1	0	0
女性	2312	0.87	0.00	1.73	0.87	0.43	3.03	0.00	0.00
		2	0	4	2	1	7	0	0
案内	2126	0.47	0.47	1.41	0.94	0.00	1.41	0.00	1.41
		1	1	3	2	0	3	0	3
教育	1420	1.41	0.00	2.11	0.70	0.00	3.52	0.70	0.00
		2	0	3	1	0	5	1	0

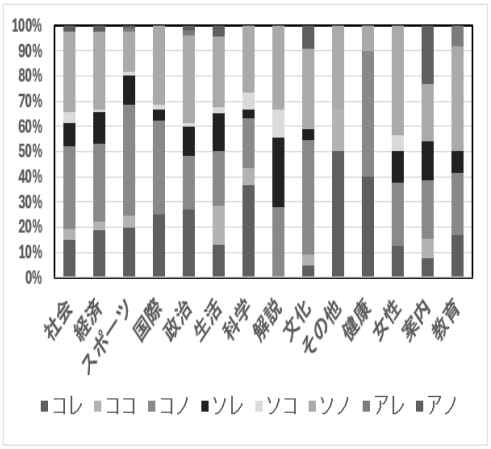


図1　分野別の語形構成比率

表 2（上の行は 1000 語あたりの調整頻度）、図 1 に示すように、多くの分野でコノとソノが多くみられる。一方、健康、科学、やその他といった分野ではコレが、解説や案内では

[2] 検索条件式を「コノ」を例に示す。キー：（語彙素="此の" AND 語彙素読み="コノ" AND 品詞 LIKE "連体詞%"）IN（registerName="出版・新聞" GENRE GENRE1="全国紙" GENRE2="読売新聞" AND（core="true" OR core="false"））WITH OPTIONS tglKugiri="" AND tglBunKugiri="#" AND limitToSelfSentence="1" AND tglFixVariable="2" AND tglWords="100" AND unit="1" AND encoding="UTF-16LE" AND endOfLine="CRLF"

ソレが相対的に多くみられる。

以上から、分野と語形との間には一定の関連が示唆される。次節では、この関連が偶然を超えて統計的に有意であるかを検証し、その相関構造を明らかにする。

５．考察

５．１　指示詞語形と記事分野の関連性

記事分野と指示詞語形の関連性を検証するため、カイ二乗検定を行った。その結果、両者の間に有意な関連が認められた（χ^2＝147.10，df＝91，p＜0.001）。これを受け、各分野での特定の語形が有意に多く、または少なく出現する傾向を明らかにするため、調整残差分析を実施した。調整残差（z）の絶対値が 2.58 以上を 1%水準の有意な偏りと判定した。分析の結果、案内におけるアノ（z＝4.85）、教育におけるアレ（z＝4.07）、生活におけるココ（z＝3.68）、科学におけるコレ（z＝2.67）、スポーツにおけるコノ（z＝2.66）に、有意な正の関連が、スポーツにおけるソノ（z＝-2.88）には、有意な負の関連が確認された。

５．２　指示詞語形と記事分野の相関構造

前掲の表 1 に示したように、全体頻度は、最多のコノ（207 例）から最少のアレ（3 例）まで大きな開きがある。コレスポンデンス分析において、こうした低頻度語をそのまま分析に用いると軸の算出に過度な影響を及ぼす恐れがある。実際、上位 4 語形（コノ・ソノ・コレ・ソレ）で全抽出例の 89.7%（累積頻度 585 例）を占めている。そこで本分析では、これら主要語形を能動的変数（主軸）として採用し、残る低頻度語形（ココ・ソコ・アノ・アレ）を補助的変数（補助点）として投影した。これにより、低頻度語による軸の歪みを排除しつつ、全語形の出現傾向を多角的に記述することを可能とした。なお、前節の調整残差分析の結果は以下のコレスポンデンス分析の結果とも整合する。

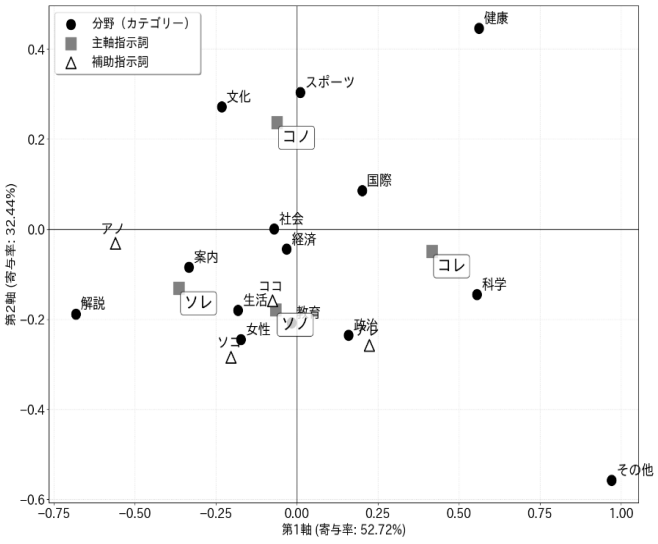


図 2　指示詞の語形と分野の関係図

図 2 に示す通り、第 1 軸の寄与率は 52.72%、第 2 軸は 32.44% であり、累積寄与率は 85.16% に達している。多変量解析において累積寄与率が 80%を超えることは、元の多次元的なデータが持つ情報の 8 割以上がこの 2 次元平面上で再現されていることを意味する。したがって、図中の分野と語形の配置は統計的に信頼性が高く、これに基づき「基底的語形」と偏りのある語形の相関構造を検討することが可能である。具体的には、社会や経済などの主要分野が原点付近に位置し、主要語形ではソノ、コノが中心部に分布する。これらは分野を超えて広く用いられる点で、基底的語形と位置づけられる。また、第 1 軸をみると、主要語形コレおよびソレなど

原点から離れた語形は、特定分野と結びつく偏りを示している。とりわけ、正の方向にはコレと科学、国際、政治が、負の方向にはソレと案内や解説が対応しており、語形と分野の結びつきが対照的に現れている。なお、補助的語形アノも案内付近に投影されている。つまり、本研究で抽出された第1軸・第2軸の相関構造は、基底的語形という安定した中心点に対して、偏りのある語形がいかに特化して周辺化するかを示すものといえる。

以上から、新聞記事における指示詞の語形選択は、分野に依存しない基底的語形と、特定分野に偏在する語形からなる二層構造として捉えられる。次節では、全体差異の半数以上を説明できる第1軸に着目し、談話的特性から考察する。

５．３　記事分野の特性を反映する指示詞相関構造の第１次元的解釈

劉（2015）は、談話参与者の談話の目的、談話に対する関わり方および利用可能な談話モデルの領域から、談話ジャンルの上位カテゴリーとして談話モードを提唱した。

表3　劉（2015）による談話モード

	a.情報伝達モード	b.語りのモード	c.対話モード
談話目的	一方的な情報伝達	聞き手を談話に引き込む	円滑な談話継続
談話への関わり方	非対称的	（見かけ上）対称的	対称的
談話モデルの領域	言語文脈領域など	言語文脈領域など	すべて

本研究は表3に基づき、一方的な伝達のaを「情報伝達性」、対人働きかけを共通項とするb・cを「働きかけ性」と定義する。両者をそれぞれ名詞率（文体の要約性）と働きかけ表現率（相手への働きかける意欲）によって指標化し、分野別に実態を把握する。名詞率の算出に際して、対象を固有名詞および一般名詞（サ変名詞含む）に限定し、形式名詞や代名詞は除外した。また、働きかけ表現率は、金田（2025）や丸山（1996）の分類に基づき、意志・勧誘・命令・促し表現・終助詞・敬語などの表現を抽出して算出した。なお、本研究における統計的なデータ処理は、各指標の算出のほか、前述したコレスポンデンス分析、および後述するTF-IDF法による特徴語の抽出も、Google Colaboratory環境（Python3）において、形態素解析エンジンMeCab（辞書：unidic-lite）を用いて実行した（図3）。

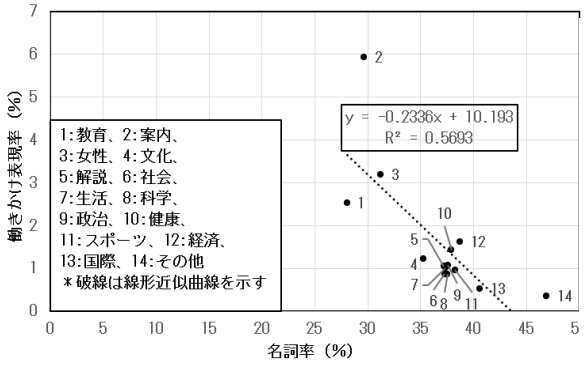


図3　名詞率と働きかけ表現率

図3の通り、名詞率と働きかけ表現率には強い負の相関（R2=0.5693）が確認された。これは、事実を名詞で要約的に伝える情報伝達性と、対人的な働きかけ性が一方が高まれば他方が相対的に低下するという関係にあることを示している。この相関に基づき、各分野は名詞率が35%付近を境に二つのグループに分かれる。即ち、教育、案内などの低名詞率・高働きかけ性グループと、その他、国際などの高名詞率・低働きかけ性グループである。このような分野ごとの談話的特性の差が、偏りのあるコレやソレなどの語形選択の背景になると考えられる。なお、前述の基底的語形であるコノ・ソノは単に出現頻度が高

い語形だけでなく、新聞の談話的特性における「中立な基底的語形」と考えられる。

以下、各グループの特徴を反映した偏りのある語形の具体的な用例を提示する。

(1) 阪神大震災が起こる直前の確率は「０．４―８％」だったと計算されている。参考になる数値は、事実上これしかない。 (PN2c_00026, 6240)

(2) 報告書によると、旧フセイン政権は、シン外相と国民会議派に対し、原油各四百万バレルの購入権をそれぞれ付与。これを受け、スイス企業の「マースフィールドＡＧ」が実際に、外相割当枠から約百九十三万六千バレルを、また、会議派枠から約百万千バレルを購入した。 (PN5c_00027, 16000)

(3) ただ、人の心はなまやさしくはありません。きっと夫との間になにかあるたびに、事故の原因になった不倫問題が頭をもたげ、あなたをつらくさせるでしょう。夫の方も「あの時のこと」を思い出して自責の念にかられて苦しむでしょう。 (PN3c_00012, 14620)

(4) 著者が生きたのが、独立運動が盛んな激動の時代とはいえ、このあっけらかんとしたまでの諦念はどうだろう。敬虔な仏教徒が多いお国柄ならではなのか。記者も先日、祖母を亡くした。思えば祖母も信心深く、物事に執着しない人だった。時は流れ、世は巡る。それが自然なことなのだと、納得できた気がした。 (PN1c_00007, 3880)

(1)「科学」と (2)「国際」は情報伝達性が高く、客観的な事態提示を主目的とする。そのため、書き手のみがアクセスできる属性情報を利用し、談話主題（金水 1999）を指し示すコ系が選択される（劉 2015）。そして、本研究では近藤（1992）が指摘する通り、レ型がヒト・モノ・トキなど多様な対象を指し示し得る柔軟性を持つ点から説明できる。一方、(3)「案内」と (4)「解説」では、文末表現（「～でしょう」「～なのか」等）に読み手への働きかけがあらわれる。これに伴い、指示詞も対人的側面を帯びるソ系やア系が選択される。たとえば、(3) の「案内」に見られるように、過去の特定時点を指す場合には、ノ型 による限定（アノ時）が行われ、読者との記憶の共有を促進する役割を果たしている。

こうした分野別の特性にかかわる語彙的背景を把握するため、ある文章に特有の語を抽出する手法のうち、よく使われる TF-IDF（Term Frequency-Inverse Document Frequency）法により、各分野の特徴語を抽出した。この手法は、単なる出現頻度（TF）に、その語の希少性を示す指標（IDF）を乗じることで、当該分野特有の語に高いスコアを与える重み付け手法である。具体的には、新聞記事全般に高頻度で現れる語（例えば、「する」「ある」などの基本動詞や助詞など）のスコアを抑制し、特定の分野（案内や科学など）に集中的にあらわれる語を浮き彫りにすること可能となる。抽出された各分野の上位 10 語を表 4 に示す。

表 4　記事内容の上位 10 位語（分野別）

順位	案内	解説	科学	教育	経済	健康	国際	社会	女性	スポーツ	生活	政治	その他	文化
1	娘	子ども	衛星	先生	パート	尿酸	大統領	母親	球根	安打	専門医	党	上方	子葉
2	夫	大人	宇宙	トイレ	石油	痛風	政府	都	アンティーク	打撃	夜景	首相	銀行	銀
3	人	番組	細胞	子ども	郵便	前立腺	首相	保険	お菓子	選手	音	幹事	テロ	桂
4	老後	モリー	カラス	学院	はし	がん	政権	女性	アキバ	打数	学会	候補	ＧＤＰ	義士
5	資金	理事	地震	運筋	痴漢	命	外相	容疑	話し方	中	城跡	派閥	首相	ハルヴァ
6	親	劇場	坑内	店	女性	不妊	主権	病院	花	打点	実況	補選	幹事	物理
7	主婦	細胞	確率	学校	銀行	受精卵	国民	自分	カフェオレ	決勝	ディレクター	市長	議長	専門医
8	自分	段階	惑星	かばん	電力	患者	映像	写真	食器	本塁打	写真	協議	事件	煤竹
9	暴力	中高生	原人	ピアス	会社	痛み	債務	ボランティア	一輪挿し	打率	姉妹	党内	政府	句
10	心	脚本	エサ	絵	車両	第三者	勢力	娘	ガラス	チーム	双六	前回	年金	討ち入り

表 4 に示す通り、科学、政治などの分野では「衛星」等の専門名詞（情報伝達性）が、対照的に案内、女性などの分野では 「娘」や「子ども」などの対人的・日常的な語（働きかけ性）が特徴語として抽出された。

こうした語彙的特性は、各分野のトピックを鮮明に反映している。以上の分析から、指示詞の語形選択には、これまでに述べた談話的特性（情報伝達性・働きかけ性）に加え、各分野が扱うトピック自体も深く関与している可能性が示唆される。

６．おわりに

本研究は『読売新聞』を対象に、指示詞選択と記事分野の相関を計量的に分析した。その結果、全分野で一貫して高い出現率を示す「基底的語形（コノ・ソノ）」と、特定分野に偏在する「偏型の語形（コレ・ソレ等）」の二層構造を解明した。分析の結果、指示詞の語形選択は記事の「情報伝達性」および「働きかけ性」と密接に連動している。科学、政治など分野では情報伝達性が、案内、女性といった分野では働きかけ性が、指示詞の語形選択に影響する重要特性であることを明らかにした。なお、分野別の特徴語から窺える記事のトピックもかかわる可能性がある。今後は、調査対象を拡大し、両指標の境界値特定を含め、多角的に分析を深化させたい。

参考文献・調査資料

庵功雄（2008）「現代日本語における限定詞の機能―「この」と「その」の使い分けの原理」『日本語文法学会第 9 回大会発表予稿集』pp. 129 - 135

金田章宏（2025）「宮古語大神島方言の助辞 kami と ta:si のふるまい : 助辞 kami の意味の拡張をめぐって」『日琉諸語の記述・保存研究』3、pp. 64-79

金水敏（1999）「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6（4）、pp. 67-90

近藤泰弘（1992）「レ系指示詞の意味論的性格」『文化言語学　その提言と建設』三省堂、pp. 365 - 376

佐久間鼎（1936）『現代日本語の表現と語法』厚生閣

迫田久美子（1998）『中間言語研究　日本語学習者による指示詞コ・ソ・アの習得』溪水社

丸山敬介（1996）「日本語初級教科書における働きかけ表現初出」『同志社女子大学日本語日本文学』8、pp. 1-33

劉驫（2011）「日本語の文脈指示詞『この』の対立型と融合型」『KLS』31、pp. 72-83

劉驫（2015）『談話空間における文脈指示』京都大学学術出版会

ロムテイ(2025)「宮沢賢治の童話(5 編)と小説『高野聖』における指示詞の比較―指示代名詞を中心に―」『論究日本文學』122、pp. 55-67

ロムテイ（2026）「明治・大正期の国定国語教科書における指示代名詞の使用傾向―形態的側面に注目して―」『論究日本文學』124（刊行中）

吕梦婷（2026）「报纸报道文本中的日语指示词―以明治、大正时期的指示代词为中心」『南大日本学研究』第 7 辑（刊行中）

「ヨミダス」https://yomidas.yomiuri.co.jp/yomiuri/search （2026 年 2 月 9 日確認）

国立国語研究所（2025）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（バージョン 2021.03，中納言バージョン 2.7.3，分類語彙表情報 2025.03）https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/（2026 年 2 月 5 日確認）

比喩の形式と出現分布の関係
―肯定・否定の形式を中心に―

菊地（きくち） 礼（かい）
長野工業高等専門学校

1．はじめに
1．1　目的と対象

本発表は比喩（隠喩・直喩）文の極性（肯定・否定）と出現分布の関係に着目する。比喩文は書き言葉において肯定形式に偏って出現する一方で、話し言葉では否定形式が肯定形式よりも多く出現すると考えられてきた。本発表では、実態調査を行い、そのような偏りが生まれる原因をそれぞれの比喩の形式が持つ機能・働きから説明する。

なお、直喩は助動詞「ようだ」を用いた形式に限定し、極性の判定が付きやすい終止形によって形成される「A は B のようだ」を対象とする。隠喩は「A は B だ」「A は B である」に限定する。否定形式は「でない」「じゃない」「ようでない」及びそれらの異形態のほかに助動詞「まい」を対象とする。これらの形式には確認などの実質的には否定を表さないものも含まれる。本発表では否定形式を含むものとして、否定を表していない表現も広く含める。各形式について代表となる比喩文例を（1）～（4）に挙げる。

（1）あの大きな四角い家だろうか。すべてが切り出した石でつくられ、まるで宮殿のようだ。（BCCWJ、PB19_00101－18850[1]）
（2）「ウーッ、なんだこいつは。こんなの噛んだら顎がはずれちまう。この蟹め、まるでゴムだぜ」（BCCWJ、LBh9_00167－49760）
（3）最大最大最高十五杯食べた人いましたとかさ　ギャル曽根じゃないんだから（CEJC、C002_007－42630）
（4）第一、どうやっておまわりさんをけしかけるんです？　犬じゃあるまいし。（BCCWJ、LBs9_00094－35730）

1．2　問題と背景

これまで比喩文の極性に注目した研究は少ない。それは比喩が肯定形式で出現することを前提としてきたためである。しかし、野村（1996）・小出（1997）が落語を資料として否定形式を含む比喩の存在を指摘した。近年では、杉本（2005）が比喩理論から否定形式の比喩を考察し、岡本（2020）や岡田（2026）が「日本語日常会話コーパス」から否定形式を含む比喩を収集・分析している。これらの研究では否定形式の比喩が話し言葉に出現しやすいとしているが、書き言葉・肯定形式の比喩と比較した調査はなされていない。そこで本発表では書き言葉コーパス（BCCWJ）と話し言葉コーパス（CSJ、CEJC）から肯定形式と否定形式を含んだ比喩を収集した。これらの調査結果について、出現の偏りを分析する。また、各比喩例の機能を質的に分析する。

[1] 本発表では出典を（コーパス、ID－開始位置）で表記する。

2．調査

肯定形式の比喩と否定形式の比喩の分布を調べるため、コーパスによる調査を行った。使用したコーパスは次の通りである。書き言葉の調査として「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（BCCWJ　中納言 2.7.3 データバージョン 形態論情報 2021.03, 分類語彙表情報 2025.03）を用いた。話し言葉の調査としては独話を中心とする「日本語話し言葉コーパス」（CSJ　中納言 2.7.2 データバージョン 2018.01）と日常的な会話を中心とする「日本語日常会話コーパス」（小磯ほか 2023　CEJC　中納言 2.7.2 データバージョン 2023.03）を用いた。

以上のコーパスで表 1 の 1 列目の形式を検索[2]し、ヒットした用例を目視で選別して比喩文を抽出した。コーパスごとに抽出された比喩文の数は表 1 の通りである。

表 1：形式ごとの比喩文の出現頻度

形式／コーパス	BCCWJ	CSJ	CEJC
ようだ	1,535	1（14）	1
だ	9（1,861）	0（0）	1（22）
である	7（997）		3
で＋ある		1	
だ＋ある		3	
でない	2（14）		0
で＋ない		0	
だ＋ない		4	
ではない	4（156）		42
で＋は＋ない		0	
だ＋は＋ない		2	
まい	60	1	0

塗りつぶしている部分は元の用例数が膨大であるためランダムサンプリング（2500 例）してから比喩文を抽出したものである。これらは推計値[3]を丸括弧に付した。

3．分析

表 1 の調査結果をもとに本節では比喩文の極性とその分布の偏りを分析する。まず

---

[2] 検索条件は以下の通りで、丸括弧内は語彙素以外の検索条件とヒットした用例数である。
BCCWJ：語彙素「様」（362,563 例）「だ」（活用形大分類終止形を指定、516,965 例）「である」（長単位、355,943 例）「でない」（長単位、17,242 例）「ではない」（長単位、97,439 例）「まい」（5,339 例）
CSJ：「様」（語彙素読み「ヨウ」、34,987 例）「だ」（活用形大分類終止形を指定、23,505 例）「で＋有る」（255 例）「だ＋有る」（13,413 例）「で＋無い」（146 例）「だ＋無い」（7,925 例）「で＋は＋無い」（275 例）「だ＋は＋無い」（6,888 例）「まい」（40 例）
CEJC：「様」（語彙素読み「ヨウ」、2,205 例）「だ」（活用形大分類終止形を指定、55,171 例）「である」（長単位、219 例）「でない」（長単位、74 例）「ではない」（長単位、7106 例）「まい」（8 例）

[3] 抽出した比喩数×（元になった用例数÷サンプリング数［2,500］）によって算出した。

表 1 の「ようだ」「だ」「である」「で＋ある」「だ＋ある」を肯定群とし、「でない」「で＋ない」「だ＋ない」「ではない」「で＋は＋ない」「だ＋は＋ない」「まい」を否定群として集計し、カイ二乗検定を行った（表 2）。なお、丸括弧内は調整残差である。

表 2：コーパスごとの比喩文の極性

コーパス	肯定群	否定群	合計	否定率
BCCWJ （書き言葉）	4,393（17.8**）	230（-17.8**）	4,623	4.9%
CSJ（独話）	31（-3.3**）	7（3.3**）	38	18.4%
CEJC（対話）	26（-19.7**）	42（19.7**）	68	61.8%
合計	4,450	279	4,729	5.9%

** $p<.01$　　χ^2＝400.1、自由度＝2、p＝1.30749E-87 < .01

結果として、これらのコーパス群における極性ごとの比喩の頻度は、1%水準で有意差があった。「比喩文の極性とコーパス間に関連はない」という帰無仮説を棄却し、比喩文の極性とコーパス間での分布には関係が存在すると言える。なお、BCCWJ のサンプルサイズが極端に大きく、かつ CEJC の期待度が 5 を下回るため、効果量（Cramer's V）を算出した。その結果は 0.291 であり、コーパスの種別と比喩の極性の間には中程度の関連が認められる。

調整残差はそれぞれ 1%水準で有意である（z > 2.58）。BCCWJ は肯定群が正の値を取り、CSJ、CEJC はいずれも否定群が正の値を取った。特に、BCCWJ の肯定群（17.8）と CEJC の否定群（19.7）は突出している。また、「否定率」[4]の列に着目すると、BCCWJ は 4.9%、CSJ は 18.4%、CEJC は 61.7%となっている。書き言葉と話し言葉で否定の比喩文の出現率に大きな差が存在することが分かる。

以上の分析をまとめる。比喩は書き言葉において、肯定形式で使用されるのが主である。一方で、話し言葉においては否定形式の比喩の方が多く用いられ、書き言葉とは対照的な実態を示す。

ここで話し言葉内の運用の違いに着目してみる。そこで、CSJ と CEJC を取り出して、カイ二乗検定を行った（表 3）。丸括弧内は調整残差である。

表 3：CSJ と CEJC の比較

コーパス	肯定群	否定群
CSJ	31（4.3**）	7（-4.3**）
CEJC	26（-4.3**）	42（4.3**）

** $p<.01$　　χ^2＝18.4、自由度＝1、p＝1.76838E-05 < .01

結果として、CSJ と CEJC の肯定・否定形式の比喩の出現頻度には 1%水準で有意差があった。「比喩文の極性と CSJ と CEJC の間に関連はない」という帰無仮説を棄却し、両者には差があると言える。調整残差についてはそれぞれ 1%水準で有意である（z > 2.58）。CSJ は肯定群が 4.3 となり肯定形式の比喩が多く、CEJC は否定群が 4.3 となり否定形式の比喩が多いことが分かる。話し言葉コーパス内のこのような出現分布の違

[4] （否定群÷列合計）×100 により算出。

いには、様々な要因が存在すると思われるが、一つの要因として CSJ には独話が多く収録され、CEJC には日常会話という対話が多く収録されていることが挙げられる。つまり、否定形式の比喩は対話と親和性のある働き・機能を有しているのだと思われる。そこでレジスターの違いと比喩文の形式ごとの働きを確認し、表 2・表 3 のような出現分布になる要因を考察する。

４．考察

４．１　比喩の機能：書き言葉 - 肯定形式・否定形式

本節では、比喩文の形式ごとの出現分布の偏りを比喩の持つ働き・機能から考察する。まず書き言葉における肯定形式の比喩は主に描写に用いられる。

（5）真っ白な蘭の肌は雪のようだった。（BCCWJ、PB29_00050－14350）
（6）しかし、三十メートルも進まぬうちに、敵に発見されたらしく、猛烈に機関銃が撃ってきた。腹に響く銃声は重機である。（BCCWJ、LBj9_00122－75050）

（5）は「蘭の肌」の白さを「雪のよう」と表現する人物の身体描写である。（6）は機関銃の銃声が重く腹に響く様を「重機である」と表現する身体感覚の描写である。

次に、書き言葉における否定形式の比喩は描写よりも（7）の読者への確認や（8）の会話文への使用が見られる。

（7）人生は、ジグゾー・パズルのようではないでしょうか。色々なピースを埋め合わせながら、どうしても見つからない最後の一片を捜す旅のようでもあります。（BCCWJ、PB31_00153－25790）
（8）「さき子姉ちゃ、赤ん坊産んだんだろう」すると、文太は顔をくしゃくしゃと歪めてから、「まだ生まれん。猫の子じゃあるまいし、そう簡単に生まれるかい、ばかもん」（BCCWJ、LBan_00012－36540）

（7）は人生をジグソーパズルに喩え、それを「ではないでしょうか」と読者に問いかける形で確認を取る。（8）は「赤ん坊産んだんだろう」という発話に対し、「そう簡単に生まれるかい」と答え、そして「猫の子じゃあるまいし」と比喩的なイメージを提示して相手の認識を修正・訂正する[5]。

４．２　比喩の機能：話し言葉 - 肯定形式・否定形式

話し言葉における肯定形式の比喩は対象への評価として用いられることが多い。

（9）（会話概要：店舗で知人にビジネスの相談）
岸尾　利休は戦争の武器商人であって。例えば。秀吉に付いていながらにして秀吉とおータイえー対戦する相手にも裏で武器を流すってゆうね

[5] （8）のような用法は岡田（2026）において認識上の問題の是正と指摘される。岡田（2026）はこのような表現は話し言葉に多いことを前提とするが、管見の限りでは話し言葉のコーパスでは該当する用例は多くなく、むしろ書き言葉コーパスの会話文に見られた。また関連する用法として半沢（2016）は表現の選択の是非の修正を挙げる。これは「肌は雪のようだ」という発話に対して「雪じゃない。大理石だ」と伝える場合である。

（CEJC、K010_005b－5140）

千利休の行動を「戦争の武器商人」と評し、その内実を後続の発話で説明する。

話し言葉における否定形式の比喩は、その場で思いついたイメージを提示したり、聞き手への確認などのように用いられる。

（11）（会話概要：配偶者・息子と車で移動中）
智也　ラーメン食べたい放題とか
日野　サ最大最大最高十五杯食べた人いましたとかさ。ギャル曽根じゃないんだから（CEJC、C002_007－42630）
（12）（会話概要：飲食店で配偶者・友人夫婦と食後のお茶をしながら）
広瀬　圧力が大きくなかったら英雄は生まれないわけで
〔中略〕（参加者による相槌）
広瀬　そうゆう別の波がいろんな種類のがものがあってそれが相まった時に千年に一人なのか
〔中略〕（参加者による相槌）
広瀬　橋本環奈じゃないけど（CEJC、T001_011－179480）
（13）（会話概要：カラオケボックスで後輩たちとトランプをしながら）
ほっさん　録音はしない感じですね
〔中略〕
菊池　　それを録音するって鬼じゃないっすか
ほっさん　聞かれちゃいますしね（CEJC、T006_006a－31250）

（11）は過剰な量を食した人の話について、大食いタレントの「ギャル曽根」の名を出す。大食いという話題から思いついたであろう、大食いの代表的なタレントを引き合いに出し、過剰な飲食量に対する突っ込みを行う。（12）は「千年に一度英雄が生まれる」という発言を受けて、「橋本環奈」の名を出す。千年に一度生まれる傑出した人材の具体的な事例として「千年に一度の美少女」をキャッチコピーとする「橋本環奈」を引き合いに出したと思われる。一方で、話の本筋には関係ないので「じゃないけど」を付して発話が冗談であることを示す（本例の分析は岡本 2020 も参照）。（13）は録音することが望まれない状況で、もし録音することになればそれは「鬼」（ひどい等の評価を示す喩え）であるとし、その認識を聞き手と話し手で共有し得ることを「じゃないっすか」で表す。

以上に見た比喩の機能をまとめる。書き言葉における肯定形式の比喩は描写に用いられ、否定形式の比喩は読者への確認や会話文での使用が見られる。会話文においては他者の行動や認識の訂正・是正を求めるような文に出現する。それに対して話し言葉では、肯定形式の比喩は対象への評価として用いられ、否定形式の比喩は思いついたイメージの提示や聞き手への確認といった機能を持つ。

否定形式の比喩が持つ、確認や（会話文に見られるような）他者の行動・認識の修正は聞き手を意識した機能だと言える。このような聞き手への意識は、否定形式の比喩文の文末に「けど」や「から」といった接続助詞を伴い、「言いさし文」（白川 2009）などで用いられることが多いことからも裏付けられる（接続助詞の付加割合は肯定形式：11%、否定形式：65%）。逆説／理由の文法形式を付加することで、「A は B（のよう）でない」のような断言を回避しているのである。独話を中心とする CSJ

よりも対話を中心とする CEJC に否定形式の比喩が出現しやすいことも、否定形式の比喩の持つ対人的な性質を反映したものであろう。

また、思いついたイメージの提示は会話のリアルタイム性と関連する機能だと思われる。実際の対話では言い間違いやその瞬間での思い付きの言語化など、リアルタイムで談話を構築しているがゆえのミスや冗長さが存在する。(12) や (13) のような否定形式の比喩は、談話の流れから思いついたイメージを提示したと見られ、思いついたものを肯定形式で断言する（i.e.ギャル曽根だ、橋本環奈である）と談話の流れ上不自然であるため、否定形式により「現在の話題とは関係ないが思いついたよ」という態度で提示する。否定形式の比喩は、このような談話のリアルタイム性や冗長さを反映したものと言えよう。書き手が文言を選び、練ることができる会話文では、実際の発話のようなミスや冗長さが現れることは少ないと思われる（登場人物の特徴としてあえて冗長な会話にすること自体はあり得る）。そうであるならば、否定形式の比喩を使用する動機は書き言葉においては弱くなる。書き言葉では情景や人物を肯定形式の比喩により、鮮明に描写することの方が求められる。ゆえに、比喩は書き言葉・肯定形式に偏って出現し、話し言葉では否定形式の比喩が出やすいという傾向になるのである。

５．おわりに

本発表は比喩文の極性と出現分布の関係を分析・考察した。肯定形式の比喩と否定形式の比喩を、書き言葉（BCCWJ）と話し言葉（CSJ・CEJC）のコーパスから抽出し、出現分布の偏りを分析した。結果として、比喩はそもそも書き言葉に多く出現し、肯定形式に偏って使用される。一方で、話し言葉では否定形式の比喩が多く出現し、特に CEJC に収録されるような対話に出現した。このような分布の偏りについて、比喩文の持つ機能から説明を試みた。書き言葉において肯定形式の比喩は描写に用いられ、否定形式は読者への確認や会話文で用いられる。話し言葉において肯定形式の比喩は対象への評価として用いられ、否定形式の比喩は思いついたイメージの提示や聞き手への確認など、対話のリアルタイム性や聞き手への意識を反映した機能を持つ。比喩が主に出現する書き言葉（特に非会話文）では否定形式の比喩を活かす場面が少なく、使用する動機が弱いため、比喩は書き言葉・肯定形式に偏るのである。

【参考文献】

岡田純音（2026）「否定のコピュラを用いたメタファー表現の認知言語学的考察」京都大学大学院修士論文.
岡本雅史（2020）「直喩標識としての『じゃないけど』：談話における直喩とアナロジーの再考に向けて」『日本認知言語学会論文集』20 号、pp.126－137：日本認知言語学会.
小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香（2023）「『日本語日常会話コーパス』設計と構築」『国立国語研究所論集』24，pp.153-168：国立国語研究所.
小出美河子（1997）「比喩的構造にもとづく否定形式の表現」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』9 号、pp.21－46：早稲田大学.
白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版.
野村雅昭（1996）『落語のレトリック』平凡社.
杉本巧（2005）「隠喩の否定のレトリック」『文体論研究』51 号、pp.1－12：文体論学会.
半沢幹一（2016）『言語表現喩像論』おうふう

評価成分における程度修飾について

常舒婷（じょうじょてい）（早稲田大学大学院生）

1. はじめに

「評価副詞（成分）」とは、「文頭または主題の直後に位置して『文の叙述内容に対する話し手の評価を表わす』語句」（工藤 2000(p.222)）である。評価成分は叙述内容の外部に位置するが、形式面において多様性が見られる。特に「惜しくも」「残念ながら」「驚いたことに」といった形容詞類や動詞類から派生した複合的な形式をここでは「評価成分」と呼ぶ。本発表では、典型的な評価成分である「～くも・にも」「～ことに」「～ながら」のほか、「～ですが」のような注釈的な評価成分[1]も含めて考察する。

これらの成分は形容詞類や動詞類を包含するため、程度修飾との共起関係が問題になる（例：「とても驚いたことに」「大変残念ながら」など）。しかし、すべての形式が程度副詞と自由に共起できるわけではない。例えば、形容動詞「残念」を例とすると、次のような制約が確認される。（以下作例）

（1）＊｛大変・少し・やや・かなり・もっと・全く｝残念にも、連絡先を聞き忘れた。[2]

（2）｛大変・*少し・？やや・*かなり・*もっと・*全く｝残念ながら、連絡先を聞き忘れた。

（3）｛大変・少し・やや・？かなり・もっと・全く｝残念なこと｛に・ですが｝、連絡先を聞き忘れた。

のように、（1）（3）において、「～くも・にも」形式は程度修飾を受けにくいのに対し、「～ことに」「～ですが」形式は程度副詞と比較的幅広く共起する。（2）では、「～ながら」形式は「大変」などの純粋程度副詞としか共起しない傾向を示し、しかも「僭越ながら」「*幸いながら」のように共起できる属性も限られている。

すなわち、「程度副詞＋評価成分」構文における程度性は、評価成分の種類と程度副詞の種類や意味に深く関連していることがわかる。しかし、このような共起制限のメカニズムについては、従来の研究では十分に検討されていない。本発表では、評価成分と程度副詞との共起関係を分析し、その背後にある要因を明らかにしたい。

2. 先行研究

2.1 評価成分について

工藤（1997）は評価成分を「文の叙述内容に対する話し手の評価を表わす、先行する独立的成分」（p.62）と定義し、その〈代表的な型〉と〈代表的な語例〉を分類・提示している。その中で、形容詞類や動詞類に関わる形式として、b)「－も」形式（「奇しくも」「残念にも」など）、c)「－ことに（は)」形式（「嬉しいことに」「驚いたことに」など）、d)「－（もの）で」形式（「変なもので」「妙なもので」など）、e)「－ながら」形式（「残念ながら」「当然のことながら」など）、f)その他、前置き節・挿入句など（「恥ずかしい話ですが」「 まことに残念ですが」など）がある（pp.66-68）。

本発表では、典型的な評価成分である「～くも・にも」「～ことに」「～ながら」のほか、「～ですが」のような注釈的な評価成分も含めて考察する。一方、「～もので」構文は「～もの（だ）」を含む点で性質が異なるため、本発表の対象から除外し、詳しい考察は別稿に譲る。

---

[1] 本発表では、「評価成分」であるか「注釈的な評価成分」であるかの判定基準を、文末モダリティとの共起関係、すなわち命令文・疑問文・意志文と共起し得るか否かとする。

[2] 本稿における実例は、特に断りのない限り BCCWJ によるものである。作例の自然さに関する判断基準は以下の通りとする。やや不自然な例文には「?」を、不自然と判断される例文には「*」を付けた。

(4) 人間というのは不思議なもので「もっと上に行きたい」という欲が出てくると、自然と他人に対する礼儀も正しくなってくるんです。(『すべての答えは自分にあった』)

2.2 程度副詞の位置付け

森山(1985)では、程度副詞は、「－が［程度副詞］ある」という表現が可能な、量的概念をも内包する程度副詞(「量的程度副詞」)と、量的概念を内包せず、純粋に程度だけを表す副詞(「純粋程度副詞」)とに区別されている。

(5) 彼は {*大変・随分} 歩いた。　　cf.彼は大変よく歩いた。

(6) 彼は {大変・随分} 困った。　　(森山 1985(p.60)より引用)

＜語例＞純粋程度副詞：非常に、大変、はなはだ、著しく、極めて、ごく、すこぶる、あまりに、/ずっと、より、最も、一番

量程度副詞：かなり、随分、結構、やたら、なかなか、比較的、相当、大分、わりあい、少し、ちょっと、多少、少々、ある程度いささか/もっと

また、「本当に」「誠に」などのような「程度副詞の周辺的・過渡的なもの」も指摘されている。工藤(1983)は主に「本当に」「実に」について、「多くの場合に文頭に位置して、接続のことがら内容全体に対する真偽や予想との異同といった話し手の評価・コメントを表す用法を持つもの」であり、「形容詞と組合わさり、特にその直前に位置する場合、程度性を持たされることが多いようである。」(p.184)としている。さらに川端(2026)では、「本当に」などの副詞を「広義程度副詞」と称し、「表示した程度が相対的な段階性を有しない点で従来から程度副詞とされてきたものとは異なるものであった。話し手の認定した属性の程度を実感的に把握し、その判断ごと増幅して伝達するという点で、その程度修飾機能は『程度強調型』であり、従来からの程度副詞が『程度指定型』であるのとは区別されるべきものであった。」(p.148)と述べ、「本当に、ほんとに、ほんと、まことに、真実、真に、事実、実際、確かに、なるほど、実に、全く、まさに、まさしく、いかにも、何とも」などを前者(「程度強調型」)として挙げている。

本発表では、上記の分類を踏まえ、「純粋程度副詞」「量的程度副詞」のほかに、「本当に」「誠に」といった話し手の評価や程度の強調を表す「程度強調型副詞」も考察の対象とする。

ただし、このような「程度副詞＋評価成分」構文における共起制限のメカニズムについては、従来の研究では十分に検討されていない。

3. BCCWJ における評価成分の使用実態

まず、BCCWJ における評価成分の諸形式の使用実態を以下の表 1 にまとめる。

表 1　BCCWJ における評価成分の使用実態

評価成分	前接する広義形容詞類・動詞類(用例数上位 20 例)[3]
～くも・にも	早い(988)、意外(313)、幸い(166)、皮肉(119)、幸運(113)、惜しい(106)、卑しい(102)、不幸(88)、辛い(57)、無残(47)、大胆(46)、脆い(42)、不運(34)、不思議(32)、愚か(30)、恐れ多い(29)、健気(22)、丁寧(21)、図々しい(20)、珍しい(20)
～ことに	驚いた(293)、不思議な(262)、残念な(252)、幸いな(166)、皮肉な(163)、ありがたい(114)、悪い(101)、意外な(97)、困った(89)、面白い(83)、奇妙な(82)、興味深い

[3] 後続成分も無関係ではないが、この点については常(2026)を参照。

	（68）、驚くべき（66）、悲しい（54）、驚く（48）、不幸な（38）、嬉しい（37）、おかしな（35）、幸運な（27）、信じられない（25）
～ながら	残念（2264）、当然（444）、恥ずかし（76）、失礼（65）、遺憾（48）、不本意（45）、恐れ（34）、嫌々（28）、僭越（10）、半信半疑（7）、恐縮（7）、未熟（4）、稀（3）、面倒（2）、不憫（2）、苦しい（2）、恐れ多い（2）、気の毒（1）
～ですが	特に制約がなく、用例数も多いため省略。

表１のように、評価成分の諸形式は情意を表す形容詞類[4]と共起する場合が多いが、形式ごとに使用上の制限がある。

まず、「～くも・にも」形式は前接成分に語彙的制約があり、語彙的固定性を持つものが観察される。

（7）普段は強気なアキラが｛早くも・*遅くも｝涙目になっていた。（作例）

（8）いかにおれたちが聞いていないとは言いながら、よくもそうまで平気で嘘がつけたものだ。

（『日本ジュニア文学名作全集』）

また、「～ことに」形式は基本的に生産性が高い。例えば、

（9）｛驚く・驚いた・驚くべき｝ことに、彼の美的な表現能力はまったく障害されなかった。（作例）

この点について、工藤（1997）も「形容詞のみならず、評価・感情的な動詞から作られ、（中略）現在もっとも生産的と言ってよい型である」（p.63）と述べている。ただし、生産性が高いとはいえ、語彙的制約が全くないわけではない。例えば、「いいことに、～」と言えないように、共起できない形容詞もある。

（10）｛*いいことに・悪いことに｝、雨が降ってきました。（作例）

一方、「～ながら」形式はマイナスの属性を表す形容詞類が前接する傾向が見られる。

（11）僭越ながらコメント欄お休みさせていただきます。（『Yahoo!ブログ』）

（12）遺憾ながら、事件直後に寝室を調べておりません。（『殺人買います』）

（12’）*幸いながら、事件直後に寝室を調べました。（作例）

これに対し、注釈的な評価成分である「～ですが」形式は前接成分に対する制限がなく、後続する内容についても自由度が高い。

（13）経験がお有りの方たいへん失礼ですが詳細を教えてください。（『Yahoo!知恵袋』）

（14）「お気の毒ですが、お断わり申します。」（『禁演落語』）

このように、「～ですが」形式は前接成分および後続述語文に対する制約がほとんどないのに対し、「～くも・にも」「～ことに」「～ながら」形式は情意を表す形式に前接する傾向があり、このうち「～ながら」形式はマイナスの属性を表す形容詞類としか共起できない。

4. 評価成分における程度修飾

評価成分は形容詞類や動詞類が前接するため、程度副詞との共起が注目される。ただし、程度修飾には、形容詞類の語彙的性質からそもそも共起し得ないものもある（例：「*たくさん残念」、「*まったく嬉しい」など）。本発表では、このような語彙的な共起・非共起を扱うのではなく、評価成分として機能する場合に焦点を当て、程度修飾における特徴を探求する。

本発表では、程度副詞と評価成分の結合において、生産性を持つ形式や語彙的制限を持つ形式のほか

[4] 「情意を表す形容詞」の判断基準は、「連用形＋感じる・考える」と共起できるか否かのテストに基づく。

に、「部分的生産性」を持つ中間的な形式が存在すると考える。

具体的に見ていくと、「～ですが」形式は評価成分の周辺である注釈的なものとして、程度副詞との共起に制約はほとんどない。

（15）失礼な質問で大変恐縮ですが、その点についてお教え願えますか？（『Yahoo!知恵袋』）

（16）ちょっと気になるのですが、二年目のジンクスという言葉はこの場合使わないのでは？（『Yahoo!知恵袋』）

次に、「～ことに」形式は程度修飾において高い生産性が見られ、少数の量的程度副詞を除いて幅広く共起できる。

（17）{極めて・少し} 残念なことに、これがあまり質の高いものとはいえない。（作例）

（18）もっと驚いたことには、この患者さんに行われた手術は余命が何十年も期待される若い人と同じ手術でした。（『このガン切るべきか、切らざるべきか』）

（17'）？なかなか残念なことに、これがあまり質の高いものとはいえない。（作例）

さらに、マイナスの属性としか共起しない「～ながら」形式は「部分的生産性」を持ち、「大変」「はなはだ」「極めて」といった高程度を表す純粋程度副詞や程度強調型副詞とのみ共起する。[5]

（19）はなはだ遺憾ながら、陛下はこのまことに心残りな縁談をやむなく諦めざるをえないとのご心境にあられます…。（『皇女セルマの遺言』）

（20）{誠に・本当に} 恐縮ながら、宣伝を兼ねて紹介させていただきます。（作例）

（21）*随分残念ながら一つもありませんでした。（作例）

一方、「語彙的固定性」をもつ「～くも・にも」形式は基本的に程度修飾を受けにくい。

（22）*{とても・ちょっと・やや・もっと} 惜しくもわずかの差で準優勝となった。（作例）

（23）{*大変・？本当に} 意外にも曲にマッチしていて素晴らしい。（作例）（5.2 で詳述）

このように、評価成分と各種の程度副詞との共起関係は表 2 のようにまとめられる。

表 2 評価成分における程度修飾の特徴

	～ですが	～ことに	～ながら	～くも・にも
純粋程度副詞	○	○	△	×
量的程度副詞	○	△	×	×
程度強調型副詞（本当に、誠に等）	○	○	○	△
評価成分の特徴	制限なし	文法的生産性	部分的生産性	語彙的固定性

表 2 からわかるように、評価成分の程度修飾には、文法的生産的なものから語彙的固定的なものへと、いくつかの段階があると考えられる。次節では、このような差異が生じる要因について分析する。

5. 評価成分における程度修飾可否の要因

5.1 文法的・語彙的要因

評価成分と程度副詞との共起関係は、構文的独立性と深く関わっていると考える。すなわち、構文における独立性が高いほど、程度修飾における共起制限も緩和されると考えられる。

まず、「～くも・にも」形式は、述語を修飾する形容詞・形容動詞を含む修飾構造に形式的に近い。

[5] BCCWJ の検索結果によれば、「大変」「はなはだ」「極めて」といった純粋程度副詞や、「本当に」「誠に」のような程度強調型副詞の用例が観察された。また、ネット検索及びアンケート調査の結果からは、「やや」「いささか」などの用例も一部あるが、これについては 5.2 で詳述する。

（24）合流２戦目の俊輔が、早くもチームの中心になった。(『Yahoo!ブログ』)

（24’）合流２戦目の俊輔が、早くチームの中心になった。(作例)

のように、(24）における「早くも」は評価成分として後続する文全体にかかるのに対し、(24’)の「早く」は修飾語として動詞「なった」に直接かかっている。すなわち、「～くも・にも」形式は、構文的には修飾用法にも近いところがある評価成分であると言える。しかし、「非常に早くチームの中心になった」は自然な程度修飾用法である一方、「*非常に早くもチームの中心になった」は言えないように、「早くも」のような評価成分には語彙的固定性が高く、程度修飾に制約がある。

次に、「～ながら」形式について述べる。評価成分としての「～ながら」は部分的生産性を有するものの、共起する語彙は限定され、程度修飾も限定される傾向がある。

（25）至極当然のことながら、コースが変更された。(作例)

（26）誠に｛残念・遺憾｝ながら、ご要望には添いかねます。(作例)

のように、「～ながら」形式は逆接的な性格を帯びるとともに、「残念」「遺憾」のようなマイナスの属性と共起する。このようにマイナスの属性において高程度修飾が用いられやすいのは、語用論的要因とも関係していると考えられる（後述)。

また、この逆接的性格は、注釈的な「～ですが」形式にも連続的につながっている。

（25’）至極当然のことですが、コースが変更された。(作例)

（26’）誠に｛残念・遺憾｝ですが、ご要望には添いかねます。(作例)

さらに、生産性の高い「～ことに」構文は独立した主語をとることが可能であり、程度修飾においても生産性が高い。また、「～ですが」形式は文法的制約がほとんどなく、程度修飾も自由にできる。

（27）われわれが大変驚いたことに、ランダーにはなんの悪影響もなかった。(作例)

（28）私からは誠に言いにくいのですが、早めに離婚された方がよろしいかと思います。(作例)

従って、修飾的なものから注釈的なものとなるにつれて、いわば構文的な独立度が高くなり、程度修飾における共起制約も緩和されると言える。

5.2 語用論的要因

しかし、評価成分の程度修飾はすべてが文法的要因のみによって決まるわけではなく、実際の使用の中でゆれが生じ、部分的な例外も観察される。例えば、本来は程度修飾を受けにくい「～くも・にも」形式が程度副詞と共起する場合（例（23)「本当に意外にも」）や、高程度副詞との共起にほぼ限定される「～ながら」形式などがある。このような現象の背後には、語用論的要因が大きく関与していると考える。

（29）｛大変・誠に・*やや・*ちょっと｝残念ながら、不採用と決定しました。(作例)

のように、「残念ながら」における「残念」という評価属性が重要な役割を果たしている。即ち、「残念ながら」は語用論的に否定しがたい評価的含意を持ち、その評価の程度を低く見積もることは許容されにくい。例えば、「大変・誠に残念ながら」は「残念」という評価を強める方向に働くのに対し、「*やや・ちょっと残念ながら」は、「残念ではない」という含意を部分的に喚起しうるため、語用論的に不適切となる。

この点を踏まえると、評価成分の程度修飾においては、評価属性の「一方向性」を保持するために、それを肯定的に強化する副詞が選択されやすいといえる。すなわち、高程度を表す純粋程度副詞や程度強調型副詞が優先的に用いられる傾向がある。したがって、「～ながら」構文の背後には、「高程度評価の原則」とも言える語用論的制約が働いており、高程度副詞による強調が求められやすいと考えられる。

また、評価成分とは別に、「恐縮」「失礼」「申し訳ない」のような関係修復に関わる表現と共起する場合にも、この「高程度評価の原則」が観察される。すなわち、「大変」「極めて」「本当に」「誠に」といった高程度副詞が優先的に選択される傾向がある。(以下作例)

(30) {大変・本当に・?ちょっと} 失礼ですが、どなたさまでしょうか？

(31) ご多忙中のところ {大変・誠に・*やや} 恐縮です。

(32) {大変・*少し} 申し訳ございません。

5.3 文体論的要因

文体的に見れば、「〜くも・にも」および「〜ながら」形式はやや改まった文体で使われるのに対し、「〜ことに」「〜ですが」形式はくだけた文体でも使用できる。BCCWJ で検索したところ、「残念ながら」に関わる 2264 例のうち、『国会会議録』という話し言葉でありながらやや硬い文体における用例が 217 例ある。その中で、共起する程度副詞として「大変」「誠に」といった文体的汎用性が高いものが挙げられるが、「とても」「すごく」のようなくだけた文体のみで使用する副詞に置き換えられない。

(33) いわゆる先進国と言われておる日本では、大変残念ながら欧米に比して著しくおくれているというのが実情でございます。(『国会会議録』) cf.？とても残念ながら

(34) まことに残念ながら、現段階ではそれはだんだん悪い方向に行くわけですね。(『国会会議録』) cf.？すごく残念ながら

6. まとめ

本発表では、評価成分と程度副詞との共起関係を分析し、その背後にあるメカニズムを明らかにしようとした。すなわち、まず、評価成分の周辺として、注釈的な成分である「〜ですが」形式があるが、程度副詞との共起に制約はない。一方、文法的生産性が高いものとして、「〜ことに」形式が位置付けられ、少数の程度副詞を除いて共起できる。これに対し、「〜ながら」形式は高程度を表す純粋程度副詞等とのみ共起し、さらに「〜くも・にも」形式は基本的に程度修飾を受けない。「〜ながら」「〜くも・にも」形式は評価を質的に表す語彙的な副詞成分になっており、基本的に程度の分化は表せないということだと言える。ただし、「本当に・誠に〜」のように強調的な程度修飾は可能である。このように、評価成分の程度修飾において、文法的生産的なものから語彙的固定的なものへと、いくつかの段階があると言える。これは、文法的・語彙的要因だけでなく、語用論的要因及び諸形式の文体的傾向性といった要因が関与しているためであると考えられる。

今後の課題として、評価成分における「高程度修飾の一方向性」という現象がどの程度一般的に見られるのか、また、程度修飾と後続述語（文）との相互関係について、より精緻な検討が必要である。

参考文献

川端元子(2026)『現代日本語の程度表現の研究』ひつじ書房

工藤浩（1983)「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院

工藤浩（1997)「評価成分をめぐって」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』〔再録:工藤浩（2016)『副詞と文』pp.59-80,ひつじ書房〕

工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」仁田義雄・森山卓郎・工藤浩著『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店

常舒婷（2026)「日本語における『〜くも・にも』型評価副詞的表現—『〜ことに』型との比較も含めて—」『早稲田大学大学院 文学研究科紀要 第 71 輯』pp.221-233.

南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店

森山卓郎(1985)「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』20,pp.60-65.

【用例出典】 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ 中納言』2.7.2 データバージョン 2021.03

［形容詞語幹＋形容詞］型複合形容詞における連濁
ー新奇表現を中心にー

趙　萱（ちょう　けん）（大阪大学大学院）

1. はじめに

本研究では、イ形容詞を語幹とし、もう一つのイ形容詞と複合して造語された語を［形容詞語幹＋形容詞］型複合形容詞（以下、AA 型複合形容詞）と呼ぶ。現代日本語において、近年の言語使用では、以下のような AA 型複合形容詞の表現がよく見られる。本発表では、辞書に記載されておらず、まだ定着していないこのような用法を「新奇表現」と呼ぶことにする。

（1）あのときの長男君の顔は、面白可愛かったです。（fc2.com）

（2）12 話では、常に感情を偽ってきた二人の気持ちが通じ合えて、嬉し切ない気持ちになりました。（so-net.ne.jp）

（1）と（2）のように、「面白可愛い」「嬉し切ない」といった新奇表現はインターネットで生産的に使用されている。しかし、音韻的な観点から見てみると、「薄暗い」や「甘酸っぱい」「狡賢い」といった定着度の高いものと異なり、新奇表現には連濁形をとるものがほとんど存在しないと言える。その傾向を究明するために、本発表は近年の言語使用で現れた AA 型複合形容詞の新奇表現に着目し、その連濁傾向を考察することで、AA 型複合形容詞において連濁が起こる要因を再検討することを目的とする。

2. 先行研究と本発表の理論的枠組み

２．１　「連濁」の定義および AA 型複合形容詞の連濁傾向

連濁とは、一般的に、複合語の後項要素の頭子音が濁音化することとされている。つまり、複合語の後項要素のはじめに現れる子音が、清音から濁音へと変わる現象である。例えば、（3）のように、「窓口」という複合語の後項要素は形態素「口」の発音である「クチ」の代わりに、「グチ」と変わる。

（3）窓（マド[1]）＋口（クチ）→ 窓口（マドグチ）

連濁現象について、従来、複合名詞と複合動詞の研究は盛んにされてきた。それに対し、複合形容詞、とりわけ AA 型複合形容詞は管見の限り、ほとんど議論されていない。この中で、AA 型複合形容詞の連濁傾向に関し、従来の研究において意見の相違が見られる。戸田（1994）と Vance (2005)においては、AA 型複合形容詞の連濁率はそれぞれ 50%と 44%であると判断されており、高くないと言える。それに対し、山下（2024）においては、後部要素「苦しい」を有するものを除き、AA 型複合形容詞は連濁形をとる

[1] 本発表では、カタカナ表記で語の発音を示す。

とされている。具体的に、山下は以下のように指摘している。

「「形容詞語幹＋形容詞」複合語は 5.1 節で述べたように連濁率が低いことがこれまでに指摘されてきたが、表 1[2]の語例に基づけば、「甘辛い（アマカライ）」と後部要素「苦しい」を有する場合にのみ非連濁形をとり、残りの例は連濁形をとる。すなわち、「形容詞語幹＋形容詞」の非連濁例は、後部要素「苦しい」がその大半を占めることになる。後部要素「辛い（カライ）」は NA 型・AA 型ともに非連濁であるので語彙的に連濁を避ける要素と見ておく。」（山下 2024: 99-100）

そして、それらの先行研究は辞書に載っているものに対して分析を行っているため、言語の使用実態を見逃す可能性が高い。以上のことから、言語の使用実態を考慮に入れて新奇表現に着目し、連濁の生起条件を整理し、再検討する必要があると考える。さらに、連濁の傾向について、Vance (2015: 435)は“Despite all the tendencies cataloged above, […] rendaku is fundamentally unpredictable.”と述べている。つまり、連濁の有無はある程度、一定の傾向が観察できるにもかかわらず、基本的に予測不可能と言える。しかしながら、連濁にしても、非連濁にしても、そこにはいくつかの要因が含まれている。

２．２　連濁の揺れに関する要因

上述したように、複合語の連濁には、かなり揺れが存在し、予測が困難である。それらの揺れは、ほぼ「音韻的要因」「形態的要因」「意味的要因」という三つの要因と結びついているとされる。

２．２．１　音韻的条件

（１）ライマンの法則（Lyman’s Law）

ライマンの法則とは、「後部要素がすでに濁音を含んでいる複合語では連濁は起こらない」という連濁条件である（窪薗 1999: 123）。例えば、「風（カゼ）」はすでに「ゼ」という濁音を含んでいるため、「春」と複合して「春風（ハルカゼ）」のような複合語になる際には、「カ」は「ガ」にならなく、つまり、連濁が起こらないということになる。

（２）連濁とアクセントの関連性

従来、連濁と複合語のアクセントの関連性に関しては、議論が明らかではない。谷脇（1997: 242）は（4）の例を挙げ、「並列構造（前項要素と後項要素が意味的に対等な関係）を成す複合語は、各構成素のアクセントが保持され、1 つにまとまらない」と指摘しているが、AA 型複合形容詞とは恐らく関係がないのではないかと考えられる。なぜなら、「AA 型複合形容詞のアクセントは平板型を原則とするが、若い人人の間では、また一般に拍数多い語は、中高型の傾向がある（秋永 2025: 付 68-69）」とされているからである。要するに、並列といった意味構造とは関係なく、AA 型複合形容詞でさえあれば、アクセントは一つにまとまる。したがって、連濁とアクセントの関係の有無に関わりなく、AA 型複合形容詞の場合はこの要因を無視できると考えることができる。

---

[2] 紙幅の都合で、山下（2024: 105-106）を参照されたい。

(4) すききらい，おひれ，のみくい，　やまかわ，
ふえたいこ，いきかえり

２．２．２　意味的要因

一般的に、並列構造を成す複合語は特殊な意味構造を有しており、連濁しにくいとされている（窪薗 1999，バンス・金子・渡邊 2017 など）。窪薗（2023）においては、並列構造は連濁阻止の機能を有していると指摘されている。

「並列構造は、通常の複合語とは違い〔修飾語＋主要部（被修飾語）〕という意味構造を持たないため、その意味的特異性が音韻規則の阻止という形で表されることになる。」（窪薗 2023: 19）

しかしながら、AA 型複合形容詞においては、「甘酸っぱい（アマズッパイ）」「嬉し悲しい（ウレシガナシイ）」といったような例外が挙げられる。谷脇（1997: 242）は「甘酸っぱい」を「C_1 が C_2 を意味的に規定している」、つまり「修飾－被修飾」の意味関係と判断している。だが、辞書の項目である「甘みと酸っぱみとがまじった味やにおいである（スーパー大辞林、日本国語大辞典）」から見ると、「修飾－被修飾」ではなく、並列構造を成すと考える方が自然である。さらに、類推（analogy）の連濁の有無における働きについては、Ohno (2000)は、新造語における連濁の有無は、実在複合語から類推して決められるとしている[3]。しかし、「おいししょっぱい」といった味覚を表す新奇表現を見る限り、こうした類推の働きは見られない。この点に関しては、4 節で具体的に述べる。

3. 分析対象

AA 型複合形容詞の新奇表現を中心に分析を行うために、Sketch Engine というコーパス分析システムを利用し、日本語 WEB コーパス（jaTenTen11）から合計 250,979 件の AA 型複合形容詞を網羅的に収集した。このように、本発表は豊富なデータを用い、新奇表現の使用実態から連濁の生起条件を再検討するという学術的意義があると考える。

4. 本発表の提案

４．１　AA 型複合形容詞の新奇表現の連濁傾向

辞書に載っており、定着度の高い AA 型複合形容詞の連濁有無は、谷脇（1997）と山下（2024）によると、以下のようになる[4]。

---

[3] “If there is no possible reference to existing rendaku forms, the item does not undergo rendaku in a novel compound. (Only when there are existing rendaku forms (in the individual lexicon), may the item undergo rendaku), (Ohno 2000: 162).”

[4] 本発表では、実質的な意味を持つ要素から複合する語を研究対象としているため、「～臭い」「～たらしい」「～こましい」といったような形容詞は含まれていない。

（A） 連濁するもの：薄暗い、薄白い、悪堅い、嬉し悲しい、浅黒い、ずる賢い、悪賢い。

（B） 連濁しないもの：後項要素が「苦しい」であるもの（むさ苦しい、堅苦しい、狭苦しい、重苦しい、暑（熱）苦しい）、あまったるい、薄寒い、甘辛い。

この中で、（A）においては、複合形容詞は「嬉し悲しい」を除き、ほとんど 2.2.2 で述べた「修飾－被修飾」の意味関係をなすため、連濁形を取ることになる。「嬉し悲しい」も連濁をとる要因として、後項要素「悲しい」は NA（「物悲しい」「心悲しい」）の場合も連濁し、つまり、語彙的に連濁が起こりやすい要素であるため、AA も連濁になると考えられる。一方、（B）においては、複合形容詞は連濁が起こらない。後部要素が同じく「苦しい」であるにもかかわらず、語幹が形容詞の場合と名詞／動詞の場合（例えば、「息苦しい（イキグルシイ）」「聞き苦しい（キキグルシイ）」）には連濁の有無がそれぞれ異なる、という形態に関わる連濁傾向の非対称性が存在する。そして、「あまったるい」が連濁形を取るのは、促音の介在という連濁阻止の規則が関与しているからである。また、「薄寒い」が「修飾－被修飾」の意味関係であるものの、連濁しない。その理由として、山下（2024: 100）は「寒い（さむい）は「さぶい」形の影響が考えられる」という「ライマンの法則」が関与しているとしている。しかし、「甘辛い」と「甘酸っぱい」とは異なり、並列構造であるものの、非連濁形をとる。

以上のように、「薄暗い」といった定着度の高い複合形容詞は連濁形をとるのに対して、新奇用法では異なる傾向が見られる。調査によると、「ライマンの法則」の場合を除き、「可愛い」「楽しい」「怖い」「切ない」といった 9 個の形容詞を後項要素とする新奇表現の全てにおいて連濁が起こっていないことがわかる。詳細は（5）に示す。そこから、AA 型複合形容詞の新奇用法において、連濁は有標であるのに対し、非連濁は無標な音韻的表示であると言える。

（5）新奇表現である AA 型複合形容詞[5]：

①「～可愛い」: 面白、うざ、ゆる、怖、ださ、小さ、甘、太、若、痛、強、くど、幼、可笑し、悪、渋、懐かし、えぐ、細、古、優し、凛々し、嬉し、ちょろ、おいし、うま、情けな、恥ずかし、ケバ、長、美し、むさ、大人し、勇まし、恐ろし、あざと、汚、キモ、野暮った、怪し、明る、おっかな、愛し、いやらし、えら、憎らし、寂し、逞し、頼もし、だらしな、きしょ、ありがた、潔、丸っこ、眠、危な、賢、浅、しょぼ、重た、しょっぱ、もろ、真ん丸、温か、楽し、怠、喧し、淡、弱、しつこ、麗々し、珍し、聡、まぶ、せこ、濃ゆ、図々し、厳し、頼りな、悲し、微笑ま し、熱、鬱陶し、でか、細かまし、小高、もどかし、辛（ツラ）（88 件）。

②「～楽しい」: 嬉し、面白、怖、おいし、忙し、苦し、きつ、おかし、懐かし、辛（ツラ）、ゆる、痛、可愛、恥ずかし、明る、難し、長、恐ろし、うざ、勇まし、

[5] 本発表は AA 型複合形容詞の連濁の考察であり、「～美味しい」や「～甘い」「～美しい」などを研究対象としないため、ここで挙げない。また、「～恥ずかしい（ハズカシイ）」や「～寂しい（サビシい）」「～素晴らしい（スバラシイ）」はライマンの法則と関わるため、分析対象としなかった。

寒、しんど、優し、もろ、新し、遅、羨まし、忙しな、暑、えら、親し、温か、酸っぱ、珍し、うま、ややこし、ださ（37 件)。

③「〜怖い」: 面白、怖、うざ、痛、可愛、嬉し、恐ろし、薄、ありがた、悪、楽し、くど、焦った、懐かし、汚、美味し、きも、危な、恥ずかし（19 件)。

④「〜切ない」: 面白、嬉し、甘、怖、可愛、痛、甘酸っぱ、明る、薄暗、可笑し、楽し、しょぼ、早、しょっぱ、苦し（15 件)。

⑤「〜キモい」: うざ、痛、怖、キモ、ださ、可愛、面白、えぐ、えら、長、臭、くど、喧し（13 件)。

⑥「〜酸っぱい」: しょっぱ、辛（カラ)、苦、甘辛、旨、甘苦、薄、ほろ苦、えぐ（9 件)。

⑦「〜しょっぱい」: 酸っぱ、香ばし、可愛、薄、美味し、えぐ、甘酸っぱ（7 件)。

⑧「〜辛い（カライ)」:酸っぱ、しょっぱ、甘酸っぱ、薄、痛、旨、苦（8 件)。

⑨「〜悔しい」: 嬉し、悲し、えら、恥ずかし、ありがた、羨まし（6 件)。

連濁が起こらない要因として、それらの後項要素は NA や VA 複合語の場合にも連濁が起こっていない（もしくは、AA 以外の形を持っていない）ため、語彙的に連濁を阻止する要素であるためと考えられる。そのため、それらの形容詞を後項要素とする AA 型複合形容詞も連濁が生起しにくくなるのでであろう。また、戸田（1997: 161）は「古くから残っている語は、連濁するものが多い」と主張しているが、それも AA 型複合形容詞の新奇表現のこうした連濁傾向と関連性があると考えられる。

４.２　新奇表現の連濁有無における類推の働き

2.2.2 で述べたように、Ohno (2000)は、新造語における連濁の有無は、実在複合語から類推して決められるとしている。しかし、(5) で挙げられた⑥⑦⑧が示すとおり、「〜酸っぱい」「〜しょっぱい」「〜辛い」という味覚形容詞に関しては、新奇表現はいずれも非連濁形をとっている。それは、「甘酸っぱい（アマズッパイ)」から拡張して造語される際に類推が働くという説明ではなく、並列構造条件が働いているという説明の方がより妥当であることを示す。(6) は「しょっぱ酸っぱい」を例とするものである。このように、近年新奇性が高く、しかも生産的に使用されている AA 型複合形容詞は、既存語からの類推とは異なる過程によって造語されてきたことが示唆される。

(6) 味覚複合形容詞から見た並列構造条件の働き：

しょっぱい＋酸っぱい　→　しょっぱくて酸っぱい（意味上には並列構造）

↓

連濁阻止の機能を果たす

↓

甘酸っぱい（アマズッパイ）　——→　ショッパズッパイ（×）

ショッパスッパイ（〇）

5. おわりに

本発表では、WEB コーパスから収集した豊富なデータを用い、AA 型複合形容詞の新奇表現における連濁の傾向を分析し、非連濁が無標である可能性を示した。そして、類推が働く代わりに、新奇表現の非連濁傾向には意味上の並列構造が関与していることが明らかになった。しかし、連濁の生起には複数の要因が関与しており、十分に解明されていない側面も残されている。今後の課題として、さらなるデータの拡充とともに、意味構造などとの関連を含め、より精緻な分析を行う必要があると考えられる。

参考文献

Ohno, Kazutoshi (2000) “The Lexical Nature of Rendaku in Japanese,” *Japanese / Korean Linguistic 9*, 151-164, CSLI, Stanford.

Vance, Timothy J. (2005) “Rendaku in Inflected Words,” *Voicing in Japanese*, 89-103, De Gruyter Mouton.

Vance, Timothy J. (2015) “Rendaku,” *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*, 397-41, De Gruyter Mouton.

秋永一枝（2025）『新明解日本語アクセント辞典　第２版　新装版』三省堂.

窪薗晴夫（1999）『日本語の音声』岩波書店.

窪薗晴夫（2023）『一般言語学から見た日本語の語形成と音韻構造』くろしお出版.

谷脇康子（1997）「日本語の複合形容詞における連濁現象」『人文論究』47(3), 225-246.

ティモシー・J・バンス　金子恵美子　渡邊靖史（2017）『連濁の研究』開拓社.

戸田綾子（1994）「現代語における和語の連濁（1）―複合形容詞の連濁―」『同志社国文学』40, 159-171.

山下大希（2024）「複合形容詞の連濁現象について－学説検討と連濁のメカニズム－」, 名古屋大学国語国文学(117), 97-108.

ツール

Sketch Engine　https://app.sketchengine.eu/　2025 年 8 月参照.

現代日本語におけるテミセルの用法別の表記

堀越（ほりこし） 颯斗（はやと）（筑波大学大学院生）

1. はじめに

現代日本語には、テイクやテクルなど、接続助詞テに意味を抽象化させた一部の動詞が後接した形式が存在する。これらの形式は表記の際、「ていく」や「てくる」のように平仮名で表記される場合と、「て行く」や「て来る」などのように漢字で表記される場合があるが、その使い分けの傾向については十分な検討がなされていない状況にある。

本発表では、このような形式のうち、テミセルを取り上げ、平仮名表記の「てみせる」と漢字表記の「て見せる」の使い分けの傾向を、主に用法という観点から考察する。

2. 先行研究

テミセルという形式は、補助動詞として捉えられることがある（成 2012; 井上 2020; 青木 2021 など）。日本語における補助動詞について、三宅（2015）は、「“いる”等の特定の動詞が、他の動詞のいわゆる「テ形」に後接し、意味を抽象化して、機能語的にふるまうようになったもの」（三宅 2015: 238）を補助動詞としたうえで、それらが文法化の過程にあるということや、その用法は本動詞としての性質を色濃く保持するものから、本動詞の意味が抽象化された機能語的な意味を持つものへと拡張していき、このような意味変化の方向性が文法化の一般的な方向性に一致するということを示している。なお、日本語における文法化については、三宅（2005）において「動詞や名詞などの語が助詞／助動詞的な機能を有するようになる現象」（三宅 2005: 62）とされており、三宅（2005）はさらに、文法化は実質的な意味の抽象化や希薄化、消失という意味的な側面と、自立性を失い、専ら文法機能を担う要素になるという形態・統語的な側面といった二つの異なった側面を合わせ持つ現象であると述べ、前者は漂白化、後者は脱範疇化と呼ばれると指摘している。

テミセルという形式について分析を行った研究としては、日本語記述文法研究会（2009）、成（2012）、井上（2019, 2020）、青木（2021）などが挙げられる。このうち井上（2020）は、書き言葉において主節の述部にタ形で出現する場合のテミセル（テミセタ）を対象に、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）から用例を収集し、それらを本動詞として〈モノ〉、補助動詞として〈実技〉、〈身振り・態度〉、〈作り様態〉、〈結果〉という区分に分類している。井上（2020）ではこれらの区分について、動詞「見せる」の意味の抽象化の段階性と区分間の連続性が見られるとし、〈実技〉、〈身振り・態度〉、〈作り様態〉、〈結果〉の順で、本動詞「見せる」の意味が薄れていくと述べ、このことから文法化における意味的な側面の変化である漂白化が見られるとしている。一方、青木（2021）は、テミセルの用法とし

て〈手本／見せびらかし／信号〉、〈決意〉、〈評価〉を挙げ、〈手本／見せびらかし／信号〉ではモノを「見せる」からコトを「見せる」へというコト拡張が起こっていること、〈決意〉ではニ格を取らなくてもよくなっていることから、意味の漂白と脱範疇化が、〈評価〉ではさらに共起する動詞の制限がなくなり、生産性を増していることから使用範囲の拡大・拡張が起こっていると述べている。

また、現代日本語の表記については、国立国語研究所（1983）や小椋・柏野（2020）において、形式語的な性格の強い語や機能的な表現では、平仮名表記が出現しやすいということが指摘されている。

以上のことから、テミセルの表記については、文法化の段階が高い用法ほど平仮名表記されやすいという予測ができるのではないかと考えられ、本発表ではこのような予測に基づき調査を行うこととする。

3. 調査の概要

本発表では、テミセルの用例を BCCWJ から収集し、主に井上（2019, 2020）、青木（2021）の用法分類をもとに、それらの用法分類を行う。その後、用法ごとの総数に対する漢字表記の割合を確認し、テミセルにおける表記の傾向と用法の関係を考察する。

用例の収集については、「中納言」の短単位検索で、前方共起 1 を品詞大分類「動詞」、前方共起 2 を語彙素「て」、キーを語彙素「見せる」として検索する。レジスターは、年代による表記への影響が比較的少ないと思われる「出版・書籍」を対象とする。

用法分類の基準については、以下の表 1 の通りである。

表 1　本研究における用法分類とその基準

	テとミセルの間に語句が挿入できるか	提示の相手を表すニ格と共起できるか	時制	何を見せるか
a.モノ（本動詞）	＋	＋	自由	対象
b.実技	－	＋	自由	動作
c.身振り・態度・作り様態	－	＋	自由	意向、意図性
d.決意	－	－	未来	能力
e.結果（評価）	－	－	過去	能力

続いて、表の基準をもとにした分類の具体的な手順を述べる。

まず、用例中のテミセルにおける、テとミセルの間に、語句の挿入が可能かどうかを確認する。語句の挿入が可能である場合は、〈a.モノ（本動詞）〉という用法とする。

(1)　a.　彼は地図を広げて私にみせた。　→〈a.モノ（本動詞）〉

　　b. * 彼はボールを蹴って私にみせた。→補助動詞

（例文は井上 2020: 73（8））

次に、補助動詞について、用例中のテミセルが提示の相手を表すニ格と共起可能かどうかを見る。共起が可能である場合、文脈から、動作そのものを見せているか、動作によって意向・意図性を見せているかを判断する。共起が不可能である場合は、時制を確認し、未来の場合は〈d.決意〉、過去の場合は〈e.結果（評価）〉とする。

(2) a. 彼は私にボールを蹴ってみせた。 →文脈から判断→〈b.実技〉
b. 彼は私に驚いてみせた。 →文脈から判断→〈c.身振り・態度・作り様態〉
c. * 私は彼に大学に合格してみせる。 →時制から判断→〈d.決意〉
d. * 彼は私に大学に合格してみせた。 →時制から判断→〈e.結果（評価）〉

（2a・2b・2d の例文は井上 2020: 73（9）一部改変，2c は作例）

本発表では、井上（2020）および青木（2021）の記述に基づき、〈a.モノ（本動詞）〉から〈e.結果（評価）〉の順に文法化が進んでいると考え、漢字表記の割合もこの順に減少していくと予測する。

4. 分類結果

「出版・書籍」におけるテミセルの用例に対して用法分類を行った結果が以下の表 2 である。表の下に実際に見られた〈a.モノ（本動詞）〉、〈b.実技〉、〈c.身振り・態度・作り様態〉、〈d.決意〉、〈e.結果（評価）〉の用例の一部を挙げる。（以下、用例中のテミセルに下線を施す。）

表 2 「出版・書籍」の分類結果

	みせる	見せる	計	漢字表記の割合
a.モノ（本動詞）	26	50	76	65.79%
b.実技	63	36	99	36.36%
c.身振り・態度・作り様態	291	98	389	25.19%
d.決意	86	8	94	8.51%
e.結果（評価）	52	12	64	18.75%
保留	84	30	114	26.32%
分類不能	45	12	57	21.05%
除外	2	32	34	94.12%
全体	649	278	927	29.99%

(3) 「もう、辻ちゃんったら。で、どうします？私はこれかこれかなって思うんですけど…」ミカが、テーブルから二枚のデザイン画を取ってみせた。
（楠未莉『ミニモニ。におまかせっ！』，PB39_00372・4520，〈a.モノ（本動詞）〉）

(4) たとえば、ネクタイの結び方を知らない人に、文章だけで教えようと試してみれば、文章の不十分さが痛感できるはずだ。実際にやってみせればすぐ伝わることが、文章ではうまく伝えられないのだ。
（清水義範『大人のための文章教室』，PB48_00031・53300，〈b.実技〉）

(5) 「うちね、パパが大好きやねん。こんなけ」明美は、両手をいっぱいに広げて見せた。それは無限大を意味していた。小さな手をいっぱいに伸ばす。世界中を指していた。
（三木俊昭『大路治川』，PB29_00436・40090，〈c.身振り・態度・作り様態〉）

(6) その年、私は無理を言って東京の大学を受験、合格したので仙台の家を出て寮にはいることになっていました。夏が明けた新学年（新制度のため）からは、日本育英会の奨学金とアルバイトだけで自立してみせる、と宣言していたのです。
（吉田直哉『日本の科学者吉田富三』，PB52_00278・9500，〈d.決意〉）

(7)　ワールドカップへの九十八年初出場、02 年大会の日韓開催という追い風もあったが、J リーグが日本のスポーツが持ち合わせていなかった問題点を表面にさらし、しかも打破してみせたのは、大きな功績である。

（杉山茂『スポーツマネジメントの時代を迎えて』, PB57_00138･38560, 〈e.結果（評価)〉）

なお、表における「保留」は分類に確証が持てなかったものや、用法分類にゆれが生じたものであり、「分類不能」は、表 1 で設定したどの用法にも当てはめることができないと思われた用例である。

分類の結果、〈a.モノ（本動詞)〉、〈b.実技〉、〈c.身振り･態度･作り様態〉、〈e.結果（評価)〉、〈d.決意〉の順に漢字表記の割合が減少していることが分かった。〈d.決意〉、〈e.結果（評価)〉の順序については予測と反しているものの、〈a.モノ（本動詞)〉、〈b.実技〉、〈c.身振り･態度･作り様態〉については先行研究を踏まえた予測通りの結果となっており、大きく予測から外れている点もないため、概ね文法化の段階が高くなるにつれて、仮名表記されやすくなると言える。

一方で、〈d.決意〉と〈e.結果（評価)〉において予測と逆転していることについては考察の必要があると思われる。そこで、次節ではこの点についてさらに分析を試みる。

5. 分類結果に対する考察

日本語記述文法研究会（2009）では、テミセルについて、「過去の事柄を述べる場合、「てみせる」は本来の「見せる」の意味が強く表れ、可視的な事態に用いられるのが普通である」（日本語記述文法研究会 2009: 140）と述べている。また、「「紙に書く」のように書かれた文字が見える場合や、「作る」のように行為そのものが視覚的にとらえられる場合には、過去の事柄にも用いることができる。一方、「偉くなる」「大もうけをする」のような必ずしも視覚的にとらえにくい出来事の場合、「てみせる」は用いられにくい」（日本語記述文法研究会 2009: 140）とも述べられている。

このような記述から、以下のようなことが言える。

(8)　テミセルは本動詞「見せる」の意味が強く表れるならば、可視的な事態に用いられる

そして、上記が真であるため、その対偶である次の（9）の記述も真であると言える。

(9)　テミセルは可視的な事態に用いられていないならば、本動詞「見せる」の意味が強くは表れていない。

「本動詞「見せる」の意味が強くは表れていない」ということは、「漂白化している」ということと同値であるため、(9) はまた次のように言い換えることもできると思われる。

(10)　テミセルは可視的な事態に用いられていないならば、漂白化している。

以下では、(10) の前提に立ち、「出版・書籍」の用例についてテミセルの前接の動詞が可視的であるか不可視的であるかを分類することによって、可視的な事態に用いられている

か否かという観点からテミセルの漂白化の段階を捉えたうえで、先の用法分類の結果を意味的な側面に着目して考察することを試みる。

分類にあたっては成（2012）を参考にする。成（2012）は、テミセルの前接の動詞について、語彙的な意味のなかに「動作の始まりや過程が視覚で捉えられる性質を含んでいる動詞」（成 2012: 139）を「可視動詞」とし、「その動作の始まりや過程が視覚で捉えられない動詞」（成 2012: 139）を「不可視動詞」として分類している。

成（2012）をもとに、テミセルの前接の動詞が可視的であるか不可視的であるかを分類した結果が以下の表 3 である。なお、表 2 において「除外」とした用例については分類を行っていないため、表 3 ではそれらを除いている。

表 3　可視的であるか不可視的であるかを分類した結果

	可視動詞	不可視動詞	どちらともいえない	計
a.モノ（本動詞）	73（96.05%）	1 （1.32%）	2 （2.63%）	76（100%）
b.実技	85（85.86%）	1 （1.01%）	13（13.13%）	99（100%）
c.身振り・態度・作り様態	331（85.09%）	42（10.80%）	16 （4.11%）	389（100%）
d.決意	12（12.77%）	43（45.74%）	39（41.49%）	94（100%）
e.結果（評価）	13（20.31%）	38（59.38%）	13（20.31%）	64（100%）
保留	68（59.65%）	17（14.91%）	29（25.44%）	114（100%）
分類不能	9（15.79%）	20（35.09%）	28（49.12%）	57（100%）
全体	591（66.18%）	162（18.14%）	140（15.68%）	893（100%）

※（）内は各用法の総数に占める割合

上の表 3 より、〈e.結果（評価）〉よりも〈d.決意〉の方が、各用法の総数に占める可視動詞の割合が低いことが分かる。ここから、〈d.決意〉は〈e.結果（評価）〉よりも可視的な事態に用いられにくいということが言え、さらに前述の（10）より、〈d.決意〉は〈e.結果（評価）〉よりも漂白化していると捉えることができると思われる。

そして、このような順序は、先に見た漢字表記の割合の場合と対応している。そのため、〈d.決意〉と〈e.結果（評価）〉の漢字表記の割合については、漂白化の段階がより高い――より可視的な事態に用いられにくい――〈d.決意〉の方が、〈e.結果（評価）〉よりも仮名表記されやすいために、漢字表記の割合は〈e.結果（評価）〉、〈d.決意〉の順に減少していたという説明が可能になると思われる。

一方で、表 3 においては、〈b.実技〉と〈c.身振り・態度・作り様態〉の可視動詞の割合に大きな差がなく、漢字表記の割合の場合との対応が見られない。そのため、テミセルの表記の傾向については、漂白化の段階という尺度のうちの、可視的な事態に用いられているか否かという観点に基づくもののみによって、説明が尽くされるというわけではなく、文法化の段階という総合的尺度も踏まえて記述する必要がある。

6. まとめ

本発表では、現代日本語の書き言葉におけるテミセルという形式について、仮名表記と漢字表記の使い分けの傾向を、用法という観点から明らかにした。本発表では、以下の 2 点を指摘した。

（A）　テミセルは概ね文法化の段階が高い用法ほど仮名表記されやすい。

（B）　漂白化や脱範疇化によって特徴づけられる文法化の段階という総合的尺度のみでは説明がしきれない部分については、文法化の一側面である漂白化の段階という部分的尺度を導入することによって説明が可能になり、漂白化の段階が高い――可視的な事態に用いられにくい――用法ほど仮名表記されやすい。

そして、以上のことから、現代日本語の表記の傾向として、同一の形式でも、文法化やその意味的な側面である漂白化の段階が高い用法ほど仮名表記されやすくなるという可能性が示唆される。文法化が表記の選択に与える影響をより深く捉えるために、今後テミセル以外の文法化が関わる形式についても検討することが求められる。

なお、通時的な変化も捉えるために、「図書館・書籍」のレジスターを対象に、「出版・書籍」と同様の方法で用例を収集し観察を試みたが、用例数が少なく、特定の傾向を見出すことができなかった。この点についても、用例数を増やして改めて調査を行う必要がある。

調査資料

国立国語研究所（2025）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Ver.2021.03）
https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/（2026 年 3 月 23 日最終確認）

参考文献

青木博史（2021）「「て＋みせる」の文法化」天野みどり・早瀬尚子（編）『構文と主観性』，203-220，くろしお出版.

井上直美（2019）「「テミセル」表現に関する一考察―書き言葉における文末「てみせる。」の使用実態―」『さいたま言語研究』（3）26-37，埼玉大学大学院人文社会科学研究科日本語専攻内さいたま言語研究会.

井上直美（2020）「「彼は笑ってみせた。」は何を見せたか―書き言葉の「てみせた。」の意味機能に注目して―」『日本語の研究』16（1），68-84，日本語学会.

小椋秀樹・柏野和佳子（2020）「和語・漢語の表記」小椋秀樹（編）『コーパスで学ぶ日本語学―日本語の語彙・表記―』，83-102，朝倉書店.

国立国語研究所（1983）『現代表記のゆれ―国立国語研究所報告 75―』，秀英出版.

成知炫（2012）『現代日本語の補助動詞：「してみる」と「してみせる」の意味・用法の記述的研究』東京外国語大学大学院地域文化研究科博士学位申請論文.

日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 2―第 3 部格と構文第 4 部ヴォイス―』，くろしお出版.

三宅知宏（2005）「現代日本語における文法化―内容語と機能語の連続性をめぐって―」『日本語の研究』1（3），61-76，日本語学会.

三宅知宏（2015）「日本語の「補助動詞」と「文法化」・「構文」」秋元実治・青木博史・前田満（編）『日英語の文法化と構文化』，237-270，ひつじ書房.

新語「味変」（あじへん）の使用増加要因

同志社大学［院］谷口 悠（たにぐち ゆう）[1]

1. はじめに

近年、食に関する新語「味変（あじへん）」の使用が増加している。本発表で扱う「味変」は、例えば次のように用いられる（以下、下線等は発表者による）。

（1）途中、メープルシロップをかけたり、レモンを搾ったりして「味変」を楽しみながら、直径約 20 センチのダッチベイビー（発表者注：ドイツ発祥のパンケーキ）をぺろりと食べ終えてしまった。（『読売新聞』2025 年 10 月 31 日）

「味変」は食事の途中で味を変化させて楽しむことを指す。本発表では新聞および雑誌記事に見られる「味変」の使用実態を示し、使用増加の要因を考察する。具体的には、「味変」の使用増加時期を調査し、類義語「変味（へんみ）」「味変わり（あじがわり）」との違いを検討する。そのうえで、消費者と提供者の観点、および比喩的用法の特徴の観点から「味変」を分析し、新語「味変」の使用増加要因を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

新語の使用増加要因（背景）についての研究は、これまでに蓄積がある。具体的には、①「よるごはん」に対する「あさごはん」のように既存語との対応があること（橋本 2007）、②「男」かつ「孫」を端的に示す「孫息子」のように情報量を少なくすること（高木 2017）、③中高年から老年層を示す「シニア」のように好印象であること（橋本 2021）、④前置き表現「肌感覚ですが」のように特定の用法に限定して用いられること（谷口 2025a）、⑤「完食」の「完」のように当該語の一部を語構成要素とする造語が拡大していること（谷口 2025b）、⑥「自分軸」が専門家から非専門家へと使用を広げるように、使用者層が拡大していること（谷口 2025c）が挙げられる。

これらの研究は語構成・語のイメージといった語そのもの、あるいは使用者の属性に注目している。しかし、本発表で扱う「味変」はこうした語の内部要因や静的な属性では十分に説明できない。「味変」は意図的に味を変えるという行為を伴い、提供者と消費者の相互作用をもとに使用されている側面があるからである。

そこで、本発表では「味変」の使用増加の要因として、食を楽しむ消費者と提供者の行為・意識を背景として生み出されたこと、食に限定されない比喩的用法が食の分野以外に拡大していることを主張する。

3. 分析方法

本発表では、書き言葉の使用に注目し、新聞記事と雑誌記事における用例を取り上げる。新聞記事は『朝日新聞クロスサーチ』[2]『ヨミダス』[3]『日経テレコン』[4]を用いて得られた合計 232 件、雑誌記事は「WebOYA-bunko」[5]（雑誌記事の見出し検索のみ検索可能）を用いて

[1] youareyu0625@gmail.com
[2] https://xsearch.asahi.com/（2026 年 4 月 4 日最終アクセス）
[3] https://yomidas.yomiuri.co.jp/（2026 年 4 月 4 日最終アクセス）
[4] https://telecom.nikkei.co.jp/（2026 年 4 月 4 日最終アクセス）
[5] https://www.oya-bunko.com/（2026 年 4 月 4 日最終アクセス）

得られた合計 70 件を調査対象とする。

まず、収集した用例を年ごとに集計し、いつごろ使用が増加しているかを確認する。次に、類義語「変味」「味変わり」と比較し、それらとの違いを示す。「変味」は「味変」の字順転倒漢語の例、「味変わり」は「味変」に先行して使用が確認された例である。そのうえで、消費者と提供者の観点から、「味変」の用例を分析する。その際、新聞記事だけでなく日経プレスリリースに使われる「味変」52 件も調査対象とする。最後に、「味変」の比喩的用法の特徴を考察する。食事の際に味を変えるという本来の用法とは異なり、比喩的用法は（2）のように食事場面以外に転用され「マンネリ化した状況に変化を与えること」を指す。

（2）先手番の渡辺は矢倉を選択。今期は 1 回戦で 3 局が矢倉になり、角換わりと相懸かりがゼロという点が興味深い。解説役の岡部怜央四段は「角換わりが行き詰まっているので、『味変』じゃないですけど、目を別のところに向けている」と分析する。（『読売新聞』2023 年 8 月 6 日）

4. 調査結果

4.1. 「味変」の使用傾向

まず、「味変」の雑誌記事・新聞記事における初出を調査したところ、初出は雑誌記事で 2015 年、新聞記事で 2017 年であった。用例は以下の通りである。

（3）a こまかいお悩みに答えます絶対失敗しない唐揚げの作り方、味変ワザ 14、揚げなくてもおいしい唐揚げレシピ、他（『LEE』2015 年 5 月）

b さらに、10 種のスパイスみそで『味変』。一気にエスニック系になります（『読売新聞』2017 年 3 月 1 日）

（3a）は唐揚げを毎日食べても飽きない方法として味を変える方法 14 個を紹介するもの、（3b）は味噌を入れることにより、ラーメンの味を変えることを説明するものである。雑誌記事、および新聞記事に見られる「味変」の年別の出現記事件数の推移を図に示す。

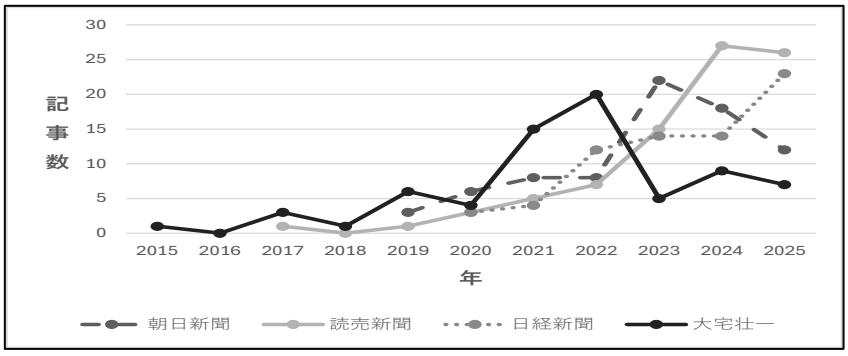


図　雑誌・新聞における「味変」出現記事件数の推移

図より、「味変」の記事件数は雑誌記事において、2019 年までは横ばいに推移していたが、2020 年（4 件）を境に急増し、2022 年に最多の 20 件の記事に用いられている。それに対し、新聞記事において 2022 年を境に急増していることが分かる。各紙における「味変」の初出は読売新聞が最も早く 2017 年であり、朝日新聞（2019 年）、日経新聞（2020 年）の順に続く。最多となるのは朝日新聞が最も早く（2023 年の 22 件）、次いで読売新聞（2024 年の 27 件）、日経新聞（2025 年の 23 件）が続く。雑誌と新聞の間で急増する時期にずれが見られる理由として、媒体の性質の差が挙げられる。比較的表現の自由度が高い雑誌において先行して受容され、規範性の強い新聞へと波及したためと捉えられる。

4.2. 類義語との比較

次に、「味変」の意味的特徴を明らかにするため、類義語「変味」「味変わり」[6]と比較する。これらはどのように違うだろうか。まず、「変味」と比較してみよう。

4.2.1. 「変味」との相違

「変味」は国語辞典（『広辞苑』第 7 版、『大辞林』第 4 版、『三省堂国語辞典』第 8 版）に掲載のある語で「（日がたって）味の変わること」と説明される。実際に、(4) のように、古くから用例が確認され、現在でも用例が見られる。

(4) a 醸造する玉罎朝日ラムネ中には良腐敗に傾むき変味を来せしものあるより
（『朝日新聞』1898 年 7 月 24 日）
b 過度の多品種化は生産や販売効率を下げ、変味による在庫ロスを多くすると判断した（『日経産業新聞』1991 年 10 月 18 日）

(4) より、「腐敗に傾」いて「変味」になること、また「変味」のせいで在庫の廃棄につながることが読み取れる。そのため、「変味」は自然と味が変化することを表すネガティブな意味として用いられている。したがって、味を人為的に変化させ楽しむというポジティブな意味の「味変」とは一線を画すると言えよう。

4.2.2. 「味変わり」との相違

一方、「味変」に先行する「味変わり」は「味変」と近似する用法、異なる用法の 2 つが確認された。

(5) 基本の松前漬けは、保存がきくように少し味が濃い目ですから、そのつど食べる分をとり分け、好みの具を加えて味変わりを楽しみます。（婦人生活社（1978）『婦人生活』32（12））

(5) の「味変わり」は、松前漬けに具を加えた結果、味が変わることである。一度に二度楽しめるという点で、「味変」と近似する用法と言える。なお、婦人生活社発行の雑誌（『婦人生活』『婦人生活ファミリークッキングシリーズ』）には「味変わり」が 1980 年代から 1990 年代前半にかけて見られた。このような途中で味を変えることとは別に、調理の最初から味に変化をつける用法も見られた。

(6) 人気の高い、おふくろの味も、ちょっと今風にアレンジすると、また新しいおいしさが楽しめます。カレー味のほかにトマト味にしたりかき油を加えたり味変わりを楽しんで（世界文化社（1991）『献立が 5 倍になるおかずの知恵』）

(6) のように、「味変わり」は、調理の最初の段階でバリエーションを加えていつもと違う味にすることを指している。つまり、途中で味を変えることでなく、あらかじめ味の変化を用意しておくことを表し、現在使われる「味変」とも異なる用法である。

本節で扱った 3 語を位相に注目してまとめると、次の通りである。「変味」は (4) に示したように、味が好ましくない状態へと変化することを表し、食品の品質を管理する製造業における専門用語として用いられていると考えられる。「味変わり」は（途中で）味の変化を用意することを表し、料理本において用いられている。「変味」が自然と味の変わること、「味変わり」が最初から味を変えることを主に表す業界・専門用語であるのに対し、「味変」は食べる途中で意図的に味を変えることを表す俗語的性格を有する語であると言えよう。さらに、「味変」は「変味」と字順転倒の関係にある。字順転倒漢語の併存する場合、意味

[6] 用例の調査に『国立国会図書館デジタルコレクション』https://dl.ndl.go.jp/（2026 年 4 月 4 日最終アクセス）を用いた。

や位相の分化が生じて使い分けられる（鈴木 1981、田島 1998 など）とされるが、「味変」と「変味」はその例の一つと言えよう。

5. 「味変」の使用増加要因

前節で見たように、「味変」は味を変えるという意図的な介入がある点で他動詞的な性質を含む。この他動詞性を介して、消費者のニーズと提供者の思惑が合致し、「味変」の使用が促進されている側面がある。一方で、「味変わり」とは異なり、後述する通り「味変」はファッションの分野でも用いられ、それ以外の分野にも使用領域を広げている。したがって、食の文脈以外で使われ、マンネリ化した状況に変化を与えることを表す比喩的用法が「味変」の使用を促進しているとも捉えられる。そこで、5.1 では消費者と提供者の観点から、5.2 では比喩的用法の特徴の観点から「味変」の使用増加の要因を考察する。

5.1. 消費者・提供者の相互作用

ここでは、消費者のニーズと提供者の思惑がいかに影響し合い、「味変」を促進させてきたかを考察する。提供者の思惑を分析するために、新聞記事に加え、日経プレスリリースの記事から得た「味変」52 件を調査対象とする。日経プレスリリースは、企業や団体などが報道機関向けに発表した資料を収録するものであり、『日経テレコン』により検索できる。

まず、消費者の最後まで飽きずに食べたいというニーズに提供者が応えることで「味変」が普及したと想定される。以下の用例から、単調な食事を回避するために「味変」が消極的な解決策として求められていたことが窺える。

（7）a たまり醤油だれの旨味とマヨネーズの味変で最後まで飽きずにお召し上がり頂けます。（2018 年 3 月 23 日／アークランドサービス）

b 久原本家グループ（福岡県久山町）は、「〆（しめ）で味変　2 度旨（うま）い鍋」のシリーズ 4 商品を発売した。「味が飽きる」との消費者の声を受け、「レモン鍋」から「エスニック風」や、「とんこつ鍋」から「辛味噌（みそ）」など 2 種類のスープをセットにして味を変えられるようにした。（『読売新聞』2021 年 10 月 21 日）

（7a）は「たまり醤油だれ」と「マヨネーズ」によって「味変」することで、「最後まで飽きずに」食べることができることを提示している。（7a）に明示されていないが、（7b）の「味が飽きる」という消費者の不満の声を受けた可能性がある。提供者は消費者の声・ニーズを捉えて、一つの商品で複数の味を食べることができるようにした。そのことを端的に「味変」が表せるため、「味変」は広まったと考えられる。

さらに、提供者は「味変」を新しいもの、楽しむものとして打ち出した。楽しむ文脈で「味変」が用いられている記事は日経プレスリリース 52 件中 26 件（50%）にのぼる。

（8）a 今回、”半分食べたら 3 秒味変!”という、今までになかった新しい食べ方を提案したリニューアルを行います。（2021 年 1 月 19 日／明星食品）

b バーガーに添えたくし切りカットのレモンを途中で絞ると、爽やかな香りと酸味が広がり、味変も楽しめます。（2021 年 7 月 5 日／ロッテリア）

（8a）はキャッチコピーに「味変」が用いられた例であり、3 秒という短時間で味を変える新しい食べ方を提案している。（8b）はレモンを途中で絞ることにより、「味変も楽しめ」るとしており、「味変」が楽しむものとして位置づけられていることが窺える。

味変は楽しむ行為であるという認識が定着すると、消費者に「自分好みの味を追求したい」というニーズが生まれ、それに合わせて提供者も「自分だけの味を作ること」を付加価値と

して宣伝するようになる。(9) の「自分だけの 1 杯」という表現から、消費者の「自分好み」の 1 杯を追求しようとする積極的なニーズが読み取れる。そのうえ、(10a) のような手軽に美味しく食べたいという消費者のニーズが生まれたと考えられる。これを受けて、提供者は (10b) のように、「味変」を、美味しさを増幅させる過程の一つとして提示している。

(9) 元祖油堂「自分だけの 1 杯」に 10 種超の味変(『日経 MJ』2025 年 5 月 16 日)

(10) a 調査してみると、消費者は『マンネリ化した食事でもかけるだけで味が七変化して手軽においしくなる魔法の調味料』に価値を見いだしていました。(『日経 MJ』2025 年 2 月 7 日)

b そのまま食べてももちろん美味しいですが、味変用スイートチリソースでもっと美味しくお召し上がりいただけます。(2025 年 3 月 14 日／松屋)

以上より、「味変」の使用増加は、消費者の消極的なニーズ（単なる飽きの解消）から次第に積極的なニーズ（好みの味の追求）へと移行する過程と並行している。「味変」は消費者のニーズと提供者の思惑が相互に影響を与え合う中で定着したと言えよう。その背景には、前節で述べた「味変」の持つ「意図的に味を変える」という他動詞的な性質が深く関与していると想定される。

5.2. 比喩的用法による使用領域の拡張

次に、「味変」の比喩的用法に注目し考察を進める。調査の結果、マンネリ化した状況に変化を与えるという比喩的用法の初出は雑誌記事で 2017 年、新聞記事で 2023 年であった。

(11) a 味変を心底堪能「ひつまぶし」のような NHK 大河(『週刊新潮』2017 年 12 月)

b 異業種コラボなどの取り組みは、味そのものには手をつけず、ブランドアピールを「味変」する戦略と言える。(『日経 MJ』2023 年 5 月 31 日)

(11a) は大河ドラマ「おんな城主直虎」の物語展開が変わることを、ひつまぶしの「味変」に喩えている。(11b) は売り上げの停滞を回避するために、ベビースターブランドの雰囲気を変えることを「味変」に喩えている。

「味変」は (11b) のような食品業界の企業（ほかに味の素・矢場とん）の持つ雰囲気を変えることを表す際に用いられていた。こうした味を変える行為を表す以外の「味変」は、新聞記事で 2023 年以降徐々に見られるようになっている (2023 年 2 件、2024 年 3 件、2025 年 2 件)。食品業界の企業以外の使われ方として、(12a) では公園の持つ雰囲気を変えるという政治におけるもの、(12b) ではチームの雰囲気を変えるというスポーツにおけるものがある。このように、状況の変化を「味変」を用いて抽象的に表していることから、「味変」は味を変えるという具体的な意味から変化を与える抽象的意味へと意味の希薄化を起こしつつある側面がある。

(12) a 宮嶋市長は市内にある観光果樹園との連携を視野に入れており、「周遊拠点として期待できる」と、民間活力で公園を魅力的に変える「味変」の可能性を語っていた。(『朝日新聞』2024 年 11 月 27 日)

b 今のトリニータは確かに統一された「味」を持っている。だが、それが逆に相手にとって読みやすく、観る者にとっても「変化」に乏しい印象を与えている。そこに必要なのは、“ちょい味変”でもいい、ガラッと風味を変える選手の存在なのだ。(『朝日新聞』2025 年 5 月 21 日)

比喩的用法の使用について注目すべきは、新聞記事で比喩的用法が見られる以前から、ファッション誌において「味変」の比喩的用法が確認される点である。(13) のように、ファ

ッションの分野ではコーディネートの変化を「味変」に喩える用法が見られるのである。

（13）a 同じ服でも、味付け変えれば何回でも美味しく着こなせる　真夏のド定番コーデの味変レシピ 32（『JJ』2018 年 9 月）

bTシャツを秋フレーバーに味変して、あと 3 カ月着こなす方法（『STORY』2019 年 9 月）

「味変」を用いているファッション雑誌は『JJ』『STORY』の他に、『with』『nonno』『MORE』『CLASSY』といった若年層を対象とするものであった。

次の表はファッション雑誌における比喩的用法の記事件数の推移を示したものである。

表　ファッション雑誌における「味変」の比喩的用法の記事件数推移

年	2018～2020 年	2021・2022 年	2023 年～2025 年
比喩的用法の記事件数	4	10	3

表より、雑誌記事では、2021 年・2022 年に「味変」の使用が急増するが、その時期に用いられるのはもちろん、それ以前にも比喩的用法が確認される。

ファッション雑誌が他分野、特に食分野の用語を借用することで新しく見せる先行例として「隠し味」がある[7]。「隠し味」の使用拡大を踏まえると、食分野で用いられた「味変」は若者を対象としたファッション雑誌に新しいトレンドとして紹介された。ファッション雑誌での受容が比喩的用法の認知を促し「味変」の使用拡大を後押しした一因と考えられる。

6.　まとめ

本発表では、新語「味変」の使用増加要因について考察した。飽きの解消や好みの追求といった消費者のニーズと、新たな食事体験を提案する提供者（企業）の思惑が合致したことが使用増加の主要因である。この合致する動きは言語とマーケティングの相互作用（松井 2013、大谷 2015）を具体的に提示するものである。さらに、食の文脈以外でマンネリ化した状況に変化を与えるという比喩的用法が若者層の間で先行し、「味変」の使用増加を促したことも要因として考えられる。「味変」は食に関する記事にとどまらずに、若者を対象としたファッション、さらにそれ以外への分野へと使用を拡張している。つまり、マーケティングの相互作用と分野・用法の拡張とが相まって、「味変」の使用は増加しているのである。

【参考文献】

大谷鉄平（2015）「流行語「ファジィ」の「理屈づけ」の推移」『日語日文學研究』95-1,181-203.

鈴木丹士郎（1981）「「抵抗」と「抗抵」」『国語語彙史の研究』2,237-254.

高木千恵（2017）「男孫を表す新語「孫息子」について」『待兼山論叢　日本学篇』51,39-59.

田島優（1998）『近代漢字表記語の研究』和泉書院.

谷口悠（2025a）「新語「肌感覚」の発生・使用増加要因」『同志社国文学』102,72-61.

谷口悠（2025b）「漢語接頭辞「完」について」第 138 回国語語彙史研究会発表資料.

谷口悠（2025c）「新語「自分軸」の使用増加要因」『解釈』71-4,22-31.

橋本行洋（2007）「語彙史・語構成史上の「よるごはん」」『日本語の研究』3-4,33-47.

橋本行洋（2021）「新語の定着とその条件」『日本語の乱れか変化か』131-151.

松井剛（2013）「言語とマーケティング：「癒し」ブームにおける意味創造プロセス」『組織科学』46-3,87-99.

[7] ことば研究館「ファッション雑誌で新しさを表すための言葉には、何か特徴がありますか」（加藤祥執筆）https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-210/（2026 年 4 月 4 日最終アクセス）

近現代日本語における副詞ジョジョの展開

金子春子（筑波大学学生）

1. はじめに

本発表では、近現代日本語の副詞「徐々」「徐々として」「徐々と」「徐々に」（以下、これらを副詞ジョジョと総称する）を対象として、用法の推移と、それに付随して起きる共起要素の変化について記述することを目的とする。現代日本語の副詞「徐々に」は、仁田（2002）において〈時間関係の副詞〉のうち、〈時間の中における事態の進展〉を表すとされ、事態の実現の漸次的拡大を示す〈進展様態型〉に位置づけられている。また歴史的には、φ型からトシテ型、ト型を経てニ型へと定着したこと、（1a）のような動作がゆっくりと行われている様子を説明する用法に加えて近代（～1920 年代）において（1b）のような事態が進展していく様子を説明する用法を獲得し、時間副詞として定着したことが鳴海（2024）において指摘されている。

（1） a. 私は滔々たる時流に頓着なく、地味に徐々と進んで行かうと思ふ。（筆谷等観「美術院日本画作家の感想」『太陽』1917 年 12 号）　（鳴海 2024：381,（31））

b. 然れども、これと同時に新主義新思想を以て、徐々に感化を及ぼし、この家庭を改良して、（伊勢時雄「基督教と日本将来の政治」『国民之友』16 号（1888 年））　（鳴海 2024：381,（33））

これらを踏まえると、動作がゆっくりと行われている様子を説明する用法と事態が進展していく様子を説明する用法が併存していた時期を経て、1930 年代以降に後者のみに限定されるようになることが推察できるが、1930 年代以降から 2000 年代にかけての調査はなされておらず、現代語の体系の成立過程については明らかになっていない。そこで本発表は、1800 年代後半から 2000 年代にかけての副詞ジョジョについて、用法の推移と共起する要素の変化について記述することを目指す。

2. 先行研究

まず現代語の副詞「徐々に」については、副詞全体の体系を整理した仁田（2002）や、「だんだん」「次第に」との比較を試みたパリハワダナ（2008）などに指摘があり、事態の実現の漸次的拡大を示す〈進展様態型〉の副詞として位置づけられている。

次に「徐々に」の史的展開については、鳴海（2024）が「徐々に」について中世から近世にかけての変化と、近世末期以降の変化として、それぞれ次の点を明らかにした。まず前者について、中世前期はトシテ型やト型で①〈動作やふるまいが落ち着いてものしずかなさま〉を表し、立ち居振る舞い全体について動作・行為を連用修飾するものが多かったが、中世後期以降には、②〈ゆっくりと、そっと、ゆったりとした動きで〉を表し、ひとつの動作について連用修飾するものがみられるようになると主張している。次に後者について、近世末期以降の変化として、前代のトシテ型・ト型の使用と並行してニ型の使用も大きく増えていったと主張している。その変化の中で状態の変化を伴う表現を修飾する例がみられるよ

うになり、この用法を現代の用法につながるものとして③〈少しずつ、時のたつにつれて〉と整理している。

このように鳴海（2024）は、「徐々に」が時間的意味を獲得した過程と漢語副詞として定着していく過程を示した。しかし、現代語の副詞「徐々に」の研究を踏まえると、「徐々に」が時間的意味のみを持つ副詞になるまでの過程については明らかになっていない。そこで本発表では、「徐々に」が時間的意味のみを持つ語として定着する過程について述べる。

3. 調査概要

3.1. 調査の方法と分析の観点

本発表では『青空文庫[1]』（日本文学/小説）、『日本語歴史コーパス明治・大正編』、『昭和・平成書き言葉コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用してジョジョの用例を収集した。『全文検索システムひまわり』を利用して『青空文庫』から用例収集をする際には文字列を「徐々」「徐徐」「徐／＼」「じょじょ」とし、コーパスでは語彙素「徐々」として用例を検索した。以上から得られた用例のうち、本発表で調査対象とする用例は、副詞的修飾成分として働いており、係り先が明確なもの[2]とする。

以上の手順で収集した用例に対して、用法、形態（φ型、トシテ型、ト型、ニ型）、係り先の動詞の分類、有標アスペクト形式との共起の 4 つの観点から分類を行う。まず、用法については、鳴海（2024）を参考に、(1a)（2a）(2c）のような動作がゆっくりと行われている様子を修飾しているものを〈動き様態〉、(1b)（2b）のような時間が進むとともに事態が進展していく様子を修飾しているものを〈進展〉とした。なお、(2d）のような空間が漸次的に拡大することを修飾しているものも見られたが、これについても〈進展〉の中に含めた。

次に形態については、鳴海（2024）の指摘をもとに、ジョジョに後接する助詞によって、φ型、トシテ型、ト型、ニ型の 4 つに分類を行う。(2a）はφ型、(2b）はトシテ型、(2c）はト型、(2d）はニ型の用例である。

続いて係り先の動詞については、動詞の表す「動作」と「変化」を捉えられるよう石井（2007）の 6 分類を採用し、「有る」などを「状態動詞」、「滑る」などを「主体動作自動詞」、「追う」などを「主体動作他動詞」、「加える」などを「主体動作客体変化動詞」、「去る」などを「主体変化動詞」、「失う」などを「再帰動詞」と分類する。これに照らせば、(2a)「動かす」、(2d)「広げる」は「主体動作客体変化動詞」、(2b)「更ける」は「主体変化動詞」、(2c)「歩む」は「主体動作自動詞」の用例である。

最後に有標アスペクト形式は日本語記述文法研究会（編）（2007）などを参考に「〜ていく」「〜ている」「〜しだす」や助動詞「たり」「り」を認め、その共起の有無を検討する。(2b）は「ていく」と共起している用例、(2a)、(2c)、(2d）は共起していない用例である。

---

[1] 全文検索システム『ひまわり』における「『青空文庫』パッケージ（20251001)」を利用している。

[2] 以下（ｉ）のように連用修飾成分として働いていないものは対象から除外してある。その他に、ルビとして異なる語形が示されているもの、係り先が不明瞭なものは除外した。また、同作品の異なる版については初出のみを対象とし、初出年代が不明なものは除いた。なお、用例の引用に当たっては、強調のために下線を施したり、ジョジョに後接する助詞をゴシック体にして示したりする場合がある。

（ｉ） 急速なる成長と隷屬たる團簇の發生及び徐々たる成長とに迨ばざるを得ず

（「世界の過去未來を論ず（一)」『東洋学芸雑誌』1882 年）

(2) a. 柿団扇をもち、徐々、それをうごかして、戦闘指揮にかかっていた。
（吉川英治「新書太閤記」第九分冊，1939 年,〈動き様態〉）
b. 夜は徐々として更けて行く……。 （国枝史郎「蔦葛木曽桟」, 1922 年,〈進展〉）
c. 荷の莖ばかり情無う立てる間に世を忍び氣の白鷺が徐々と歩む姿もをかしく、
（幸田露伴「五重塔」其二十一，1891 年,〈動き様態〉）
d. 私のハゲは脳天、マンナカから薄く徐々に円形をひろげるという見た目にカンバシカラヌ最下級品である（坂口安吾「無毛談――横山泰三にさゝぐ――」, 1948 年,〈進展〉）

3.2. 調査結果の概観

ここでは本発表の調査において得られた用例について概観する。調査で得られた副詞ジョジョの用例について形態別の推移を表 1 に示す。

表 1 形態別の推移

	φ	トシテ	ト	ニ	計
1874-1885	4(25.00%)	0(0.00%)	1(6.25%)	11(68.75%)	16(100.00%)
1886-1900	9(23.08%)	5(12.82%)	16(41.03%)	9(23.08%)	39(100.00%)
1901-1915	11(14.10%)	9(11.54%)	10(12.82%)	48(61.54%)	78(100.00%)
1916-1930	2(1.09%)	19(10.38%)	8(4.37%)	154(84.15%)	183(100.00%)
1931-1945	13(5.04%)	26(10.08%)	1(0.39%)	218(84.50%)	258(100.00%)
1946-1960	2(1.22%)	2(1.22%)	0(0.00%)	160(97.56%)	164(100.00%)
1961-1975	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	85(100.00%)	85(100.00%)
1976-1990	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	164(100.00%)	164(100.00%)
1991-2005	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	319(100.00%)	319(100.00%)
2006-2013	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	238(100.00%)	238(100.00%)
全体	41(2.66%)	61(3.95%)	36(2.33%)	1406(91.06%)	1544(100.00%)

表 1 から、全体として 1960 年代頃までは φ 型、トシテ型、ト型、ニ型のいずれの用例も見られるが、それ以降にはニ型のみが見られることが読み取れる。具体的には、1910 年代後半以降にニ型が 8 割を、1930 年から 1960 年頃までに 9 割強を占めるようになり、1960 年代以降には φ 型、トシテ型、ト型が見られなくなるという推移が明らかになった。

4. 用法の推移についての考察

ここでは、副詞ジョジョの用法の推移について分析を行う。

まず、調査で得られた用例から、用法の判別が困難な例（53 例）を除いた 1491 例を対象に、用法の推移を表 2 に示す。

表 2 から、1880 年代前半までは〈動き様態〉が約 6 割を占めていたが、1880 年代後半には逆転し、1910 年代後半頃には〈進展〉が約 7 割を占めるようになったこと、1990 年代以降に 9 割以上を占めるようになり、2006 年以降には〈進展〉のみが見られるようになったことが読み取れる。

表 2 用法の推移

	〈動き様態〉	〈進展〉	計
1874-1885	10(62.50%)	6(37.50%)	16(100.00%)
1886-1900	15(39.47%)	23(60.53%)	38(100.00%)
1901-1915	25(35.71%)	45(64.29%)	70(100.00%)
1916-1930	49(28.82%)	121(71.18%)	170(100.00%)
1931-1945	56(23.33%)	184(76.67%)	240(100.00%)
1946-1960	39(24.84%)	118(75.16%)	157(100.00%)
1961-1975	17(20.00%)	68(80.00%)	85(100.00%)
1976-1990	17(10.43%)	146(89.57%)	163(100.00%)
1991-2005	22(6.96%)	293(93.02%)	315(100.00%)
2006-2013	0(0.00%)	237(100.00%)	237(100.00%)
全体	250(16.77%)	1241(83.23%)	1491(100.00%)

次に、用法と形態の推移を表 3 に示し、検討する。

表 3 用法・形態の推移

	〈動き様態〉				〈進展〉				計
	φ	トシテ	ト	ニ	φ	トシテ	ト	ニ	
1874-1885	3(18.75%)	1(6.25%)	0(0.00%)	6(37.50%)	1(6.25%)	0(0.00%)	0(0.00%)	5(31.25%)	16(100.00%)
1886-1900	2(5.26%)	8(21.05%)	3(7.89%)	2(5.26%)	7(18.42%)	7(18.42%)	2(5.26%)	7(18.42%)	38(100.00%)
1901-1915	7(10.00%)	3(4.29%)	4(5.71%)	11(15.71%)	3(4.29%)	7(10.00%)	5(7.14%)	30(42.86%)	70(100.00%)
1916-1930	2(1.18%)	2(1.18%)	6(3.53%)	39(22.94%)	0(0.00%)	6(3.53%)	12(7.06%)	103(60.59%)	170(100.00%)
1931-1945	6(2.50%)	0(0.00%)	7(2.92%)	43(17.92%)	5(2.08%)	1(0.42%)	16(6.67%)	162(67.50%)	240(100.00%)
1946-1960	1(0.64%)	0(0.00%)	1(0.64%)	37(23.57%)	1(0.64%)	0(0.00%)	1(0.64%)	116(73.89%)	157(100.00%)
1961-1975	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	17(20.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	68(80.00%)	85(100.00%)
1976-1990	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	17(10.43%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	146(89.57%)	163(100.00%)
1991-2005	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	22(6.98%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	293(93.02%)	315(100.00%)
2006-2013	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	237(100.00%)	237(100.00%)
全体	21(1.41%)	14(0.94%)	21(1.41%)	194(13.01%)	17(1.14%)	21(1.41%)	36(2.41%)	1167(78.27%)	1491(100.00%)

表 3 から次の 2 点が読み取れる。1 点目は、1900 年代頃までは前掲（2b）や（3a）のように〈動き様態〉と〈進展〉のいずれの用法においても全ての型が見られていたが、1940 年代後半以降、ニ型に偏っていったことである。1960 年代以降は（3b）のようなニ型の用例のみが見られるようになるが、〈動き様態〉も〈進展〉も見られることから、形態の収斂の方が用法の収斂よりも先んじていたことが窺える。2 点目は、2006 年以降、ニ型の〈動き様態〉の用例が見られなくなり、〈進展〉に収斂したことである。1910 年代後半以降にニ型の〈進展〉が全体の 6 割以上を占め、それ以降も占める割合が増えていき、2006 年以降は（3c）のようなニ型の〈進展〉のみが見られるようになる。

（3） a. ガラス板上の薄皮を其儘徐々に流水中に投ずれば 、泡球は驅出せられ、之を押附くるには、指若くは舌の先を以てす。（「〔工業世界〕」『太陽』1901 年,〈動き様態〉）

b. 凛子も満ちたあとの充足と安堵感のなかで、徐々に目を閉じる。

（渡辺淳一「失楽園」落日，1997 年,〈動き様態〉）

c. いま湯沢ではリゾートマンションに定住する住民が徐々に増えている。

（森健「リゾートマンションが姥捨て山に」『文芸春秋』2013 年,〈進展〉）

5. ジョジョの共起要素についての考察

5.1. 共起する動詞について

ここでは、副詞ジョジョと共起する動詞について考察を行う。用法分類をした用例のうち、石井（2007）の基準によって共起する動詞を分類することが難しい用例（外来語サ変動詞・複合動詞と共起用例）を除いた 990 例[3]に対して、その推移を表 4 に示す[4]。

表 4 から次の 2 点が読み取れる。1 点目は、用例数を見ると、〈動き様態〉の中では前掲（2a）（3a）のような主体動作他動詞や主体動作客体変化動詞にやや偏るように見られる一方で、〈進展〉の中では前掲（2b）（2d）のような主体動作客体変化動詞や主体変化動詞が多く見られることである。これは〈動き様態〉の動きを修飾するという性質と主体動作他動詞や

[3] 第 4 節において対象とした 1491 例から 333 例の外来語サ変動詞と 168 例の複合動詞を除いた。

[4] なお、表 4 では石井（2007）による動詞の 6 分類をそれぞれ「状態」、「主動自」、「主動他」、「主動客変」、「主変」、「再帰」と略記して示した。

主体動作客体変化動詞の表す動作との親和性が高いこと、〈進展〉の漸次的拡大を表すという性質と主体動作客体変化動詞や主体変化動詞の表す変化との親和性が高いことを量的に裏づけるものであると言える。特に〈進展〉の親和性については、パリハワダナ (2008 : 7) における、変化の仕方を描写する「漸次的展開を表す副詞」は「共起する文の出来事が変化性のあるもの」でなければならないという指摘とも一致している。2 点目は、各年代の全体に占める割合を見ると、1910 年代後半以降、〈進展〉と共起する主体変化動詞が全体の約 6 割を占めるようになっており、それ以降も微増傾向にあることである。この主体変化動詞の増加の時期は表 2 から読み取れる〈進展〉の増加と一致しており、用法の推移と共起する動詞の推移が軌を一にしている実態が明らかになった。

表 4 用法・動詞の推移

	〈動き様態〉						〈進展〉						計
	状態	主動自	主動他	主動客変	主変	再帰	状態	主動自	主動他	主動客変	主変	再帰	
1874-1885	0(0.00%)	0(0.00%)	3(33.33%)	1(11.11%)	1(11.11%)	2(22.22%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	1(11.11%)	1(11.11%)	9(100.00%)
1886-1900	0(0.00%)	3(13.64%)	1(4.55%)	5(22.73%)	2(9.09%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	1(4.55%)	3(13.64%)	6(27.27%)	1(4.55%)	22(100.00%)
1901-1915	0(0.00%)	4(9.76%)	5(12.20%)	1(2.44%)	6(14.63%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	1(2.44%)	9(21.27%)	14(34.15%)	1(2.44%)	41(100.00%)
1916-1930	0(0.00%)	4(3.25%)	4(3.25%)	11(8.94%)	11(8.94%)	1(0.81%)	0(0.00%)	1(0.81%)	4(3.25%)	8(6.50%)	71(57.72%)	8(6.50%)	123(100.00%)
1931-1945	0(0.00%)	2(1.38%)	12(8.28%)	7(4.83%)	8(5.52%)	1(0.69%)	0(0.00%)	1(0.69%)	8(5.52%)	19(13.10%)	78(53.79%)	9(6.21%)	145(100.00%)
1946-1960	0(0.00%)	5(5.15%)	10(10.31%)	7(7.22%)	4(4.12%)	1(1.03%)	0(0.00%)	0(0.00%)	2(2.06%)	12(12.37%)	49(50.52%)	7(7.22%)	97(100.00%)
1961-1975	0(0.00%)	1(1.85%)	3(5.56%)	4(7.41%)	1(1.85%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	5(9.26%)	6(11.11%)	30(55.56%)	4(7.41%)	54(100.00%)
1976-1990	0(0.00%)	2(1.94%)	6(5.83%)	5(4.85%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	1(0.97%)	4(3.88%)	9(8.74%)	71(68.93%)	5(4.85%)	103(100.00%)
1991-2005	0(0.00%)	1(0.46%)	4(1.83%)	11(5.02%)	1(0.46%)	0(0.00%)	0(0.00%)	2(0.91%)	11(5.02%)	39(17.81%)	140(63.93%)	10(4.57%)	219(100.00%)
2006-2013	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	0(0.00%)	18(10.17%)	30(16.95%)	121(68.36%)	8(4.52%)	177(100.00%)
全体	0(0.00%)	22(2.22%)	48(4.85%)	52(5.25%)	34(3.43%)	5(0.51%)	0(0.00%)	5(0.51%)	54(5.45%)	135(13.64%)	581(58.69%)	54(5.45%)	990(100.00%)

5.2. 共起する有標アスペクト形式について

ここでは、副詞ジョジョと有標アスペクト形式の共起の有無について分析を行う。用法分類をした用例 1491 例について、有標アスペクト形式の共起の有無の推移を表 5 に示す。

表 5 有標アスペクト形式との共起の推移

	〈動き様態〉		〈進展〉		計
	共起あり	共起なし	共起あり	共起なし	
1874-1885	1(6.25%)	9(56.25%)	0(0.00%)	6(37.50%)	16(100.00%)
1886-1900	3(7.89%)	12(31.58%)	9(23.68%)	14(36.84%)	38(100.00%)
1901-1915	3(4.29%)	22(31.43%)	9(12.86%)	36(51.43%)	70(100.00%)
1916-1930	14(8.24%)	35(20.59%)	71(41.76%)	50(29.41%)	170(100.00%)
1931-1945	21(8.75%)	35(14.58%)	119(49.58%)	65(27.08%)	240(100.00%)
1946-1960	12(7.64%)	27(17.20%)	67(42.68%)	51(32.48%)	157(100.00%)
1961-1975	5(5.88%)	12(14.12%)	35(41.18%)	33(37.82%)	85(100.00%)
1976-1990	6(3.68%)	11(6.75%)	85(52.15%)	61(37.42%)	163(100.00%)
1991-2005	5(1.59%)	17(5.40%)	174(55.24%)	119(37.78%)	315(100.00%)
2006-2013	0(0.00%)	0(0.00%)	148(62.45%)	89(37.55%)	237(100.00%)
全体	70(4.69%)	180(12.07%)	717(48.09%)	524(35.14%)	1491(100.00%)

表 5 から、有標アスペクト形式と共起する割合は、〈動き様態〉が全体の 1 割に満たないのに対し、〈進展〉は約 5 割を占めている。また、前掲表 2 で示した〈進展〉が約 7 割を占め始めた 1910 年代後半以降には、各年代における〈進展〉のジョジョと有標アスペクト形式の共起する割合は全体の約 4 割から 6 割程度へ微増の傾向が認められる。したがって、〈動き様態〉よりも〈進展〉の方が有標アスペクト形式と共起しやすく、〈進展〉が増加するにしたがって有標アスペクト形式との共起も増加していったと考えられる。なお、パリハワ

ダナ（2008：9）においては現代語の「だんだん」「次第に」「徐々に」が「〜ていく」「〜ている」と「頻繁に共起する」ことが指摘されている。この点について本発表の結果と照らせば、1990 年代以降にジョジョ全体のうち〈進展〉のジョジョとアスペクト形式とが共起する用例が約 6 割を占めていることから、現代語においてジョジョとアスペクト形式とが「頻繁に共起する」という実態についてもその概要を量的に把握し得たものと言える。

6. おわりに

本発表では、副詞ジョジョについて次の 3 点について明らかにした。まず、用法について、1880 年代前半までは〈動き様態〉が約 6 割を占めていたが、1880 年代後半には逆転し、1910 年代以降〈進展〉に偏り、2000 年代後半に〈進展〉のみが見られるようになったことを明らかにした。次に用法と形態の関係について、1960 年代頃にニ型の用例のみが見られるようになるが、用法としては〈動き様態〉も〈進展〉も見られることから、形態の収斂の方が用法の収斂よりも先に起きたことを指摘した。最後に、〈進展〉が勢力を拡大する過程において、共起する動詞とアスペクト形式のとの共起の有無との観点においても副詞ジョジョ全体に変化が見られることを明らかにした。以上のことを示した本発表は、副詞ジョジョが「徐々に」という形態で時間的意味のみを持つ形式として固定化する展開の実態を明らかにしたものと位置づけられる。

今後の課題としては、ジョジョの形態がニ型に収斂し、用法が〈進展〉に限られるようになった要因について、「だんだん」「次第に」や川瀬（2011）によってジョジョの変化との関連が指摘されている「そろそろ」（川瀬 2011、鳴海 2024）、〈動き様態〉の副詞である「ゆっくり」などの他の形式との比較を通して検討することが求められる。また、ジョジョの形態がニ型に収斂することや形態と用法の推移の時期のずれなどについては、前田（1983a,1983b）や鳴海（2015）などを始めとする漢語副詞に関する研究を踏まえ、漢語副詞の体系にどのように位置づけていくかという点について検討する必要がある。

【調査資料】『青空文庫』所収の小説作品（※検索には全文検索システム『ひまわり』（ver.1.7）を利用した）、国立国語研究所（2025）『日本語歴史コーパス明治・大正編』（ver.2025.11）、国立国語研究所（2023）『昭和・平成書き言葉コーパス』（ver.2023.05）、国立国語研究所（2025）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（ver.2021.03）（※検索にはコーパス検索アプリケーション「中納言」（ver.2.7.2）を利用した）（2026 年 3 月 10 日確認）
【参考文献】石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』，ひつじ書房.／川瀬卓（2011）「副詞「そろそろ」の史的変遷」『語文研究』112,pp.1(93)-16(78),九州大学国語国文学会.／鳴海伸一（2015）『日本語における漢語の変容の研究―副詞化を中心として―』，ひつじ書房.／鳴海伸一（2024）「漢語副詞「徐々に」の成立と定着」，大木一夫・甲田直美（編）『日本語変異論の現在』，pp.373-388，ひつじ書房.／仁田義雄（2002）『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』，くろしお出版.／日本語記述文法研究会（編）（2007）『現代日本語文法 3』，くろしお出版.／パリハワダナ・ルチラ（2008）「副詞「だんだん」「次第に」「徐々に」が表す展開の諸局面―漸次性と過程性・意志性・望ましさとの関わり―」『金沢大学留学センター紀要』（11），pp.1-12，金沢大学留学生センター.／前田富祺（1983a）「漢語副詞の変遷」国語語彙史研究会（編）『国語語彙史の研究 4』，pp.189-231 和泉書房.／前田富祺（1983b）「漢語副詞の種々相」渡辺実（編）『副用語の研究』，pp.360-378,明治書院.

現代・近世日本語におけるイツ形指示詞の指示対象について

髙田篤志（立命館大学大学院生）

1. はじめに

本発表では、日本語のイツ形指示詞（コイツ、ソイツ、アイツ）の指示対象について扱う。イツ形指示詞はヒト、およびモノを指す指示詞であるとされる（佐久間 1951 など）が、レ形指示詞（コレ、ソレ、アレ）との違いが明確ではないという問題がある。

そこで本発表では、まず現代語におけるイツ形指示詞の指示対象について検討し、イツ形指示詞が特定の個体としてヒトを指すことを基本義としていることを主張する。続いて、イツ形指示詞がまとまって見られるようになる近世語の調査を行った結果を示す。

近世前期にヒトを指す語として使用されていたイツ形指示詞が、近世後期に指示対象を拡大させたこと、その拡大が特にコイツにおいて顕著であることを明らかにする。また、アイツでは指示対象の拡大がほとんど起きなかったことを指摘する。

2. 先行研究と問題の所在

佐久間（1951）は、イツ形指示詞の指示対象を「もの」および「人（卑）」（p.7）であるとしている。しかし、レ形指示詞についても指示対象を「もの」とし、「見下したいい方」（p.32）としてヒトを指すとしているため、両者がどのように異なるのかは明らかでない。

レ形指示詞でヒトを指すことには、構文的な制限が加わることが指摘されている。近藤（2000）は、レ形指示詞が「ヒト・モノ・トキなどいろいろの値」をとれるため「役割だけを指示している」場合にヒトを指せること、そのため「発話段階において、それで指示される対象の値をあえてヒトに固定して値指示として用いると、いわばモノ扱いしたことになり、敬語運用的に下位のものとなってしまう」（p.569）ことを明らかにしている。

レ形でヒトを指すことに敬語運用が関与することは首肯できる。ただしあとで分析を行うが、敬語運用的に全く同一の条件が与えられたとしても、イツ形が使用可能であるのに対し、レ形の使用に不自然さが伴う例が存在することから、両者の本質的な違いを明らかにする必要がある。

3. 現代語のイツ形指示詞について

本発表では、まず現代語イツ形指示詞について、レ形との違いが現れる状況を検討する。

3-1. 特定の個体を指し示す

イツ形指示詞は対象が複数である場合、ほとんど義務的に接尾辞「ら」が必要になる。以下に例を示す。

（1） a. 私は犯罪者《ルビ：こいつら》から / たくさんの人を守りたい
（奥山哲矢『K-9 ～警視庁公安部公安第 9 課異能対策係～』1、講談社：2 話）

b. （空にたくさんの宇宙人が飛んでいるのを見て）宇宙人《ルビ：アイツら》みんな消えればいいのにな　（市川苦楽『ドラマクイン』1、集英社：1 話）

以上の例から接尾辞「ら」を取り除き「こいつ」「アイツ」に置き換えると、誰か特定の「犯罪者」「宇宙人」に言及していることとなり、人物の集合を指せなくなる。

それに対し、レ形指示詞は、対象が複数であっても外形的な変化を必要としない。これは、「いろいろの値」（近藤 2000：569）を包括的に指す機能によるものと考えられる。一方のイツ形指示詞は単独で使用されると特定の個体を指すこととなり、複数を指す場合にはそれ相当の語を補う必要がある。

3-2. 文脈内直示における指示対象

続いて、文脈内直示用法（金水、岡﨑、曺 2002：224-225）におけるコイツについて観察する。文脈内直示用法とは、典型的には次の（2）のようなものである。

（2） ”＄”これはアメリカの通貨記号です。　　（金水、岡﨑、曺 2002：225）

以下に、文脈内直示用法として使用されるコイツの例を示す。特にインターネット上で使用されるものに、以下のように矢印を使用した文脈内直示が存在する。

（3） ｔａｍａ５＿ｄｘ　←こいつウザイね！こうゆうバカは死ねばいいのに！
（BCCWJ：OC05_00210,670）

（4） 脹相「どけ！俺はお兄ちゃんだぞ！！」←こいつが名シーン製造機という事実…
（YouTube　@manga_jouhou[1]）

（5） M字ビターンと相撲の蹲踞の違いはなんですか？↑こいつアホｗ
（BCCWJ：OC06_02038,240）

（6） 丸明の社長会見中の表情　【＊＊】→お前は本当に反省してるのか　会見する前の態度　【＊＊】→何こいつ　（BCCWJ：OY05_01151,1050、【＊＊】は発表者）

（3）はインターネット上のユーザーネームに言及している例であり、「こいつ（＝ユーザーネームの使用者）ウザイね」という意味に解釈される。また（4）のようにヒトを表す語（ここでは「脹相」）とコイツとの距離が離れている場合や、（5）のように文脈中にヒトを表す語が存在しない場合でも、コイツが指しているのはヒトであると考えられる。（7）は語や文ではなく写真について言及したものであるが、やはり「こいつ（＝丸明の社長）」という意味に取るのが最も自然であると考えられる。

ここでもレ形指示詞と比較しておきたい。例えば（6）の場合、イツ形をレ形に置き換える（「何これ」とする）と、丸明の社長の姿勢や態度に言及する文意にとることが可能で、レ形指示詞による包括的な指示が確認できる。

さらに次のような場合にもイツ形とレ形との間には、文意の差を指摘することができる。

（7） a. ｛あれほど / あいつほど｝の美人なら、周囲の男性がほうっておかないでしょう。　　（金水、木村、田窪 1989：90 改）

b. ｛これでは / こいつでは｝、次の試合には勝てそうも無いな。　　（作例）

c. 見てください、｛これ / こいつ｝が典型的な英国紳士です。　　（作例）

（7a）（7b）のように、「ほど」「では」などが後接するとレ形は程度や事態を指す意味を持つ（金水、木村、田窪 1989：90）が、イツ形では特定の個体としてのヒトを指していると言える。また、（7c）のような場合であっても、レ形ではファッションや態度などを包括的に指しているのに対して、イツ形では隣に居るヒトを個体として指していると言える。

3-3. BCCWJ におけるイツ形指示詞の指示対象

以上の分析から、イツ形指示詞は特定の個体としてヒトを指すことを基本義としていることを主張する。そこで、傍証として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ と略す。）を使用し、イツ形指示詞の指示対象について現代語の実態を観察する。

BCCWJ の短単位データ（2021.03）に対して、コーパス検索アプリケーション「中納言」

[1] 漫画放送情報局@manga_jouhou「脹相「どけ！俺はお兄ちゃんだぞ！！」←こいつが名シーン製造機という事実…【呪術廻戦 考察】」https://www.youtube.com/watch?v=fLxuCF-8UaM（2026 年 4 月 4 日最終確認）

（バージョン 2.7.3）を使用して検索を行った（検索条件＝キー：［語彙素］が［此奴］[2]）。検索結果から本発表の趣旨に当てはまらない例 [3]を除外して有効例を定めた。それぞれの前後文脈を参照してイツ形指示詞の指示対象を特定し、性質の観点からヒト、モノ、（ヒト以外の）生物、事態の 4 つ [4]に分類を行った。結果を以下の表 1 に示す。

表 1：BCCWJ におけるイツ形指示詞の指示対象

語形	指示対象					小計
	ヒト	モノ	生物	事態	判別不能	
コイツ	1439(63.6%)	446(19.7%)	139(6.1%)	213(9.4%)	26(1.1%)	2263(100.0%)
ソイツ	927(54.9%)	238(14.1%)	130(7.7%)	347(20.6%)	45(2.7%)	1687(100.0%)
アイツ	2788(94.3%)	23(0.8%)	83(2.8%)	0(0.0%)	62(2.1%)	2956(100.0%)

表 1 では、コソアすべてにおいてヒトを指す例が最も多く、現代語におけるイツ形指示詞の主要な指示対象はヒトであることが確認できる。

特徴的な結果として、アイツの指示対象が極端にヒトに偏っており、モノを指す例はごくわずかであることを指摘したい。アイツがモノに使用された例を以下に示す。

（9） a.ポプラってのは、俺、好きなんだ。あいつはバカだから、まっすぐ上にしか伸びない。（BCCWJ：OB1X_00305,86700）

b. 春になるともれなく付いてくるあいつ！そう！かふん＞＜！（BCCWJ：OY14_42872,350）

「バカ」「付いてくる」のように、対象に人格や動作性を認めていることが確認でき、これは擬人法的な表現であると思われる。他の例にも類似の表現は散見され、アイツがモノを指す際には、擬人法的に使用されていると考えられる。以上の点から、現代語におけるアイツは、モノを指す機能がそれほど発達していないことが指摘できる。

4. 近世語の分析

続いて、近世語イツ形指示詞について用例調査を行った。寺田（2014）が述べるように、イツ形指示詞は専らヒトを指して使用されていた語が、近世後期以降に指示対象を拡大させたことが知られている。当該時期の使用実態を観察し、現代語のイツ形指示詞と対照させることで、変遷の過程を明らかにしたい。

4-1. 調査概要と結果

調査には、主に『日本語歴史コーパス　江戸時代編』（以下、CHJ と略す。）を使用した。CHJ の短単位データ（ver.2025.03）（ver.2025.11）に対して、それぞれコーパス検索アプリケーション「中納言」（2.7.2）を利用して検索を行い、用例を取得した [5]。また滑稽本であ

[2] 同様に、①キー：［語彙素］が［其奴］②キー：［語彙素］が［彼奴］でも検索を行った。

[3] コイツ、ソイツ、アイツ以外の語形（キャツ、コヤツなど）であるもの、漢字表記であるもの、書籍などのタイトルの一部になっているもの、慣用表現である「どいつもこいつも」を除外している。

[4] 指示対象の分類基準は、以下の通りである。①ヒト：指示対象が人物である例（ユーザーネームや死体を含む。）②モノ：指示対象が事物である例（「メロディ」などの抽象物、植物、人工知能なども含む。）③生物：人間以外の有情物（「ケルベロス」「トランスフォーマー」なども含む。）④事態：文単位の内容を指す（「犯人の足跡が見つからない」「先生が部屋を出て行った」など。）

[5] CHJ における検索条件は、現代語と同様である（キー：［語彙素］が｛［此奴］OR［其奴］OR［彼奴］｝）。サブコーパスの内、「VI上方絵入狂言本」のみ（ver.2025.11）で検索している。なお底本を確認した上で、漢字表記のものや「小春（あいつ）」のように振り仮名が使用されたものを除外している。

る「浮世風呂」、「浮世床」についてもそれぞれ調査を行った。以上のようにして取得された用例について、現代語と同様に指示対象の特定、分類を行った結果が表 2 である。

表 2:近世語イツ形指示詞の指示対象

コイツ								
地域	区分	資料	ヒト	モノ	生物	事態	判別不能	計
上方	前期	絵狂	13(100.0%)	0	0	0	0	13(100.0%)
		近松	14(93.3%)	0	1(6.7%)	0	0	15(100.0%)
	後期	洒落	7(38.9%)	4(22.2%)	0	6(33.3%)	1(5.6%)	18(100.0%)
江戸	後期	洒落	8(21.6%)	14(37.8%)	0	15(40.5%)	0	37(100.0%)
		人情	8(47.1%)	2(11.8%)	0	7(41.2%)	0	17(100.0%)
		滑稽	10(29.4%)	5(14.7%)	0	18(52.9%)	1(2.9%)	34(100.0%)
ソイツ								
地域	区分	資料	ヒト	モノ	生物	事態	判別不能	計
上方	前期	絵狂	6(100.0%)	0	0	0	0	6(100.0%)
		近松	3(100.0%)	0	0	0	0	3(100.0%)
	後期	洒落	0	0	0	1(100.0%)	0	1(100.0%)
江戸	後期	洒落	1(12.5%)	1(12.5%)	0	6(75%)	0	8(100.0%)
		人情	0	0	0	13(100.0%)	0	13(100.0%)
		滑稽	1(7.7%)	3(23.1%)	0	9(69.2%)	0	13(100.0%)
アイツ								
地域	区分	資料	ヒト	モノ	生物	事態	判別不能	計
上方	前期	絵狂	0	0	0	0	0	0
		近松	13(100.0%)	0	0	0	0	13(100.0%)
	後期	洒落	13(100.0%)	0	0	0	0	13(100.0%)
江戸	後期	洒落	19(95.0%)	0	0	1(5.0%)	0	20(100.0%)
		人情	38(100.0%)	0	0	0	0	38(100.0%)
		滑稽	15(75.0%)	3(15.0%)	0	1(5.0%)	1(5.0%)	20(100.0%)

表 2 から、近世前期にはほとんどヒトを指す専用語だったイツ形指示詞が、近世後期に指示対象をモノや事態に拡大させたことが確認できる。また近世後期は、コイツの指示対象が広範囲に及んでいるのに対し、アイツがほとんどヒトを指していることも観察され、現代語の使用実態に近いことが指摘できる。ただし、ソイツについては今回の調査範囲では事態を指す例が中心的であった。

4-2. 近世前期

以下に、用例を上げながら詳しく見ていく。まず近世前期は、ほとんど全てがヒトを指す例であった。

(10) こいつ慮外者　お小袖、馬具に泥をかけて、怪我というては済まぬ。
（女殺油地獄　CHJ：51-近松 1721_05001,38500）

(11) さてこそ盗人顕れたり。そいつ括れ。承ると踏み付け／＼、腕捻ぢ上げ、はや切縄にぞかけてげる。　（五十年忌歌念仏　CHJ：51-近松 1707_01003,52110）

(12) 常々に身をひづめ始末して、あいつに遣るは淵へ捨つるも同然
（女殺油地獄　CHJ：51-近松 1721_05003,25600）

文脈に「慮外者」「括る」「踏み付ける」などの語が共起することも踏まえ、先行研究の指摘通り、ヒトを乱暴に指す語として使用されていたと考えられる。

なお、次の 1 例のみ、ヒト以外の生物を指して使用されているものが確認できた。

（13）隣の紅粉屋の赤猫は見かけからやさしう、この三毛を呼び出すも声を細めて恥づかしさうに見えてこいつが男にしてやりたい

（大経師昔暦　CHJ：51-近松 1715_23001,11820）

（13）は「隣の猫を、こいつ（＝話し手の猫）の夫にしてやりたい」という文意であり、猫をヒトに近い存在として捉えている擬人法的なものだと考えられる。

4-3. 近世後期

続いて近世後期の用例を挙げる。近世後期にも引き続き、ヒトを指して使用されるイツ形指示詞が確認できる。

（14）【らん】をほほほほそないおこりないなわたしやいつこううれしいわへ【巴】けたいのわるいこいつ酒のんだと見へる（粋の曙　CHJ:52-洒落 1820_01050,74790）

（15）鳥羽瀬のみへきなぞじやあ子ども屋へくる女かみゆひの外に゛りばかりこしらへにくる女がある　それで渡世になるのさ　そいつを゛りのおばさんとつけてをくわな　（仕懸文庫　CHJ：52-洒落 1793_01066,112760）

（16）昨夕おらが表の風松が弟子子をぶちやアがつたも、あいつらだらう

（浮世風呂 p.293）

そして近世後期から、モノを指して使用される例が確認できるようになる。

（17）見やれおれが盃はれいこくの通り是だ〇とちいさい盃でのむ【親分】どふでこいつじやあおのし達にやあめんどうだろう。

（侠者方言　52-洒落 1771_01004,26330）

（18）時宗が紙入の中へ金を入る【五】ううどふもそいつがなくつちやあかれこれがらくじやくしねへ　（仕懸文庫　CHJ：52-洒落 1793_01066,182280）

（19）土龍「しかしやきもちといふやつはうるせへてネ。おらアやかれた覚はなけれど長「あいつも、わざ／＼からかつてやいてもらふ男があるよ　（浮世床 p.322）

ただし先に示したように、アイツではモノを指す例がごく少数である。

またソイツについては、個体としてのヒトやモノを離れ、相手の発言全体を照応するような例が多くなっていくことを示しておく（本発表では、まとめて事態とした。）。

（20）小三「をや佐介どん旦那はもうおかへりだよ　佐介「ほいそいつはおほしくじり。

（仮名文章娘節用　CHJ：53-人情 1831_05005,34560）

ソイツが事態を指す例は、28 例中 23 例が［ソイツ＋ハ］または［ソイツア］であることから、助詞「ハ」との関係も示唆されるが、紙幅の関係から今回は指摘にとどめる。

5. 指示対象の拡大に関する考察

ここまでの観察を踏まえ、近世後期に起こったイツ形指示詞の指示対象拡大についての考察を述べる。

5-1. 中世末～近世前期のイツ形指示詞動向

『日葡辞書』『日本大文典』にコイツとアイツが立項されていることから、少なくとも両者については、中世末期ごろには一般に使用される語であったと考えられる。中世末～近世について、岡﨑（2010）は指示詞のコソア体系が整備される時期であるとし、李（2002）も指示対象のカテゴリに合わせて語形が整備される時期としている。よって、そのような流れの中で当該時期にソイツも広く使用されるようになり、ヒトを指す指示詞としてのイツ形指示詞が成立したものと推測される。

5-2. 近世後期の用法拡大について

本発表における調査結果から、イツ形指示詞の用法拡大はコイツにおいて顕著であったことが示される。ヒトを指していた語がヒト以外に使用される場合、そこには少なからず擬人法的な修辞法が関わると考えられる。よって、イツ形指示詞は近世前期に「個体としてヒトを指す」を基本義として成立し、擬人法的にモノを指す用法を獲得したことを主張したい。このような修辞法は、対象を自己の領域にあるものとして扱うコ系と相性がよく、結果、指示対象の拡大はコイツにおいて顕著に起きたと考えられる。

アイツにおいては、近世後期に入ってもモノを指す機能がそれほど発達しなかった可能性が考えられる。これはア系の指示領域が、コ系に比べて擬人法的な操作と相性が良くなく、そのような表現を用いることが稀であったからではないか。

このようにしてモノを指す用法を獲得したため、現代語でもイツ形指示詞はモノをヒトに準ずるものとして指し示しており、レ形指示詞がヒトを「モノ扱い」（近藤 2000：569）していることとは本質的に異なると考えられる。つまり、イツ形とレ形との間には、基本的な指示対象がヒトであるかモノであるかという点で、差違を認めることができる。

6. まとめ

本発表ではイツ形指示詞の指示対象について検討し、特定の個体としてヒトを指すことを基本義としていることを主張した。また、近世後期に起きた指示対象拡大の過程を踏まえ、アイツにはモノを指す機能が発達していないことについても指摘した。これらは、近世期におきた指示詞全体の整備の中で起きた現象であると考えられる。ただしソイツについては議論を割くことができなかったため、今後の課題としたい。

参考文献

João.Rodrigues 原著、土井忠生訳註（1955）『日本大文典』、三省堂

岡﨑友子（2010）『日本語指示詞の歴史的研究』、ひつじ書房

金水敏、岡﨑友子、曺美庚（2002）「指示詞の歴史的・対照言語学的研究：日本語・韓国語・トルコ語」、生超直樹編『シリーズ言語科学 4　対照言語学』東京大学出版会、pp.217-247

金水敏、木村英樹、田窪行則（1989）『日本語文法セルフ・マスターシリーズ　4　指示詞』、くろしお出版

近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』、ひつじ書房

佐久間鼎（1951）『現代日本語の表現と語法（改訂版）』、厚生閣

寺田智美（2014）「代名詞の史的変遷」、中山緑朗、飯田晴巳監、沖森卓也、山本真吾、木村義之、木村一編「品詞別学校文法講座　第 2 巻　名詞・代名詞」、明治書院、pp.262-293

土井忠生、森田武、長南実（1980）『邦訳日葡辞書』、岩波書店

李長波（2002）『日本語指示体系の歴史』、京都大学学術出版会

調査資料・コーパス

式亭三馬「浮世風呂」、『日本古典文学大系　63』、岩波書店

式亭三馬「浮世床」、『新編日本古典文学全集　80』、小学館

国立国語研究所(2025)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(バージョン 2021.03, 中納言バージョン 2.7.3, 分類語彙表情報 2025.03）https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/（2026 年 4 月 5 日最終確認）

国立国語研究所（2026）『日本語歴史コーパス』バージョン 2026.3 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/（2026 年 4 月 5 日最終確認）

北陸諸方言における主語・目的語の格標示
―動作主性・有生性・主題性の関与する示差的項標示―

松倉　昂平（金沢大学）　米村　雪乃（東京外国語大学博士後期課程）

1. 目的・概要

本発表の目的は、北陸諸方言の基本的な格配列（主語・目的語の格標示）の記述とそこに観察される示差的項標示（2.1節参照）を引き起こす要因の解明である。当地において主語は主としてゼロ標示（無助詞）で現れるかまたは情報構造に関係なく用いられる主格形式 =アで標示され、目的語は主としてゼロ標示で現れるか対格形式 =オ を伴う。

(1) に石川県白山市河原山方言のデータを一部例示する。(1a) の人間主語「太郎」には主格標示 =ア が必須でゼロ標示（∅）は非文となる一方、(1b) の無生物主語「看板」や (1c) ではゼロ標示も許容される。(1a) と (1b)(1c) の比較から、主語の有生性や情報構造がその格標示に影響を与える示差的主語標示の存在が窺える。

(1)　a. タロー{ア／*∅}　タオレトッタ　「（部屋の中を見たら）太郎が倒れていた」
　　b. カンバン{ナ／∅}　タオレトッタ　「（外を見たら）看板が倒れていた」
　　c. タロー{ア／∅}　ドコデ　タオレトッタガヤ　「太郎はどこで倒れていたんだ」

目的語についても有生性や焦点性が関与する示差的目的語標示が各地で確認されている。(2) に福井県三国町安島方言のデータを例示する。(2a) の人間目的語には対格標示 =オ が必須でゼロ標示（∅）は非文となる一方、(2b) の無生物目的語ではゼロ標示も許容される。

(2)　a. センセア　ムスメ{オ／*∅}　サガシトッタ「先生が（自分の）娘を探していた」
　　b. センセア　トケー{オ／∅}　サガシトッタ「先生が時計を探していた」

また本発表では北陸3県の6地点の調査結果を対照し北陸地方内部の格体系の地域差・多様性を明らかにする。従来、富山市方言は主語・目的語ともにゼロ標示を基本とするいわゆる「中立型」の格配列を有すると解釈され得ることが知られてきたが（小西2022）、周辺地域（富山県山間地域や石川・福井両県）に目を向けると、むしろ上に例示したように主語・目的語を有形標示する地域が広いことが明らかになっている。

特に主語標示に関しては、主格形式としての =ガ も主題形式 =ワ も欠けているあるいは不活発な言語体系[1]において、どのような格標示・情報構造標示が行われるのかという点に関心が寄せられる。

2. 先行研究

2.1 示差的項標示とは

本発表で注目する示差的項標示（differential argument marking, DAM）とは同一の文法関係・意味役割を有する項が名詞句の内在的な性質や情報構造等に応じて異なる標示を受ける現象である（Witzlack-Makarevich & Seržant 2018など）。日本語学ではあまり用いられない呼称であるが現象自体は共通日本語にも存在し、例えば節のタイプに応じた主語標示のガノ交替 (3) や、情報構造に応じたガとハの交替 (4) もまた（ガとハをparadigmaticな関係にあると見れば）DAMの一種とみなしうる。

(3)　a. 花｛が／*の｝散っている。　　b. 花｛が／の｝散っている道。
(4)　a. あの桜並木が見えるかい、もうすっかり花｛が／は｝散っているよ。
　　b.「今週末まだお花見間に合うかな。」「もう花｛#が／は｝散っているよ。」

(3a) のように、一方の標示のみ適格でもう一方の標示は非文と判断される現象として観察されるDAMがある一方、(4) のように、語用論的なあるいは談話・文脈上の要因に応じ

[1] 北陸方言における主題・とりたて形式「ワ」の不使用傾向については山田 (2000) に指摘がある。

て複数の標示を許容するあるいは使い分けるDAMもある。いずれにせよ示差的標示を引き起こす条件およびその機能（もしあれば）の解明が言語記述上・類型論上の課題となる。

2.2 日本語諸方言における示差的項標示

全国各地の日本語諸方言において項名詞句の有生性や情報構造が関与する示差的項標示の存在が確認されている。東北・北関東方言では目的語名詞句の有生性が対格標示の有無を決定する主要因となることが知られる[2]。例えば茨城県水海道方言（佐々木2004, 2006）では有生の目的語のみ対格形式 =ゴド で標示され無生の目的語は対格標示をとると非文となる（佐々木2004: 46）。主語は基本的にゼロ標示となるため、有生名詞においてはA, Sがゼロ標示、P[3]が対格標示される「対格型（有標対格）」、無生名詞においてはA, S, Pいずれもゼロ標示の「中立型」の格体系を有することになる（表1）。このようにDAMは同一言語内に複数の格配列を併存させる要因となることがある。

表1　茨城県水海道方言の格体系（佐々木2006:19(33) 一部改変）

	有生	無生
主語（A,S）	-Ø	-Ø
目的語（P）	-ゴド	-Ø

また九州方言の一部では主語名詞句の動作主性と有生性が2種類の主格形式（ガ系とノ系）の分布を決定する要因となることが知られる[4]。例えば福岡県博多方言（坂井2022）では1, 2人称代名詞A, Sや3人称Aはガで標示されるが3人称Sはおおよそノ（一部ガ）で標示される（表2）。すなわち動作主性・有生性が高い主語ほどガ系、低い主語ほどノ系で標示される。またSaとSp[5]が異なる標示を受ける「分裂自動詞性」が有生性階層の一部（博多方言では親族･固有名詞）において観察される。

表2　福岡県博多方言の格体系（坂井2022:120 表4 一部改変）

	1,2人称代名詞	親族・固有	人間普通・動物・無生物
A	ガ	ガ	ガ
Sa			ノ
Sp		ノ	
P	バ	バ	バ

さらに本州の中央に位置する京都市方言でも焦点主語の格標示（ガか無助詞かの選択）における有生性の関与と分裂自動詞性が報告されている（竹内・松丸2019）。

以上のように全国各地の諸方言において、統語的性質（AかSかPか）や情報構造だけでなく項名詞句の有生性や動作主性といった項に内在する意味的性質が主語・目的語の格標示に関わること（そしてその結果としての示差的項標示や分裂自動詞性）が近年確認・報告されており、その他の地域においても体系的な調査を実施する必要があると思われる。

3. 調査方法

本稿中の用例は2025年6月～2026年4月にかけて実施した発表者の現地調査（共通語文翻訳式の調査）で収集した。調査地点は北陸三県の6地点（富山市城北町、石川県七尾市松本町、金沢市小立野、白山市河原山町、福井県坂井市三国町安島、大野市高砂町）である[6]。

4. データ・考察

4.1 文焦点環境における基本的な格配列／動作主性・有生性（人称）の関与

節タイプを主節、情報構造を文焦点（中立叙述）に固定し、地点別に基本的な格配列を

[2] 仙台市方言（玉懸2002）、茨城県水海道方言（佐々木2004）、福島県北部方言（白岩2023）など。
[3] 他動詞主語をA、自動詞主語をS、目的語をPで表す。
[4] 鹿児島県甑島里方言（坂井2019）、福岡県博多方言・熊本市方言（坂井2022）、福岡県柳川市方言（松岡2024）など。
[5] Saは動作主的な自動詞主語、Spは被動者的な自動詞主語を表す。
[6] 調査協力者の生年は次の通り：1949年生女性（富山）、1947年生男性（七尾）、1939年生女性（金沢）、1941年生男性（河原山）、1941年生女性（安島）、1942年生男性（大野）。高年層話者にご協力頂いた。

示す。2.2節の表2と同様に、項名詞句の動作主性の高低（A > Sa > Sp > P）と有生性の高低という2つのパラメータを掛け合わせた「クロス階層」（下地2019）を用いて、両階層と格標示の関係を体系的に整理する（表3-8）。なお表中の“X／Y”はXとYを併用するがXの方が第一回答として挙がる（ことが多い）形式であること、“X(／Y)”は一部の条件下に限りYが用いられる（＝Yが使えない環境がある）ことを表す。

4.1.1 中立型

富山市では主語・目的語いずれも原則としてゼロ標示となる中立型の格配列が確認された（表3）。小西 (2022) など先行研究の記述を追認する結果である。AとPの識別には語順が重要な役割を果たすようで、相対的な有生性あるいは世界知識よりも語順（＝AがPに先行する）によって解釈が決定する (5)。

(5)　クリ　タヌキ　タベトッタ「｛栗が狸を／*栗を狸が｝食べていた」

表3　富山方言の格体系

	1人称・2人称	親族・固有	人間普通	動物	無生物
A,S	ø				
P	ø				

4.1.2 対格型（有標対格）／中立型

大野市では主語が原則としてゼロ標示となる一方、目的語は有生性が高いほど対格標示を、有生性が低いほどゼロ標示を選好する (6)（表4）。Pを有形標示する対格型（有標対格）とA, S, Pすべてゼロ標示となる中立型が有生性の高い所と低い所に併存する、東北・北関東方言（2.2節表1参照）と類似の格配列を有する。

(6) 人称・有生性が目的語標示に関与する例（大野）

a. センセー　ウラ｛*ø／オ｝ サガイテタンヤ「先生が私を探していたんだ」
b. センセー　オメー｛ø／オ｝ サガイテタンヤ「先生がお前を探していたんだ」
c. センセー　ムスメ｛ø／オ｝ サガイテタ　「先生が（自分の）娘を探していた」
d. センセー　ネコ｛ø／??オ｝ サガイテタンニャ　「先生が猫を探していたんだ」
e. センセー　カサ｛ø／??オ｝ サガイテタンニャ　「先生が傘を探していたんだ」

表4　大野方言の格体系

	1人称	2人称	親族・固有	人間普通	動物	無生物
A,S	ø					
P	オ	オ／ø	ø／オ		ø	

4.1.3 中立型or対格型（有標対格）／対格型（有標主格）

七尾市と金沢市では人称に基づく示差的項標示が確認された（表5-6）。1, 2人称代名詞主語は基本的にゼロ標示である一方、3人称名詞主語は主格標示とゼロ標示を併用する (7)。金沢市では1, 2人称代名詞目的語が対格標示をとりうる一方、3人称目的語は原則として対格標示を許容しない。したがって1, 2人称では中立型（七尾）またはPのみ有形標示し得る対格型（有標対格）（金沢）、3人称ではA, Sのみ有形標示し得る対格型（有標主格[7]）の格配列が成り立つ。

(7) 人称・有生性が主語標示に関与する例（七尾）

a. ｛オマエ／??オマエァ[8]｝ ミズ　ノンドッタ「お前が水を飲んでいた」
b. ｛タロー／◎タロァー[9]｝ ミズ　ノンドッタ「太郎が水を飲んでいた」
c. ｛トシヨリ／◎トシヨリャ｝ ミズ　ノンドッタ「年寄りが水を飲んでいた」
d. ｛タヌキ／◎タヌキャ｝ ミズ　ノンドッタ「狸が水を飲んでいた」
e. ｛◎ナスビ／ナスビャ｝ アブラ　スーテシモタ「茄子が油を吸ってしまった」

[7] A, Sを有形標示しPをゼロ標示とする「対格型（有標主格）」は類型論的に極めて珍しい格配列とされる（Handschuh 2014）。
[8] オマエァはIPAで表記すればおおよそ [oma.ẹa]。
[9] ◎ は最もよく使う形を表す。タロァーは [taro̯a:]。

表5　七尾方言の格体系

	1人称・2人称	親族・固有	人間普通	動物	無生物
A	ø(／ア)	ア／ø			
S					ø／ア
P	ø				

表6　金沢方言の格体系

	1人称	2人称	親族・固有	人間普通	動物	無生物
A	ø／ア		ア／ø			ア
S						
P	オ／ø	ø／オ	ø			

4.1.4 対格型（有標主格）or対格型（有標主格対格）

河原山と安島では動作主性と有生性に基づく示差的主語標示が確認されている（表7-8）。主語は原則として主格標示されるが動作主性の低い非人間名詞主語はゼロ標示を許容し得る (1)(8)。安島では自動詞主語がその動作主性の高低を反映して異なる格標示を受ける分裂自動詞性が認められる[10]。目的語は河原山では原則としてゼロ標示、安島では原則として対格標示されるが動物・無生物目的語はゼロ標示を併用する (2)。ゼロ標示の分布に注目すれば河原山に能格型（A／SP）、安島に活格型（ASa／SpP）の配列を見いだすことはできるが、有形標示の分布に基づけば対格型（AS／P）が基本にあると言える。

(8) 動作主性が主語標示に関与する例（安島）

a. ｛*タヌキ／タヌッカ｝ クリ　クトッタンジャ「狸が栗を食べていたんだ」
b. ｛*タヌキ／タヌッカ｝ アルイトッタンジャ「狸が歩いていたんだ」
c. ｛?タヌキ／タヌッカ｝ シンドッタンジャ「狸が死んでいたんだ」

表7　白山市河原山方言の格体系[11]

	2人称代名詞	親族・固有	人間普通	動物	無生物
A	ア		ア(／ø)		
S				ア／ø	
P	ø(／オ)				

表8　三国町安島方言の格体系

	2人称代名詞	親族・固有	人間普通	動物	無生物
A	ア				
Sa					
Sp				ア(／?~okø)	
P	オ			オ／ø	

4.2 情報構造の関与

前節では文焦点環境における格体系を概観し動作主性・有生性（人称）の関与を論じたが、本節では観察範囲を述語焦点・項焦点環境にも拡張し、情報構造に関わる条件が格標示の使い分けに関与する例を示す（紙幅の都合上ごく一部の例しか掲載できない）。

4.2.1 定性あるいは主題性

河原山と安島では主語・目的語双方の標示において名詞句が (i) 談話上既出の存在、(ii) 発話現場に存在するもの、(iii) 談話上未出であっても聞き手にとって特定可能あるいは (iv) 状況・文脈から連想可能なもの、のいずれか――すなわち聞き手が指示対象を同定できる定名詞句[12]――であればゼロ標示を許容または選好する。

---

[10] 現在得られているデータに基づくと、安島方言では文焦点環境で (a)「主格標示しか認めない自動詞」と (b)「（条件が揃えば）ゼロ標示を許容し得る自動詞」をある程度明確なカテゴリーとして認められるようであるが、分裂の詳細なあり方・安定性については今後さらなる調査が必要である。

(a) (狸が)歩く、(船が)行く、(バスが)来る、(狸が)逃げる、(雪が)降る
(b) (狸が)居る、(茄子が)枯れる、(狸が)死ぬ、(窓が)閉まる、(看板が)倒れる、(茶碗が)割れる

[11] 河原山・安島方言において語末が母音 a に終わる名詞の主格形は見出し形（ゼロ標示）と同形になる（例：kuma + =a → kuma〈熊.NOM〉）。両方言の1人称代名詞がウラ（河原山）、ンダ（安島）でそれぞれ語末が a であるために、主格標示とゼロ標示の判別が付かず、表から除外している。

[12] 主題を表すハの使用条件として高見・久野 (2006: 185–186) が提唱する「指示対象既知」あるいは普遍的

(9) (i) 既出性が関与する例（河原山）
a. {*トッショリ／トッショリャ} エーガ　ミトッタ「年寄りが映画を見ていた」
b. ソン {トッショリ／トッショリャ} ナン　シトッタガヤロ
「その年寄りは何をしていたんだろう」

(10) (iii) 特定可能性が関与する例（a, b は安島方言、c, d は河原山方言）
a. {*チャワン／チャワンガ} ワレトッタワ「茶碗が割れていたよ」
b. ワレノ {チャワン／チャワンガ} ワレトッタワ「お前の茶碗が割れていたよ」
c. センセア　ネコ {?ø／オ} サガイトッタ
「（猫を飼いたくて）先生が猫を探していた」
d. センセア　ネコ {ø／??オ} サガイトッタ
「先生が（自分の飼っている）猫を探していた」

(11) (iv) 連想可能性が関与する例（河原山）
a. バス {?ø／ア} アッチカラ　クルゾ
（道で、近づいて来るバスに注意するよう指摘）「バスが向こうから来るぞ」
b. バス {ø／ア} アッチカラ　クルゾ
（バス停で、待っていたバスが来たことを教える）「バスが向こうから来るぞ」

(10)(11) から分かる通り、主題であるかどうかではなく、主題になりやすいかどうかという性質がゼロ標示の認可に関与的である。ただしこの2方言において2人称代名詞を含む有生性が高い名詞句は上記の条件にあてはまってもゼロ標示が許容されにくい傾向にある。この定性（主題性）条件よりも有生性条件の方が優先されるためと考えられる。

定性は多くの言語で示差的目的語標示に関与するが、通言語的には定目的語が有形標示されるのが普通で（Comrie 1989, Aissen 2003など）、河原山・安島方言のように逆に定の目的語がゼロ標示となり不定目的語が有形標示される体系は極めて珍しい（Lyons 1999: 48–49）。また定性が関与する示差的主語標示も極めて稀なようである（Comrie 1981: 123）。格体系の類型論に希少な事例を提供する言語である可能性はあるものの、定性以外の概念で説明可能かどうか等さらに慎重に検証していく必要がある。

4.2.2 焦点性

富山市と七尾市では、項焦点（七尾では対比焦点）下にある項が有形標示を許容または選好する例を確認している (12)。例えば目的語に対格標示を伴うと原則として対比焦点の解釈が生じるため、(12a) において対比焦点解釈を避けるならばゼロ標示のみが適格となる。

(12) 対比焦点性が関与する例（七尾）
a. ハナコ {ø／#オ}　ツレテケァ イカッタンニ
「（お前は）花子を連れていけば良かったのに」【述語焦点解釈】
b. タロァー　オラデノーテ　ハナコ {ø／オ}　サガイトッテント
「太郎は私じゃなくて花子を探していたんだって」

富山市や七尾市では主格・対格形式がむしろ項焦点（対比焦点）を標示する形式として機能していると言える。特に対比焦点がDAMを引き起こす要因として報告される例はほとんどなく（諸隈2023: 133）、これもまたDAM研究に貴重なデータをもたらす発見である。

5. まとめ

富山市を除く5地点で動作主性・有生性（人称）が関与する示差的項標示（DAM）が確認された（4.1節）。金沢・安島・大野の3地点では目的語名詞句の有生性を反映する示差的目的語標示、七尾・金沢の2地点では主語名詞句の人称（1, 2人称か3人称か）に基づく示差的主語標示が確認されている。河原山・安島の2地点では主語標示に動作主性と有生性の

な認知カテゴリーとしての “identifiability” (Lambrecht 1994) とも重なる部分が大きい。(iv) はある情報が聞き手の意識に上っているかどうかという概念 “activation states” (Chafe 1987) とも関連する。意識の片隅にでも上っていれば（“semi-active concept” であれば）ゼロ標示を許容し得ると言えそうか。

両方が関与し、安島では有生性が低い主語においてSaとSpが異なる標示を受ける分裂自動詞性が認められた。さらに、これら項名詞句の内在的な性質に基づくDAMの上に、情報構造（定性・主題性あるいは焦点性）に基づくDAMが重なることがある（4.2節）。

有標主格（4.1.3, 4.1.4項）、定性が関与する示差的主語標示（4.2.1項）、対比焦点が関与する示差的目的語標示（4.2.2項）など類型論的に珍しいあるいは報告の少ない現象も数多く発見された。

北陸内部の地域差に関しては、富山市で徹底的な中立型[13]、石川県各地で対格型（有標主格）の分布が確認された。富山・石川両県は地理的に隣接し語彙・文法面で多くの共通点を有するものの、格体系に関しては全く異なる類型に属することが明らかになった。福井県内の2地点でもそれぞれで全く異なる格体系が確認されたが、県内の地域差を詳細に描き出すには調査地点をさらに増やす必要がある。

今後の課題としては、話者の内省に頼る調査（エリシテーション）に加えて、自然談話を用いた定量的な分析を通じて、本発表で示した仮説を実証していく点が挙げられる。

謝辞

本研究はJSPS科研費 JP24K16087およびJST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2185の支援を受けたものです。本発表は国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」の研究成果です。

参考文献

小西いずみ (2022) 「富山市方言における格成分のゼロ標示―二重対格相当構文が可能になることに着目して―」木部暢子・竹内史郎・下地理則編『日本語の格表現』91–108. 東京: くろしお出版.
坂井美日 (2019) 「甑島方言の格について」窪薗晴夫・木部暢子・高木千恵編『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』49–81. 東京: くろしお出版.
――― (2022) 「九州方言の格表現–熊本市方言と博多方言の基本配列を中心に–」木部暢子・竹内史郎・下地理則編『日本語の格表現』109–136. 東京: くろしお出版.
佐々木冠 (2004) 『水海道方言における格と文法関係』東京: くろしお出版.
――― (2006) 「第1章 格」佐々木冠ほか編『シリーズ方言学2 方言の文法』1–46. 東京: 岩波書店.
下地理則 (2019) 「第1章 現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性」竹内史郎・下地理則編『日本語の格標示と分裂自動詞性』1–36. 東京: くろしお出版.
白岩広行 (2023) 「福島県北部方言の主語・目的語の格標示」『立正大学文学部論叢』146, 155–178.
高見健一・久野暲 (2006) 『日本語機能的構文研究』東京: 大修館書店.
竹内史郎・松丸真大 (2019) 「京都市方言における情報構造と文形態―格標示とイントネーション標示による分裂自動詞性―」竹内史郎・下地理則編『日本語の格標示と分裂自動詞性』67–102. くろしお出版.
玉懸元 (2002) 「仙台市方言における格助詞相当形式「ドゴ」の用法」『国語学会2002年度秋季大会予稿集』127–132.
松岡葵 (2024) 「福岡県柳川市方言の記述研究」九州大学博士論文.
諸隈夕子 (2023) 「ケチュア語アヤクーチョ方言の示差的目的語標示と情報構造」『言語研究』163, 111–138.
山田敏弘 (2000) 「北陸方言における主題・とりたてを表す「は」の運用について」『日本方言研究会第70回研究発表会発表原稿集』59–66.
Aissen, Judith (2003) Differential object marking: Iconicity vs. economy. *Natural Language and Linguistic Theory* 21(3). 435–483.
Chafe, Wallace L. (1987) Cognitive constraints and information flow. In Russel S. Tomlin (ed.) *Coherence and grounding in discourse*. 21–51. Amsterdam: John Benjamins.
Comrie, Bernard (1981) *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*. Oxford: Blackwell.
――― (1989) *Language universals and linguistic typology: Syntax and morphology*, 2nd edn. Oxford: Blackwell.
Handschuh, Corinna (2014) *A typology of marked-S languages*. Berlin: Language Science Press.
Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form*. Cambridge: Cambridge University Press.
Lyons, Christopher (1999) *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press.
Witzlack-Makarevich, Alena & Ilja A. Seržant (2018) Differential argument marking: Patterns of variation. In Ilja A. Seržant et al. (eds.) *Diachrony of differential argument marking*. 1–40. Berlin: Language Science Press.

[13] ただし発表者は最近の現地調査で、富山市内の山間地域（富山市八尾町）において中立型の格配列ではなく主語を主格形式 =ナ（=ア）で標示する対格型（有標主格）の格配列を確認している。富山県内の格体系の地域差（平野部と山間部で異なる？）についても今後の研究課題としたい。

文政期備中の膝栗毛の方言資料的価値と「疑問詞＋仮定形」型疑問文の成立

三宅（みやけ） 俊浩（としひろ）（愛知学院大学） tmiyake@dpc.agu.ac.jp

1. はじめに

・方言史研究……現代方言分布＋中央語史＋**過去の方言資料**（彦坂 1997 など）

・十返舎一九『東海道中膝栗毛』（1802 年～）の影響➡地方戯作者の地元を舞台とした模倣作が各地で出来。広い地域で 19 世紀前半の方言史文献が見出せる可能性（尾崎 1929）。

・事例：尾崎（1929）で言及された、備中井原人「三宅快幸」作、井原舞台の滑稽本『続膝栗毛添編』（文政 11=1828 年。名古屋市蓬左文庫蔵。以下『添編』）の方言資料的価値を検討。

・用語： GAJ…『方言文法全国地図』、FPJD…全国方言分布調査　※歴史文献の用例引用に際し、現代の人権意識に照らして不適切な差別的表現が現れるが、不当な差別を助長・肯定する意図はない。

2. 『添編』について

・上下巻二冊。上巻 34 丁、下巻 29 丁。文政 11 年に作成後、嘉永 3=1850 年に補修し製本し直したもの（上巻頭序文より）。嘉永 3 年に「当星六十八」（68 歳）。

・上巻冒頭「里俗言解（さとびごとをとく）」…作品内の方言「ぢないふ」「なんちう事を」「何じゃけに」「うら」「でほうだア」などの 15 項目を予め挙げ、意味や語源を注釈。方言使用に自覚的。

3. 『添編』の音韻・文法・語彙

・**[検討方法]** 1.中央語文献に見られない現象、2.近世(以前)の中国地方方言の記述との整合性、3.現代方言の分布から文政期に存在したと推定される形式の有無、を見る。

3.1 音韻：①ai 連母音、②格助詞ヲの融合、③ト言ウ＞チュー

①(1) 中国のものは発音する時、開がる発音を過大にして、口を開き過ぎて（略）例へば、Narumai（なるまい）の代りに Narumà（なるまぁ）といふ。　（ロドリゲス日本大文典）

(2)a. こんたの嚊（かゝ）あの顔が見たァわあ。（添編上 21 ウ）　b. めつそふもなァ。（添編上 21 ウ）

②(3)〈現代備中〉Ci ヲ→C^{j}uː、Ce ヲ→C^{j}oː（友定 1977）。GAJ6 図「酒を」山陽全域 sak^{j}oː。

(4)〈18C 初頭美作方言歌〉暑き日や塩硝はたく人のてう手ノ事也。ウハ助語（西国曲 巻 3 1717 年）

(5)a.（犬を）いかの下（左：床）へはあらす（三宅注：入らす）な。石（いし）ウぶつつけへ／＼。　（[石を]添編下 8 オ）

b. コリヤウ壱匁三分ちうたか。　（[これを]添編上 22 オ）

③(6)備後人著『俚諺漫録』（文政 6=1823 年）…「山陽の民は何と云（ママ）といふと云ふべきを何んちふといふ。」　◎『添編』でも(5b)のように徹底して「ちう」。

※①②③は『滑稽道中宮島土産』（1851 年）にもあり（三宅 2025）、中央語文献には見えない。

3.2 文法：④バ行音便、⑤一段動詞意志形、⑥理由ケニ、⑦疑問詞疑問、⑧「分」相当

④FPJD（2010 年頃）→GAJ（1980 年頃）→広戸惇調査（1960 年頃）→文部省口語法調査（1903 年）と遡ると、バ行動詞「ウ音便 vs 撥音便」の境界線が関門海峡→広島西部→広島東部→岡山中部。文政期備中はウ音便に違いない。

(7)a. よふで見う。（[呼ぶ]添編上 22 ウ）　b. 茶筌をよふでがうもんするぞ（添編下 21 ウ）

⑤中世京都「見ュー／投ギョー」→後期上方江戸「見ヨウ／投ゲヨウ」（ヨウ分出）。現代岡山

方言「見ュー／投ギョー」。文政期備中にヨウ分出はあるまい。

(8)買(かう)て見せう。(添編上 20 ウ)　(7)a. よふで見う。　…ヨウ分出例は見られない。

⑥(9)『俚諺漫録』…「京畿にてそうしやさかひといふことを備中備後人はそうしやけにといふ」

(10)魚売府丁(いをうりふてう)で七をタナといゝ五をゲヱと云ますけに…事でございます(添編上 23 ウ)

⑦虫明(1958)「疑問詞の係結」…疑問詞疑問文末が仮定形になる現象。「どこできもの一着りやー(どこで着物を着るか)／どこが悪けりやー(どこが悪いか)」。

(11)a. なにうぬかしやァ(添編上 21 オ)、 b. なんちう事をさんすりやァ(添編上 29 ウ)

⑧GAJ52 図「百円ぶんください」では、旧備中備後地域にガーがある。『添編』にもある。

(12)コリヤ／＼。其じやこウ十文(もん)がァくれへヤ　(添編上 21 オ)

3.3　語彙：⑨ママカリ、⑩茶筌

⑨魚「サッパ」の方言名「ままかり(飯借)」。酢漬けが岡山県の郷土料理。文政 8=1825 年『物品識名拾遺』に「マヽカリ 備前 コノシロノ類ナリ」。『添編』には「ままかれゑ」で現れる。

(13)(魚売)しよせん貴様が買やうな。まゝかれゑはけふはなあけに　(添編上 20 ウ)

i⇔e の揺れか。揺れは『添編』にもある。(14)「ゑのふ」は恐らく「いのう(担・荷)」。

(14)ツヂナラ(左：四十四分)のさあら(左：鰆)ァ。うんと片荷(かたに)有たけゑのふ　(添編上 20 ウ-21 オ)

⑩(15)『日本国語大辞典第二版』「茶筌」の項…「江戸時代、(略)中国地方に多く、百姓とは区別され、水呑百姓の下に位置づけられ、不当に差別を受けた。」

(16)『俚諺漫録』…「備後に茶せんと呼一種類あり。屠児(えた)の下に属す。然れども牛馬を屠る業はせず　村里の為めに盗賊をいましめ悪人番をするのみにて(略)」

(7b)茶筌をよふでがうもんするぞ。※弥次を盗賊と思い、激怒する宿亭主の発言

★①-⑩は同時期の上方・江戸文献には見られないが、近世中国地方方言の断片的記述や現代方言の状況と整合する。『添編』は文政期備中方言資料としての使用に耐えると考える。

4. 諸方言における「疑問詞＋仮定形。」の成立 —❶分布と❷『添編』と❸中央語史から—

・虫明(1958)や三宅(2015)に示される例を、構文から 3 つに分けて考える。

【A：体言ナラ】(どこなら？)　【B：用言ノナラ】(どこへ行くんなら？)

【C：用言仮定形】(どこへ行きゃー？)　【C'：用言タ仮定形】(どこへ行ったら？)

4.1　ナラについて —【A体言ナラ】と【B用言ノナラ】ー

【A体言ナラ】GAJ256 図「それは何か。」の分布：ナラ…岡山広島・四国・奈良南部、ナ/ナー…九州北西部・四国・和歌山・三重県牟婁・石川県白峰

・和歌山と白峰のナ/ナーも、かつてはナラだった(村内 1953、山口 2013、新田 2009)。両地域ともナ/ナー/ナラは疑問詞疑問文でのみ使用されるという。

・各地方言記述を見ると【A体言ナラ】の地域には【B用言ノナラ】がある(九州除く)。

・【B】言語島の白峰だけは用言にノを介さずナラが接続(白峰方言はゼロ準体方言、新田 2009)。

(17)われがとこに何があるゅなら。(白峰の昔話　新田 2009:32。引用に際し「ゅ」を追記)

❶分布から…京阪を中心とした周圏分布。かつての京都に、ナラにつながる形式があった。

[時期]…九州カ(中古京都的)、中国四国ゾ(中世京都的)とナラ、近畿ヤ(近世京阪的)。

(18)a.「まろは何か。ただあらむにまかせてを」など言ひて、　（枕草子；中古）
b.「其ハ何ゾ」ト問ヘバ　（今昔物語集 20-10；中世）
c.「今のはなんぢや。女子ども、有明の灯も消えた。」　（曾根崎心中；近世前期）

・するとナラは中世京都にあった形式（の変化形）と推定される。

❷方言史文献（『添編』）から…【B用言ノナラ】より更に遡ると思われる「ノナリャ」。

(19)地黄煎うりにつきやァるくやうに。なにううろ／＼するのなりやァ　（添編上 20 ウ）

・幕末土佐、武市瑞山の審問記録の例(20)も、疑問詞＋ナリャの例かもしれない。

(20)（瑞山を取調する「奸吏」の発言）「只存じん＼／と云ふて、マダかくすか、此間よりヒドイ拷問被仰付が、明白に申せ、ドウナリヤ、　（瑞山会編 1912：726）

・**ナレバ**＞ナリャ＞ナラ、だろう（ナラバからはナリャになるまい）。
・　［仮定条件］　雨が降った**ら**涼しくなるだろう　**←タラバ（未然バ）由来**
［偶然確定条件］雨が降った**ら**涼しくなった　**←タレバ（已然バ）由来**（小林 1967）

(21)a.「(茸を) 取てミたれバ、くわれさうなくさびらでもござなかつた（虎明本　1642 写）
b.「こな様の顔見たりや胸もおほかた静まつた。」　（薩摩歌　1704 年）
c. 店でたゝみざんをして見たら。今夜はおいでんとあつた　（箱まくら　1822 年）

・Takubo(2025)は岡山方言の疑問詞疑問のナラをナレバ由来と推定。(19)(20)はそれを支持。
・ただ疑問詞＋ナレバがどのようなものであったかは明らかでない。→❸中央語史へ

❸中央語史から…中世京都方言には**「疑問詞＋ナレバ、～～」型疑問文**が見られる。

(22)a. 堂ノ後ノ方ニ論義ヲ出ス音(こゑ)有リ。（略）講師、「何計ノ寺ナレバ、我レニ対(むかひ)テ論義ヲセム為(ざる)ナラム」ト疑ヒ思テ　（今昔 11-2）
b. その水を見れば、濃くすりたる墨の色にて流れたり。あやしき水の色かなと見て、「これはいかなる水なれば、墨の色なるぞ」と問へば　（宇治拾遺 8-4）
c.（文覚が死んだ直後）天童二人、滝のうへよりおりくだり、文覚が頂上より、手足のつまさき、たなうらにいたるまで、よにあたたかにかうばしき御手をもって、なでくだし給ふとおぼえければ、夢の心地していきいでぬ。(文覚→天童)「抑いかなる人にてましませば、かうはあはれみ給ふらん」と問ひ奉る。　（平家物語　巻 5）

(23)a. 何たるいたづら物なれば、宣公をばたぶらかすぞ。　（『毛詩抄詩経　二』p. 161）
b.（見付の者）「ああ」くちあき、てをひろげ…略…（すっぱ）「やいおのれは、何ものなれば、口をあいてああとはいふぞ　（虎明本　磁石）
c. 買わうずと言うて、どしめくに因って、その女房の親類これを見て何事なれば、怪しからぬ肴道具の買い様ぞと怪しむれば　（天草伊曽保）

［ナレバの組成］コピュラのナリ已然形＋バ。原因理由の確定条件。
ex.(22b)の直訳：「どんな水だから墨の色なの？」**（現代語では非文）**。

・中世京都文献には名詞直接形（ex. 何ナレバ）、つまり【A】相当のみ見られ、用言節接続例（ex. 何のあるナレバ）は見られない。各地方言の【B用言ンナラ】（ex. 何があるンナラ）は、各地方言で拡張した用法と思われる。

［疑問詞ナレバの成立］古代語に存した理由を問う表現「イカナレバ（直訳：どうだから）」

の「イカ」の位置に種々の疑問詞が入ったものか。「イカナレバ」は出現が早い(24)。

(24) 春くれば たきのしらいと いかなれば むすべどもなほ あわになる覧

(貫之集　945 頃、『日本国語大辞典第二版』)

［ナレバの固定化］〈コピュラ部分〉鎌倉期は「にてましませば」(22c)のように尊敬語化を許すが室町期には「何者でござれば」などは無い。**〈条件形部分〉**鎌倉期の原因理由は已然バ⇔室町期にはホドニ。虎明本の原因理由形式はホドニ 72%、ニヨッテ 10%、已然バは 7%という(小林 1973)。原因理由の意味がナレバに残っていれば「何者｛じゃほどに／じゃによって｝、〜〜。」等も見られてよさそうだが、無い。形態的に「ナレバ」で固定化している。

［待遇］鎌倉期は(22c)のように尊敬語化例があるが、室町期には無く、また虎明本の半数が「やい」(22b)と共起する（疑問詞ナレバ 13 例中 6 例)。待遇度が低下したと見られる。

(25) iare（やれ）も「もし、おい」という呼びかけの語、しかしこれは目下の者に用いる。

（略）iai（やい）も又「もし、おい」の意であるが、これはさらに下等である。

（コリャード日本文典　1632 年）

・現代方言ナラについて「これは品位の低い単純な問ひかけの言葉であって、主として男子の言ふもの」（藤原 1949:496；愛媛県大三島方言)、「岡山県、広島県で盛んなものであるが、上品さはない」（神鳥 1982)。室町期京都方言の「疑問詞ナレバ」の特徴と一致する。

［文の構造］「疑問詞ナレバ、既知事態」の構造。例えば(23b)は直前に「ああ」と言った相手に対し「何ものなれば、口をあいてああとはいふぞ」。

・既知事態であるから言語化されない場合（＝後件を省略して「疑問詞ナレバ。」で言い切る場合）もあったのではないか。(26)は大風で進行を阻まれた始皇帝が、大風は「湘君」（女神）の所為と知り、怒りながら博士に尋ねる場面。衣畑 (2014 : 26) は(27)と述べる。

(26)　湘君ト云ハ、何タル神ナレハ、我カトヲルヲハ、不知歟トテ怒ルソ。(『史記桃源抄の研究 一』p. 395)【原漢文：逢大風幾不得渡。上問博士曰「湘君何神」(『新釈漢文大系』)】

(27) もしこれ(引用者注;「何タル神ナレハ、我カトヲルヲハ、不知歟」)を一つの疑問文と見れば、唯一文末のカが疑問詞疑問文で使われる例となる。しかし、「何タル神」は史記本文の「湘君何神」に対応するものであり、「我ガトヲルヲバ、不知歟」は瑞仙が補足した部分であるため、独立の疑問文として使われた可能性もある。

・発表者も「何タル神ナレバ。」で一文だと思う。近松浄瑠璃(28)も文末ナレバだろう。

(28) これ親仁. まづ和御寮は誰なれば. よい年をして京の町の作法知らぬか. 町所へも断りなく. 人の留守に踏ん込み、畳まで売り払ひ. 捌きはなんとすること（博多小女郎波枕）

ナラの成立まとめ：中世京都方言「疑問詞ナレバ~~、既知事態~~。」

・これが伝播し、北陸・南近畿・中国四国で定着。時期は中世末-近世初期か。はじめは【A 体言ナレバ（＞ナリャ＞ナラ)】で広がり、各地で【B 用言ノナリャ（＞ノナラ)】に拡張。

4.2 C：【用言仮定形】（どこへ行きゃー？）

・Takubo(2025)は岡山方言の【ＡＢ】ナラが推測的疑問を表さないのに対し、【C】「どけー(何所に)有りゃー/何が無けりゃー」が「どけー有るじゃろー（か）/何が無いじゃろー（か)」のようなジャローカ）が表す推測的疑問の意味に近いことを指摘し、【C】は【ＡＢ】とは無

関係に、推量ヤラとの融合化により成立したと推定する。

(29)a. 食べる（母音語幹）　tabe-ru+jara＞taber+jara＞taberjara＞taberja:

b. 書く（子音語幹）　kak-ku+jara＞kak+jara＞kakjara＞kakja:

・しかし、形容詞では「無いやら」から「無けりゃー」になるとは考え難いこと〈形態〉、ヤラは疑問詞疑問文に限られない（30）こと〈統語〉、の説明が難しい。

(30)十月マテニハ、兆ノヨイカ、ナイヤラウ　（『史記桃源抄の研究　五』p. 235）

・さらに分布を考えるに、【ＡＢ】のヤラと関連性を持っていると考えられる。

4.2.1 ❶分布と奈良県吉野郡十津川村方言

・GAJ257 図「誰がやるものか。(反語)」: ヤリャー/スリャー…岡山・四国・奈良県南部。

・奈良県吉野郡十津川村方言でも使用されている（NHK『全国方言資料 8』、国語研究所『方言談話資料』、『文化庁方言緊急調査文字化原稿』を対象に調査）。

・【Ｃ】仮定形終止 11 例、全て疑問詞共起⇔肯否疑問文では 0 例。肯否疑問ではカが主(32)。

(31)a. ドコ　イキャー　どこへ行きますか。　（十津川村小原『全国方言資料 8』p. 219）

b. ドーユ　コト　ユータラ　ヨケリャ。どういうことを言ったらいいんだい。
（十津川村重里　緊急調査文字化原稿）

(32)《肯否疑問》バーサンラワ　ヤッタ　コト　アルカ　ばあさんたちは(樫の渋抜きを)やったことがあるか。　（十津川村小原『全国方言資料　八』p. 201）

・【ＡＢ】は「ナ/ナイ/ナエ/ラ」。肯否疑問文には無く、カが現れる(34)。

(33)a. ドコノ　ヒトナェ。　どこの人だい。　（十津川村重里　緊急調査文字化原稿）

b. （あなたの息子の名前は）ナーンチュノラ。　何というのだい。　（同上）

(34)a. 《肯否疑問》イマー　サイテー　ゴジューマンカ。　今は最低 50 万円か。（同上）

b. 《肯否疑問》ナンカ　キトンノカ。　何か（案内が）来ているのか。　（同上）

・『近畿方言の総合的研究』(pp. 575-607) の方言文訳「一度見に行ってきたらどうだい」…野迫川村「ドーナラ」、下北山村「ドーナラ」、串本「ドーナラ」、十津川村「ドーナエ」。GAJ256 図「それは何か」では上北山村に「何ナラ」、和歌山全域に「何ナ」。

・分布と語形から、十津川村のナも、さらに以前はナラだったろうと思う。

4.2.2 Ｃタイプを持つ方言の共通点

・中国・四国・奈良県南部…全て【ＡＢ】でナラを持つ。【ＡＢＣ】は階層をなす。ヤラ由来とすると偶然の一致だが、そうは考えない。

・ナラはナレバだった時期あり。【Ｃ】は【ＡＢ】で「～ナレバ。」で疑問詞疑問文を終止することに引き寄せられ、用言も「-eba。」で終止するようになる類推作用が働いた結果ではないか。

(35)Ａどこナレバ。/Ｂどこへ行くノナレバ。/Ｃどこへ行ク。＞行ケバ。

	A	B	C
中世京都	○	×	×
九州西部	○	×	×
石川白峰	○	○	×
和歌山	○	○	×
中国	○	○	○
四国	○	○	○
奈良南部	○	○	○

・三宅(2015)には岡山方言疑問詞疑問タ形相当「どけー行っタラ(どこへ行った？)」が挙がる。『添編』ではタリャ(36)。現代岡山方言【Ｃ'】のタラも近世は-eba 形だった。

(36)（宿亭主→弥次）臓物はどうしたりや　〔盗品はどうした？〕　（添編下 20 ウ）

4.2.3 東北日本海側方言 ―本発表にとって例外らしき方言―

・津軽方言について…「na は単純疑問のみに用い（略）、ba は疑問詞疑問のみに用いる（沢

木 1984)」「「誰が行くか」という意味で da egeba と da egwba の二通りの言い方があるが、この二つの中では egeba のほうが古い（沢木 1984)」　※下線引用者付

・「「ナ、バ」は「卑しめ、ぞんざい、投げやり」のニュアンス（略）下待遇」（佐々木 1988）

・津軽版膝栗毛『奥州道中記』(1865 年）や庄内洒落本にも「疑問詞…Ｖ-eba」あり(37)。

(37)a. コリヤこふしたらとへば〔ドウ＋サ変スル已然形のセ＋バ〕　（奥州道中記 p. 82）

b. ヤアわねへら〔＝お前達〕何咄せばや　（庄内洒落本・筬の千言 p. 125 1812 写）

(38)a. コリヤなんだば／＼。〔これは何だ？〕　（奥州道中記　p. 18）

b. なちよたおなこたはね。〔どんな女だい？〕　（庄内洒落本・温泉の垢 p. 169 1798 写）

・バ出現当初から「何ダバ。」なら、動詞接続でも当初から「何話すバ。」になりそうなもの。【ＡＢ】は古くは「(ナレバ＞）ダレバ」だったのではないか（と思うが、同時期の資料では「ダバ」(38)で現れ、立証できない)。

・変化過程は、庄内のタレバ＞タバの変化(39)と同様、何ダレバ＞何ダバになったか。

(39)a. 太鼓枕様の咄したればの、ござへて帰(ゑく)とさ。（庄内洒落本・苦界船乗合咄　p. 383　1867）

b. 台所で刺身作て居だば、茶間で大そ笑音するすけ誰きたんでろと　（同上　p. 388）

	～近世中期（◆推定）	近世後期（実例あり）	近現代（実例あり）
【A】	何[ダレバ]。(*何ダレ。)	何ダ[バ]。　(何ダ。)	何ダ[バ]。　(何ダ。)
【C】	何[話せバ]。(*何話せ。)	何[話せば]。(*何話せ。)	何話す[バ]。(何話す。)

5. おわりに ―本発表の要点―

[1]『添編』は文政期備中方言資料として有用である。[2]分布と『添編』を手がかりにすると、各地の疑問詞疑問文専用の助詞ナラは、中世京都「疑問詞ナレバ~~、既知事態~~。」の残存と推定される。[3]【Ｃ】は「～ナレバ。」に類推し、用言を「-eba」終止させたものだろう。

使用方言史資料：西国曲…勝峰晋風編(1927)『日本俳書大系 蕉門俳諧続集』日本俳書大系刊行会/俚諺漫録…中国民俗学会(1935)『方言叢書第九篇』/物品識名拾遺…岡林清達他(1980)『物品識名 物品識名拾遺』青史社/武市瑞山審問記録…瑞山会編(1912)『維新土佐勤王史』富山房/奥州道中記…藁科勝之(2020)『奥州道中記』北方新社/庄内洒落本…『洒落本大成』/京阪文献は日本語歴史コーパスを使用した他、抄物を調査。　**参考文献**：尾崎久弥(1929)「地方物と方言（上)」『江戸文学研究』7/神鳥武彦(1982)「広島県の方言」『講座方言学 8』国書刊行会/衣畑智秀（2014)「上代から中世の疑問文の様相-データ解釈を中心に-」『福岡大学人文論叢』46-1/小林賢次(1967)「条件表現形式としての「なら」「たら」の由来」『国文学言語と文芸』54/小林千草(1973)「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』94/佐々木隆次(1988)「青森市文末詞の考察」『此島正年博士喜寿記念国語語彙語法論叢』桜楓社/友定賢治(1977)「助詞「を」「に」「は」表示の表現形態　備中方言のばあい」『島大国文』6/新田哲夫(2009)「白山麓白峰の方言特徴と昔話に見られる方言の語法」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』1/彦坂佳宣（1997)『尾張近辺を主とする近世期方言の研究』和泉書院/広戸惇(1965)『中国地方五県言語地図-附アクセント分布図-』風間書房/藤原与一(1949)『日本語方言文法の研究』岩波書店/三宅俊浩(2025)「広島出身戯作者の滑稽本『滑稽道中広島土産』に見える嘉永期広島方言」近代語学会発表資料/三宅知宏(2015)「対照方言研究の試み-不定語疑問文をめぐって-」『鶴見大学紀要』52/虫明吉治郎(1958)「疑問詞の係り結び-中国地方の場合-『国語学』34/村内英一(1953)「文末助詞の考察」『和歌山大学芸学部（人文科学）紀要』3/山口華奈(2013)「和歌山市方言における疑問詞疑問文の文末詞「ナ」『阪大社会言語学研究ノート』11/Takubo,Yukinori.2025.Co-occurrence restrictions between Wh-words and the sentencefinal use of two conditional forms in a variety of Okayama Japanese. *Language in Japan* 2(1)

『日本語歴史コーパス 平安時代編Ⅲ漢文系資料』の公開と活用
―法華百座聞書抄・高山寺本古往来・尾張国解文の公開―

山本久（京都大学）・呉子凡（総合研究大学院大学学生）・田中牧郎（明治大学）・鴻野知暁（大阪大学）・小木曽智信（国立国語研究所）

1 はじめに

本発表では、国立国語研究所が 2026 年 3 月に『日本語歴史コーパス 平安時代編Ⅲ漢文系資料』として公開した 3 資料（法華百座聞書抄・高山寺本古往来・尾張国解文）について、その概要を示すとともに、新公開資料を用いた日本語史研究の展開について報告する。

2 『日本語歴史コーパス 平安時代編Ⅲ漢文系資料』

2.1 法華百座聞書抄・高山寺本古往来・尾張国解文の概要

本節では、3 資料の概要とコーパス化の意義、およびその方法等について説明する。

『法華百座聞書抄』は、天仁 3（1110）年 2 月 28 日から 300 日間にわたって講じられた法華経・阿弥陀経・般若心経の講説（説教・説話）の聞書である。唯一の伝本である法隆寺本は、300 日の講説のうち 10 人の説教僧による 20 日分の講説を収めた抄出本であり、カタカナ主体の漢字仮名交じり文で記されている。院政期の話し言葉を伝える資料として重要視されており、古文學祕籍複製會による複製本、勉誠社文庫による影印が公開されているほか、小林編（1975）に翻刻が収録されている。

（1）昔シ、仏法ニ信ヲイタサス破戒ナルモノアリキ。ソノ名ヲ不信ノ男トイヒキ。
（法華百座聞書抄・二月二九日・香雲房）

『高山寺本古往来』は、平安後期頃成立の往来物（書簡文例集）であり、中世から近世にかけて隆盛した往来物の中で最古のものにあたる。全 56 通の書状から成り、高山寺所蔵『表白集』の紙背に残された写本が唯一の伝本である。文体は和習を含む漢文体（和化漢文）で、院政期～鎌倉初期と推定される豊富な訓点（傍訓・声点・合符・返点）が付されていることから、音韻史や漢文訓読史上の重要資料として利用されてきた。また、書状の内容から平安時代の国衙行政や農業経営の実態を知ることができ、社会史的な観点からも重要な史料とされる。高山寺典籍文書綜合調査團編（1972）に影印・翻刻・訓読文が収録されている。

（2）昨サク日適タマ/＼雖トモ二賜タマフ一拝ハイ謁エツヲ一、　（高山寺本古往来 1）

『尾張国解文』は、永延 2 年（988）11 日 8 日付で、尾張国の郡司・百姓らが国司藤原元命の非法を朝廷に訴えた 31 ケ条から成る文書である。文体は随所に和習を含む和化漢文だが、全体として対句を多用した駢儷文である。平安後期の地方行政の実態を伝える史料として著名であるだけでなく、13 世紀後半から 14 世紀前半頃の古写本 3 点（早稲田大学本・東京大学史料編纂所本・真福寺本）が現存し、いずれも訓点（傍訓・声点・合符・返点、真福寺本のみヲコト点）を含むことから、漢文訓読史上の重要な資料としても知られている。早稲田大学本および東京大学史料編纂所本はカラー画像がインターネット公開されており、真

福寺本も愛知県史編さん委員会編（2009）にてカラー写真が刊行されているほか、宇都宮（2000）で訓読文が公開されている。また、梅村（2020）や森（2024）に注釈・現代語訳が収録される。本コーパスでは真福寺本を主本文とし、冒頭の欠部を早稲田大学本で補った。

（3）一、請被任官府旨裁断、不別租税地子田偏准シテ租税田附加徴官物事、

（尾張国解文・第2条）

2.2 法華百座聞書抄・高山寺本古往来・尾張国解文のコーパス化の意義と方法

従来の『平安時代編』は『枕草子』や『源氏物語』に代表される和文を中心としていたが、2022 年の西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点の公開によって漢文訓読文が収録され、文体の拡張が行われた。今回の公開では更なる文体の拡張を意図し、初めてカタカナ交じり文（法華百座）と和化漢文（古往来・解文）の資料を収録した。資料の選択に際しては、『鎌倉時代編』を含めても未収録だった資料ジャンルを収録できるよう、説教、往来物、文書と多様な資料ジャンルを含むようにした。

3 資料のコーパス化にあたっては、形態素解析辞書「UniDic」と形態素解析器「MeCab」による形態素解析を行った。これに際して、原本のカタカナ交じり文、和化漢文の表記のままでは形態素解析が困難であることから、原本に依拠した漢字ひらがな交じり文のテキストを作成して形態素解析を行った。解析対象に用いたテキストは、信頼できる翻刻文（古往来・解文は訓読文）である小林編（1975）、高山寺典籍文書綜合調査團編（1972）、宇都宮（2000）を底本とし、濁点の付加など一部の校訂を経たうえで表記を漢字ひらがな交じり文に変換したものである。

（4）a 昨サク日適タマ/＼雖トモ二賜タマフ一拝ハイ謁エツヲ一　（原本）

b 昨サク日（シツ）適タマ/＼拝謁ハイエツヲ賜タマフ（ト）雖（イヘ）トモ　（底本）

c 昨日適拝謁を賜ふと雖も　（コーパステキスト）

（高山寺本古往来 1）

なお、今回の公開においては「短単位」の言語データのみを公開した。「長単位」についても近年中の公開を予定している。

2.3 原文文字列の概要

コーパステキストとして表示される訓読文では、テキストのどの部分が原本の訓点と対応し、どの部分が訓読文作成者による補読なのかという情報を示していない。そこで、コーパス検索ツール「中納言」の検索結果に表示される「原文文字列」において、原本の表記を可能な限り再現することを方針として作成した本文を表示している。

和化漢文である高山寺本古往来と尾張国解文については、原本の表記を復元できる形式の訓読文を原文文字列として表示している。具体的には、原本に傍訓がなく、底本の訓読文で補読されている付属語や送り仮名を（）で括り、これらが補読であることを明示した。また、漢字に対する振り仮名についても、原本に傍訓が存するものを（）で括らずに示したのに対し、原本に傍訓がなく、底本の推読によるものは（）で括って示した。いずれにせよ、

原文文字列欄で（）に括られた文字は原本に存しない補読・推読箇所であり、それらを当時の用例として扱う際には注意を要することを指摘しておく。

（5）a 月来コロ之間動ヤヤモスレハ静ニシテ如イ可　（原本）
b 月来の間動もすれば静かにして如何　（コーパステキスト）
c 月〈(ツキ)〉来コロ（ノ）之間動〈ヤヤ〉モスレハ静（カ）ニシテ如〈イ〉可（原文文字列）
（高山寺本古往来 42）

なお、現今の日本語史研究における漢文訓読文では、上記の補読・推読を（）で括ることに加え、ヲコト点をひらがなで表記する、原本の不読漢字を〔〕で括る、という習慣があるが、本文が複雑になり過ぎることを避けるため、原文文字列の本文ではこれらの処理を行っていない。このほか、声点や合符、返点も原文文字列には反映していない。

法華百座聞書抄の原文文字列については、基本的には解析に用いた漢字ひらがな交じり文を原本通りのカタカナ交じり文へと変換したものである。ただし、法華百座聞書抄の原本には相当数の欠損箇所があり、底本とした小林編（1975）の翻刻文では、残画を根拠とした推読字には「△」、文脈に基づく推読字には「×」印を付している。コーパスの原文文字列では、底本で「×」印の付された字のみを（）で括る形で表示した。

（6）a コ△ノ×ヒト文字カキヲヘテ、セニハトラムトイヒケレハ　（底本）
b このひと文字かきをへて、ぜにはとらむといひければ　（コーパステキスト）
c コ（ノ）ヒト文字カキヲヘテ、セニハトラムトイヒケレハ　（原文文字列）
（法華百座聞書抄・二月二九日・香雲房）

以上に示してきたように、本コーパスでは原本の表記を可能な限り再現した原文文字列を作成するようつとめたものの、その原文文字列の参照に際しても注意を要する点は少なくない。CHJ の検索でヒットした「漢文系資料」の用例を研究上に使用する際には、底本として用いた翻刻文、さらには原本の影印・画像に遡って吟味を行うことを推奨する。

2.4 コーパスの規模

最後に、3 資料のコーパスとしての規模について触れておく。短単位での総語数は、法華百座聞書抄は 19976 語、高山寺本古往来は 8403 語、尾張国解文は 10187 語を数え、「漢文系資料」全体での総語数は 38566 語となる。同じ『平安時代編』所収の資料と比べると、法華百座聞書抄は堤中納言物語（19669 語）、高山寺本古往来は土佐日記（8211 語）、尾張国解文は西大寺本金光明最勝王経平安初期点（9836 語）とほぼ同程度の言語量を持つ。「漢文系資料」全体では、『鎌倉時代編』の『今昔物語集』の平均的な一巻分（30000～35000 語程度）とほぼ同じか、多少大きい規模と言える。

3 新公開資料を用いた日本語史研究の展開

3.1 高山寺本古往来の敬語法「被～給（たまはる）」

続いて、新公開資料を用いた日本語史研究の展開を示す事例として、高山寺本古往来の敬語法「被～給（たまはる）」を取り上げる。

「被～給（たまはる）」は、単独または動詞連用形に後接して使用され、物や恩恵を与える上位者の行為（くださる、～してくださる）、またはそれを受ける下位者の行為（いただく、～していただく）を表す。文体的には公家日記に例が多いことが指摘されている（穐田 2008）が、高山寺本古往来にも 9 例がみられる。「レ（バ）」「ルヽ」等の付訓例から下二段活用であることが確認でき、本コーパスでは動詞「給う」＋助動詞「れる」という解析を行った。

（7）a 被ハレハ借カシ給タマ者尤モトモ所望マウ也　（高山寺本古往来 1）

b 被ルヽ上仰給弊馬之事　（高山寺本古往来 29）

さて、2026 年 2 月時点での CHJ 収録資料から動詞「給う」＋助動詞「れる」という連続を検索すると、中世以前の資料では『平家物語』に 1 例がみられるのみであり、この形式が和化漢文に特有のものであることが知られる。なお、穐田（2008）は公家日記等にみられる「被～給」と和文にみられる四段動詞「たまはる」を同一の語として扱っているが、『高山寺本古往来』の付訓例を重視するならば「被～給」は下二段活用であり、四段動詞「たまはる」と同一視することには慎重を要する。下二段活用の確実な例が『色葉字類抄』にもみられることからも、下二段活用の「たまはる」は公家日記や文書で確かに使用されていたことが知られ、下二段活用の「たまはる」と四段動詞「たまはる」は異なる形式であるという立場で検討を進めたい。以下、この「被～給」を「給ふ＋る」と表記する。

（8）被及ヲヨホシ給タマハレナム哉ヤ　（前田本『色葉字類抄』上 85 オ 2）

3.2 四段動詞「たまはる」の代替

それでは、この「給ふ＋る」は、なぜ和化漢文に特有の形式として使用されたのだろうか。まず重要なのは、四段動詞「たまはる」は、平安後期から院政期時点で漢字表記「賜」との結びつきが強くなかったことである。観智院本『類聚名義抄』に「たまはる」は漢字の訓として掲載されず、『色葉字類抄』には「たまはりあづかる」の「たまはる」の表記として「給」が挙げられるが、「賜」字が「たまはる」の表記として挙げられた箇所は確認できない。

（9）給預タマハリアツカル　（黒川本『色葉字類抄』中 11 オ 5）

この「給」字が『色葉字類抄』においては「たまふ」の表記としても挙げられていることからすると、院政期以前において、四段動詞「たまはる」には確立した表記がなかった可能性が高い。穐田氏は、『小右記』において、意味的に「賜」が四段動詞「たまはる」を表記したと解釈できる例があることを指摘しつつも、総じて「「給」と「賜」とは、同一語「たまふ」の異表記であったと考えられる」としており、従うべきだろう。

そうすると、「給ふ＋る」が和化漢文に使用された第一の要因としては、確立した漢字表記がなかった「たまはる」を代替していたことが考えられる。前述の通り、「給ふ＋る」は単独または動詞連用形に後接して使用され、物や恩恵を与える上位者の行為（くださる、～してくださる）、またはそれを受ける下位者の行為（いただく、～していただく）を表すが、この特徴は統語的にも意味的にも「たまはる」に近い。和化漢文の文書・日記の記主にとっては、「給」や「賜」字を用いて臨時的に「たまはる」を表すことも不可能ではなかったと思われるが、「たまふ」との混乱を避ける上では「給ふ＋る」の形式を用いることが便利だ

ったのだろう。一方、「たまはる」が定着していた話し言葉では「給ふ＋る」を用いる必要がなく、「給ふ＋る」は書き言葉として用いられるにとどまったと考えられる。

3.3 「敬語動詞＋る・らる」の類型

前節の説明は、和化漢文に「給ふ＋る」が使用された背景について、「たまはる」を使用しにくかったという消極的な面から説明を試みたものと言える。本節では、「給ふ＋る」という形式が和化漢文に好んで使用されたという積極的な面からの説明も試みたい。

穐田氏は「給ふ＋る」の意味について、「る」が受身を表す「いただく」の意味（＝A類）と、「る」が尊敬を表す「くださる」の意味（＝B類）に分けたうえで、平安後期の公家日記の用例にはA類・B類のいずれとも解せる例が多く「クダサル、イタダクの両義が完全に分離しきっていないものが少なくない」こと、また「給ふ＋る」の用例そのものは奈良時代の文書や『続日本紀』収載の文書の例が早く、「る」の尊敬の意味自体が平安時代以降に成立したことを考えるとA類が本来の意味だったと考えられることを指摘している。

本発表でも、当初の「給ふ＋る」の「る」が受身の意味だったという穐田氏の指摘に従いたいが、ここで思い起こされるのは森（1992）の指摘である。森氏は、「思し食さる」「御覧ぜらる」といった和文にみられる「敬語＋る・らる」の形式を取り上げ、この中には「御覧ぜらる」「聞こし召さる」など「る・らる」を受身で解釈するのが自然な形式があることを指摘している。ここから、「給ふ＋る」は和化漢文に特有の敬語法だったとは言っても、敬語法の構成として特殊なものではなく、和文にも多くみられる「敬語＋（受身）る・らる」という敬語法の類型として把握できることになる。こうした背景を持っていたことから、和化漢文の記主にとっても大きな違和感のない表現として多用されたことが考えられる。

(12) 世の中にありと聞こしめされむもいと恥づかしければ
((私（＝源氏）があなた（＝藤壺）に）まだ生きているということをお聞きになっていただくのも、とても恥ずかしいので)　(20-源氏 1010_00017, 99200, 56300)

高山寺本古往来の「給ふ＋る」についても、「給ふ＋る」が上位者の行為全般ではなく、特に書状の差出手が恩恵を受けるような上位者の行為を表すのに使用されていることから、受身の意味がなお強く残っていることが見て取れる。差出手への恩恵を与えるわけではない上位者の行為については、名詞「御～」などの異なる表現が使用されるようである。

（9）a 借し給は被ば尤も所望也、　(20L 高山 1186_00001, 1480, 1050)
((あなたが私に）手本を貸してくだされば、たいへん幸いです。)
b 仰せ給は被る弊馬の事、　(20L 高山 1186_00029, 1620, 1080)
((あなたが私に）お命じくださった、私の馬のことにつきまして、)

（10）當国守の殿御下向以後、野望絶え不、　(20L 高山 1186_00027, 640, 480)
（当国の国司殿は、下向なされてから野望が絶えることなく、)

なお、（9）ａｂの例に示した通り、高山寺本古往来の「給ふ＋る」は、書状の「差出手が受取手に与えられる」行為を指すのに使用される。高桑（2017）は、和文にみられる敬語法「御覧ぜらる」が、会話文に偏って使用されること、さらに「話し手が聞き手に見られる」

行為を表すことを指摘している。「給ふ＋る」は、目の前の相手（聞き手・書状の受取手）から自ら（話し手・書状の差出手）へ向かう行為を表すために用いられるという用法の面でも、「敬語＋る・らる」という敬語法の類型として把握できることになるだろう。

（11）いまはのとぢめを御覧ぜらるべき身にもはべらねば

（（私（＝明石の君）はあなた（＝明石の女御）に）臨終をみとっていただける身でもございませんので）　（20-源氏 1010_00034, 385670, 224580）

目の前の相手から自らへ向かう行為を表すために用いられるという用法は、対人的なやり取りである文書に好んで用いられたことが想定できる。「給ふ＋る」が日記にも使用されたことの背景は別に説明する必要があるが、日記も文書と同じく 1 人称視点で記される文章である以上、現実に行われる物や恩恵の授受行為のうち、特に自らへ向かう行為を区別して表現する需要は高かったことが想定される。この点への検討は、文章ジャンルと受身文の使用の関係という大きな視野から論じていく必要があり、今後の課題としたい。

4 おわりに

3 節で示した活用例から、敬語という蓄積の多い分野においても、和化漢文にはまだ十分に掘り下げられていない特有の現象があることがうかがえる。従来コーパス化されていなかった文体・ジャンルの資料をコーパス化することで文体・ジャンル間の比較が容易になり、新たな研究が展開できるようになったことの意義は大きいと言えるだろう。

同時に、これらの資料は従来の収録資料とは異なる性格を持ち、扱いに注意を要する点が少なくない。利用者各位には、『『日本語歴史コーパス 平安時代編Ⅲ漢文系資料』（短単位データ 0.9）解説書』を熟読の上で、新公開資料を存分に活用いただくことを希望する。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 25H01243、および国立国語研究所の共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」による研究成果の一部である。

文献

愛知県史編さん委員会（編）（2009）『愛知県史 資料編 7（古代 2）』愛知県／穐田定樹（2008）「「給・賜」「被給・被賜」」『古記録資料の敬語の研究』清文堂出版／宇都宮睦男（2008）「真福寺宝生院蔵尾張国解文正中二年点訓読文」『日本文化論叢』8／梅村喬（2020）『尾張国郡司百姓等解文の時代』塙書房／高山寺典籍文書綜合調査團（編）（1972）『高山寺本古往來表白集』東京大学出版会／古文學祕籍複製會（編）（1934）『法華修法百座』古文學祕籍複製會／小林芳規（編）（1975）『法華百座聞書抄総索引』武蔵野書院／高桑恵子（2017）「「御覧ぜらる」における対者敬語の用法」『国語研究』80／森公章（2024）『平安時代の国衙機構と地方政治』吉川弘文館／森昇一（1992）「尊敬動詞に下接する助動詞「る」「らる」について」森昇一（著）・中村幸弘ほか（編）『平安時代敬語の研究　森昇一論攷集』桜楓社／山岸徳平（開題）（1976）『法華修法一百座聞書抄』勉誠社／山本久・呉子凡（2026）『『日本語歴史コーパス 平安時代編Ⅲ漢文系資料』（短単位データ 0.9）解説書』

『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅲ 抄物』の公開

青木博史（九州大学）、村山実和子（日本女子大学）、渡辺由貴（常葉大学）、北﨑勇帆（大阪大学）、古田龍啓（九州産業大学）、小木曽智信（国立国語研究所）

1. はじめに

日本語史上の大きな転換期を示す中世後期（室町時代）の研究は，抄物資料・キリシタン資料・狂言資料という、いわゆる「三大口語資料」をバランスよく用いることで深化を遂げてきた。中でも、抄物資料は、①15 世紀から 16 世紀にかけて多く作成されたこと、②言語量が十分に含まれること、③資料的性格が明らかなこと、そして何より、④当時の口語を多分に反映していること、などから、中世後期の言語資料としては最も重要なものと言える。しかし、逆にその膨大さ、あるいは本文の難解さが障壁となり、コーパス化が進められることはなかった。『日本語歴史コーパス（CHJ）』から漏れた抄物資料は、日本語史研究の表舞台から一歩下がったものとなってしまっている（青木 2024）。この問題の発展的な解決を図るために、2021 年度に「抄物コーパス」の構築を目指した研究グループを作り、着手を始めた。そしてついに 2025 年度末、その一部につき、『日本語歴史コーパス 室町時代編Ⅲ 抄物』として公開するに至った。本発表では、今回の収録内容の概要について報告し（第 2 節）、その意義と現状の課題について述べる（第 3 節）。

2. コーパスの概要

2.1 収録内容の概要

抄物資料のコーパス化にあたっては、抄物資料群全体を見渡し、成立時期や系統、原典の性質が偏らないよう考慮して候補が選定されている（青木 2024）。2026 年 3 月に公開した『室町時代編III抄物』では、先んじて『中華若木詩抄』の巻之一の範囲を対象とした。同資料は、16 世紀中頃に成立した抄物の一つで、室町時代末期の禅僧である如月寿印が、中国・日本の 261 篇の漢詩を交互に並べ、注釈・解説を加えたものである。漢詩を先に配し、その後に漢字仮名交じりの抄文を付すという、注釈元を参照しやすい構造を持つ点が特色である（図 1 参照）。加えて、参照可能な翻刻・校注・索引・影印がある等の条件が揃っていることから、優先的に構築を進めた。

構築にあたって、まずは最も善本とされる古活字版 18 行本を底本とし、亀井孝『語学資料としての中華若木詩抄（校本）』（清文堂出版）所収の「校異の部」などを参考に、写本 6 種、古活字版 2 種、整版 3 種と校合して、独自の校訂本文テキストを作成した（古田 2023、青木 2024）[1]。その校訂本文テキストに対し、文字の置き換え等の前処理を行い（2.4 節参照）、文書構造情報等を XML 形式で付与した（北﨑・古田 2024, 図 1）。その本文データを、中世口語 UniDic と形態素解析器 MeCab を用いて自動解析し、人手による修正を加えて、短単位データとして整備を行った。各言語単位には、語見出し・品詞・活用型・活用形などの形態論情報が付与されており、これらを組み合わせて高度な検索や集計を行うことができる。なお、2024 年 1 月には、その XML データを全文

[1] この「校訂本文テキスト」は、凡例とあわせ、国立国語研究所「日本語史研究用テキストデータ集」＜https://www2.ninjal.ac.jp/textdb_dataset/＞上で公開する予定となっている。

検索システム「ひまわり」上での利用に適合させた『ひまわり版「抄物コーパス」』[2]を先行公開しており、『中華若木詩抄』全四巻の文字列検索が可能である。

```
<text textID="中華若木詩抄_01" series="" title="中華若木詩抄" volume="01">
  <front>
    <titleBlock>
      <block>
        <s><pb n="001o"/>中華若木詩抄巻之一 </s>
        <s>東山如月和尚註<lb/></s>
      </block>
    </titleBlock>
  </front>
  <body>
    <article num="001">
      <block type="詩題">
        <s>聞子規 </s>
      </block>
      <block type="作者">
        <s>荀鶴</s>
      </block>
      <block type="漢詩本文">
        <s>楚天空闊月成輪 蜀魄声々似告人 啼得血流<lb/>無用処 不如緘口過残<lb/></s>
      </block>
      <p>
        <s>一二ノ句ハ、楚天空闊ハ、雲一点モナク晴レワタ<lb/>レ<corr type="vMark"
          originalText="ハ">バ</corr>天モヒロキヤウナリ。</s> <s> ……<lb/></s>
      </p>
    </article>
  ……
  </body>
  ……
</text>
```

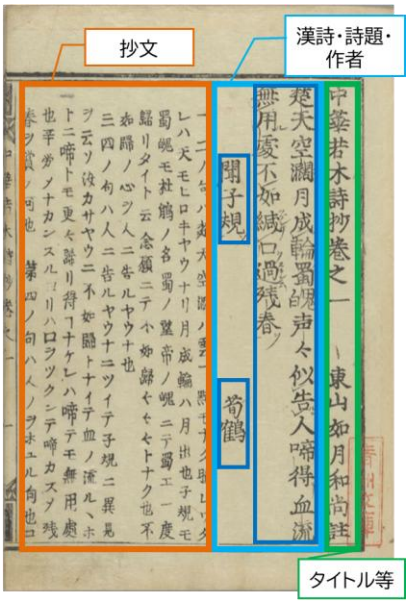


図 1 『中華若木詩抄』構造化の例[3]

2.2 コーパスの公開形式

本コーパスはその他の CHJ 公開作品と同じく、Web 上の検索アプリケーション「中納言」を通じて利用可能である。『中華若木詩抄』の巻之一の範囲を収録したもので、短単位のみの公開となる（Ver.0.8）。データ量は約 20,000 短単位で、すべて人手による修正を行ったコアデータとして公開した。今後、『中華若木詩抄』に関しては全四巻を公開する予定である。現時点での収録内容には限りがあるものの、本コーパスの追加により、CHJ『室町時代編』に抄物・キリシタン資料・狂言資料が出揃うこととなった（表 1）。

表 1 『室町時代編』の収録内容

シリーズ名	収録作品	成立時期	データ量
室町時代編Ⅰ狂言	虎明本狂言集	1642 年写	（短）27.7 万 （長）25.6 万
室町時代編Ⅱ キリシタン資料	天草版平家物語・天草版伊曽保物語・ 天草版金句集	1592～1593 年刊	（短）14.9 万 （長）13.9 万
室町時代編Ⅲ抄物	中華若木詩抄（巻之一のみ）	16 世紀中頃	（短）2 万 （長）なし

2.3 本文種別の表示

2.1 節で見たように、『中華若木詩抄』内には、漢詩とそれに対する注釈（抄文）という、性質の異なる本文が含まれている。コーパス化にあたってはそれらを区別し、「本文種別」欄にて表示するようにした（表 2）。なお、本文種別が「漢文」の範囲には形態論情報を与えておらず、「短単位検索」

[2]古田龍啓・北﨑勇帆・青木博史編（2023）『ひまわり版抄物コーパス』（ver.2024.3）＜https://researchmap.jp/furuta_tatsuhiro/published_works＞

[3] 校訂段階で、底本における詩、詩題、作者の順をあらため、詩題、作者、詩の順としている。画像は東京大学附属図書館（青洲文庫）蔵本＜https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/collection/0059ade7-1028-113b-6a35-8cb225a12a32＞より。

の対象外としている（検索結果には表示される。また、文字列検索による検索は可能である）[4]。

表 2　本文種別の表示

本文種別	下位分類	説明
漢文	詩題	個別の漢詩の詩題を表す
	作者	個別の漢詩の作者を表す
	漢詩	個別の漢詩のまとまりを表す
（明示なし）		先行する漢詩に対する注釈、抄文に相当する
発話引用		抄文中に見られる、発話や思考内容の引用相当箇所を表す
その他	タイトル	作品（巻）の題（尾題含む）を表す
		抄者等を表す

また、漢詩に対する抄文の中で、発話（心内文含む）の引用に相当する範囲には、<speech>タグを付与し、中納言上での本文種別が「発話引用」として表示されるようにしている[5]。

(1) 曹操いかりて孫権が処へ案内を云ふことは、「水軍八十万人を以て、船にて参じて、一合戦仕るべし。呉国にて参会申すべし」と云ふぞ。　（40-抄物 1520_01001, 19190）[6]

(2) 「春もはや秋になりたるよ。此の如く時節のうつりやすきにつけても学をせいでは」と思ふて、ふつとをきて灯を吹いて漢書をよむ也。　（40-抄物 1520_01001, 91080）

2.4　本文の校訂・変換

本コーパスでは校訂および解析の前処理として、表 3 のように文字の置換等を行っている。

表 3 『室町時代編Ⅲ抄物』の校訂・変換対象

	校訂・変換を行った箇所	対処	例【原文】	【入力】
1	片仮名表記	平仮名へ置換	劉備【ハ】恐【レテ】	劉備【は】恐【れて】
2	濁点の無表記	濁点を付与	口ヲツ【ク】ン【テ】	口をつ【ぐ】ん【で】
3	仮名一字分の踊り字	該当する平仮名へ置換	百花ノサキ乱ル【ヽ】	百花のさき乱る【る】
4	誤字・脱字・衍字	適当な文字への置換 不足要素の補入 重複要素の削除	ミタリニ抹過スヘカラ【】。／イマタ【タ】年モヨラネトモ	みだりに抹過すべから【ず】。／いまだ【　】年もよらねども
5	送り仮名がなく分割不可能な助詞・助動詞	不足要素の補入	柴、【燥】荻ナントヲ其船ニ【積】テ	柴、【燥ける】荻なんどを其船に【積ん】で
6	漢文（訓読が適当なもの）	出現順の入れ替え	夢【不熟】。	夢【熟せず】。

これらの処理は、XML 構造化タグとしてすべて保存されており、その情報をもとに校訂・変換前のテキストが復元される。それらは、中納言の検索結果の「原文文字列」「原文 KWIC」列より参照可能である（図 2）。図 2 の例からは、キーの「こがるる」が、もと片仮名表記かつ、濁点無表記であり、踊り字が含まれていたことがわかる。また、前後の文脈からも「旱天」が、原文の「早天」を訂正していること、「望うで」はコーパス化に際しテキストが補入されていることが確認できる。

[4] 今回、口語資料としての側面を重視して、漢文相当箇所の形態論情報を捨象している。これは『室町時代編Ⅲ抄物』（Ver.0.8）における暫定的な処置であり、今後の更新や資料の追加によって変更する可能性もある。

[5] 心内文は（2）のように言いさし文が現れることなど、発話の引用と似た傾向を示すようであり、少なくとも、抄文の「地の文」と区別する意義が認められる。寿岳（1957）参照。

[6] 以下、用例はすべて『中華若木詩抄』巻之一より、サンプルIDと開始位置を併記して引用した。

サンプルID	開始位置	連番	コア	前文脈	キー	後文脈	語彙素ID	語彙素読み	語彙素	語形	品詞	活用型	活用形	原文文字列
40-抄物 1520_01001	265020	173530	1	也|。# 喜雨 # 義堂 # 天地如焦草木黄 |雲霓日々幾相望 |愁辺喜聴今宵雨 |滴在芭蕉也不妨 # 一二|の|句|、|早天|の|こと|なれ||ば|、|天地|も|	こがる	|やう|也|。# 草木|も|こと|ヶ\く|枯れ|て|黄色|に|なる|ぞ|。# 日々|空|を|望う|で|、|いかなる	12487	コガレル	焦がれる	コガル	動詞-一般	文語下二段-ラ行	連体形-一般	コカルヽ
				自然ニ題ニ出スコトモアレハ、其時ノタスケニナルヘキ也。# 喜雨 # 義堂 # 天地如焦草木黄 雲霓日々幾相望 愁辺喜聴今宵雨 滴在芭蕉也不妨 # 一二ノ句、早天ノコトナレハ、天地モ	コカルヽ	ヤウ 也。# 草木モコト /゛\ク枯テ黄色ニナルソ。# 日々空ヲ望テ、イカナル雲モアリテ雨トナレカシ、又、霓モフケカ							

図 2　検索結果の原文文字列および原文 KWIC 表示

2.5　参照リンク

『中華若木詩抄』については、底本と同じ古活字版 18 行本である東京大学総合図書館青洲文庫蔵本の公開画像への参照用リンクを用意しており、検索結果に応じて、その参照先が表示される（表示名：UT-Seishu）。ただし、底本とは異なる「参照」用であり、コーパス本文とは必ずしも一致しない場合があることに留意されたい。

3. 構築の課題と意義

3.1 引用と抄文との境界

『中華若木詩抄』の抄文内では、注釈に際し、漢詩内（または別の漢籍）の語句がしばしば引用される。その漢字文字列に対し、どこまでを「語」と見なし、形態論情報の付与対象とするかがコーパス構築上の課題の一つであった。現時点では暫定的に、国語研の短単位認定規程（小椋他 2011）にもとづき、3 字以上の漢字文字列は一律に品詞「漢文」として処理を行い、2 字以下のものはなるべく熟語と見なす方針をとっている。ただし中には次のように判断が難しい例も含まれる。

(3)　白布長衫皁板絛　腰間百箭臂双刀　帰来酣飲咸陽市　換得殷紅錦戦袍
〈中略〉酣飲は、酒をすぐれてのむことぞ。
（40-抄物 1520_01001, 43710／品詞：名詞-普通名詞-サ変可能）

(4)　相思枕倦夜如年　半記半忘終未円　江上春風吹不去　依然只在白鷗前
〈中略〉枕倦とは、久しく離別すること也。　（40-抄物 1520_01001, 36590／品詞：漢文）

(3)の「酣飲（カンイン）」の場合、『日本国語大辞典　第二版』（小学館、以下『日国』）にも当該例を初出とする立項があること、漢詩中に訓合符があることも勘案し、一語として認定した。一方、(4)は、抄文中の読みや一語性を確定しがたく（漢詩中の「倦」字に「ウンテ（デ）」の読み添え有り）、「漢文」とした。ただし、『日国』の「酣飲」の項に(3)の例と漢詩の例しかなく、同時期の熟語としての使用実態が不明瞭であることを考えると、両者の線引きは曖昧であるともいえる。このような引用の扱いについては、『中華若木詩抄』の残りの巻、他の抄物のコーパス化を踏まえた検討が必要である。

3.2　室町時代語の拡充の意義

形態論情報の付与に際しては、自動解析の結果を『室町時代編』の規程にもとづいて人手で修正し[7]、UniDic の見出し語の拡充を行っている。今回の収録範囲内でも CHJ に初めて登場した語

[7] 漢字表記の語については、コーパス構築時点での校訂本文の「読み」を参照し、語形を確定させた。今回は試行的な先行公開であり、必ずしも「日本語史研究用テキストデータ集」で公開予定の「校訂本文テキスト」と一致しない場合があるが、全四巻を

が様々に見られた。その一例として以下を挙げる。

(5) a. 詩は意を新しく語をふるしく云ふことがよき也。 （40-抄物 1520_01001, 113470）

b. 若此髪が梳るに随う而をちずんば、白髪三千丈の糸となるべきぞ。不落は、さて也。

（40-抄物 1520_01001, 206240）

c. 落ちかかり、滴れ、愁辺、痩馬、抹過……（※『日国』で『中華若木詩抄』が初出とされる例）

(5a)「古しい」は形容詞「古い」から派生した語で（寿岳 1955）、特に室町期において同様にシク活用化する語がさまざまに見られることが知られる（山本 2008）。『日国』では当該例が初出として挙げられ、CHJ 内では現時点で唯一の例となる。また(5b)「さて」は、「その事態を疑わしく確信しかねるものとして留保するさまである意を表す」（『時代別国語大辞典 室町時代編 三』「さて」の項）用法として、初めて CHJ 収録資料内に出現したものである。これは「古く副詞や接続詞として用いられた「サテ」が中世後期ごろから感動詞としても用いられるようになり、その感動詞「サテ」が疑問文に用いられるようになったものが更に転成して形容動詞化したもの」（坂詰 2002:15）であり、主に抄物によく見られる語であることから「抄物のような講義の場において口頭に発せられて用いられることが多かったもの」（同:6）とされる。同じ室町時代語でも、成立時期や資料性の違いから、実際に現れる語法には多分に異なりも見られる。抄物が『室町時代編』に追加されることで、中世語研究、通時的研究に効果的に用いられることが期待される。

3.3『室町時代編』間の比較

他の『室町時代編』（キリシタン資料・狂言）のデータとの比較によって、室町時代語の全体を俯瞰するケーススタディとして、ここでは、テンス・アスペクトと、モダリティの形式を検討する。

表 4 『室町時代編』のテンス・アスペクト形式

	抄物		キリシタン		狂言	
き	5	1.63%	27	0.58%	171	3.12%
けり	1	0.33%	12	0.26%	279	5.09%
つ	8	2.61%	49	1.05%	19	0.35%
ぬ	3	0.98%	35	0.75%	90	1.64%
り	8	2.61%	23	0.49%	48	0.88%
たり	103	33.66%	1065	22.88%	1334	24.35%
た	178	58.17%	3444	73.98%	3538	64.57%
計	306	100.00%	4655	100.00%	5479	100.00%
（参考）て＋ある	27		23		99	
て＋いる・おる	21		78		157	

まず、テンス・アスペクトの形式（表 4）[8]は、既にタリ・タへとほぼ一本化しており[9]、その内部ではタリからタへの移行期にあることが改めて窺える。モダリティの形式（表5）[10]は、肯定系の「推定」を表すものについて、抄物の段階ではベシが中心であるのが、キリシタン資料ではウズが中心になること、さらにこれが、狂言の段階では、推量系のウへと移行すること（大鹿 2004）が把握できる。他方で、否定系の場合、キリシタン資料のマジの使用率は抄物に比して高く

公開するアップデート時に統一する計画である。

[8] (i)の検索条件式により、テ＋アル、テ＋イル・オルの検索は、(ii)(iii)による。

(i) キー: 品詞 LIKE "助動詞%" IN 時代名="4 室町"

(ii) キー: 語彙素 LIKE "有る|居る" AND 前方共起: 品詞 LIKE "動詞%" ON 3 WORDS FROM キー AND 前方共起: 語彙素 ="て" ON 2 WORDS FROM キー AND 前方共起: 品詞 LIKE "助詞%" ON 1 WORDS FROM キーIN 時代名="4 室町"

(iii) キー: 語彙素 LIKE "有る|居る" AND 前方共起: 語彙素="て" ON 2 WORDS FROM キー AND 前方共起: 品詞 LIKE "助詞%" ON 1 WORDS FROM キー IN 時代名="4 室町"

[9]「狂言」に文語助動詞の例が一定数あるのは、ト書き・韻文・候体の曲の例が含まれていることが大きい。

[10] (i)と、次の(iv)の検索条件式による。 (iv) キー: 活用形 LIKE "意志推量形%" IN 時代名="4 室町"

[11]、必ずしも、時代間の変化を反映するものとは言えない面もある。このような資料性の差の計量的な検出も、本コーパスによって可能になるものと思われる。

表 5『室町時代編』のモダリティ形式

		抄物		キリシタン		狂言	
肯定系	べし	104	58.43%	76	4.56%	184	4.12%
	むず(うず)	10	5.62%	727	43.61%	332	7.43%
	む	57	32.02%	42	2.52%	185	4.14%
	う・よう・意志推量形	7	3.93%	822	49.31%	3767	84.31%
	(計	178	100.00%	1620	100.00%	4381	100.00%)
否定系	まじ	1	2.70%	126	50.40%	72	6.82%
	まい	34	91.89%	104	41.60%	943	89.38%
	じ	2	5.41%	20	8.00%	40	3.79%
	(計	37	100.00%	250	100.00%	1055	100.00%)

4. おわりに

本発表では、『室町時代編Ⅲ抄物』(短単位 ver.0.8)の概要と特色について述べた。データの拡充や語の認定方針等は課題であるが、三大口語資料の一つとして重視されてきた抄物が CHJ に加わったこと、『室町時代編』において空白であった 15～16 世紀の資料が補充されたことは大きな一歩であるといえよう。継続して構築を進め、狂言台本・キリシタン資料のコーパスとあわせて活用していくことで、今後の日本語史研究に大きな躍進をもたらすことが期待される。

参考文献

青木博史(2024)「「抄物コーパス」の構築をめざして」『文献探究』62, pp.57-56.

大鹿薫久(2004)「モダリティを文法史的に見る」尾上圭介(編)『朝倉日本語講座 6 文法II』朝倉書店, pp. 193-195.

大塚光信(1996)『抄物きりしたん資料私注』清文堂出版.

小椋秀樹・小磯花絵・冨士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕(2011)「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規定集第 4 版(下)」国立国語研究所.

亀井孝(編)(1977)『語学資料としての中華若木詩抄(校本)』清文堂出版.

北﨑勇帆・古田龍啓(2024)「ひまわり版「抄物コーパス」(中華若木詩抄)構築報告」「抄物コーパス」の構築とコーパスを応用した日本語史研究 2023 年度第 2 回研究会発表資料.

国立国語研究所言語変化研究領域(片山久留美)(編)(2019)「『日本語歴史コーパス 室町時代編』形態論情報規程集 Ver.1.0」<PDF>.

坂詰力治(2002)「抄物に見える「サテ」(不可)について―「カナ(叶・適)ハヌ」との比較を通して―」『近代語研究 11』武蔵野書院, pp.1-17.

寿岳章子(1955)「形容詞の語彙的変遷―中古から中世へ―」『国語学』22, pp.61-70.

寿岳章子(1957)「抄物の会話文―漢書抄による―」『国語学』28, pp.25-35.

古田龍啓(2023)「抄物コーパスの構築へ向けて」「通時コーパス」シンポジウム 2023 発表資料.

山本佐和子(2008)「新シク型形容詞の派生について―中世室町期におけるク活用形容詞からの派生を中心に―」『国語語彙史の研究 27』和泉書院, pp.223-242.

湯澤幸吉郎(1929)『室町時代の言語研究―抄物の語法』大岡山書店.

【付記】

本発表は、科研費 21H04349, 24H00089、および国立国語研究所共同研究プロジェクト「開かれた共同構築環境による通時コーパスの拡張」の成果の一部です。

【謝辞】

コーパス化にあたり、西谷龍二氏(高知大学)、手塚美希氏(東北大学学生)、竹内理子氏(九州大学学生)、宮崎翔太氏(九州大学学生)、久保征子氏(総合研究大学院大学学生)、呉子凡氏(総合研究大学院大学学生)、髙橋雄太氏(国立国語研究所)、中村壮範氏(国立国語研究所)にご協力を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

[11] このことは、大塚(1996: 405-409)に指摘がある。

近代文語文への長単位形態論情報付与の試み
―解析器Monakaの開発と形態論情報規定の検討―

近藤 明日子　KONDO Asuko　（国立国語研究所）
尾崎 太亮　OZAKI Hiroaki　（東京農工大学大学院学生）
浅田 宗磨　ASADA Soma　（元国立国語研究所）
小木曽 智信　OGISO Toshinobu　（国立国語研究所 / 総合研究大学院大学）

1. はじめに

国立国語研究所の構築する『日本語歴史コーパス』（CHJ）では、語の単位として短単位・長単位の2種類を設定し、それぞれに形態論情報を付与する設計となっている。このうち、長単位は当該資料の性格を反映する特徴語の観察に有効な単位とされており、CHJ収録の各資料の語彙的特徴の分析においても重要な単位である。ただし、CHJ「江戸時代編」「明治・大正編」では長単位の形態論情報付与が行われていないため、長単位の形態論情報を利用した研究ができない状態にある。特に、CHJの中でも言語量が多く、語彙の計量的研究と親和性の高いCHJ「明治・大正編」において、長単位の形態論情報付与は喫緊の課題と言える。なかでも、CHJ「明治・大正編」に大量に収録されている近代文語文に対する長単位形態論情報の付与方法を確立することが重要である。

そこで、本発表では、近代文語文への長単位形態論情報付与の実現に向けて、近代文語文用の長単位解析器Monakaを開発したことを報告する。併せて、近代文語文に長単位形態論情報を付与する上で不可欠な規定（ルール）の整備に向け、近代文語文特有の問題を例示し、検討する。

2. 短単位と長単位

CHJにおける短単位・長単位2種類の言語単位の設定と、それに対する形態論情報付与の規定は、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ、前川監修・山崎編2014）に倣って設計されている。小椋ほか（2011）によれば、BCCWJでは、コーパスの利用目的に応じて、言語単位の選択が可能となるよう2種類の言語単位が設定された。そのうち長単位は、言語の構文的な機能に着目して規定された単位であり、当該資料の性格を反映する特徴的な語の把握に適しているとされる。もう一方の短単位は、言語の形態的な側面に着目して規定した単位であり、均質的で揺れのない認定が可能という長所を持つ。しかし、合成語を過度に短く切ってしまうという短所も併せ持つため、長単位がその短単位の短所を補う役割を持つ。

長単位の単位認定は、理論上は、まず文節を認定し、

文節内を自立語と付属語に分け、それぞれを長単位とするという方法で行われる。一方の短単位は、まず意味を持つ最小の単位を認定し、それを長単位の範囲内で、1回結合させる（あるいは結合させない）ことにより認定される。表1に、CHJ「鎌倉時代編Ⅰ説話・随筆」（30-今昔1100_13029，720-1090）に付与された短単位・長単位の対応関係の例を示す。

3. 長単位解析器Monakaの近代文語文用モデルの開発

大規模なコーパスに長単位の形態論情報を付与するためには、長単位解析器が必須である。BCCWJの長単位形態論情報付与においては、長単位解析器Comainu（小澤・内元・伝2014）が使用された。そして、CHJ「奈良時代編」「平安時代編」「鎌倉時代編」「室町時代編」でもComainuによ

表 1　短単位と長単位の対応関係

短単位		長単位	
師	名詞-普通名詞-一般	師	名詞-普通名詞-一般
に	助詞-格助詞	に	助詞-格助詞
随	動詞-一般	随	動詞-一般
て	助詞-接続助詞	て	助詞-接続助詞
法花	名詞-普通名詞-一般	法花経	名詞-普通名詞-一般
経	名詞-普通名詞-一般		
を	助詞-格助詞	を	助詞-格助詞
受け	動詞-一般	受け習	動詞-一般
習	動詞-一般		
て	助詞-接続助詞	て	助詞-接続助詞
日夜	名詞-普通名詞-副詞可能	日夜	名詞-普通名詞-一般
に	助詞-格助詞	に	助詞-格助詞
読誦	名詞-普通名詞-サ変可能	読誦す	動詞-一般
す	動詞-非自立可能		
。	補助記号-句点	。	補助記号-句点

る解析結果を人手により修正して長単位形態論情報が付与された。Comainuは現代語用の解析器のため、CHJに収録されている異なる時代・文体のテキストを解析した場合、その解析精度は低かったと考えられるが、言語量のさほど多くない室町時代以前のサブコーパスであれば、人手により修正する手法で対応可能であったと考えられる。しかし、CHJ「明治・大正編」は特に言語量が多く、その中に現代語とは性質の大きく異なる文語文も多く含まれることから、Comainuを使って実用に堪える精度の長単位形態論情報を付与することは困難であった。

そこで、本発表では、CHJ「明治・大正編」への長単位形態論情報付与に向けて、近代文語文用の長単位解析器Monakaモデルを開発した。Monakaは深層学習ベースの解析器であり、短単位と長単位を対とする学習データに基づいて、現代語および室町時代以前の日本語において高精度な解析結果を得られるようになっている（Ozaki et al., 2024、尾崎ほか2026）。

開発においては、近代文語文とそれと類似する特性を持つと思われる文を入力として、深層学習モデルの学習を行う。この際、生成AIなどに使用されている大規模言語モデルをファインチューニングすることにより、高精度な解析モデルが得られると期待される。解析器の解析精度は、使用する大規模言語モデルと学習データにより差があるため、最も精度の高くなる組み合わせを選定する必要がある。そこで、言語モデルは、尾崎ほか（2026）において、同一の学習データでチューニングを行った複数の言語モデルの精度を比較した結果、最も精度の高かった日本語BigBird[1]を選定した。次に、学習データとして次の3種類を選定した。

① CHJ「鎌倉時代編Ⅰ説話・随筆」コアデータ
② CHJ「明治・大正編Ⅰ雑誌」収録の『明六雑誌』6サンプルに対し試験的に長単位形態論情報を人手で付与したデータ[2]
③ BCCWJ生産実態サブコーパス書籍レジスター（PB）コアデータ

この①～③のデータを組み合わせて学習データとし、それぞれチューニングを行った場合の精度（単位境界レベル）を表2にあげる。

[1] https://huggingface.co/nlp-waseda/bigbird-base-japanese
[2] https://github.com/UniversalDependencies/UD_Japanese-Modern

表2　学習データの言語量と解析精度

学習データ	文数	短単位数	長単位数	精度
②明六	746	13,201	12,026	96.84%
①鎌倉＋②明六	10,802	445,924	417,589	97.63%
②明六＋③PB	20,838	247,601	211,433	97.63%
①鎌倉＋③PB	30,148	667,123	604,970	84.18%
①鎌倉＋②明六＋③PB	30,894	680,324	616,996	98.42%

表2に示すように、もっとも精度の高い学習データは「①鎌倉＋②明六＋③PB」であった。そこで、このモデルに基づいたMonakaを用いて、CHJ「明治・大正編Ⅰ雑誌」収録の『太陽』の文語体のコアサンプルを解析した。その結果、精度は単位境界レベルで98.3%、品詞レベルで97.7%に達し、実用に耐える精度であることが確認できた。

なお、学習データ②の長単位形態論情報は、付与作業を行った2015年当時のBCCWJおよびCHJ「平安時代編」の規定を参照して、試験的に付与したものである。そのため、厳密な意味での正解データではない点に留意が必要である。同様に、表2に示した精度も、既存の規定を参照して想定した正解データに対する暫定的な値である。

4.　近代文語文の長単位形態論情報の規定整備における課題

近代文語文への長単位形態論情報付与の実現に向けて、もう一点重要な課題となるのは規定の整備である。規定がなければ均質的な形態論情報の付与は不可能である。既存のBCCWJやCHJ「奈良時代編」「平安時代編」「室町時代編」の詳細な規程集（小椋ほか2011、国立国語研究所言語変化研究領域（呉）編2021、国立国語研究所コーパス開発センター（池上）編2016、国立国語研究所言語変化研究領域（片山）編2019）を参照しつつ、近代文語文の規程集を編纂していくことになるが、それらに挙げられている規定では対応できない近代文語文特有の問題が存在する。その中で、ここでは境界認定に関する2つの問題をとりあげる。

A）　名詞連続における境界認定

既存の規程集においては、名詞連続における境界認定に関して、「主語・主題の後ろで切る」「連用修飾成分の後ろで切る」「体言の独立格の後ろで切る」「同格の関係にある体言連続は切り離さない」「並列された語は切り離さない」「長単位認定規程に従って長単位を認定すると、意味的に問題のある体言連続は切り離す」といった規定を設けている。しかし、それに当てはまらず、境界認定が困難な名詞連続が近代文語文には出現する。以下にCHJ「明治・大正編Ⅰ雑誌」の用例をあげる。

（1）　夫れ本邦國體開闢一姓統御人心固結して海外諸國と異なる（60M明六1874_13003, 6620）
（2）　此は婦人女子御幣かづきの敬にして却て之を欺くなり（60M明六1874_13003, 5560）
（3）　千二百名の代表委員及ケレンスキー首相以下閣僚全部出席大會を開くと。（60M太陽1917_13059, 26490）

現代語ならば、例えば(1)は「國體開闢より一姓統御、人心固結して」、(2)は「婦人女子の御幣かづき」、(3)は「全部出席し大會を開くと」のように、名詞に読点や助詞・動詞「する」等が後接し、文節境界および構文上の機能が明示されるところ、近代文語文では名詞の単独使用が見られる。これに対応する規定が既存の規程集にはなく、新たに近代文語文用に規定を定める必要がある。

B） 複合辞・連語

BCCWJおよびCHJ「室町時代編」の規定では、助詞・助動詞を含む複数の語が助詞・助動詞として機能するものを複合辞、その他の品詞として機能するものを連語としてリスト化し、1長単位として認定する[3]。近代文語文にも「ことを得」「むとす」「ずして」「ところの」のように複合辞として認定可能なものや、「常に」「しかりといへども」「しからばすなわち」のように連語として認定可能な語の連続がある。近代文語文における複合辞・連語リストは存在しないため、BCCWJのように、既存のリストからコーパスでの頻度に基づき抽出する手法は採ることができない。CHJ「室町時代編」の規定では、複合辞・連語を高頻度の短単位Ngramから抽出する方法がとられており、参考になる。ただし、高頻度な短単位Ngramからの完全な人手による抽出もまた困難なため、並行して大規模言語モデルを用いた自動抽出の方法も検討していく必要がある。

5. おわりに

本発表では、近代文語文への長単位形態論情報付与の実現に向けて、形態素解析器Monakaの開発と規定整備における近代文語文特有の課題の検討を行った。今後は、規定を整備し、それに基づて作成した学習データでモデルを再チューニングし、Monakaをアップデートした上で、CHJ「明治・大正編」へ長単位形態論情報付与を実施することになる。さらに将来的には、国立国会図書館「次世代デジタルライブラリー」で公開されているような大量の近代語資料の電子テキストに対しても、長単位形態論情報を付与できることが期待される。

参考文献

Ozaki, Hiroaki, Komiya Kanako, Masayuki Asahara and Toshinobu Ogiso (2024) "Long Unit Word Tokenization and Bunsetsu Segmentation of Historical Japanese." *Proceedings of the 1st Workshop on Machine Learning for Ancient Languages* (ML4AL 2024), pp.48-55.

尾崎太亮・浅田宗磨・古宮嘉那子・近藤明日子・小木曽智信(2026)「MonakaによるBCCWJ2における長単位情報の付与支援」『言語処理学会第32回年次大会発表資料集』pp.907-912.

小澤俊介・内元清貴・伝康晴(2014)「長単位解析器の異なる品詞体系への適用」『自然言語処理』21(2), pp.379-401.

国立国語研究所(2026)『日本語歴史コーパス』バージョン2026.3 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/

前川喜久雄(監修)山崎誠(編)(2014)『書き言葉コーパス―設計と構築―』, 講座日本語コーパス2. 朝倉書店.

小椋秀樹・小磯花絵・冨士池優美・宮内佐夜香・小西光・原裕(2011)『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第4版(上)』https://doi.org/10.15084/00002855

国立国語研究所コーパス開発センター(池上尚)(編)(2016)『『日本語歴史コーパス 平安時代編』形態論情報規程集』https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/doc/morph-heian-2016.pdf

国立国語研究所言語変化研究領域(片山久留美)(編)(2019)『『日本語歴史コーパス 室町時代編』形態論情報規程集 Ver.1.0』 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/morph_muromachi_v1_0.pdf

国立国語研究所言語変化研究領域(呉寧真)(編)(2021)『『日本語歴史コーパス 奈良時代編』形態論情報規程集 Ver.1.0』https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/doc/morph_nara_v1_0.pdf

[3] CHJ「奈良時代編」「平安時代編」「鎌倉時代編」は複合辞を認めず、少数の連語のみ認定する。

形態素解析サービス「Web 茶まめ」における
文節・長単位解析機能の実装と公開

尾崎 太亮（東京農工大学学生）浅田 宗磨（元国立国語研究所）
近藤 明日子（国立国語研究所）堤 智昭（筑波大学）
小木曽 智信（国立国語研究所・総合研究大学院大学）

1. はじめに

形態素解析サービス「Web 茶まめ」（堤・小木曽 2016）は国立国語研究所（以下、国語研）が定義する短単位語について、上代から現代にかけて、また、時代によっては地域や話し言葉・書き言葉それぞれに対応した形態素解析結果を提供するサービスである。本稿では、この「Web 茶まめ」において、文節と長単位情報の解析結果を提供する機能と実装について論ずる。文節・長単位の解析を高精度で実現するためには、深層学習などの高度な言語処理技術が必要であるが、このような処理を日本語研究者が公開されている解析プログラムを用いて実施することは敷居が高い。しかし、これらの処理を Web サービスとして実装することで、簡便に、かつ、直感的にわかりやすく利用することが可能となるため、日本語学研究の基盤として重要な取り組みであると考える。

2. 背景と目的

2.1 短単位・長単位・文節の解析

国語研が認定する日本語の語の単位は二種類あり、短単位語と長単位語である。短単位語は、「意味をなす最小の単位」から構成的に定義された粒度の細かい、語の認定単位である。短単位語はそのような特徴から語の成り立ちを観察することができ、また構成的に定義されることから語彙数を抑制することができ、UniDic のような網羅的な辞書を構築することが可能である。このことから、従来より MeCab（Kudo・Yamamoto・Matsumoto 2004）などのいわゆる形態素解析技術により機械的に高精度かつ高速に解析を行うことができる。

長単位は、より文の中での語の役割という、構文的な観点での語の認定単位である。長単位は文節の認定に基づいてその単位単位が認定される。このため、その解析には構文を考慮したより高度な解析技術を要するものである一方で、人間的にはより直感的な語単位ということもできる。その意味において日本語学の歴史的な観点では機械処理を意識した短単位語よりも長単位語に相当する語の単位が長く用いられてきた。例えば、動詞・修飾語の比率、いわゆる MVR による文体研究においては、長単位語に相当する単位で行われてきた(樺島 1954, 1955, 菅野・菊池 2021、佐藤 2025)。

このような、短単位語と長単位語における機械による解析の容易性と人間的な扱いやすさのトレードオフ関係を考慮すると、長単位語の解析手段を誰もが利用できるようにすることは、日本語学における歴史的な検討経緯と整合性持ちつつも新たな研究領域を開拓する上で必要不可欠であると考えられる。

発表者らは、これまで深層学習による文節・長単位解析の手段 Monaka の検討を行ってきた（尾崎・古宮・浅原・小木曽 2024)。Monaka は平安期から室町期、加えて現代語において高い文節・長単位解析結果を実現しているが、その中で、2024 年度から開始された文化庁委託事業である「信頼できる言語資源としての現代日本語の保存・活用のためのデジタル基盤整備事業」で整備を進める「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の拡張（BCCWJ2）を効率よく実施するために、文節・長単位解析の精度を高めた結果、BCCWJ において 99.6%、BCCWJ2 において 98.7%の長単位解析精度を実現した（尾崎・浅田・古宮・近藤・小木曽 2026)。

2.2 形態素解析サービス「Web 茶まめ」

「Web 茶まめ」は、主に日本語研究者が利用することを想定して作られた形態素解析の Web サービスであり、http://chamame.ninjal.ac.jp/にアクセスすることで、誰もが利用可能なものである。

図1

図1にWeb 茶まめの Web インターフェースを示す。主な入力は以下の通りである。

① **解析対象のテキスト入力部分（1）** テキストは Web インターフェースに直接入力することもできるし、テキストファイルをアップロードして解析させることもできる。

② **辞書バージョン選択（2）** 解析に用いる UniDic のバージョンを指定することができる。

③ **辞書選択（3）** 解析に用いる辞書を指定することができる（最大二つまで）。辞書は以下のものが利用できる。

（ア）現代: 現代語（BCCWJ)、現代話し言葉（CSJ）、関西方言、IPAdic(現代語)

（イ）近代: 近現代口語小説、旧仮名口語、近代文語

（ウ）近世: 近世江戸口語、近世上方口語、近世文語

（エ）中世: 中世口語、中世文語

（オ）中古: 中古和文

（カ）その他: 上代語、和歌

④ **出力項目選択（4）** 結果として出力させたい項目を選択できる。

⑤ **出力形式選択と解析実行（5）** Web 上での確認のほか、CSV やエクセル形式などで出力またはダウンロードを行うことができる。

上記のインターフェースからも分かる通り、Web 茶まめは内部で UniDic と MeCab を用いた解析を行なっており、UniDic と不可分の関係である。UniDic は国語研が構築するコーパスに基づいて作成された短単位辞書であり、日本語歴史コーパス(CHJ; 国立国語研究所 2025)や日本語話し言葉コーパス(CSJ; 国立国語研究所 2006)、日本語日常会話コーパス（CEJC; 小磯・天谷・居關・臼田・柏野・川端・田中・伝・西川・渡邊 2023）、現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ; 前川・山崎 2014)に登場する語などを収録している。したがって、国語研によるコーパスの拡張等によって順次更新されている。したがって、利用者はWeb 茶まめにアクセスすることによっていつでも最新の UniDic に基づく形態素解析を利用できる。また、利用者は異なる UniDic による解析結果の違いを比較することもできる。

本稿では、この Web 茶まめに文節・長単位解析の機能を追加するものであるが、異なる時代や辞書に対応する解析を提供する必要がある。文節・長単位解析器である Monaka は日本語古典においても高精度な解析を実現できることを実証しているが、解析対象の時代に対応した解析モデルを準備して提供する必要がある。

3. 「Web 茶まめ」における文節・長単位解析機能の実装

文節・長単位解析機能の実装は以下のように行なった。

① **辞書選択による解析モデルの自動選択**

辞書選択時に対象とする時代やレジスタ（口語・書き言葉・文語、方言など）をユーザが指定することになるが、Monaka 解析モデルもこれらの区分に準じる。辞書と Monaka 解析モデルをあえて異なるレジスタで用いる利点も特に考えにくいことから、利用時の利便性を優先して辞書選択時に解析するモデルが自動で選択されるようにした。2026 年 4 月時点において利用

可能な解析モデルは 3 種類あり、(a) BCCWJ モデル(現代)、 (b) 近代モデル、 (c)全時代モデル、である。(a)については BCCWJ2 に利用するモデルであり、前述の解析精度を実現した実用レベルのモデルである。 (b) については、主に明治期の明六雑誌(明治初期の文語文)を対象に試行的に開発したモデルである。なお、近代における長単位語については、その認定基準が確立されているわけではないため、参考程度の解析結果であると言える。(c) については、平安期～室町期における CHJ 収録の長単位と現代語の長単位コア情報から学習したモデルであり、平安期以降の日本語について文節・長単位の解析が可能ではあるが、長単位の認定基準とはやや異なる品詞を出力するなど、開発途中の解析モデルである。現代・近代以外の時代において文節や長単位境界をまずは調査したい場合にある程度有効であると考えられるが、その解析結果については人手による検討など、注意を持って扱うべきである。

② **出力項目の追加**

長単位の具備する項目のうち、現段階で出力可能な項目を選択することができる(図2)。現時点においては、品詞の他、活用型・活用形、および読みについて出力することができる。なお、前述の通り、これらの項目について(a)の現代モデルについては精度の検証済み、(b)の近代については試行レベル、(c)については正確性が低く、あくまで参考程度である。

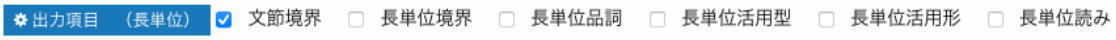


図 2

4. 利用例

辞書	文境界	キー（＝表層形）	語彙素細分類	品詞	文節境界	長単位境界	長単位品詞	長単位活用型	長単位活用形	長単位読み
現代語	B	私		代名詞	B	B	代名詞			ワタシ
現代語	I	は		助詞-係助詞	I	B	助詞-係助詞			ワ
現代語	I	国立		名詞-普通名詞-一般	B	B	名詞-固有名詞-一般			コクリツコクゴケンキューショ
現代語	I	国語		名詞-普通名詞-一般	I	I	*	*	*	*
現代語	I	研究		名詞-普通名詞-サ変可能	I	I	*	*	*	*
現代語	I	所		接尾辞-名詞的-一般	I	I	*	*	*	*
現代語	I	に		助詞-格助詞	I	B	助詞-格助詞			ニ
現代語	I	き		動詞-非自立可能	B	B	動詞-一般	カ行変格	連用形-一般	キ
現代語	I	て		助詞-接続助詞	I	B	助動詞	上一段-ア行	連用形-一般	テイ
現代語	I	い		動詞-非自立可能	I	I	*	*	*	*
現代語	I	ます		助動詞	I	B	助動詞	助動詞-マス	終止形-一般	マス

図3

現代語の解析例として「私は国立国語研究所にきています」という文の解析結果を示す(図3)。文節と長単位境界は、「B」または「I」で示され、B は境界の先頭を、I は境界でないことを表す。解析結果は、

/私|は/国立国語研究所|に/き|てい|ます/　　(/ が文節境界、 | が長単位境界)

となっている。例えば、国立国語研究所は、4 つの短単位語（国立・国語・研究・所）からなるが、そのいずれも固有名詞ではないなか、長単位ではそれらを一つの固有名詞として認識することができる。また、「ている」のような複合辞も一つの長単位と認識される。このように、これまで短単位では容易に抽出できなかった固有名詞や複合辞なども容易に抽出することができるようになる。活用型・活用形、および読みについても出力することができるが、これらは短単位語からの組み上げで出力している。なお、BCCWJ2 の構築においても同様の手段を用いているものである。

TOPへ戻る

選択辞書:
- 現代語
- 近代文語

入力文字列:
あゝをとうとよ、君を泣く、君死にたまふことなかれ

出力結果

辞書	文境界	キー（＝表層形）	語彙素細分類	品詞	文節境界	長単位品詞	⟷	辞書	文境界	キー（＝表層形）	語彙素細分類	品詞	文節境界	長単位品詞
現代語	B	あゝ		感動詞-一般	B	感動詞-一般	⟷	近代文語	B	あゝ		感動詞-一般	B	感動詞-一般
現代語	I	をとうと		名詞-普通名詞-一般	B	名詞-普通名詞-一般	⟷	近代文語	I	をとうと		名詞-普通名詞-一般	B	名詞-普通名詞-一般
現代語	I	よ		助詞-終助詞	I	助詞-終助詞	⟷	近代文語	I	よ		助詞-終助詞	I	助詞-終助詞
現代語	I	、		補助記号-読点	I	補助記号-読点	⟷	近代文語	I	、		補助記号-読点	I	補助記号-読点
現代語	I	君	代名詞	代名詞	B	代名詞	⟷	近代文語	I	君	代名詞	代名詞	B	代名詞
現代語	I	を		助詞-格助詞	I	助詞-格助詞	⟷	近代文語	I	を		助詞-格助詞	I	助詞-格助詞
現代語	I	泣く		動詞-一般	B	動詞-一般	⟷	近代文語	I	泣く		動詞-一般	B	動詞-一般
現代語	I	、		補助記号-読点	I	補助記号-読点	⟷	近代文語	I	、		補助記号-読点	I	補助記号-読点
現代語	I	君	代名詞	代名詞	B	代名詞	⟷	近代文語	I	君	代名詞	代名詞	B	代名詞
現代語	I	死に		動詞-一般	B	動詞-一般	⟷	近代文語	I	死に		動詞-一般	B	動詞-一般
現代語	I	た		助動詞	I	助動詞	⟷	近代文語	I	たまふ	尊敬	動詞-非自立可能	I	*
現代語	I	ま		感動詞-フィラー	B	感動詞-フィラー	⟷	近代文語	I					
現代語	I	ふ		接頭辞	B	接頭辞	⟷	近代文語	I					
現代語	I	こと		名詞-普通名詞-一般	B	名詞-普通名詞-一般	⟷	近代文語	I	こと		名詞-普通名詞-一般	B	名詞-普通名詞-一般
現代語	I	なかれ		形容詞-非自立可能	B	形容詞-一般	⟷	近代文語	I	なかれ		形容詞-非自立可能	B	形容詞-一般

図4

近代語を事例に辞書比較機能を紹介する（図4）。「あゝをとうとよ、君を泣く、君死にたまふことなかれ」という与謝野晶子の詩からの引用であるが、現代語と近代文語との比較において、現代語では「たまふ」が認識できず、3つの短単位語に分割されてしまうが、近代文語では正しく認識される。この短単位語の認識間違いによって、長単位語の認識にも間違いが発生しているが、近代文語では正しく認識できていると言えよう。

5. まとめと今後の予定

本稿では、に日本語研究者が利用することを想定して開発された形態素解析 Web サービスである Web 茶まめにおける文節・長単位機能の実装について論じた。これまでの Web 茶まめのインターフェースを念頭に、利用者にとって自然な拡張となるよう、文節・長単位解析モデルを選択した辞書から自動で選択するようにし、短単位と同様に長単位についても出力項目を利用者が設定できるようにした。本サービスは http://chamame.ninjal.ac.jp/ で公開されており、一般的に利用されている Web ブラウザからアクセスすることで誰でも利用できる。

現段階では、現代語については実用レベル、近代語については試行レベルの解析精度であるが、今後、UniDic が対象とする各時代・レジスタに対応した文節・長単位解析モデルを順次実装していく予定である。

また、長単位の出力項目は品詞の他、活用型・活用形・読みに限定されるが、他の出力項目も順次対応する予定である。特に長単位語彙素は、語の正規化処理として重要な項目であるが、これについては今回実装した範囲外の解析技術を必要とする。これらに対しても、発表者らは解析技

術をすでに開発しているため、実用を見越した検討ののち実装を予定している。

さらに、さまざまな Web サービスとの連携のための API 整備や利便性向上のための機能追加・改善も逐次行なっていく予定である。

参考文献

堤 智昭, 小木曽 智信（2023）「複数の UniDic 辞書による形態素解析支援ツール『Web 茶まめ』の実装と運用」, 情報処理学会論文誌, Vol.64, No.3, pp.749-757.
http://doi.org/10.20729/00225271

Kudo, Taku・Yamamoto, Kaoru・Matsumoto, Yuji（2004）" Applying conditional random fields to Japanese morphological analysis" *Proceedings of the 2004 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing* (EMNLP).

樺島忠夫（1954）「現代文における品詞の比率とその増減の要因について」『國語學』

樺島忠夫（1955）「類別した品詞の比率に見られる規則性」『國語國文』

菅野倫匡・菊池そのみ（2021）「和歌集における品詞の構成比率の算出方法に関する試論 ―計量語彙論のための標本抽出法を中心に―」『計量国語学』

佐藤龍弥（2025）「品詞構成率と文章の特性との対応に関する批判的検討」日本語学会 2025 年度春季大会オープン学生セッション

尾崎太亮・古宮嘉那子・浅原正幸・小木曽智信（2024）「歴史的日本語資料を対象とした長単位・文節解析器 Monaka の開発と検証」日本語学会 2024 年度春季大会オープン学生セッション

尾崎太亮・浅田宗磨・古宮嘉那子・近藤明日子・小木曽智信（2026）「Monaka による BCCWJ2 における長単位情報の付与支援」『言語処理学会第 32 回年次大会発表資料集』

前川喜久雄（監修）・山崎誠（編）（2014）『書き言葉コーパス―設計と構築―　講座日本語コーパス 2』. 朝倉書店

国立国語研究所（2025）「日本語歴史コーパス」（バージョン 2025.11, 中納言バージョン 2.7.2）https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/（2026 年 3 月 23 日確認）

国立国語研究所（2006）『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所

小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香（2023）「『日本語日常会話コーパス』設計と構築」『国立国語研究所論集』

現代語コーパスを用いた長単位解析器の精度評価

佐藤龍弥（筑波大学学生）

１．はじめに

本発表は現代語コーパスを用いて長単位解析器の解析精度を評価することを目的とするものである。現代語の大規模コーパスである『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ）は 2006 年以降のデータを増補する「BCCWJ2」が計画されている。2025 年度末には 2010 年までのデータの先行公開が予定されており（山崎・髙橋・小木曽 2025）、実際に 2025 年 3 月 24 日に出版サブコーパスのうち「書籍」の短単位データが公開された。この BCCWJ2 では長単位の形態論情報を認定するために長単位解析器「Monaka」（尾崎他 2024）が利用されるという。本発表は BCCWJ に収録されているデータを用いて長単位解析器の精度評価を行うことにより、大規模コーパスを用いた形態素解析器の精度評価に関する方法論を提示するものであり、その一事例として特に BCCWJ2 に利用される Monaka を中心に取り上げることとする。

２．研究対象と研究方法

2.1 研究対象

本発表ではサンプル ID ごとにテキストを収集することが可能である BCCWJ（DVD 版）を使用して、そのうち人手で修正が施されているコアデータのみを研究対象とする。本発表が研究対象としたデータのサンプル数をサブコーパス別に表 1 に示す。

表 1　BCCWJ（DVD 版）におけるサブコーパス別のサンプル数

	OC	OW	OY	PB	PM	PN
サンプル数	938	62	471	83	86	340

次に精度評価を行う形態素解析器について述べる。本発表では Monaka、Comainu、MeCab の 3 種の形態素解析器を用いて精度評価を行う。MeCab は BCCWJ の短単位の解析に、Comainu は BCCWJ の長単位の解析にそれぞれ利用されている。Monaka や Comainu は長単位の解析器であるが、形態素解析を行うと短単位の解析結果も同時に出力されるため、それに合わせて本発表では BCCWJ の短単位の形態素解析器として利用されている MeCab も精度評価の対象とした。Monaka は Sudachi を形態素解析の基盤としており、その短単位解析は UniDic に準拠している。加えて長単位の語彙素の認定には Sudachi の full 辞書（Ver.20240716）を後処理として使用した。また MeCab は現代書き言葉 UniDic（Ver.202302）を使用した。また Comainu は PC へのインストールが困難なことからウェブ上で使用したため、短単位解析に MeCab（Ver.0.98）、辞書に unidic-mecab（Ver.2.1.2）が設定されており、対象としたサンプルの一部に形態素解析を行い解析結果を比較した。

2.2 研究方法

まず研究方法として、BCCWJ を用いた精度評価の方法について論じる。本発表では BCCWJ（DVD 版）の短単位・長単位のコアデータを正解データとする。これは BCCWJ のデータ全体の解析精度は 98%を目標としているのに対して、人手で修正が施されたコアデータは 99%以上の解析精度であることが報告されているからである（小木曽 2014）。次に正解データと同様のテキストに対して精度評価の対象とした形態素解析器によって形態素解析を行う。解析結果の評価方法については小木曽（2013）や菊池・菅野（2023）を参考に「境界」、「品詞」、「語彙素」の 3 項目で評価した。なお評価方法としての「境界」、「品詞」、「語彙素」は小木曽（2013:54-55）に倣って「解析結果において単語の境界が正しかったかどうか」、「境界が正しいことに加えて単語の品詞・活用型・活用形も正しく認定されていたかどうか」、「境界と品詞に加えて語彙素の認定も正しかったかどうか」という各観点からの解析精度を示すものである。解析精度の評価については小木曽（2013:55）と同様に、各観点における「正解語数（正解データの語数）」、「出力語数（解析結果として出力されたデータの語数）」、「一致語数（出力語数のうち正解データと一致した語数）」を基に「適合率」、「再現率」、「F 値」を算出し、基本的には F 値に基づいて精度を評価する。「適合率」、「再現率」、「F 値」については「一致語数／出力語数」、「一致語数／正解語数」、「再現率と適合率の調和平均」によって算出される（小木曽 2013:55）。

また精度評価の際の集計はサンプル単位ではなくレジスター単位で行った。これは本発表で使用したデータはすべて可変長サンプルのため、サンプルによってはテキストの語数に大きな差が確認されたためである。

３．解析精度について

3.1 短単位の解析精度

まず短単位の解析精度についての結果を述べる。短単位は Monaka、Comainu、MeCab の 3 種の形態素解析器を精度評価の対象とした。表 2 は短単位における Monaka の解析精度をレジスター別に示してある。

レジスターごとに各サンプルの解析精度を平均すると、語境界の認定では 99%、品詞の認定では 76%、語彙素の認定では約 72%であることが示された。

表 2　短単位におけるレジスター別の Monaka の解析精度

	語境界			品詞			語彙素
	適合率	再現率	F 値	適合率	再現率	F 値	F 値
OC (知恵袋等)	.989	.995	.991	.757	.761	.758	.719
OW (広報・白書)	.998	.996	.997	.858	.856	.857	.850
OY (知恵袋)	.978	.991	.984	.757	.767	.761	.711
PB (書籍)	.999	.998	.998	.769	.769	.769	.728
PM (雑誌)	.997	.997	.997	.788	.788	.788	.747
PN (新聞)	.996	.998	.997	.801	.803	.802	.783
全体平均	.987	.994	.990	.758	.764	.760	.719

品詞や語彙素の解析精度が低くなったことを踏まえ、試みに品詞について「-」を区切り文字として大分類・中分類・小分類に分割して解析精度を算出し直すと、大分類の水準で79%、中分類の水準で77%、小分類の水準で76%であり、品詞大分類の水準で2割程度の品詞認定が誤っていることが明らかになった。

表3はComainu とMeCabの解析精度を示している。Comainuは大規模のデータを解析させることが難しいため、出版サブコーパスから10サンプルをランダムサンプリングして解析を行った。またMeCabはMonakaと同様にコアデータの全サンプルを対象とした。

表3　ComainuとMeCabの短単位の解析精度

	語境界	品詞	語彙素
Comainu	.914	.873	.843
MeCab	.987	.980	.975

表3を見るとComainuの短単位の解析精度は特に語境界の認定においてMonakaよりも低い結果となった。これはComainuを利用する際の形態素解析器がMeCab（ver.0.98）と古いバージョンのため解析精度が 9 割程度となった可能性が挙げられる。しかし観点別の評価で大きな差が見られない点は重要であり、Comainuの解析精度は語境界が正しければ品詞や語彙素も概ね正解データと一致することを示唆している。またMeCabの解析精度は語境界・品詞・語彙素の全ての観点で高い解析精度であることが示された。これはMeCabがBCCWJの短単位解析器として実際に利用されており、人手で修正を施していない非コアデータの解析精度が98%であるとした小木曽(2014)の報告と矛盾しない結果といえる。

3.2 長単位の解析精度

続いて長単位の解析精度についての結果を述べる。長単位はMonaka、Comainuの2種の形態素解析器を精度評価の対象とした。表4は長単位におけるMonakaの解析精度をレジスター別に示してある。

レジスターごとに各サンプルの解析精度を平均すると、語境界の認定では約 95%、品詞の認定では約68%、語彙素の認定では約46%であることが示された。この結果からMonakaの長単位解析の解析精度は正解データを BCCWJ の長単位コアデータとした場合にBCCWJ が目標としていた非コアデータにおける解析精度である 98%には達しておらず、現状のままでは実用的とはいえないことが示された。

なお品詞の観点に関して、品詞分類の階層性による解析精度への影響を考慮し、短単位の解析結果と同様に、品詞について「-」を区切り文字として品詞を大分類・中分類・小分類に分割して解析精度を算出し直すと、大分類の水準で92%、中分類の水準で80%であり、大分類に比して中分類以下の水準で解析精度が低いことが示された。この結果は名詞であることは正解データと一致するものの、「名詞-固有名詞」と解析すべき語を「名詞-普通名詞」と解析するといった誤解析が相対的に多いことを示している。

表 4　長単位におけるレジスター別の Monaka の解析精度

	語境界			品詞			語彙素
	適合率	再現率	F 値	適合率	再現率	F 値	F 値
OC (知恵袋等)	.965	.960	.963	.660	.655	.657	.512
OW (広報・白書)	.950	.930	.940	.746	.729	.737	.406
OY (ブログ)	.931	.924	.928	.650	.644	.647	.446
PB (書籍)	.978	.971	.974	.672	.667	.669	.453
PM (雑誌)	.950	.946	.948	.676	.673	.674	.456
PN (新聞)	.951	.948	.950	.711	.708	.709	.474
全体平均	.956	.948	.952	.691	.686	.688	.457

次に長単位における Comainu の解析精度の結果について述べる。なお Comainu の解析にあたっては表 2 の結果を踏まえて出版サブコーパスのテキストからランダムサンプリングした 10 サンプルを対象とした。出版サブコーパスの 10 サンプルを対象とした Comainu の解析精度は語境界の認定では約 98.5%、品詞の認定では 98.1%、語彙素の認定では 98.0%であり、全ての観点で非常に高い精度であることが明らかになった。この結果は Comainu が BCCWJ の長単位解析器として実際に利用されており、短単位同様、人手で修正を施していない非コアデータの解析精度が 98%とされている（小木曽 2014）ことと矛盾しない結果といえる。

なお Comainu で形態素解析の対象とした 10 サンプルについて Monaka で同様に形態素解析した結果は表 4 に示した数値と概ね一致することを確認した。

4．長単位解析器の誤解析の例

本節では長単位解析器の誤解析について観点別に確認することで、その傾向を分析する。観点別のエラー分析に先立ち、表 4 の詳細な解析精度について述べると、Monaka は解析の傾向として再現率に比して適合率が高いことが示されている。本発表で扱うデータセットにおける適合率と再現率の関係については、再現率が相対的に高いと正解データが 1 語と解析する語を 2 語以上に分割していることを表しており、適合率が相対的に高いと正解データが 2 語以上に分割している語を 1 語に結合していることを表している。

4.1　語境界の観点から

まず語境界の観点から誤解析の例を整理すると、Monaka は BCCWJ のコアデータを正解データとした場合に、一語を長く認定する傾向があることが明らかになった。表 5 は語境界の観点から見た長単位の過分割の例であり、表 6 は語境界の観点から見た長単位の過結合の例である。なお表内の数値は該当する件数を表している。

表 5、表 6 を見ると Monaka は正解データで 2 語以上に分割される語を 1 語と認定する、過結合が過分割に比して多いことが明らかになった。なお語境界の観点における誤解析のうち、過結合の件数は全体の 7 割程度を占めていることから、件数の多寡を問わず Monaka は誤解析の傾向として過結合の場合が多いことが示された。

表 5　語境界の観点から見た過分割の例

BCCWJ（正）	Monaka（誤）	
ことにし	こと／に／し	49 件
それとも	それ／と／も	39 件
でも	で／も	37 件
に違いない	に／違い／ない	33 件
としたら	と／し／たら	27 件

表 6　語境界の観点から見た過結合の例

BCCWJ（正）	Monaka（誤）	
て／き	てき	351 件
と／いう	という	296 件
と／し／て	として	234 件
て／くる	てくる	157 件
に／よる	による	79 件

特に表 6 において最も件数が多い「て／き」について取り上げる。BCCWJ の文字列検索において「てき」を検索したところ、以下のような用例が確認できた。

（1）a.種々｜の｜方法｜が｜試さ｜れ｜てき｜た。（PM25_00067）
（1）b.思いがけ｜ない｜ニュース｜が｜入っ｜て｜き｜た。（PB42_00003）
（2）a.農業対策｜による｜財政負担｜の｜増加｜を｜懸念する｜。（PN4c_00011）
（2）b.事態｜の｜進展如何｜に｜よる｜ところ｜が｜大きく｜、（OW6X_00032）

（1）a.の例で下線部は助動詞「てくる」の連用形であり、（1）b.の下線部は接続助詞「て」に動詞「来る」の連用形が後接している。表 6 で過結合の例として示した 5 つの例はいずれも BCCWJ が「助詞＋動詞」として解析している語であり、Monaka では（1）b.に示した「て｜き」を一語とする誤解析が多く確認された。また BCCWJ では「に／よる」が一語と解析される例も存在している。（2）a.の用例では「による」は複合格助詞として 1 語と解析されている。一方で（2）b.の用例では文中で述語成分となる「による」は「に／よる」と 2 語で解析されるという違いによる誤解析が確認された。

4.2　品詞の観点から

続いて品詞の観点から誤解析の例を整理すると、Monaka は BCCWJ のコアデータを正解データとした場合に、助詞と助動詞の混同や短単位が「名詞（～可能）」となる語を誤解析する例が確認された。表 7、表 8 は品詞の観点から見た長単位の誤解析の例であり、表内の数値は該当する件数を表している。なお表 7 は大分類の水準、表 8 は中分類の水準で誤解析の例を示している。

表 7　品詞大分類の水準から見た誤解析の例

BCCWJ（正）	Monaka（誤）	
助動詞	助詞	281 件
助詞	助動詞	256 件
名詞	形状詞	89 件
副詞	名詞	85 件
動詞	名詞	79 件
形状詞	名詞	54 件
感動詞	名詞	52 件

表 8　品詞中分類の水準から見た誤解析の例

BCCWJ（正）	Monaka（誤）	
名詞-普通名詞	名詞-固有名詞	154 件
助詞-準体助詞	助詞-格助詞	145 件
名詞-固有名詞	名詞-普通名詞	142 件
助詞-接続助詞	助詞-格助詞	131 件
助詞-格助詞	助詞-準体助詞	132 件
助詞-格助詞	助詞-接続助詞	117 件
名詞-数詞	名詞-普通名詞	74 件

表 7、表 8 を見ると Monaka は機能語や名詞を誤解析する例があることが明らかになった。これらの誤解析を詳細に分析すると以下のような用例が確認できた。

(3) おせっかい｜で｜親切な｜他人｜が｜い｜なけれ｜ば｜。(PB29_00026)
(4) 青アザ｜は｜、｜普通｜ある｜程度｜の｜大きさ｜が｜ある｜ので (PB54_00015)
(5) ですから｜、｜いくら｜子供｜に｜ゆとり｜を｜与え｜て｜も｜、(PB33_00032)

(3) は「で」が助動詞「だ」の連用形の例であり、格助詞と混同する誤解析が確認された。助動詞と助詞の混同はほかにも同じく助動詞「だ」の連用形である「に」の格助詞との混同が見られ、これらの用例だけで助動詞と助詞の誤解析の例の 8 割以上を占めていた。次に (4) は「普通」が名詞の例であり、形状詞と混同する誤解析が確認された。(5) は「いくら」が副詞の例であり、名詞と混同する誤解析が確認された。(4)、(5) の語は短単位でそれぞれ「名詞 (形状詞可能)」「名詞 (副詞可能)」と分類がなされる語であることから、用法によって品詞が柔軟に変化する語であり、Monaka が誤解析する例が多く確認された。

５．おわりに

本発表では複数の形態素解析器を対象に BCCWJ 収録のコアデータを用いた長単位解析器の精度評価の方法とその結果について論じた。BCCWJ2 に利用される長単位解析器 Monaka については、BCCWJ の目標である 98%を基準に据えると下回る結果が示された。また観点別に誤解析を分析すると、語境界の観点では Monaka は一語を長く分割すること、品詞の観点では助詞・助動詞や名詞を誤解析することが明らかになった。本発表の結果は Monaka で自動解析したデータをそのまま非コアデータとして使う場合に、既存の BCCWJ の長単位の非コアデータと共に利用する際に解析精度に違いがある可能性について留意する必要があることを示唆するものである。BCCWJ2 の短単位データが一部コアデータとして公開されたことを踏まえても、長単位データの公開には今後の更なる改善が求められる。

参考文献

小木曽智信 (2013)「中古仮名文学作品の形態素解析」『日本語の研究』9(4), pp.49-62. ／小木曽智信 (2014)「第 5 章形態素解析」山崎誠 (編)『講座日本語コーパス 2 書き言葉コーパス―設計と構築―』pp.89-115,朝倉書店. ／尾崎太亮・古宮嘉那子・浅原正幸・小木曽智信 (2024)「歴史的日本語資料を対象とした長単位・文節解析器 Monaka の開発と検証」日本語学会 2024 年度春季大会オープン学生セッション. ／菊池そのみ・菅野倫匡 (2023)「中古和文資料『夜の寝覚』のコーパス構築の試み」『言語資源ワークショップ 2023 発表論文集』, pp.171-184. ／山崎誠・髙橋雄太・小木曽智信 (2025)「「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の拡張―BCCWJ2 の構築―」『言語処理学会第 31 回年次大会発表論文集』, pp.414-417.

VR 空間における指示詞コソアの選択—現場との比較と通して—

岡﨑友子（おかざきともこ　立命館大学）
藪野光斗（やぶのひろと　立命館大学学部生）

1. はじめに

指示詞コソアの指示領域はこれまで研究者の内省、文献調査、また多くはないが現場調査（岡﨑 2020,2025 等）によって明らかにされてきた。特に現場調査のデータは個人の内省や文献調査では分からない年代・地域・個人の差、さらに岡﨑（2025）の指摘する「指示対象に対する評価・感情」の影響を示す。ただし、指示対象の設置位置、部屋の大きさ等といった条件の違いが、現場の指示詞の使用に影響を与えることは容易に想像され、分析に望ましいデータを得るには、この問題をクリアにする必要がある。

そこで、本発表は様々な地域・世代の日本語、他言語（ベトナム語,岡﨑・松田 2026）の指示詞について、条件を揃えた調査を行うことを目的とした VR アプリケーションを試作した。そして調査を行った結果、VR 空間でもコソアの 3 分節がみられること、また、現場（リアリティ）と VR（バーチャルリアリティ）の違いによるデータの差異と予測されるものも観察された。このようなデータは、未解明の指示詞の用法の分析に役立つと考える。

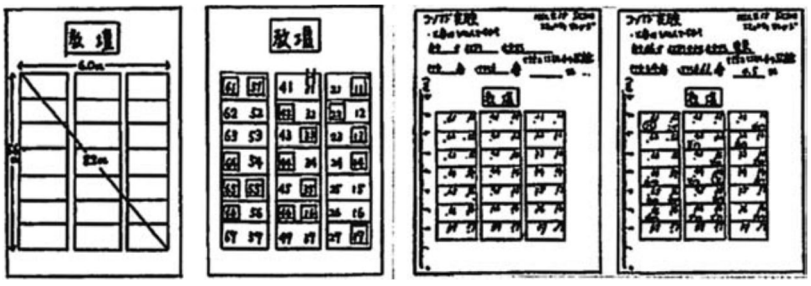
さらに、実際に VR ヘットセットを用いデモンストレーションを行うことにより、現在のプログラムに対する意見を収集するとともに、指示詞以外の言語現象に対し、どのような VR 空間を利用した調査が可能であるかについても議論したい。

2．先行研究と問題の所在

2.1. 日本語学関係

現場調査の先駆的なものに高橋・中村（1992）等がある。これは大教室と机の配置、指示対象としての多くの人員といった大掛かりなものであり（図 1）、同じ条件で調査するには困難さを伴う（この研究は被験者全体の指示の傾向を指摘するものであり、同様の調査に安部（2008）堤（2011）岡﨑（2011）等がある）。

図 1 高橋・中村（1992）の調査シート



そこで、岡﨑（2020,2025）は個人・指示対象の違いによる差異を明らかにするため調査法を以下のように変更した。両論とも話し手（A）と聞き手（B）の位置関係は同じである（図 2）。

【位置 1】調査者（A）・被験者（B）は 11m離れて向かい合う

図2　調査配置

【位置２】調査者（A）・被験者（B）は 5.5m離れて向かい合う

（調査者（A）が位置❺と❻の間に立つ）

【位置３】調査者（A）・被験者（B）は並んで同じ方向をみる

【位置１】「害虫」（ゴキブリ）を扱うもののみ以下に示す。

○岡崎（2020）【第２問】対象物は「害虫等の好ましくないものの絵（A３）」

被験者（B）「＜調査者の名前＞さん！（❶～⑩の害虫等の名前）がいます！」

調査者（A）「えっ！どこですか？」被験者（B）「（ここ・そこ・あそこ）です！」

○岡崎（2025）［質問2：対象2ゴキブリ］

可動式の玩具のゴキブリが❶～⑩にランダムに出現する。

〈あなた〉「△△さん（調査者）！ゴキブリがいます」

〈調査者〉「えっ！？どこですか？」〈あなた〉「ここ・そこ・あそこです」

表1 岡崎（2020）【位置1】【第2問】（害虫）

1*2	NM	YS	SA	AY	UY	SR	UR	OY	TT	IU
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	ソ	ソ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❸	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	コ	ソ	コ	ソ
❹	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア
❺	ア	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア
❻	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ア
❼	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア
❽	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ
❾	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ
⑩	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ

図3 岡崎（2020）の調査

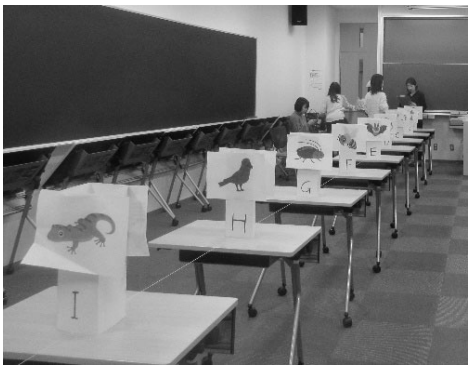


表2 岡崎（2025）【位置1】［質問2：対象2ゴキブリ］

1*2	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	S	T	U	V
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	ソ	コ	コ	コ	ソ	コ	ソ	コ	コ	コ	ソ	コ	ソ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❸	ソ	◎	ソ	ソ	コ	コ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ア	コ	ア
❹	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア
❺	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ
❻	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア
❼	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア
❽	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❾	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
⑩	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ

図4 岡崎（2025）の調査

なお、岡崎（2020）の調査（図３）は机を一直線に並べ、その上に対象物を置いたため、離れた対象物が見えにくくなるという問題が発生していた。岡崎（2025）はその問題を解消するため床の上に設置した（図４）。そのため岡崎（2020）とは目線の高さが違う。そして、調査方法を変更したためであろうか、例えば表２に示すように、【位置１】位置⑩（聞き手前）にアが見られるという結果が出た。これは話し手にとっては対象物が聞き手前１ｍの床置きよりも、机上の方が近くに見えるためと予想される。

また、岡崎（2019）において、位置❶から順に質問すると無意識に「コ→ソ→ア」と被験者が答えてしまうのではないかという指摘を受けた。そのため、岡崎（2025）では位置❶か

ら⑩までの対象をランダムに回答させた。例えば被験者Ⅰ・Ｊはコソアソア、被験者Ｖはコアソアソと回答している（表２）。この結果から指摘が妥当である可能性は高く、今回のVRプログラムもランダムに現れる形式とした。

図5 岡﨑・松田（2026）の調査

次に、他言語における調査について、岡﨑・松田（2026）はベトナム語の指示詞を同様の方法で現地調査した（ハノイ国家大学外国語大学）。岡﨑（2025）と同様に教室内で行おうと考えたが、11ｍの幅がある教室が用意できず、廊下で調査を行っている（図５）。比較するデータがないため、どのような影響があったか不明だが、調査空間が違うと指示詞の使用に差がでることが予想される。

2.2. VR 空間を用いた研究

指示詞は空間スケールを心理的な側面から把握できる指標となることが期待され、居心地の良い空間を設計する目的により建築分野で、現実とVR空間での実験がなされている。その中の若松・大崎（2022）では、１）VR空間においても指示領域の存在が示唆される。特に指示代名詞「コレ」「アレ」によって、ある一定の距離で明瞭に空間を分節できる、２）VR空間におけるコレ領域の拡がり方は現実空間と似た卵型になる。その大きさはVR空間の方が小さいと考えられる、３）現実空間に比べVR空間の方が（特に前方向、右斜め前方向の見上げる位置）指示物までの距離を遠く知覚することが示唆される、と述べている。その他にソレに関して「コレ領域・アレ領域に比べ、その分布にはばらつきがあり、『ここからここまでは確実にソレ領域』と断定できる範囲はみられない」とし、現実空間と比べVR空間はソレ領域がはっきりと分布しないと述べる。これは若松・大崎（2022）が聞き手の設定がない発話者のみの調査であり（聞き手領域指示のソが出ない）、不安定な中距離のソのみを観察したためと考えられる。

以上のように、他分野でも指示詞の調査・分析は行われているが、日本語学における研究成果はあまり参照されていない。これについては相互に参照する必要があろう。

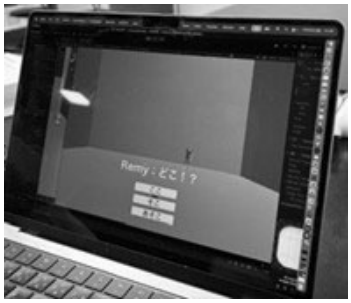
2.3 問題の所在

2.1で述べたように現場調査で全ての条件を揃えることは難しく、また、設定するだけでも様々なコストがかかる。また、内省による分析も安部（2008:74）において「語感を異にしているもの同士が、同じ用例に対して、異なった（自分の）言語体系からの解釈を議論していることによる議論のずれの可能性も、指摘できるように思われた」と述べるように、指示詞の用法解明には多くの客観的なデータが必要であるとも感じる。

そこで本発表は、調査のブレを排除した条件下で、客観的・具体的なデータをより多く取得することを目的としたVRアプリケーションを作成（試作版）した。そして、収集したデータの分析から、日本語の指示詞の用法の全体的な姿を明らかにする。さらに、同じく３系をもつ他言語の指示詞を調査することにより、指示のシステムの解明を目指す。なお、現VRアプリケーションは試作段階であり、様々な調査や議論を経て作り上げていく必要がある。

３.調査方法

VR ヘットセットは Meta 社 Meta Quest 3S、開発エンジンは Unity（2D・3D のゲームを作成することができるプラットフォーム）を用いた。まず、位置条件は岡﨑（2025）とほぼ同様であるが、【位置１】（調査者と被験者の距離 11m）を変更し、アバター（Remy）と被験者の間の距離を 10m とした（［条件１］）。なお、アバター（Remy）は［条件１］［条件２］の場合には指示対象物の横 2m、［条件３］の場合には被験者の横 0.6m に設置した。



〇位置条件　1m間隔の位置❶から⑩に指示対象物が現れる
アバター（Remy）と被験者の位置関係は３つ

［条件 1］　アバターと被験者は 10m離れて向かい合う

［条件 2］　アバターと被験者は 5.5m離れて向かい合う

［条件 3］　アバターと被験者は並んで同じ方向をみる

〇質問形式①　被験者「ねえねえ、バラ咲いてるよ」
アバター（Remy）「どこ！？」

〇質問形式②　被験者「ゴキブリ！」　アバター（Remy）「どこ！？」

→画面に「ここ」「そこ」「あそこ」の３つのボタンを表示

→被験者がいずれか１つのボタンを押して回答する

→回答と各種パラメータをログに記録する

→質問形式①②をそれぞれ 10 回（位置❶～⑩）、位置はランダムに現れる

４．調査結果と分析

まず、岡﨑（2025）の被験者に調査を行った[1]（以降の表では、VR 調査と現場調査は「VR」「R」、指示対象のバラとゴキブリは「花」「ゴ」と記載する）。被験者 Q（20 代男性千葉）は、VR 調査（表３・表４）の位置❶（被験者の手前）で「花」より「ゴキブリ」のコが狭くなる。その他は、現場調査（表５・表６）と差はあまりない。次に、被験者 N（30 代女性鳥取）も同じく、VR 調査（表７・表８）の位置❶で「花」より「ゴキブリ」のコが狭い。また、被験者 N の現場調査（表９）でみられた話し手と聞き手の間のアが、VR 調査（表７）では現れない。これについて発表者も試したところ、現場調査の際にはアを使用すると感じていたが、表 11・表 12 に示すように VR 調査では中間のアが現れなかった（コも「ゴキブリ」で狭くなる）。

表３VR（花）

Q	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	コ	コ	ソ
❸	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ア
❻	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ア
❽	ソ	ア	ア
❾	ソ	ア	ア
⑩	ソ	ア	ア

表４VR（ゴ）

Q	条1	条2	条3
❶	ソ	コ	ソ
❷	ソ	ソ	ソ
❸	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ア
❽	ソ	ソ	ア
❾	ソ	ア	ア
⑩	ソ	ア	ア

表５R（花）

Q	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	コ	コ	ソ
❸	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ソ
❽	ソ	ア	ア
❾	ソ	ア	ア
⑩	ソ	ア	ア

表６R（ゴ）

Q	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	コ	コ	ソ
❸	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ア
❻	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ア
❽	ソ	ソ	ア
❾	ソ	ア	ア
⑩	ソ	ア	ア

[1] 2026 年２月立命館大学で行った。岡﨑（2025）のもう一つの質問を記載しておく。［対象１花］（ランダムに指定）位置❶～⑩の花の名前［●●］を入れて、話しかけてください。〈あなた〉「△△さん！［●●］が、きれいに咲いてます」〈調査者〉「えっ!?どこですか？」〈あなた〉「ここ・そこ・あそこです」

表７VR（花）

N	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	コ	コ	ソ
❸	コ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ア
❽	ソ	ソ	ア
❾	ソ	ア	ア
❿	ソ	ア	ア

表８VR（ゴ）

N	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	ソ	ソ	ソ
❸	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ソ
❽	ソ	ア	ア
❾	ソ	ア	ア
❿	ソ	ア	ア

表９R（花）

N	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	コ	コ	ソ
❸	コ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ア
❺	ソ	ソ	ソ
❻	ア	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ア
❽	ア	ア	ア
❾	ソ	ア	ア
❿	ソ	ア	ア

表10R（ゴ）

N	条1	条2	条3
❶	コ	コ	ソ
❷	コ	ソ	ソ
❸	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ア
❺	ソ	ソ	ア
❻	ソ	ソ	ア
❼	ソ	ア	ア
❽	ソ	ソ	ア
❾	ソ	ア	ア
❿	ソ	ア	ア

表11VR（花）

岡	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ
❸	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ア
❻	ソ	ソ	ア
❼	ソ	ソ	ア
❽	ソ	ア	ア
❾	ソ	ア	ア
❿	ア	ア	ア

表12VR（ゴ）

岡	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	ソ	ソ	ソ
❸	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ア
❻	ソ	ソ	ア
❼	ソ	ア	ア
❽	ソ	ア	ア
❾	ソ	ア	ア
❿	ソ	ア	ア

ただし、上記の結果とは違う（逆の）結果がでる被験者もいる。表 13 から表 16 に示すように、被験者 L（20 代男性奈良）は、現場調査と VR 調査であまり差は出ず、さらに、現場調査では出なかった中間のアが VR 調査に出ている。

表13VR

L	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ
❸	ソ	ソ	ソ
❹	ア	ソ	ソ
❺	ア	ソ	ア
❻	ソ	ソ	ア
❼	ソ	ア	ア
❽	ソ	ア	ア
❾	ソ	ア	ア
❿	ソ	ア	ア

表14VR（ゴ）

L	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ
❸	ソ	コ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ
❺	ア	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ア
❼	ソ	ア	ア
❽	ソ	ア	ア
❾	ソ	ア	ア
❿	ソ	ア	ア

表15R（花）

L	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ
❸	コ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ア
❽	ソ	ア	ア
❾	ソ	ア	ア
❿	ソ	ア	ア

表16R（ゴ）

L	条1	条2	条3
❶	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ
❸	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ア
❽	ソ	ア	ア
❾	ソ	ア	ア
❿	ソ	ア	ア

その他、新しく VR 調査したデータ（表 17 から表 22）を示す[2]。紙幅の関係から詳しい分析は記載できないが、VR 調査におけるデータは現場調査のものとやや違うものの、全体的に大きな差異はないと判断している。ただし、今後、なぜ VR 調査と現場調査のデータに差異が出るかについても分析が必要であり、その結果は指示詞の用法解明の一助となると予想される。

以上から、VR 調査でも空間におけるコソアの 3 分節は観察され、現場調査と何等かの差異はあるが、VR アプリケーションによる指示詞の領域調査は可能と考える。

5．おわりに

今後、本研究では日本語の様々な地域・世代の指示詞のデータを取るため、VR プログラムの調整を行っていく。展開として①聞き手（アバター）・背景（教室・運動場等）・指示対象の違いで指示領域に差が出るか調査する、②回答までの時間から、どの領域で回答に迷いがあるかを数値化し指示領域の境界を予測する、③アイトラッキング機能を使い、視線や注意の対象をデータ化する、といったことが考えられる。そして、調整が終わった後に、同じく 3 系の指示詞を持つ他言語（韓国語・ベトナム語・タイ語）に翻訳し、調査を行う。

本研究は現代語を対象としているが、様々な調査・分析を行うことにより、最終的には、日本語はどのように歴史的に 2 系列から 3 系列になったのか、そのヒントも探っていきたいと考えている。

---

[2] 2026 年 2 ・ 3 月に立命館大学・岡山大学・福岡大学で調査を行った。被験者は TR（50 代男性滋賀）KJ（20 代男性東京）KS（60 代男性大阪）KA（40 代男性熊本）TS（50 代男性岡山）IM（40 代女性愛媛）HY（20 代女性広島）FM（40 代女性兵庫）KT（50 代男性大阪）である。ご協力に感謝する。

表17　VR（花）条件１

1＊1	TR	KJ	KS	KA	TS	IM	HY	FM	KT
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	ソ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	コ	ソ	コ	コ	コ
❸	ソ	コ	コ	コ	ソ	ソ	コ	コ	コ
❹	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ア	ソ	ソ
❼	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❽	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❾	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❿	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ソ

表18　VR（花）条件２

1＊2	TR	KJ	KS	KA	TS	IM	HY	FM	KT
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	コ	コ	ソ	コ	コ
❸	ソ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ア	ソ	ソ	ア	ア	ア	ソ	ア
❽	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ソ	ソ	ア
❾	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア
❿	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア

表19　VR（花）条件３

1＊3	TR	KJ	KS	KA	TS	IM	HY	FM	KT
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	ソ	コ	ソ	ソ	コ
❸	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ
❹	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ア
❺	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ
❻	ア	ソ	ア	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ア
❼	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア
❽	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア
❾	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア
❿	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア	ア

表20　VR（ゴ）条件１

2＊1	TR	KJ	KS	KA	TS	IM	HY	FM	KT
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	ソ	コ
❸	コ	コ	ソ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	コ
❺	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❻	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❼	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❽	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア
❾	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❿	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ

表21　VR（ゴ）条件２

2＊2	TR	KJ	KS	KA	TS	IM	HY	FM	KT
❶	コ	コ	コ	コ	コ	コ	ソ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	コ	ソ	ソ	ソ	コ
❸	ソ	コ	コ	コ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❹	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ
❺	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア
❻	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ
❼	ソ	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ
❽	ア	ア	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ソ	ア
❾	ソ	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア
❿	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ソ	ア

表22　VR（ゴ）条件３

2＊3	TR	KJ	KS	KA	TS	IM	HY	FM	KT
❶	コ	コ	コ	コ	コ	ソ	ソ	コ	コ
❷	コ	コ	コ	コ	ソ	ソ	ソ	コ	ソ
❸	ソ	ソ	ソ	コ	ソ	ア	ソ	ソ	ソ
❹	ア	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア
❺	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	ア	ア
❻	ア	ア	ソ	ソ	ソ	ア	ア	ア	ア
❼	ア	ア	ソ	ソ	ア	ア	ソ	ア	ア
❽	ア	ア	ア	ソ	ア	ア	ア	ア	ア
❾	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア
❿	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア	ア

参考文献

安部清哉（2008）「指示代名詞の現場指示の領域－高橋調査法による2008 年若者のコソアド―」『学習院大学文学部研究年報』55、pp.73-112．岡﨑友子（2011）「指示代名詞の直示用法における領域調査－高橋調査法による、2010 年中国四国地方の若者のコソア―」『就実論叢』40、pp.29-48. 岡﨑友子（2019）「現代語コソアの指示について」日本語文法学会第20回大会(2019 年 12 月 7 日、於学習院大学)．岡﨑友子（2020）「現代日本語の指示詞コソアの指示領域」『文学論藻』第 94 号、東洋大学文学部紀要第 73 集日本文学文化篇、pp.140（1）-124（17）．岡﨑友子（2025）「現場調査からみる指示詞コソアの選択―評価･感情に焦点をあてる―」『論究日本文學』第 122 号 pp.15-28. 岡﨑友子・松田真希子（2026）「現場調査からみるベトナム語の指示詞―指示領域と感情・評価の影響について―」『論究日本文學』第 123 号、pp.1-24．高橋太郎・中村祐里子（1992）「1991 年、わかもののコソアド」『麗澤大学論叢』3、pp.1-35．堤良一（2011）「西日本の若者のコソア―高橋調査法による岡山大学での調査からー」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』31、pp.15-26．村松若菜、大崎淳史（2022）「VR 上の指示代名詞領域による空間分節―VR 空間の知覚再現に関する研究―」『日本インテリア学会論文報告書』32、pp.23-29.

追記

VR アプリケーション作成に関し立命館大学映像学部望月茂徳先生にご助力とご教授を頂いた。また、「七隈で「ことばの会」」（於：福岡大学、2026 年 3 月 16・17 日）ではデータと貴重な意見を頂いた。記して感謝する。

日本語の二字漢語における準派生的構造の再検討

秦　周漢（しん　しゅうかん）（総合研究大学院大学大学院生）

１．はじめに

単語は単純語と合成語に分類され、合成語はさらに語形成の観点から派生語と複合語に区別される。

単語 ┬ (A) 単純語
　　└ (B) 合成語 ┬ (1) 複合語（二つ以上の構成語より成る）
　　　　　　　└ (2) 派生語（一つの語基と一つ以上の接辞より成る）

（阪倉 1986）

しかしながら、「日本」「国立」「公的」「基準」「物質」などの二字漢語については、それを単純語とみなすべきか、あるいは合成語（派生語・複合語）とみなすべきかについて、現在に至るまで議論が分かれている。日本語の漢語語彙において、漢字一字を語形成の最小単位（いわゆる字音形態素）とみなす立場は、森岡（1968）による文字形態素論以来、継続的に議論されてきた。しかし、この立場に対しては、二字漢語の慣用性や不可分性を重視する観点から批判も提示されている（宮島 1981 など）。とはいえ、意味的透明性に関する研究（本多 2015 など）が示すように、二字漢語の内部には形態的分解可能性が依然として認められ、共時的にも一定の構造性が保持されていると考えられる。

以上を踏まえ、本研究は字音形態素の語形成機能に基づいて、二字漢語内部の派生的構造パターンを明らかにすることを目的とする。「葬式」「医者」「不明」「公的」「土器」のように、内部に派生的関係が認められる語を対象とし、これらを「準派生語」と位置づけて分析を行う。

２．二字漢語の構成に関する先行研究

二字漢語の内部構造をめぐって、まず、二字漢語を単純語とみなす立場がある。野村（1988）は、「二字漢語が複合語であるという語構成意識がほとんど失われている」ことを指摘し、「二字漢語は単純語とほとんどかわりがない」と述べ、共時的観点から単純語として扱うべきであるとする。また、張（2019）も、語源的観点ではなく現代日本語における語構成意識を重視し、二字漢語を単純語のように取り扱っても大きな問題はないとの見解を示している。

これに対し、一部の二字漢語を複合語とみなす立場も存在する。石井（2007）は、「電話」「戦前」「禁煙」「洗車」などの例を挙げ、これらは非自立的ではあるものの語基同士の結合であり、複合語として捉えることができると指摘している。

さらに、折衷的な捉え方もある。宮地（1973）は、二字漢語を単なる単純語としてではなく、語基どうしの結合体として捉える必要性を指摘し、各構成要素が一定の意味機能を保持したま

ま結合している点に注目した。そのため、二字漢語は語レベルの単純語とも通常の複合語とも異なる、中間的な構造をもつものと位置づけられる。また、宮島（1980）も、「二字漢語の多くは複合語とも派生語ともつかない」とし、「電話」「行進」などは、典型的な複合語や派生語とは異なる性質を持つと指摘している。

従来の議論の多くは、二字漢語を単純語とみなすか複合語とみなすかに焦点が当てられている。実際には、二字漢語の中には、前項あるいは後項の構成要素が接辞的な機能を果たしていると考えられる構成も存在する。この点について、数は多くないが、二字漢字語の一部を派生的構造として捉えようとする研究も存在する。たとえば、張（2014）は二字漢語動詞を対象とした分析において、「強化」「弱化」「無視」「否認」「不足」など、接辞的構成要素を含む語を「接辞型漢語動詞」と呼ぶ。

以上のように、二字漢語の位置づけには、明確な合意が得られていない。本研究ではその定義を考慮せず、折衷的立場から、二字漢語内部に一定の構造性を認める観点を採用する。

３．研究対象と方法

本研究では、分析対象として『BCCWJ 短単位語彙表(Version 1.1)』に収録された二字漢語 50,784 語を用い、各語の内部構造について初歩的な手作業による判定を行った。その上で、二字漢語の中から準派生語を抽出するために、以下の四つの基準を設定した。

（1）3 字漢語派生可能性

当該字音形態素が既存の二字語基に付加し、3 字漢語を形成し得るかどうかということである。結合可能性の観点からみて、既存の 2 字語基と結合して 3 字漢語を形成し得ない字音形態素は、より制約の大きい 1 字要素との結合においても生産的に機能しにくいと考える。

この点については、張（2019）の研究を参照した。張（2019）は、常用漢字表に含まれる 2,136 字を対象とし、ある漢字が二字語基と結合して 3 字派生語を形成し得る場合、それを接辞性字音形態素として認定している。合計 693 字が接辞的性質を持つこととされている。本研究では、張の一覧表を用い、50,784 語の二字漢語を対象にスクリーニングを行った結果、30,934 語が本基準を満たすことが確認された。

（2）生産性

当該字音形態素が複数の語構成要素と反復的に結合し、語形成に参与しているか。単一またはごく少数の語にしか現れないものについては生産性が低いと判断し、準派生語から除外した。

（3）意味的透明性

各字音形態素の意味が語全体において推測可能か。語全体の意味が慣用化し、構成要素から意味を推測することが困難な場合には、準派生語から除外した。たとえば、「旅券」は「旅＋券」から「旅行のための証明書」という意味が比較的明確に理解できるのに対し、「証券」は前後要素との対応関係が抽象的であり、相対的に意味的透明性が低いと判断される。

（4）共起成分が一定の意味的カテゴリーを形成する

当該字音形態素と結合する語群を観察し、それらが「属性」「状態」「行為」など、一定の意味カテゴリーを形成しているか。たとえば、「-者」は「強者」「賢者」「訳者」「話者」など、前項に

人の「属性」「行為」を表す要素を取り、それに該当する人を表す語を形成するのに対し、「二者」は数詞と結合した指示的用法であり、同様の意味的カテゴリーには属さない。

以上の四基準をすべて満たすものを、本研究では準派生語として認定した。

４．結果と考察

以上の（2）～（4）の基準に基づく一次的な判定の結果、準派生語の候補として 17,848 語が抽出された。前部要素が語形成機能を担うもの（接頭的構造）と後部要素が語形成機能を担うもの（接尾的構造）に分けられる。本研究の分析対象においては、接頭的に機能する漢字（以下、接頭辞）は 202 項目、接尾的に機能する漢字（以下、接尾辞）は 516 項目確認された。準派生語の形成語数が多い字音形態素の上位 10 項目を表 1 に示す。

表 1　準派生語の形成において頻出する接頭辞・接尾辞（上位 10 項目）

接頭辞	準派生語個数	語例	接尾辞	準派生語個数	語例
大	259	大国　大木	人	203	法人　老人
同	209	同時　同社	法	163	憲法　療法
無	184	無料　無線	数	154	件数　人数
本	181	本部　本日	名	146	地名　題名
不	158	不明　不良	文	142	論文　呪文
新	152	新人　新品	内	139	国内　室内
全	147	全国　全身	水	130	海水　冷水
小	142	小隊　小額	体	122	液体　導体

接頭的要素よりも接尾的要素の方が数が多いことから、二字漢語においては後部要素が語形成において重要な役割を担う傾向があると考えられる。また、接頭的要素には「大」「小」「新」「不」「無」など、程度・評価・否定に関わる意味を持つものが多く見られるのに対し、接尾的要素には「人」「法」「数」「名」「体」など、語の意味を類別化・名詞化する機能を担うものが多い。そこで、これらの機能的パターンを検討するために、本研究では頻度上位 500 語を対象とし、その内部構造について機能的・意味的類型の観点から分類分析を行った。その結果、概ね以下のような類型が認められた。

表 2　接頭的構造における分類パターンと語例

分類	準派生語
対立型	逆転 反面 不安 不明 不満 不良 不要 不正 不快 不可 不利 不在 不能 不審 不便 不信 無料 無線 無事 無効 無言 無償
程度型	急増 高齢 高額 高原 高価 高温 最高 最大 最終 最新 最小 最適 最悪 少量 多発 大会 大国 大佐 長寿 長期 深夜

限定型	上級 上部 上流 下旬 下部 外部 外務 内部 内面 中旬 中年 先頭 今夜 今月 今週 昨夜 先週 翌日 翌年 翌朝 来週 毎週 毎月 毎回 前回 前半 前述 前方 前者 前掲 前条 前期 後期 後者 後方 後日 次回 次男 次官 初期 初日 初代 全国 全身 全面 全力 全額 各種 各国 各号 総務 総額 総会 総数 諸国 諸島 同時 同僚 同法 同条 同期 同社 同項 同級 当局 本人 本部 本日 本書 本体 本社 本件 本店 原稿 原作 原油 原価 現状 現役 支店 支部 支所 自治 自宅 自社 自家 自国 両親 両方 両者 両国 両側 両面 半身 半数 長男 再編 再開 再生 再建
動作型	被害 被告 防災 施策 定期 殺人 在日 立法 耐震 退院 防犯 入国 入会 入社 入所 防火
状態型	有効 既存 有機 有料 有害
属性型	公害 公務 実績 短期 貴族 女優 洋服 新設 聖書 実情 古墳 異議 私立 実務 主役 公社 好意 新人 微塵 実体 公庫 好調
待遇型	御飯 御覧

接頭的構造（188 語）の分類パターンは表 2 に示す。以下の 7 種類に分けられる。

（1）対立型（22 語）

元の語義と対立する意味関係を形成するものである。「不安」「不明」のような否定、「無料」「無効」のような欠如、「逆転」「反面」のような反転が見られる

（2）程度型（21 語）

共起要素に対して程度・量・規模などの情報を付加し、意味の強度や範囲を調整するものである。「高齢」「高額」は程度の高さ、「多発」「少量」は数量、「大会」「大国」は規模を示す

（3）限定型（100 語）

時間・空間・範囲・関係などの観点から語の適用範囲を特定化するものである。「上部」「内部」は位置限定、「今週」「翌日」は時間限定、「全国」「各国」は範囲限定、「同社」「本人」は指示限定、「両親」「半数」は数量限定、「長男」「次回」は順序限定を示す。

（4）動作変化型（16 語）

動作・過程・変化に関する意味を付加し、出来事性を表すものである。「入国」「入社」は移行、「退院」は離脱、「防災」「防犯」は予防、「被害」は受動関係を示す。

（5）状態型（5 語）

共起要素に対して状態・性質を付加し、対象の存在様態を示すものである。「有効」「有料」「有害」は存在・属性、「既存」は成立済みの状態を表し、静的な意味付与を行う点に特徴がある。

（6）属性型（22 語）

共起要素に対して性質や類型に関わる意味を付加する。「新人」「洋服」などに見られるような属性付与を通じて、共起要素の意味を特徴づける機能を持つ。

（7）待遇型（2 語）

「御飯」「御覧」などに見られるように、共起要素に敬意や丁寧さに関わる意味を付加する。

表 3　接尾的構造における分類パターンと語例

分類	準派生語
名称型	通路 経路 学歴 体力 圧力 電力 効力 武力 学力 数量 容量 燃料 食料 給料 肥料 飲料 確率 税率 食欲 西洋 東洋 石油 醤油 麻薬 農薬 表面 側面 地名 農民 庶民 区民 難民 絵本 憲法 療法 商法 民法 刑法 警報 周辺 論文 水分 塩分 貨物 食物 薬物 書物 作物 南部 北部 警部 西部 東部 商品 作品 食品 鬱病 鉛筆 看板 周波 電波 青年 若年 祝日 水道 国道 軌道 歩道 食堂 与党 頻度 強度 精度 水田 視点 拠点 焦点 欠点 頂点 利点 商店 書店 頭痛 運賃 社長 会長 議長 部長 校長 市長 課長 身長 院長 官庁 農地 産地 宅地 団地 墓地 球団 石炭 近代 艦隊 事態 形態 熱帯 遺体 液体 導体 親族 付則 画像 映像 水槽 酸素 炭素 水素 酵素 窒素 関税 国税 衛星 惑星 慢性 税制 法制 件数 人数 回数 日数 海水 洪水 法人 他人 犯人 婦人 巨人 職人 詩人 商人 役人 証人 昼食 朝食 灰色 形状 工場 会場 戦場 役所 住所 近所 芸術 学術 特集 業種 機種 品種 人種 投手 歌手 電車 戦車 医者 記者 読者 業者 筆者 著者 作者 学者 他者 役者 信者 品質 水質 教室 寝室 公式 儀式 戦時 火事 歌詞 動詞 表紙 医師 教師 講師 博士 武士 騎士 紳士 動産 水産 国産 木材 食材 教材 薬剤 野菜 社債 国債 英語 国語 財源 債権 人権 海軍 米軍 陸軍 料金 賃金 税金 罰金 農業 商業 仏教 農協 野球 葬儀 餓鬼 食器 会館 旅館 血管 警官 税額 月額 文学 化学 医学 哲学 数学 工学 協会 学会 外科 歯科 内科 作家 農家 画家 国王 学園 庭園 血液 病院 寺院 委員 職員 議員 社員 会員 役員 教員 店員 法案　仮説 優位 騒音 顧客 観客 旅客 乗客 死刑 悲劇 患者 死者 老人 美人 黒人 知人 白人 宝石 農産
状態変化型	強化 悪化
限定型	地下 海外 郊外 夜間 死後 地上 海上 陸上 路上 頂上 事前 戦前 国内 室内 市内 社内 体内 店内 町内 都内 境内 車内
動作型	国立 公立
属性化型	公的 知的 法的 私的 性的 急性
様態型	突然 当然 全然 依然 必然

接尾的構造（312 語）は表 3 に示す。以下の 6 種類に分けられる。

（1）名称型（275 語）

共起要素に接続して特定のカテゴリーを表す名詞を形成するものである。共起要素がすでに名詞である場合にも、その意味を具体化して新たな語が形成される。「食物」「商品」のような具体物、「学歴」「体力」のような抽象概念、「職人」「医者」のように人を表す語など、多様な対象を表す名詞が含まれる。

（2）状態変化型（2 語）

共起要素に対して状態の変化や推移を表す意味を付加するものである。「強化」「悪化」のよう

に、動的な変化の意味を付与する。

（3）限定型（22 語）

時間・空間・範囲などの限定を付加するものである。「国内」「社内」「体内」などは空間的範囲、「事前」「戦前」「死後」などは時間的範囲、「地上」「路上」などは位置を示す。

（4）動作型（2 語）

動作的意味を付加するものである。「国立」「公立」に見られるように、ある主体による設置・成立といった行為的意味を付与する。

（5）属性化型（6 語）

性質・属性を付加し、形容的な意味を形成するものである。「公的」「法的」「知的」「急性」などがある。

（6）様態型（5 語）

状態や様子に関する意味を付加し、語の様態的特徴を表すものである。「突然」「当然」「依然」などに見られるように、出来事や状態のあり方を示す副詞的・形容詞的な意味を形成する。

５．おわりに

本研究では、二字漢語の準派生的な内部構造に着目し、『BCCWJ 短単位語彙表』を対象に、3 字漢語派生可能性、生産性、意味的透明性、共起成分の意味的カテゴリーという四つの基準を設定し、準派生語の抽出と分類を行った。その結果、二字漢語の中には接辞的機能をもつ字音形態素が数多く存在することが分かった。ただし、本研究における準派生語の認定は比較的緩やかなものである。そのため、今後は各基準の精緻化および判定基準の追加を通じて、準派生語の範囲はさらに限定される可能性がある。

今後は、本研究で得られたデータをもとに、母語話者を対象とした語構成意識に関する調査を実施し、二字漢語の分解可能性への受容程度を実証的に検証する必要がある。特に、どのような構成パターンの語の可分解性が認知的に受容されやすいのかを明らかにすることで、従来指摘されてきた「二字漢語の可分性」に関する議論を再検討することが期待される。

参考文献・資料

石井正彦（2007）「複合語」飛田良文ほか（編）『日本語学研究事典』明治書院, pp.169−170.／国立国語研究所（2021）BCCWJ 短単位語彙表（Version 1.1）https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/bcc-chu.html／阪倉篤義（1986）「接辞とは」『日本語学』5（3）, pp.4−10.／張志剛（2014）『現代日本語の二字漢語動詞の自他』くろしお出版.／張明（2019）『現代日本語における字音接辞の研究―連体詞型字音接頭辞の記述的研究を中心に―』学習院大学博士論文.／野村雅昭（1988）「二字漢語の構造」『日本語学』7（5）, pp.44−55.／本多由美子（2015）「二字漢語における語と漢字の意味の結びつきの特徴―国語辞典の語義の説明文を利用した調査―」『第 8 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, pp.103−112.／宮地裕（1973）「現代漢語の語基について」『語文』31, pp.68−80.／宮島達夫（1980）「語構成」国語学会（編）『国語学大辞典』東京堂出版, pp.423−427.／宮島達夫（1981）「「文字形態素論」批判」『教育国語』66, pp.21−35.／森岡健二（1968）「文字形態素論」『国語と国文学』45（2）, pp.8−27.

児童作文における敬語形式
—1950 年前後に愛知県で作成された児童文集を資料として—

加藤恵梨（愛知教育大学）

１．はじめに

本研究は、1950 年前後に愛知県岡崎市で作成された児童文集を調査資料とし、その当時、児童が作文にどのような敬語形式を用いていたのかを明らかにすることを目的とする。

児童の敬語表現の変化について分析している先行研究に、鈴木（2000，2003）、竹田・有働（2022）、竹田（2024）などがある。竹田（2024）は、1952 年から 1954 年に書かれた全国の児童・生徒による作文について、述語における尊敬語の地域差を分析し、作文の敬語形式は標準語形が中心で、尊敬語は多いが謙譲語は少ないこと、また、西日本には尊敬語が使われた作文が多く、東日本には少ないことなどを述べ、西日本では尊敬語の使用が活発で、「身内尊敬用法」がおこなわれているのに対し、東日本では尊敬語の使用が低調であり、身内に尊敬語を用いない傾向があると記述している。では、地理的に東日本とも西日本とも言いがたい愛知県で作られた児童文集では、どのような敬語形式が用いられているのであろうか。

２．調査資料

本研究が調査資料とするのは、愛知教育大学附属岡崎小学校が発行する文集『ひばり』の 2 号（1950 年 11 月発行）、3 号（1951 年 3 月発行）、4 号（1952 年 2 月発行）、5 号（1952 年 3 月発行）、6 号（1952 年 9 月発行）である[1]。具体的には、1 年生 69 編、2 年生 50 編、3 年生 45 編、4 年生 42 編、5 年生 44 編、6 年生 39 編である。

竹田（2024：74）で記述されているように、文集には「一定の型に当てはめて形成された可能性がある」「教師の指導・編集などが加わることで児童・生徒が書いた原文そのものではない可能性がある」などの資料的制約があるものの、当時の児童・生徒の書きことばやその規範意識をうかがい知る資料として貴重であると考える。

３．調査結果

以下では、「先生に対する敬語使用」「両親に対する敬語使用」「その他の年上の人に対する敬語使用」にわけて調査を行う。

---

[1] 6 号のみ、低学年の部と高学年の部の二部にわかれている。

3.1　先生に対する敬語使用

まず、学年別の先生に対する敬語使用数をみると、次の表 1 のような結果が得られた。

表 1　先生に対する敬語使用数

学年	総数（編）	先生への言及あり（編）	敬語あり（編）
1年生	69	7	0
2年生	50	4	2［50%］
3年生	45	7	5［71%］
4年生	42	5	4［80%］
5年生	44	5	5［100%］
6年生	39	6	4［67%］

1 年生では先生に対して敬語を使用していないが、学年があがるにつれて使用する割合が増え、5 年生では先生について述べるときは必ず敬語を用いている。しかし、6 年生になるとその使用率が少し減っている。

具体的には、2 年生では「いらっしゃる」(2 回）と「おっしゃる」(1 回）を用いており、3 年生においても「おっしゃる」(3 回）の使用が一番多いが、次の(1)のような「てくださる」(1 回）や「なさる」(1 回）も使っている。

(1) きょうは、しんめいぐうのおまつりだったので先生がはやびきをさせてくださいました。　(3 年生、6 号)

4 年生でも「いらっしゃる」(2 回)、「おっしゃる」(1 回）を使っているが、「(言わ）れる」(1 回）や、「ていただく」(1 回）という謙譲表現もみられる。

5 年生においても「おっしゃる」(3 回）が最も多く、「ていただく」(2 回)、「いらっしゃる」「(旅立た）れる」「てくださる」(各 1 回）と続いている。

最後に 6 年生は、次の(2)のように「ていただく」(3 回）という謙譲表現の使用が最も多い。また、次の(3)のように「いたす」(1 回）を使っている。その他、尊敬表現では「てくださる」「おっしゃる」「いらっしゃる」「(ささ）れる」(各 1 回）を使っている。

(2) 先生にしょうかいしていただき、(後略)。　(6 年生、4 号)

(3) 受持の先生は竹本先生でとてもおやさしい感じがいたしました。　(6 年生、5 号)

3.2　両親に対する敬語使用

次に、学年別の両親に対する敬語使用数をみると、次の表２のような結果となった。

表２　両親に対する敬語使用数

学年	総数（編）	両親への言及あり（編）	敬語あり（編）
1年生	69	18	9［50%］
2年生	50	9	7［78%］
3年生	45	9	7［78%］
4年生	42	7	2［29%］
5年生	44	7	4［57%］
6年生	39	4	4［100%］

3.1 でみたように、1 年生では先生に対して敬語を使用していなかったが、両親に対しては１年生から敬語を使用しており、2・3 年生で使用が増えるが、4 年生で減り、5 年生で再び使用が増え、6 年生では両親について述べるとき必ず敬語を使用していることがわかる。

また、1 年生では母親に対して敬語を用いており、(お母さんが)「おっしゃる」(5 回）が最も多く、「てくださる」「ていらっしゃる」(各２回)、「お（より）になる」(1 回）を使っている。父親に対しては、(お父さんが)「お（かえり）になる」(1 回）のみである。

２年生も母親に対する敬語の使用率が高く、(お母さんが)「おっしゃる」(8 回）が最も多く、「てくださる」(4 回)、「ていらっしゃる」(2 回)、「いらっしゃる」(１回)、(お母さんに)「いただく」(１回）と続いている。父親においては、(お父さんが)「お（いき）になる」「ていらっしゃる」(各１回）の使用がみられる。

続いて３年生においても、(お母さんが)「おっしゃる」(３回）が最も多く、次に「てくださる」(2 回)、「言われる」(１回）を使っている。その他にも次の(4)や(5)のように、「おっしゃってみえる」「～ていただいておる」(各１回）のように、低学年で用いていた表現よりも、一段と丁寧な表現の使用がみられる。

(4) お母さんは『かごの中でなく鳥よりも小えだでなく鳥のほうがすきだ』とおっしゃってみえます。　（３年生、５号）

(5) おとうさんからさんじゅつやしゅうじをおしえていただいておりました。おかあさんから、よみかたを、おしえていただいておりました。　（３年生、５号）

父親については先ほどみた(5)に加え、(お父さんが)「てくださる」「おっしゃる」(各1回)の使用がみられる。

4年生では、(お母さんが)「おっしゃる」(5回)のみが使われている。5年生でも、(お母さんが)「おっしゃる」(2回)が最も多く、その他にも(お母さんが)「言われた」「てくださる」(各1回)、(お父さんが)「言われた」「お(かえり)になる」(各1回)が用いられている。最後に6年生においては、(お母さんが)「おっしゃる」「てくださる」(各1回)、(お父さんが)「お(はたらき)になる」「てくださる」(各1回)を用いている。

このように、両親に対してはどの学年でも「おっしゃる」の使用が多い。また、先生に対してはあまりみられなかった「お～になる」が両親には使われている。

鈴木(2000：72)は、両親に対する児童の敬語は、戦前から戦後にかけての昭和19年から26年に大幅に使用率が下がり、また、31年から36年の間にもほぼ半数に減少し、その後、昭和50年代以降は約1割の敬語使用がみられると指摘している。今回の調査では、児童の両親に対する敬語使用割合は、先生に対する使用割合と大きく異ならず、比較的高いと考えられる[2]。

3.3　その他の年上の人に対する敬語使用

最後に、先生・両親以外の年上の人に対する学年別の敬語使用数についてみると、次の表3のような結果が得られた。

表3　その他の年上の人に対する敬語使用数

学年	総数(編)	その他の年上の人への言及あり(編)	敬語あり(編)
1年生	69	12	7 [58%]
2年生	50	14	9 [64%]
3年生	45	6	4 [67%]
4年生	42	7	5 [71%]
5年生	44	14	10 [71%]
6年生	39	7	4 [57%]

先生・両親以外の年上の人に対しても、1年生から敬語を使用していることがわかる。

[2] 鈴木(2000：72)は、生徒の先生に対する敬語使用について、戦前は、ほぼ全員が先生に対し敬語を使用していたのに比べれば、戦後は4割～6割の間を上下していて、確かに敬語使用率は減少しているが、家族に対する敬語使用率のようには大幅に減少することはないと指摘している。

まず1年生は、卒業する6年生に対し、次の(6)のように「〜てくださる」(6回) を使ってお世話になった感謝の気持ちを表している。その他にも、友人のお父さんに対して「ていただく」「てくださる」「いらっしゃる」(各1回) を使っている。また、近所のおばさんに「おっしゃる」(1回) や兄の友人に「てくださる」(1回) を使用している例もみられる。

(6) ぼくが一年生にあがったときからずっとやさしくしてくださったり、きゅうしょくもまいにち、はこんできてくださるし、ほんとにいいおにいさん、おねえさんにかんしゃします。　(1年生、3号)

2年生では祖母に対し「いらっしゃる」「おっしゃる」「ていただく」(各1回)、近所の人 (おばさん、おじさん) に「おっしゃる」(2回)、「てくださる」(1回)、お店の人に「てくださる」(4回) を使用している。

続いて3年生では、祖父、祖母、おじ、おば、姉という両親以外の身内に対して、「てくださる」(2回)、「おっしゃる」(1回) だけではなく、「ておいでる」「ておみえになる」(各1回) という表現を使っているのが特徴的である。

4年生では、祖父母と、卒業する6年生に対して用いており、祖父母に対しては「言われる」(5回) が最も多く、「おっしゃる」(2回) よりも多く使っている。他にも「(こ) られる」(1回) を使っている。卒業する6年生に対しては「ご (そつぎょう) なさる」「てくださる」「ていただく」(各1回) がみられる。

次に5年生は、卒業する6年生への感謝の気持ちを表すのに敬語を使っており、その中でも「てくださる」(8回) が最も多く、「〜 (ら) れる」(2回)、「なさる」「ていただく」(各1回) を使っている。その他に、祖母に対して「ていただく」「おっしゃる」(各1回) や友人のお父さんに対して「おっしゃる」(1回) の使用がみられる。

最後に6年生は、おじおばに対して「いらっしゃる」(1回)、近所の人に「〜 (ら) れる」(1 回) を用いている他に、次の(7)のように、かつての卒業生について述べる際に謙譲語 (「お (おくり) する」) を使っている。

(7) こうして、二回卒業生のみなさんをおおくりして、こんどは私達が最上級生となった。　(6年生、6号)

以上のように、先生・両親以外の人に敬語を使う場合は、卒業する6年生へ感謝の気持ちを述べる際と、祖父母などの身内、近所の人に限られている。

4. まとめ

調査の結果、小学 1 年生から敬語が用いられており、学校の先生や、両親、祖父母、親戚といった年上の身内だけではなく、上級生に対しても使っていることがわかった。しかし、身内のなかでも兄弟姉妹に対して敬語はほとんど使われていなかった。

以上のように、1950 年前後に愛知県岡崎市で作成された児童文集では、尊敬語の使用が活発で「身内尊敬用法」がおこなわれていることから、愛知県は西日本の使用状況と似ているといえる。

また、学年によって多く用いている尊敬動詞、尊敬語の助動詞（相当の形式）が異なっている。低学年では、「おっしゃる」の使用が多いが、中学年になると尊敬語の助動詞（相当の形式）の使用が増え、「〜てくださる」だけではなく、「〜れる」といった短い形式の使用が増えている。さらに、高学年になると謙譲語の使用も多くみられる。

加えて、竹田（2024：87）で指摘されているように、敬語形式は標準語形が中心で、「〜てみえる」といった東海地方でよく使われる表現は今回の調査ではほとんど使われていなかった。

今後は、調査する資料を増やし、児童の敬語使用がこの後どのように変化するのかについて調査したいと考える。

参考文献

鈴木智映子（2000）「小学生作文にみられることばの変化―特に敬語の変遷をめぐって―」『学習院大学国語国文学会誌』43、pp.14-25、学習院大学文学部国語国文学会

鈴木智映子（2003）「現代における接頭辞『お』『ご』の変遷」『学習院大学人文科学論集』12、pp.85-101、学習院大学大学院人文科学研究科

竹田晃子（2024）「児童・生徒の作文にみる尊敬語の地域差―『綴方風土記』全 8 巻の作文から―」『方言の研究』10、pp.73-97、ひつじ書房

竹田晃子・有働玲子（2022）「昭和 20・30 年代の文集にみることばと表現」『聖徳大学生涯学習研究所紀要』20、pp.15-26、聖徳大学生涯学習研究所

現代日本語における新語・俗語の使用実態
―データサイエンスに基づいた可視化手法を用いて―

谷口ジョイ（静岡理工科大学）柴田希隆（静岡理工科大学大学院）山岸祐己（静岡理工科大学）

1. 現代日本語における新語・俗語

新語や俗語というものは，日常の中で頻繁に生まれては消える。人は絶えず新たな語や表現を生み出し，使用するが，その背後にある言語使用のパターンには，何か規則性があるのだろうか。なぜ，ある語は定着し，ある語は衰退・消滅するのか。本研究は，こうした課題について現代日本語の観点から検討することを目的としている。

新語や俗語を扱った先行研究においては，個別の語の統語的・語用論的特徴の分析が主流であり（工藤，2019；永瀬，2006），地域差・年代差・性差などの社会言語学的変異を定量的に検証した研究は限定的である。大学生を対象とした大規模調査も実施されてはいるが（鑓水，2014），調査対象が若年世代に限定されているため，新語・俗語の変化そのものを捉えるのは困難であった。

また先行研究では，若者ことばに見られる地域差は「首都圏から周辺地域への伝搬」によって生じるとされていた（井上・荻野，1984）。一方で，本研究の予備的な調査においては，関西や九州地方を起源とする地域変種が首都圏に伝播する事例が観察されており，既存の知見とは異なるパターンが存在する可能性が示されている。

流行語の盛衰に着目した研究（堀尾，2022）では，若者ことばは流動的であり，その変化には個人的・社会的要因が複雑に絡み合うため，進行中の変化を捉えるのは困難であることが指摘されている。本研究では，データサイエンスの手法を用いて，新語・俗語の出現・定着・衰退を可視化することで，こうした課題の解決を試みる。

2. 調査の概要

2.1 調査方法

現代日本語における新語・俗語の使用実態および理解度の把握を目的として，以下のような調査を実施した。調査対象は，18 歳以上の日本語母語話者および日本語の高度な運用能力を有する者とし，計 5,375 名から有効回答を得た（表 1 参照）。調査方法としては，スノーボールサンプリング法によるウェブ調査を採用し，回答者の基本属性（性別，生年，出身地域，現在の居住地）および 50 項目の俗語に関する使用・理解状況について回答を求めた。調査対象となる語の選出にあたっては、先行研究に倣い、「現代用語の基礎知識」2023 および 2024 の「流行語」のセクションを使用した。略語、名詞、動詞、形容詞、副詞、感動詞、地域変種が関わるものなどのバランスを考慮し、50 語を抽出している。

新語や俗語の使用・理解に関する回答選択肢としては，以下の 5 つを設定した。

表 1 調査協力者の内訳（性別・年代）

年齢	人数	年齢	人数
10 代	289	男性	1,467
20 代	1,579	女性	3,725
30 代	1,334	その他	183
40 代	1,122	総計	5,375
50 代	766		
60 代以上	285		
総計	5,375		

【アンケートにおける設問例】

しょうみ（＝実際・正直なところ）という語について

（1）使用する

（2）かつて使用していたが，今は使わない

（3）使用したことはないが意味はわかる

（4）聞いたことはあるが意味はわからない

（5）聞いたことがない。

2.2 分析方法

収集したデータに対して独立性検定およびその残差分析を行い，調整済み標準化残差（Haberman, 1973）を都道府県別ヒートマップとして可視化した上で，地域差・年代差・性差から分析を行い，若者ことばの特徴について検討した。また，地域カテゴリ（8 地方）および年代カテゴリ（7 区分）の調整済み標準化残差行列間の L1 距離を用いた階層クラスタリング（群平均法）および MDS（多次元尺度構成法）によって，語のグループ構造を可視化した。さらに，本研究では回収サンプルの年齢分布が日本の人口構成から乖離していたため，令和 2 年国勢調査に基づくウエイトバック集計を適用し，年齢ごとの偏りを補正した上での再分析も行っている。加えて，多項分布型レジームスイッチング検出（Yamagishi and Saito, 2017）を用いることで，語の使用や理解に変化が生じた時期の特定を試みた。

3. 結果および考察

3.1 若者ことばに見られる地域変種の影響

分析の結果，複数の語について，これまで先行研究によって指摘されていなかった地域変種（方言）の影響が見られることが分かった。例えば，「知らんけど（＝文末につけて断定を避け，責任も回避する言い方）」については，兵庫県を中心に関西地方で最も使用の度合いが高く，東日本では使用・理解の度合いが低いことが明らかとなった（図 1）。

また，「しょうみ（＝実際，正直なところ）」も同様に，関西地方での使用の度合いが高く，「あーね（＝ああ，それね）」については九州地方，特に福岡県での使用が多く見られた（図 2）。「ダイジョバナイ（＝大丈夫ではない）」については，北海道で最も多く用いられていることが分かった。これらの語は，地域差が顕著である語として，クラスタリング結果においてそれぞれ独立したクラスタを形成していた。

MDS 分析の結果からも，「知らんけど」「しょうみ」「あーね」「ダイジョバナイ」の 4 語は明らかに他の語とは異なる特性を持っていることが可視化された。これらは，首都圏起源の語ではなく，特定

の地方方言に起源を持ち，周辺地域へと伝播したと考えられる。この知見は，従来「首都圏から周辺地域への一方向的伝搬」として説明されてきた若者ことばの地域差モデルからは逸脱したものである。

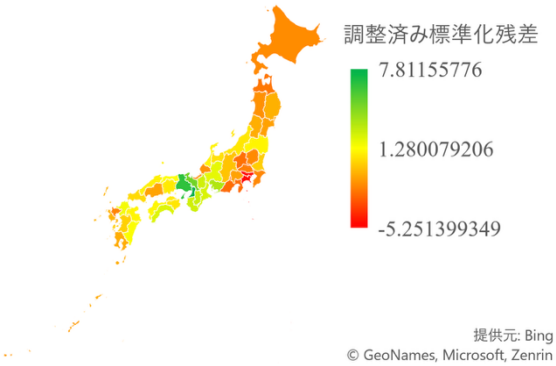


図 1「知らんけど」のヒートマップ

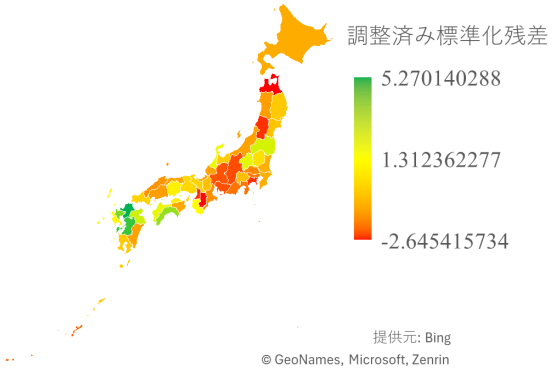


図 2「しょうみ」のヒートマップ

一方，「お祈りメール（＝就職を希望した会社からの不採用通知メール）」「ガクチカ（＝学生時代に力を入れたこと）」「バ終（＝バイト終わり）」といった語は，主に首都圏の大学生に使用される傾向があり，地域変種とは異なるクラスタを形成していた。これらは就職活動や大学生活に特有の社会的文脈に強く依存した語であり，使用者の属性によって使用が限定されることが示唆される。

3.2 若者ことばに見られる年代の影響

年代カテゴリの調整済み標準化残差を用いた分析では，語の定着・衰退・消滅の傾向を把握することができた。例えば「ワクテカ（＝胸がワクワク，肌や外見がテカテカきらめく状態）」については，表 2 のように 30 代において「かつて使用していたが，今は使用しない」という回答が期待度数よりも顕著に多く，高年層になるほど「聞いたことがない」という回答が多くなる。

表 2「ワクテカ」の調整済み標準化残差（年代別）

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代～
(1)	1.24	-1.95	1.15	0.77	0.51	-1.42	-1.01
(2)	1.91	4.75	0.84	-1.84	-3.5	-3.31	-3.78
(3)	-6.92	-4.48	13.37	0.81	-3.31	-5.52	-2.27
(4)	1.13	3.3	-3.03	-1.27	-0.07	0.08	0.03
(5)	3.03	-1.81	-13.28	1.61	7.17	10.38	6.89

(1) 使用する (2) かつて使用していたが，今は使わない (3) 使用したことはないが意味はわかる (4) 聞いたことはあるが意味はわからない (5) 聞いたことがない

「ガクチカ」については，1990 年代後半生まれまでは使用・理解の度合いが極めて低いが，2000 年以降生まれになると「使用する」という回答が顕著に多くなっており，20 代半ばまでの若

年世代によって使用が広まっていることが明らかになった。その一方で，「ナウい」については，50～60 代にかけて「かつて使用していたが，今は使用しない」という回答が多く，既に衰退が進んでいることが示された。

また，「オタク」「テンパる」などは中高年層まで広く浸透しており，定着の傾向が見られる語群に属していた。「り（了解）」「ぴえん（悲しい，泣いた）」については，ウエイトバック集計適用後の分析においても既に衰退傾向を見せている語群であることが示唆された。

性差については，クロス集計表の独立性検定の結果，使用・理解に性差が見られた語として，男性使用の偏りでは「～しか勝たん」「あざす」などが挙げられ，女性使用の偏りとしては「ぴえん」が確認された。

3.3 階層クラスタリングおよび MDS（多次元尺度構成法）による年代差

本節では，年代カテゴリ（10 代，20 代，…，70 代以上の 7 カテゴリ）の調整済み標準化残差に基づく L1 距離を用いたクラスタリング結果を考察する。図 4 の階層クラスタリング結果によると，「ガクチカ」は 20 代による使用頻度が最も高く，樹形図上部の 12 語は主に若年層で使用される語であることが示唆される。一方，樹形図最下部の「ナウい」は，現在ではほとんど使用されていない語として独立している。さらに，図 3 の MDS 結果からも，若年層中心の語，中高年層にも定着している語，すでに消滅傾向にある語といったグループの特徴を視覚的に把握することができる。

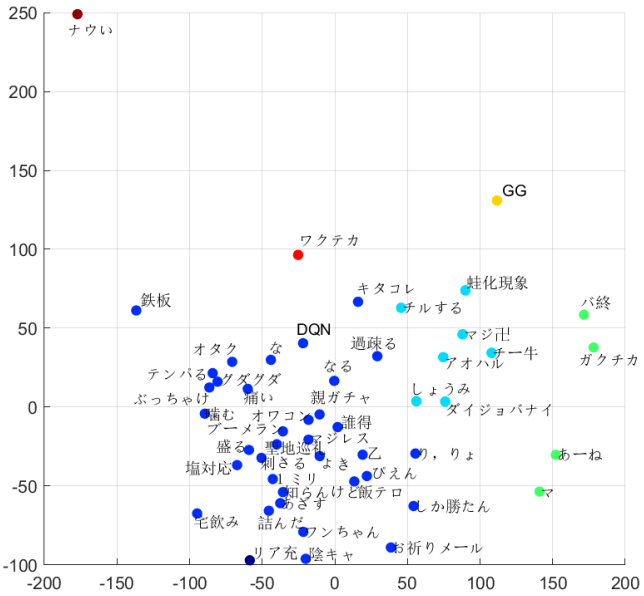


図 3 年代カテゴリにおける MDS

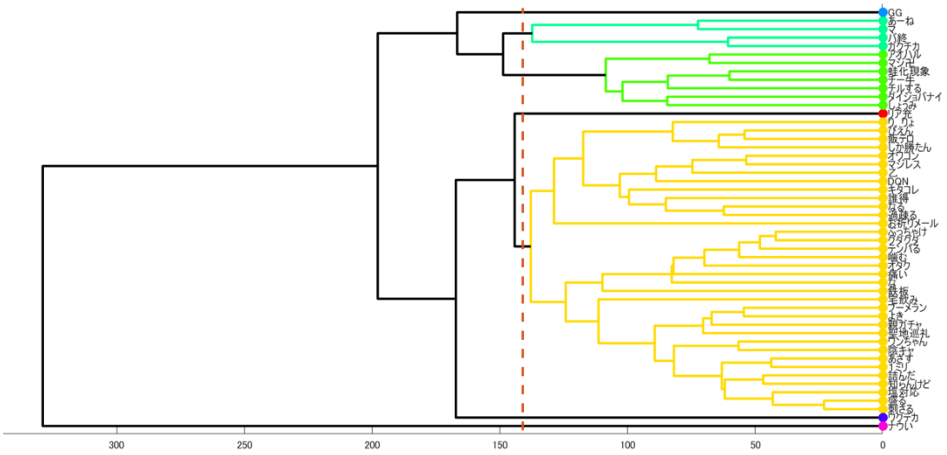


図 4 年代カテゴリにおける階層クラスタリング

3.4 多項分布型レジームスイッチングによる変化時期の特定

語の使用・理解に関するデータの質が変化した時期を推定するため，多項分布型レジームスイッチング検出を適用した。本手法では，データが多項分布に従っていると仮定し，最小記述長原理（MDL）をモデル選択基準として採用することで，変化点数を事前に指定せずに自動的に特定することが可能である（Yamagishi and Saito, 2017）。

「ガクチカ」の分析結果では，1990 年代後半生まれまでと 2000 年以降生まれの間で明確なレジーム（データの質）の切り替わりが検出された。これは，就職活動における「ガクチカ」という表現の使用が 2000 年代以降に急速に広まったことを反映している（図 5）。一方，「ワクテカ」については，1980 年代後半生まれから 2000 年生まれの間でレジームの変化が観察され，この語がインターネット・コミュニティで流行した後，衰退していく過程が可視化された（図 6）。

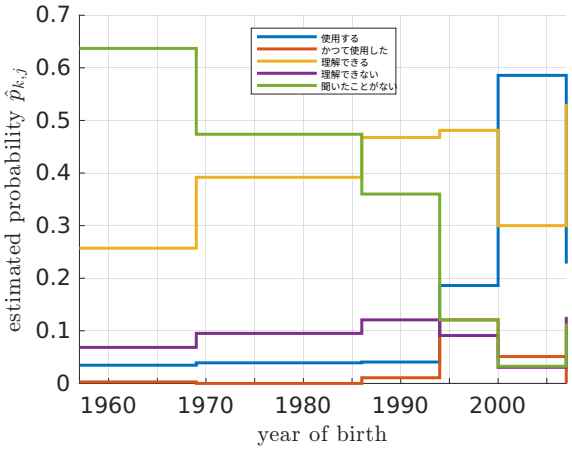


図 5「ガクチカ」のレジームスイッチング

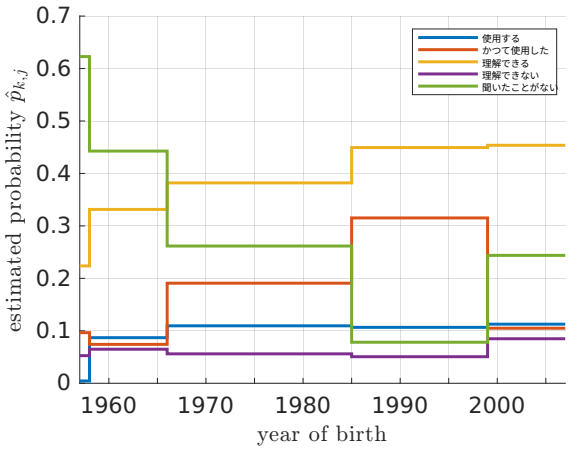


図 6「ワクテカ」のレジームスイッチング

本提案手法により，特定の語が出現した時期，あるいは衰退・消滅の時期が推定できることが示された。単純集計では，進行中の語彙変化を観察することは困難であったが，本手法を適用することで，語の動態可視化への応用が期待される。

4. まとめ

本研究では，現代日本語における新語・俗語の使用・理解について 5,375 名を対象とした大規模調査を実施し，データサイエンスの手法によって地域差・年代差・性差の観点からその通時的変化および共時的特徴を分析した。

主な成果は以下の 3 点にまとめられる。第一に，複数の若者ことば（「知らんけど」「あーね」「しょうみ」「ダイジョバナイ」など）について，先行研究では指摘されていなかった地域変種（方言）の影響が可視化された。これらは関西・九州・北海道といった特定地域を起源とする語であり，従来の「首都圏発信」モデルとは異なるパターンを示している。第ニに，年代差の分析から，衰退・消滅の傾向にある語（例：「ナウい」「ワクテカ」「ぴえん」）や，中高年層にまで使用が広がり定着した語（例：「オタク」「テンパる」），および若年世代に特有の語（例：「ガクチカ」「バ終」）が抽出された。第三に，多項分布型レジームスイッチングによる分析により，特定の語が出現・定着・衰退した時期の推定が可能であることが示された。

以上の知見は，新語・俗語の出現・定着・衰退が，語の発生地域，使用者の年代，社会的文脈といった要因によって規定されることを示唆しており，言語変化の背後にある一定のパターンの存在を裏付けるものである。

*本研究は，JSPS 科研費基盤 C（25K04137）の助成を受けている。

引用参考文献一覧

Haberman, S. J. (1973). The Analysis of Residuals in Cross-Classified Tables. *Biometrics, 29*(1), 205–220.

Yamagishi, Y., & Saito, K. (2017). Visualizing switching regimes based on multinomial distribution in buzz marketing sites. In *Foundations of Intelligent Systems: 23rd International Symposium, ISMIS 2017* (pp. 385–395). Springer.

井上史雄・荻野綱男（1984）『新しい日本語・資料図集』東京外国語大学井上研究室（文部省科学研究費特定研究「言語の標準化」資料集）.

現代用語検定協会（編）（2023）『現代用語の基礎知識 学習版 2023-2024』自由国民社.

工藤俊（2019）「若者ことば『マジ卍』の言語的特徴――『やばい』との比較を中心に――」『駒沢女子大学研究紀要』26, 63–74.

永瀬治郎（2006）「若者ことば全国分布図――2005 年調査の意味するところ」『月刊言語』35(3), 40–49.

堀尾佳以（2022）『若者言葉の研究：SNS 時代の言語変化』九州大学出版会.

鑓水兼貴（2014）「『全国若者語調査』結果概観」『専修国文』94, 93–117.

東京都新島における児童生徒の方言意識

西郷太一（総合研究大学院大学学生）

1. はじめに

方言継承の取り組みを設計するためには，将来の継承の担い手である児童生徒を取り巻く方言環境の現状と，彼らの方言に対する意識・学習ニーズを把握する必要がある。本発表では，東京都新島で実施した児童生徒対象の方言意識調査の結果を報告する。

2. 調査概要

2.1. 調査背景・目的

新島村は，新島および式根島から構成される村であり，村内には本村・若郷・式根の三集落がある。新島村では，新島村博物館（以下，博物館）および地域ボランティアグループ「新島・式根島☆昔の暮らしとことば研究会」（以下，暮らし研）が中心となって，地域方言の記録保存・継承保存活動に取り組んでいる。特に小学校では，地域教育の一環として，「総合的な学習の時間」を用いた継続的な方言教育が行われている。

本調査の目的は，新島において方言継承の計画を設計するにあたって，児童生徒を取り巻く方言環境の現状と，方言の学習や習得に対する意識・ニーズを把握することにある[1]。あわせて，先述の通り地域がこれまで主として小学校で実施してきた継承活動の効果を確認することも副次的な目的とした。本調査は，今後，新島における方言継承の計画を本格的に構築するにあたっての基礎資料となるものである。

2.2. 調査地・調査対象

新島村には，教育機関として新島村立新島小学校，新島村立式根島小学校，新島村立新島中学校，新島村立式根島中学校，東京都立新島高校が設置されている。本調査は，このうち新島村立新島小学校，新島村立新島中学校，東京都立新島高校の児童生徒を対象として方言に関する意識調査を実施したものである[2]。

調査は，2025 年 12 月に，調査協力への同意を得て，当日欠席者を除く各学校在籍者全員を対象に匿名の質問紙調査で実施した。実施方法は，学校や学年の要請に応じてオンライン（Google Forms）か紙媒体としたが，どちらも同一の質問項目を用いた。結果，新島村立新島小学校（70 名）・新島村立新島中学校（40 名）・東京都立新島高校（34 名）の回答を得た。

*本発表にあたり，以下の方々ならびに関係機関にご協力を賜った。記して感謝申し上げる。新島村教育委員会（特に前田裕二氏），新島村立新島小学校，新島村立新島中学校，東京都立新島高校，新島村博物館（特に開田萌弘氏），新島・式根島☆昔の暮らしとことば研究会（特に宮川清み氏，山本新氏）。なお，本発表は，国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」の支援，および人間文化研究機構「若手研究者海外派遣プログラム（令和 7 年度）」の助成を受けた研究成果の一部である。

[1] 言語継承は，言語コミュニティのニーズや態度に応える形で進められる必要があり（Penfield 2021 など），初めにそれらを把握しておくことが重要と思われる。

[2] 式根島には高校がないため，式根島在住で新島高校に通学している生徒もいる。当該生徒は本調査の対象に含まれるため，本調査は新島在住者のみを対象とするものではなく，新島の学校に在籍する児童生徒を対象とした意識調査である。

2.3. 調査内容・項目

本調査における調査項目は，鹿児島県奄美群島沖永良部島知名町田皆集落の意識調査報告である横山（2025）を参考に骨子を作成し，博物館および暮らし研（特に，小学校教員であるメンバー）と協議のうえ，児童生徒向けに表現・内容を調整して決定した。

質問項目は，回答者の基本属性と，大きく分けて①周囲（家庭・地域）の方言使用状況，②方言聴解能力の自己評価・向上意欲，③方言産出能力の自己評価・向上意欲，④方言に対する印象・既知の方言語彙・表現（また，それらをどこで学んだか）の項目からなる。聴解能力の自己評価は 4 段階尺度で，産出能力の自己評価は 3 段階尺度で尋ねた。②③では，向上意欲の有無に関して，その理由を自由記述で回答してもらった。本発表では，これらの項目のうち主要なものを取り上げ，報告する。

3. 調査結果

以下では，調査結果を小学校・中学校・高校に分けて示す。なお，小学校では 6 学年分のデータを得ているが，本発表では様々な制約のため，学年別の詳細な分析は割愛する。

3.1. 周囲の方言使用状況

はじめに，家庭内における言語使用状況を見る。なお，家庭内の方言接触環境は，出身背景の影響を受けると考えられるため，本項目については，新島・式根島の出身者に限って集計したデータを提示する。ここでの出身者とは，「新島で生まれた」または「生まれてすぐ島に来た」と回答した児童生徒を指す。

表 1　家庭内での言語使用

学校	方言	（方・共）半分ずつ	共通語	わからない	合計
小学校	4（11%）	6（17%）	15（43%）	10（29%）	35（100%）
中学校	0（0%）	6（17%）	29（83%）	0（0%）	35（100%）
高校	1（4%）	5（18%）	19（68%）	3（11%）	28（100%）

表 1・図 1 は，「家庭内で主に使用している言語は何ですか？」に対する回答を集計したものである。いずれの学校段階でも「共通語」とする回答が最も多く，小学校で 43%，中学校で 83%，高校で 68%を占める。一方，「方言」とする回答は小学校で 11%，高校で 4%にとどまり，中学校では 0%であった。このことから，家庭内では全体として共通語の使用が優勢であり，方言のみを用いる家庭は極めて少ないことがわかる。

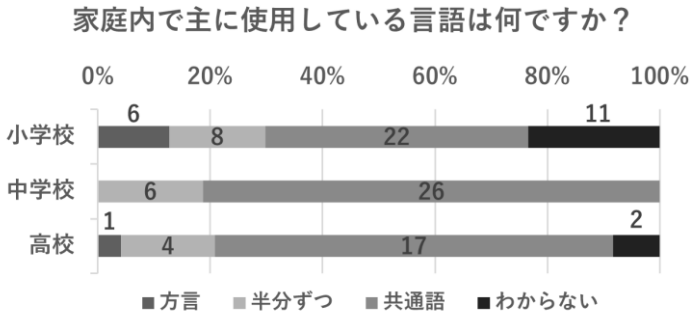


図 1　家庭内の使用言語

3.2. 方言聴解能力の自己評価・向上意欲

次に，方言聴解能力に関する自己評価と，その向上意欲について見る。それぞれの項目で島内出身・島外出身で結果が異なることが予測されるため，本来であれば，結果の提示方法

について十分に考慮する必要があるが，本発表では，自己評価と向上意欲で項目ごとに異なる属性区分を設けると比較が煩雑になること，また紙幅の制約もあることから，いずれも回答者全体の結果を提示する。まず，聴解能力の自己評価である。

表 2　聴解能力の自己評価

学校	ほとんど分かる	少しだけ分かる	ほとんど分からない	全く分からない	合計
小学校	10（14%）	36（51%）	11（16%）	13（19%）	70（100%）
中学校	9（23%）	17（43%）	10（25%）	4（10%）	40（100%）
高校	4（12%）	20（61%）	6（18%）	3（9%）	33（100%）

表 2・図 2 は，「方言を聞いてどのくらい理解できますか？」に対する回答を集計したものである。いずれの学校段階でも「少しだけ分かる」とする回答が最も多く，小学校で 51%，中学校で 43%，高校で 61%を占めた。また，「ほとんど分かる」を合わせると小学校では 65%，中学校では 66%，高校では 73%となり，一定数の児童生徒が方言をある程度聞き取れると自己評価していることが分かる。一方，「ほとんど分からない」「全く分からない」の回答も各学校段階で一定数見られ，理解度にはばらつきがある。

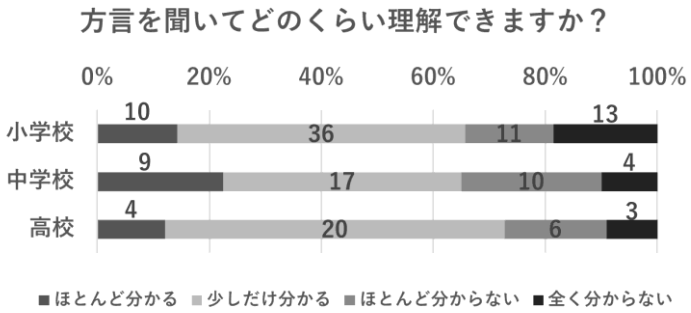


図 2　聴解能力の自己評価

次に，聴解能力の向上意欲である。

表 3　聴解能力の向上意欲

学校	はい	いいえ	わからない	その他	無回答	合計
小学校	55（82%）	1（1%）	9（13%）	2（3%）	0（0%）	67（100%）
中学校	18（45%）	2（5%）	5（13%）	0（0%）	15（38%）	40（100%）
高校	11（32%）	6（18%）	6（18%）	0（0%）	11（32%）	34（100%）

表 3・図 3 は，「方言を聞いて分かるようになりたいですか？」に対する回答を集計したものである。この項目では，「ほとんどわかる」と回答した場合，「向上意欲」の質問は無回答でよいとしたが，実際にはそれに該当しないにもかかわらず無回答の生徒が中高で相当数見られた。質問の方法が不明瞭だったか，質問票の誘導が明確でなかった可能性があるため，同様の調査を行う場合は質問を適切に修正する必要がある（図 3 は有効回答のみ提示）。

そのうえで回答を見ると，小学校では「はい」が 82%と大半を占め，聴解能力の向上に対する意欲が高いことがうかがえる。これに対し，中学校では 45%，高校では 32%にとどまり，学校段階が上がるにつれて「はい」の割合は低下する傾向が見られる。

この質問の回答の理由を自由記述欄に記入してもらうと，「はい」の意見には，小学校で「新島について詳しく知りたいから」「新島に住んでいるから」「方言を残したいから」，中学校で「知らないことを知りたいから」「いろいろな人と交流できるから」，高校で「話せたら楽しそう」「新島に住んでいるから」「家族と話してみたい」などがあった。「わからない」「いいえ」の意見には，中学校で「使う機会が少ないから」，高校で「不自由なく生活できているから」「いらないから」「もう新島を出るから」などが挙げられた。

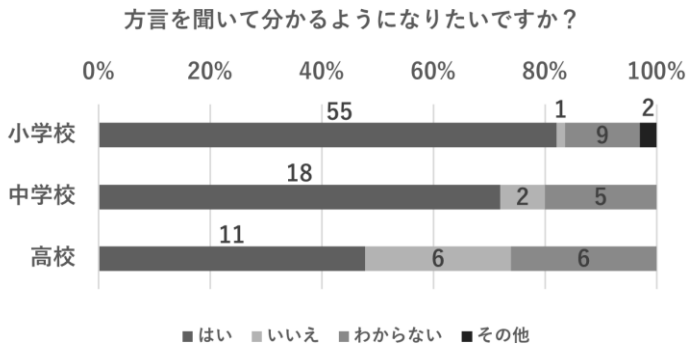


図 3　聴解能力の向上意欲

3.3.　方言産出能力の自己評価・向上意欲

次に，方言産出能力に関する自己評価と，その向上意欲について見る。聴解と同様の理由から，産出能力についても回答者全体の結果を提示する。まず，自己評価である。

表 4　産出能力の自己評価

学校	不自由なく話せる	挨拶やいくつかの言葉だけ	全く話せない	合計
小学校	3（4%）	32（46%）	35（50%）	70（100%）
中学校	2（5%）	25（63%）	13（33%）	40（100%）
高校	2（6%）	21（62%）	11（32%）	34（100%）

表 4・図 4 は，「方言をどのくらい話せますか？」に対する回答を集計したものである。回答を見ると，いずれの学校段階でも，「不自由なく話せる」とする回答はごく少なく，小学校で 4%，中学校で 5%，高校で 6% にとどまった。他方，「挨拶やいくつかの言葉だけ話せる」とする回答は小学校で 46%，中学校で 63%，高校で 62%であり，最も多い回答となっている。また，小学校では「全く話せない」が 50%と半数を占めたのに対し，中学校・高校では 3 割程度であった。以上から，多くの児童生徒にとって，方言の産出能力は限定的なものにとどまっており，日常的に不自由なく運用できる段階には至っていないことが分かる。

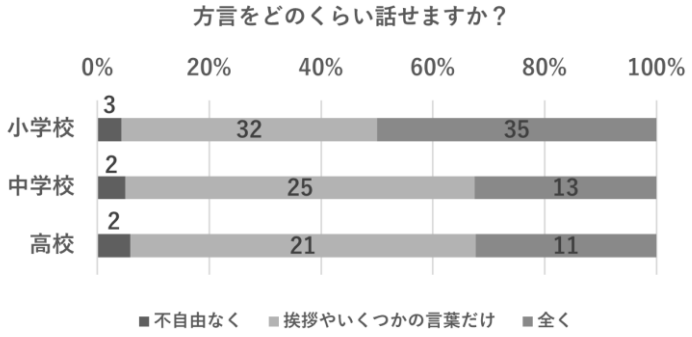


図 4　産出能力の自己評価

次に，産出能力の向上意欲である。

表 5　産出能力の向上意欲

学校	はい	いいえ	わからない	その他	無回答	合計
小学校	56（80%）	6（9%）	6（9%）	2（3%）	0（0%）	70（100%）
中学校	23（58%）	9（23%）	8（20%）	0（0%）	0（0%）	40（100%）
高校	9（26%）	8（24%）	7（21%）	0（0%）	10（29%）	34（100%）

表 5・図 5 は，「方言を話せるようになりたいですか？」に対する回答を集計したものである。なお，聴解と同様に無回答が見られたため，図 5 では有効回答のみを扱っている。

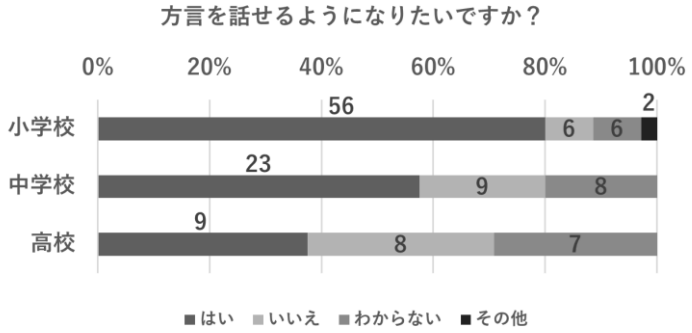


図 5　産出能力の向上意欲

小学校では「はい」が 80%を占め，向上に対する意欲が高いことがうかがえる。中学校でも「はい」は 58%と過半数を占めるが，高校では 26%にとどまった。全体としては，学校段階が上がるにつれて，産出能力の向上に対する積極的な回答が減少する傾向が認められる。

この回答の理由を自由記述欄に記入してもらうと，「はい」の意見には，小学校で「家族が話せるから」「話してみたいから」「地域の人と沢山話したいから」，中学校で「喋れた方がいいから」「新島が好きだから」「伝統を受け継ぎたいから」，高校で「いろんな人と話せるから」「方言話すの憧れるから」などがあった。「わからない」「いいえ」の意見には，小学校で「覚えたくないから」「いいから」，中学校で「使わないから」，高校で「自分だけ分かっても意味ないから」「標準語の方が使うから」「不自由がないから」などが挙げられた。

3.4.　方言に対する印象・既知の方言語彙・表現

最後に，方言に対する印象と，既知の方言語彙・表現についての回答を見る。これまでの結果から，聴解能力・産出能力の向上意欲は小学校で最も高く，学校段階が上がるにつれて低下する傾向が確認された。これに対応して，方言に対する印象にも学校段階ごとの差がある可能性がある。また，児童生徒がどのような経路で方言を知るのかを把握することは，効果的な継承支援の方法を検討するうえで重要である。

表 6 は，方言に対する印象に関する自由記述回答を抜粋したものである。

表 6　方言に対する印象（抜粋）

小学校	残ってほしい，温かい気持ちになる，伝統だから大切にしたい，新島のアイデンティティ，面白くて少しかわいい，よくわからない，難しい，不思議，など
中学校	おもしろい，ずっと残ってほしい，新島感があっていい，the 新島，かっこいい，独特，よくわからない，特にない，怖い，乱暴に聞こえる，など
高校	おもしろい，聞き心地がいい，新島ってかんじ，汚い，何を言っているか本当にわからない，いらない，古臭い，怖い，気が強そうに聞こえる，など

小学校では，「伝統だから大切にしたい」「新島のアイデンティティ」といった，方言を地域

の文化的価値や自己認識・アイデンティティと結びつける回答が見られた。中学・高校では，「おもしろい」「新島感があっていい」などの肯定的回答が見られる一方で，「怖い」「乱暴に聞こえる」「汚い」「古臭い」など，否定的な印象を示す回答も確認された。特に高校では，方言に対する否定的評価を含む記述が一定数見られ，小学校とは異なる傾向がうかがえた。

表 7 は，方言語彙や表現を知ったきっかけに関する自由記述回答を抜粋したものである。

表 7 方言語彙や表現を知ったきっかけ（抜粋）

小学校	家族，近所のおばちゃん，友だち，先生，学校の授業（総合），教室の壁に書いてある，Tシャツに書いてある，など
中学校	家族，地元の人，パンフレット，冊子，友達，先生，自分で調べた，など
高校	家族，周りの人，村内の人，友達，インターネット，LINE スタンプ，など

いずれの学校段階でも「家族」が共通して挙げられており，家庭が方言接触の重要な場であることがうかがえる。段階ごとには，小学校では学校の授業や教室掲示など，学校教育を通じた接触が見られた。中学校では，パンフレットや冊子といった配布を想定された印刷物への言及が確認された。高校では，インターネットや LINE スタンプなど，デジタル媒体を通じた接触が見られた。

4. おわりに－調査結果からみる新島の方言環境

本調査から，新島の児童生徒を取り巻く方言環境は，能力の自己評価においては学校段階による大きな差が見られない一方で，向上意欲に関しては学校段階による違いが比較的大きいことが示唆された。とりわけ小学校では，方言に対する肯定的な印象に加え，聴解・産出能力の向上意欲も高く見られた。その背景には，博物館や暮らし研との接点に加え，学校教育の中で継続的に方言へ触れる機会が設けられていることが関係していると考えられる。これに対し，中学校ではそうした機会が相対的に少なく，高校ではさらに限られているため，方言に対する関心や学習意欲が維持されにくくなっている可能性がある。

また，本調査の結果は，児童生徒への早期に接触することで，学習意欲を効果的に形成できる可能性を示唆している。小学校では，方言を新島への帰属意識と結びつける記述が複数見られた。言語継承の研究では，当事者が言語を使用しようとする意欲を持っているかどうかが継承の成否を決める重要な要素であり，言語に対する態度やイデオロギーは，その意欲の形成に関わる要因として重視されている（Dołowy-Rybińska & Hornsby 2021）。新島での実践は，小学校を中心とした早期教育を通じて，こうした方言への肯定的な態度を形成できる可能性を示している。今後の継承計画においては，早期のアクセス機会を重視するとともに，小学校段階で形成できる肯定的な受け止めを，中学校・高校へどのように接続していくかが重要な課題となる。

参照文献　横山晶子（2025）「沖永良部島における危機言語の継承と住民意識－知名町田皆集落の全戸調査より」『国立国語研究所論集』29: 153–165 国立国語研究所; **Dołowy-Rybińska**, N. & M. Hornsby (2021) Attitudes and ideologies in language revitalization. In: J. Olko & J. Sallabank (eds.), *Revitalizing Endangered Languages: A Practical Guide*: 104-126. Cambridge University Press.; **Penfield**, S. D. (2021) Planning a Language Revitalization Project. In: J. Olko & J. Sallabank (eds.) *Revitalizing Endangered Languages: A Practical Guide*: 62-71. Cambridge University Press.

語から同一対象を思い浮かべる人の語の認識と呼称における地域差の検討
—「バインダー」の連想・呼称・認識対象調査—

吉岡（よしおか）　花菜（かな）（大阪大学）

1. 目的

全国で共通に理解され使用される語を共通語という [1]。方言の中には、共通語と同じ形式だが共通語が指す意味や対象とは異なる意味や対象に用いられる語がある [2]。たとえば、「なおす」という語は一般的に元の状態にするという意味で使用される。しかし、西日本の各地では、片づけるという意味で使用される [2]。このように、地域によって語を使用する際に語に持たせる意味や対象は異なる。したがって、自分が使用しない意味や対象で語が使用された場合にその意味を理解できない、もしくは、理解はできるが自分はそのような意味や対象に対して語を使用しない可能性がある。そこで本研究では、複数の対象を持つ語における語の使用と理解について調査した。

従来の方言研究では、対象物を提示して呼称名を回答させ、その呼称名の地域差を見ていた。呼称名が全国的に同じであればその対象物を指す語の地域差はないとされた。対象物から見た呼称名の調査では、同一の語を呼称名として異なる対象物に使用した際の語の理解を調査できない。しかし、そのような場合の語の理解にこそ、語が呼称名として選択された背景や経緯が見られると考えられる。筆者の過去の研究では、同一の語が意味する複数の対象物を提示し、従来の研究法である対象物に対する呼称名の回答に加えて、語の印象や認識も回答させることで語の理解を調査した [3]。その結果、各対象物に使用する呼称名だけでなく、対象物ごとの語の印象の強さや語として認識している対象物にも地域差があった。この結果から本研究では、語から思い浮かべる対象物が同一であっても地域によって語を呼称名として使用する対象物や語として認識している対象物は異なると考え、検討した。これにより、従来の研究法では不透明であった語の選択の背景が明らかになると期待される。

2. 方法

18 歳から 23 歳の大学生を対象にアンケート調査を実施した。調査対象の地域は、北海道、宮城、新潟、東京、愛知、大阪、広島、愛媛、福岡の 9 都道府県とした。各都道府県 60 名ずつ調査した。調査では、図 1 を用いて、「バインダー」という語を聞いた時に最も強く連想する文具を一つ（以下「連想対象」）と、「バインダー」と認識している文具を全て（以下「認識対象」）選択させた。選択肢は、A: Z 式ファイル、B: クリップボード、C: リングファイル、D: その他の 4 つとした。また、ABC の文具それぞれにおいて、普段使用する呼称名（以下「呼称名」）を全て回答させた。

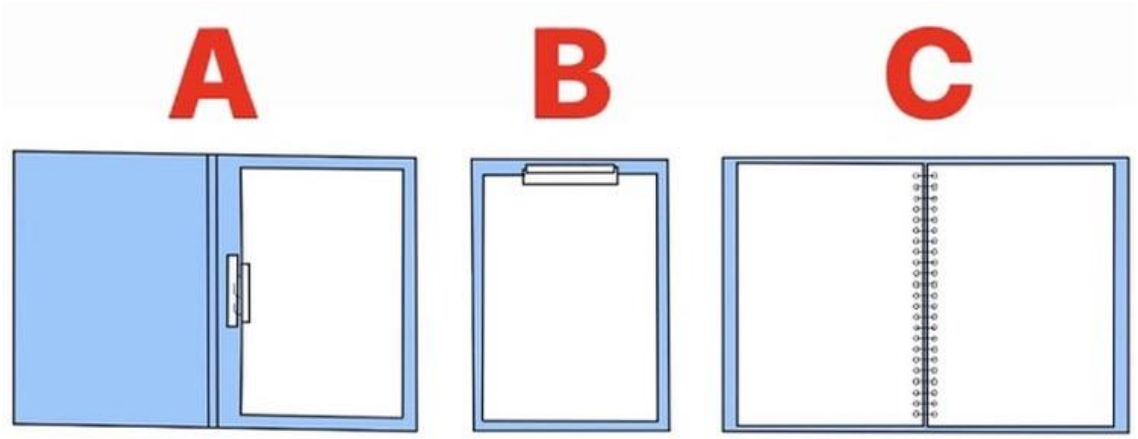


図 1　調査画像

平仮名や打ち間違いと考えられる回答は、フリック入力を加味して判断した。また、長音の揺れは考えないものとした。その上で、認識対象ではないのに呼称名に「バインダー」を用いている者 58 名と、A, B, C 全ての呼称名を「わからない」や無回答とした者 19 名は不真面目な回答として削除した。

連想対象ごとに、呼称名と認識対象を解析した。呼称名として「バインダー」と回答された文具を呼称対象として解析を行った。各文具を連想対象とする人の呼称対象と認識対象を都道府県ごとに集計し、それぞれ比較した。

3. 結果

463 の有効回答を用いて解析を行った。

表 1 に各都道府県において、Z 式ファイルを連想対象とする人が呼称対象と認識対象とした中で最も多かった文具を示した。

表 1　Z 式ファイルを連想対象とした人が最も呼称対象と認識対象とした文具

都道府県名	呼称対象	認識対象
北海道	AB	AB
宮城	AB	A
新潟	B, AB	AB
東京	AB, なし	A
愛知	AB	AB
大阪	なし	AB
広島	AB	AB
愛媛	A	A
福岡	AB	AB

注　A: Z 式ファイル、B: クリップボード、AB:Z 式ファイルとクリップボード、なし: 呼称対象とする文具なし

表 1 のように、Z 式ファイルを連想対象とした人の呼称対象と認識対象は地域によって異なった。呼称対象は、Z 式ファイルとクリップボードとする人が最多の地域が大半であった。しかし、クリップボードのみの人が同数の地域や呼称対象を持たない人が最多の地域もあった。一方で、認識対象は、ほとんどの地域で Z 式ファイルとクリップボードとする人が最多だった。このように、呼称対象は認識対象よりも地域によって異なっていた。また、愛媛でのみ、連想対象と呼称対象、認識対象が Z 式ファイルのみと同一であった。北海道、愛知、広島、福岡の 4 地域では、呼称対象と認識対象が Z 式ファイルとクリップボードであり同一であった。

表 2 に各都道府県において、クリップボードを連想対象とする人が呼称対象と認識対象とした中で最も多かった文具を示した。

表 2　クリップボードを連想対象とした人が最も呼称対象と認識対象とした文具

都道府県名	呼称対象	認識対象
北海道	B	B
宮城	B	B
新潟	B	B
東京	B	AB
愛知	B	AB
大阪	B	B
広島	B	B
愛媛	B	B
福岡	B	B

注　B: クリップボード、AB:Z 式ファイルとクリップボード

表 2 のように、ほとんどの地域でクリップボードを連想対象とする人は、呼称対象と認識対象もクリップボードのみであった。東京と愛知以外の 7 地域では、連想対象と呼称対象、認識対象がクリップボードのみと同一であった。

表 3 に各都道府県において、リングファイルを連想対象とする人が呼称対象と認識対象とした中で最も多かった文具を示した。

表 3　リングファイルを連想対象とした人が最も呼称対象と認識対象とした文具

都道府県名	呼称対象	認識対象
北海道	なし	C
宮城	なし	BC

新潟	B, C, AB	C
東京	C	C
愛知	C	ABC
大阪	C, BC, ABC	ABC
広島	ABC	ABC
愛媛	CA	C, CA
福岡	A, ABC, なし	C, CA, ABC

注　A: Z 式ファイル、B: クリップボード、C: リングファイル、BC: クリップボードとリングファイル、CA: リングファイルと Z 式ファイル、ABC: Z 式ファイルとクリップボードとリングファイル、なし: 呼称対象とする文具なし

表 3 のように、リングファイルを連想対象とする人の呼称対象と認識対象は地域によって異なった。呼称対象は、地域による違いが大きかった。一方で、認識対象は、愛知より西の地域で、Z 式ファイルとクリップボードとする人が最多だった。また、東京でのみ、連想対象と呼称対象、認識対象がリングファイルのみと同一であった。広島では、呼称対象と認識対象が Z 式ファイルとクリップボード、リングファイルであり同一であった。

4. 考察

「バインダー」という語の呼称対象と認識対象は連想対象によって異なった。また、呼称対象と認識対象の地域差も連想対象によって異なった。Z 式ファイルを連想対象とする人は、全国的に呼称対象や認識対象を Z 式ファイルとクリップボードの 2 つとする人が最多だった。クリップボードを連想対象とする人は、全国的に呼称対象も認識対象もクリップボードのみの 1 つとする人が最多だった。リングファイルを連想対象とする人は、呼称対象や認識対象をリングファイルのみの 1 つとする人や、Z 式ファイルとクリップボード、リングファイルの 3 つとする人が最多だった。「バインダー」という語の連想対象、呼称対象、認識対象とされやすい文具は、クリップボード、Z 式ファイル、リングファイルの順である [3]。語の連想対象や呼称対象、認識対象として一般的な対象ほど、語が指す対象として会話の中で通じやすい。したがって、「バインダー」という語が指す対象として一般的な対象の順で呼称対象や認識対象の個数が少なかったと考えられる。また、リングファイルを連想対象とする人は、Z 式ファイルやクリップボードを連想対象とする人に比べて、呼称対象や認識対象が地域によって異なっていた。この結果から、語が指す対象として一般的でない対象を連想対象とする人が持つ呼称対象や認識対象ほど、地域差があると考えられる。さらに、語を呼称名として使用する対象がそのまま連想対象や認識対象にならない可能性が高い。呼称名としての語の使用の有無の調査では、このような対象に使用する語は異なっていても語の印象は同一である人たちの存在は明らかにできない。しかし、語の印象は同一であるにもかかわらず、異なる語を呼称名として使用する人たちの語

の選択にこそ、その地域の背景が隠れていると考えられる。

連想対象の文具のみを呼称対象と認識対象とする人が多い地域は、連想対象の文具によって異なった。連想対象がクリップボードの場合、東京と愛知以外の 7 地域で呼称対象と認識対象もクリップボードのみの人が最多であった。一方で、連想対象が Z 式ファイルとリングファイルの場合、それぞれ愛媛と東京といった 1 地域でのみ呼称対象と認識対象も Z 式ファイルやリングファイルのみの人が最多であった。連想対象のみを呼称対象と認識対象とする人は、その対象のみを語が指す対象としている。自分が語として理解している対象が一般的であれば、会話は成立しやすい。クリップボードは、全国的に「バインダー」という語の連想対象や呼称対象、認識対象とされる文具として群を抜いている [3]。したがって、クリップボードは「バインダー」という語が指す対象として最も一般的であるがゆえに、「バインダー」という語からクリップボードを連想する人は、呼称対象と認識対象もリップボードのみの人が全国的に多いと考えられる。一方で、Z 式ファイルやリングファイルは「バインダー」という語が指す対象としてクリップボードよりも一般的でないために、それらが連想対象の人は他の文具も呼称対象や認識対象にしやすいと推測される。つまり、語が指す対象が複数ある場合であっても、最も一般的な対象のみが全国的にその語が指す単一対象として広まりやすいと考えられる。

呼称対象と認識対象のみが同一であった地域も連想対象の文具によって異なった。連想対象が Z 式ファイルの場合、4 地域で呼称対象と認識対象が Z 式ファイルとクリップボードの人が最多であった。一方で、連想対象がリングファイルの場合、広島の 1 地域でのみ呼称対象と認識対象が Z 式ファイルとクリップボード、リングファイルの人が最多であった。クリップボードは「バインダー」という語が指す対象として一般的なために、どちらの場合でも呼称対象と認識対象にクリップボードが含まれたと推測される。呼称対象と認識対象が同一である人は、自分が語として認識している対象をそのまま呼称対象としている。Z 式ファイルは、リングファイルよりも「バインダー」という語の連想対象や呼称対象、認識対象になりやすい [3]。そのため、Z 式ファイルを連想対象とする人はリングファイルを連想対象とする人よりも会話の中で違和感を覚えることが少ないので、呼称対象と認識対象が同一である地域が多かったと考えられる。つまり、語が指す最も一般的な対象以外の対象が語のイメージとして強い人は、自分が語として認識している対象に語を用いやすい可能性が示唆された。

5. 結論

「バインダー」という語を呼称名として使用する対象物や語から思い浮かべる対象物、語として認識されている対象物は地域によって異なっている [3]。本研究では、語から思い浮かべる対象物が同一であった場合における、語を呼称名として使用する対象物や語として認識している対象物の地域差について検討した。その結果、語から思い浮かべる対象物が同一であっても、その対象物が語が指す対象物として一般的でないほど、語を呼称名

として使用する対象物や語として認識している対象物が地域によって異なっていた。語の印象は同一であるにも関わらず、異なる語を呼称名として用いる人たちの語の選択こそ調査する必要があると考えられる。

参考文献

[1] 井上史雄「現代方言のキーワード」『方言の現在』小林隆, 篠崎晃一, 大西拓一郎 編（1996）明治書院.
[2] 小林隆, 篠崎晃一(2020).『ガイドブック　方言研究』, ひつじ書房.
[3] 吉岡花菜(2024).「共通語の語彙を用いた、語が指す対象物の地域差の検討　—「バインダー」の呼称・連想・認識対象調査—」『日本語学会 2024 年度春季大会予稿集』179-184.

少数言語・方言の音声対話型 AI の開発
―AI 時代における低リソースデータの可能性と課題―

坂井美日（さかいみか／鹿児島大学）、中川奈津子（なかがわなつこ／九州大学）、宮川創（みやがわそう／筑波大学）、高道慎之介（たかみちしんのすけ／慶應義塾大学）、佐藤なな子（さとうななこ／慶應義塾大学）、高橋哲朗（たかはしてつろう／鹿児島大学）、村留陵弥（むらどめりょうや／鹿児島大学）

0.1. ワークショップの趣旨

本ワークショップでは、日琉諸語・諸方言を主な研究対象としつつ、少数言語・方言を扱う音声対話型 AI の開発をめぐる理論的・技術的課題を整理し、AI 時代における低リソース言語の可能性と課題を検討することを目的とする。

発表者らは、九州・沖縄地域の消滅危機言語・方言を主な対象として、音声対話型生成 AI の開発を進めている（24K00074「九州・沖縄方言の継承支援に資する音声対話型生成系 AI の開発」）。AI 技術が社会基盤として浸透しつつある現在、当該言語で AI システムを構築できるか否かは、言語の将来的存続可能性に直結する問題となりつつある。母語話者が自らの言語をデジタル環境で使用できるか否かは言語権（母語を使いたい時に自由に使える権利）の観点からも重要であり、教育・継承・復興の実践にも大きな影響を及ぼす。

現在主流の生成 AI モデルは大規模な言語量が前提となるため、低リソース言語・方言で高精度の生成 AI システムを構築することは非常に難しい課題であるとされる。

本ワークショップは、まず前半 2 件の発表において、言語学的かつマクロな観点から AI 時代の少数言語・方言が直面する課題を論じる。続いて後半 2 件の発表において、工学的かつミクロな観点から具体的な音声合成・アクセント推定技術の開発状況を報告する。全体討論では、それら計 4 件の発表をベースとしつつ、少数言語・方言の音声対話型 AI の開発をめぐる理論的意義、社会的影響、技術的課題、倫理的懸念を多角的に議論する。

0.2. 発表の構成

趣旨説明・導入：坂井美日（鹿児島大学）

上記の趣旨を説明する。

発表 1：中川奈津子（九州大学）

題目：「AI 時代の言語的不平等―AI システムの可能性とリスク―」

発表 2：宮川創（筑波大学）

題目：「少数言語・方言をめぐる AI の開発・実装動向―国内外の事例整理―」

発表 3：高道慎之介（慶應義塾大学）・佐藤なな子（慶應義塾大学）

題目：「日琉諸語・諸方言における音声合成の構築・評価・活用事例」

発表 4：高橋哲朗（鹿児島大学）・村留陵弥（鹿児島大学）

題目：「鹿児島方言におけるアクセント推定」

デモンストレーション

開発中の鹿児島音声システムについて、実際の入出力例を提示する。

AI 時代の言語的不平等―AI システムの可能性とリスク―

中川奈津子（なかがわなつこ／九州大学）

本発表では、AI が普及する現代において少数言語が直面しうる言語的不平等の問題を検討する。大規模言語モデル (LLM) の学習基盤が特定言語に偏る現状は、デジタル社会において言語的格差を拡大させる可能性がある。この点において、少数言語による対話型 AI や音声合成システムの実装は、言語使用域の拡張や継承支援に寄与しうる。一方で、過度な標準化・誤生成・文化的文脈の問題などの懸念点も考えられる。

少数言語を取り巻く状況と AI

生成 AI の普及は、政治・経済的に優位な言語（すなわち印欧語、特に英語）をより優位に、抑圧された言語をより抑圧された地位に押しやる可能性がある。生成 AI の学習に用いられているのは、少なく見積もっても半分以上が英語のデータである。Hayase et al. (2024) は、トークナイザーの統計的特性に基づく推定により、GPT-4o の学習データにおいて非英語データが約 39%を占める可能性を指摘している。この推定に従えば、依然として約 61%は英語に由来するデータであり、英語が最大の構成要素である点に変わりはない。さらに、非英語部分についても、その多くはフランス語・スペイン語・ロシア語など、高資源言語に属する言語群に偏っていることが示唆されており、言語間の不均衡が解消されているとは言い難い。このような学習データの偏在により、LLM が生成する非英語テキストにおいても、英語に由来する言語的特徴が反映される傾向が指摘されている。例えば、Guo et al. (2025) は、LLM が生成する中国語やフランス語のテキストが、人間による自然発話と比較して、英語に類似した構造的特徴を示す傾向を報告している。英語話者においても、LLM の出力に由来すると考えられる言語的特徴に影響されていることを示唆する研究がある。例えば、Yakura et al.（2024）は、YouTube 上の学術講演および対話形式のポッドキャストからなる約 74 万時間分の音声データを分析し、ChatGPT が特徴的に用いる語彙の使用頻度が、2022 年 11 月の一般公開以降に有意に増加したことを報告している。

生成 AI における英語の優位性は単なる言語的差異にとどまらない。例えば、Zhang et al.（2025）は、多言語環境における LLM の評価指標を提案し、コード生成、数理的推論、論理的推論、知識獲得、および指示追従（instruction following）といった複数のタスクにおいて、英語が一貫して最も高い性能を示すことを報告している。また同研究では、日本語の成績はタイ語に次いで低い水準に位置づけられることが示されている。すなわち、生成 AI を基盤とする各種アプリケーションにおいて、日本語で利用する場合には、英語で利用する場合と比較して性能が相対的に低下する傾向があり、その結果として日本語話者は英語話者に比べて不利な条件でサービスを利用する可能性がある。

標準日本語は、オンライン・オフラインの双方において大量のテキストコーパスを有する高資源言語である。しかしながら LLM の文脈においては、日本語であっても英語と比較す

れば相対的に低資源言語として位置づけられるかもしれない。したがって、日本語よりも話者数が少なく、言語資源の蓄積が乏しい言語、すなわち少数言語（LLM の文脈では低資源言語）の状況は、さらに深刻であると考えられる。少数言語の中には、標準化された正書法を持たないものや、表記体系の制約により書記化が困難なものがある。現代社会においては、デジタル環境での利用可能性が言語の維持に大きく関与するため、入力手段が未整備であることや入力効率の低さ自体が、言語使用の阻害要因となる。この結果、当該言語のテキストコーパスの蓄積が進まず、機械学習に供するための学習データは極めて限定的となる。さらに、音声言語のうち書記化が進んでいないものや、手話のような言語は、記録・保存に際して音声・映像といった高コストな媒体を必要とするため、利用可能なデータ量は一層制約される。日本の少数言語における AI 応用の状況については坂井 (2025) を参照。

多様性のための AI

一方で、生成 AI をうまく使えば、むしろそれぞれの人が自分らしく生きられるように、多様性を尊重するような使い方もできる。例えば言語教育においては、学習の過程で AI を用いることで、個々の学習者の能力や興味に合わせたきめ細やかな学習がサポートされることが示唆されている (Chapelle, 2025)。実際、生成 AI が英語と同程度の精度で少数言語を生成することができるようになれば、上述した不平等が解消されるだけでなく、言語を継承しようとする人の学習教材になったり少数言語で新たな著述を生み出す時の助けとなったりしうる。坂井 (2025) の指摘する現状を反転させて想像を巡らせれば、少数言語で会議を行っても、自動書き起こしを行ったり、自動要約を利用したりすることもできるし、教育や行政サービスも受けることができる。さらに想像を発展させると、読み書きが苦手、人と話すのが苦手、文字が見えづらい、音声が聞こえづらい、自分の問題を相手にうまく伝えられない人々なども不利益を被ることがなくなるだろう。そのためにも、なるべく多くのデータが必要である。

Harding (2025) は、AI を用いた言語学習の評価におけるユートピア的立場とディストピア的立場を比較している (表 1)。ユートピア的立場では、AI を用いることで学習者の多様性が尊重され、公正性が重視され、評価は透明であり、学習と評価が統合される。ディストピア的立場では、母語話者中心主義の標準化が横行し、評価は不透明で 1 回限り、個々人の知識を高める教育というよりは選別の道具となる。Harding は、言語教育の評価の分野では倫理と社会的責任の問題に取り組んできた長い歴史があることを根拠に、悲観的な見方は起こりそうもないと述べている。日本語学・言語学・方言学においても、研究を行う上での倫理と社会的責任を明確にし、データの(非)公開、研究発表、調査、実験などを行うべきである。

表　1: AI を用いた言語学習の評価におけるユートピア的立場とディストピア的立場　(Harding, 2025: 567)

ユートピア的立場	ディストピア的立場
文脈に繊細 (context-sensitive)	画一的 (uniform)
地域に即した (localised)	均質化された (homogenised)
接続可能・包括的 (accessible, inclusive)	標準化された (standardised)
多様である (diverse)	母語話者中心である (native-speaker-centric)
学習と接続した (connected with learning)	学習から断絶している (disconnected from learning)
理論に基づいている (theory-informed)	理論性を欠き、便宜的に運用される (atheoretical, informed by expediency)
豊かでオーセンティックな構成概念 (rich, authentic constructs)	表層的で限定的な構成概念 (superficial, narrow constructs)
透明で説明可能な評価 (transparent, explainable scoring)	不透明で説明不能な評価 (opaque, unexplanable scoring)
データのプライバシーや権利を重視 (data privacy, rights focus)	データ共有、収益化を重視 (data sharing, monetisation focus)
長期的視点 (longitudinal perspective)	1 回限りの高リスク評価 (one-shot, high-stakes)
正義についての深い検討: そもそも評価は必要？なぜ？ (deep consideration of justice: Do we need to assess? Why?)	評価の乱立、より強い選別、より多くの障壁 (proliferation of assessment, more gatekeeping, more barriers)

地域の言語が話される環境で生きる意義

世界的に見ると、少数言語コミュニティがこれまで訴えてきた、祖先から受け継いだ言語を話し続けることが健康や幸福に寄与するという主張を支持する報告が出てきている。たとえば、カナダでは、先祖伝来の言語を使用する若者の自殺死亡率が低いことが報告されている (Hallet et al., 2007)。また、オーストラリアでは、コミュニティ主体でアボリジニ言語を活用することがメンタルヘルスの向上に結びつくことが示されている（Oldfield, 2016）。Harding et al. (2025) では、カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドにおける 260 件以上の研究を分析した結果、その約 78%が、先住民族言語の使用や教育、再活性化と、精神的健康の改善、学業成績の向上、社会的結びつきの強化、さらには自殺率の低下といった健康面の向上との間に正の関連があることを示すことが報告されている。こうした研究から、言語の学習や使用そのものが癒しや心理的回復の過程の一部であることが明らかになっており、先住民や少数派の言語の継承や教育が、植民地化による長期的な精神的影響からの回復にも資することが示唆されている (詳しいまとめは、半嶺・中川, to appear を参照)。少数者が抑圧されることなく、自分らしく生きられる世界のために生成 AI を活用することが望ましい。明確なポリシーを持たずに使っていては、Harding (2025) の言うディストピア的な世界の方に貢献することになるかもしれない。

参考文献

坂井美日. (2025). 日本におけるデジタル音声処理と言語学の課題: 日本列島の多様な言語・方言の声を置いていかないために. 日本語学, 44(4), 74–83.

半嶺まどか・中川奈津子 (to appear) 「危機言語と言語復興運動」『図説 世界の言語』, 朝倉書店.
Chapelle, C. A. (2025). Generative AI as game changer: Implications for language education. System, 132, 103672. https://doi.org/10.1016/j.system.2025.103672
Guo, Y., Conia, S., Zhou, Z., Li, M., Potdar, S., & Xiao, H. (2025). Do Large Language Models Have an English Accent? Evaluating and Improving the Naturalness of Multilingual LLMs (arXiv:2410.15956). arXiv. https://doi.org/10.48550/arXiv.2410.15956 (2026/3/30 最終アクセス)
Hallet, D. Chandler, M. & Lalonde, C. (2007). Aboriginal language knowledge and youth suicide. Cognitive Development. 22 (3), 392-399.
Harding, L. (2025). Utopian and dystopian visions: Steering a course for the responsible use of artificial intelligence (AI) in language testing and assessment. Language Testing, 42(4), 561–575. https://doi.org/10.1177/02655322251350717
Harding, L. DeCaire, R., Ellis, U., Delaurier-Lyle, K., Schillo, J., & Turin, M., (2025). Language improves health and wellbeing in Indigenous communities: A scoping review. Language and Health. 3 (1), 1-16.
Hayase, J., Liu, A., Choi, Y., Oh, S., & Smith, N. A. (2024). Data Mixture Inference: What do BPE Tokenizers Reveal about their Training Data? arXiv.Org. https://arxiv.org/abs/2407.16607v4 (2026/3/30 最終アクセス)
Oldfield, J.G. (2016). Anangu Muru Wunka—Talking Black Fella: A critical policy analysis of the Northern Territory compulsory teaching in English for the first four hours of each school day [PhD thesis]
Yakura, H., Lopez-Lopez, E., Brinkmann, L., Serna, I., Gupta, P., Soraperra, I., & Rahwan, I. (2024). Empirical evidence of Large Language Model's influence on human spoken communication. arXiv.Org. https://arxiv.org/abs/2409.01754v3 (2026/3/30 最終アクセス)
Zhang, Y., Wan, Y., Deng, B., Yang, B., Wei, H.-R., Huang, F., Yu, B., Liu, D., Lin, J., Huang, F., & Zhou, J. (2025). P-MMEval: A Parallel Multilingual Multitask Benchmark for Consistent Evaluation of LLMs. In C. Christodoulopoulos, T. Chakraborty, C. Rose, & V. Peng (Eds.), Proceedings of the 2025 Conference on Empirical Methods in Natural Language Processing (pp. 4809–4836). Association for Computational Linguistics. https://doi.org/10.18653/v1/2025.emnlp-main.242

少数言語・方言をめぐる AI の開発・実装動向　―国内外の事例整理―

宮川　創（みやがわそう／筑波大学）miyagawa.so.kb@u.tsukuba.ac.jp

1. はじめに

現在、地球上では約 7,000 の言語が話されているが、そのうち約 44%（約 3,193 言語）が何らかのレベルで危機に瀕しており、1,431 言語は話者数 1,000 人未満、110 言語は話者 10 人未満である（Eberhard et al. 2025）。Crystal（2000）は言語消滅の機序と規模を論じ、Campbell & Belew（2018）は世界の危機言語を体系的に目録化した。こうした不可逆的な言語多様性の喪失に対し、AI・自然言語処理（NLP）・デジタル・ヒューマニティーズ（DH）の手法を用いた多角的アプローチが急速に展開されている。

本発表では、言語記述・記録のためのデジタルツールとアーカイブ、多言語 AI 技術（音

声合成・音声認識・機械翻訳等）の開発動向、LLM（大規模言語モデル）および RAG（検索拡張生成）の少数言語への適用可能性と限界、ならびに倫理的課題について、国内外の事例を整理し、今後の研究課題を提示する。

2. 言語記述のためのデジタルツールとアーカイブ

危機言語の記録・分析では ELAN（マックスプランク心理言語学研究所が DOBES プロジェクトの一環として開発）が言語ドキュメンテーションのデファクト・スタンダードとして世界的に普及している。下地（2025）は ELAN の談話データから例文提示フォーマット形式のアノテーションデータと音声データを自動切り出しするスタンドアロンツールを公開しており、フィールドワーカーの作業効率化に貢献している。SIL International の FLEx（FieldWorks Language Explorer）は形態素解析・語彙・テキストコーパスの統合管理を可能にする。

国際的デジタルアーカイブとしては、ELAR（Endangered Languages Archive、BBAW）が 70 か国以上・550 以上のデポジットを擁し、Pangloss Collection（CNRS/LACITO）は 258 言語・1,200 時間超の録音資料をすべて DOI 付与のうえオープンアクセスで公開、PARADISEC（豪州大学連合）は太平洋地域のアナログ媒体の緊急デジタル化を進めている。2018 年のブラジル国立博物館火災は、言語記録資料の構造化・DOI 付与・クラウド冗長化の必要性を世界に知らしめた。

3. 多言語 AI 技術の開発動向

3.1 音声合成・音声認識

Meta の MMS（Massively Multilingual Speech）は 1,100 以上の言語に ASR・TTS モデルを提供し（Pratap et al. 2024）、Google の USM（Universal Speech Model）は 300 以上の言語に対応する（Zhang et al. 2023）。個別言語では、マオリ語 TTS・ASR（Te Hiku Media）、アイルランド語 ABAIR（Trinity College Dublin）、GiellaLT プロジェクトによる北サーミ語・ルレサーミ語の TTS・ASR・スペルチェッカー等が実用化されている。アイヌ語では河原らのプロジェクトにより、約 40 時間の音声データに基づく端対端音声認識で 94%の音素認識率・80%の単語認識率が報告されている（Matsuura et al. 2020）。国内では佐藤ほか（2026）が記述言語学に基づく方言 TTS 評価枠組みを提案し、宮古語池間西原方言に適用して音質の改善と方言らしさの課題を報告している。

3.2 機械翻訳

2022 年に Google はゼロショット機械翻訳技術で Google 翻訳に 24 言語（ミゾ語・リンガラ語・ケチュア語・グアラニー語等）を一括追加した。同年 Meta の NLLB-200 はスパース混合エキスパートアーキテクチャにより 200 言語間の直接翻訳を実現し、FLORES-200 で平均 44%の BLEU スコア向上を達成した（NLLB Team 2022）。アフリカでは Masakhane（イシ

ズールー語で「共に築く」）が機械翻訳・形態素解析・音声処理モデルをオープンソースで公開し、現地話者主導のデータ構築モデルを確立した。ACL 併設の AmericasNLP では先住民言語の機械翻訳共有タスクが毎年実施されている。

4. LLM の限界と RAG アプローチ

LLM は低資源･危機言語への適用に根本的な限界を抱える。FormosanBench（Lin et al. 2025）は台湾先住民のアタヤル語・アミ語・パイワン語を対象に MT・ASR・テキスト要約で最先端 LLM を評価した初の包括的ベンチマークであるが、ゼロショット・ファインチューニングのいずれでも性能は著しく低く、事前学習データの偏重とフォルモサ諸語固有の形態統語的複雑さに対する不適合が示された。

こうした課題への打開策として注目されるのが検索拡張生成（RAG）である。RAG は専門辞書･注釈済みコーパス等の既存言語資源をベクトル検索などで動的に参照させ、大規模コーパスなしに LLM の出力精度を補完する手法であり、モデルのパラメータを変更しないため低資源言語に親和性が高い。チェロキー語・チベット語・満州語（Shu et al. 2024）や客家語（Chang et al. 2025）で精度向上が報告されている。コプト語を対象とした THOTH AI（宮川 2026a）では総合コプト語語彙集を知識ベースとした RAG 構成によりベースモデル単体より約 9 BLEU ポイントの向上が得られた。琉球語与論方言では、民話集『与論のしまがたり』から文節レベル対訳 9,007 ペアを知識ベースとした RAG システム（Yunnufutuba）が BLEU スコア 45.6 を達成し、ベースモデルに対し 9.9 ポイントの向上と全評価指標での最高性能が確認されている（宮川 2026b）。

5. 倫理的課題とテクノロジーの役割

少数言語への AI 技術の適用にあたっては、倫理的配慮が不可欠である。奥田（2022）はアイヌ語の自動処理に関して、(1) 音声合成技術によるフェイク音声の生成が話者・遺族の人格権・著作権を侵害するリスク、(2) 機械が学習者のディクテーションや記述作業の機会を奪うリスク、(3) 日本語からの直訳調のアイヌ語表現が機械間で自動的に増幅され、大言語の影響が拡大するリスクの 3 点を指摘し、「人間がやるべきことは人間がやる、機械がやるべきことは機械がやる」という見通しの重要性を論じている。これらの論点は、アイヌ語に限らず危機言語一般の AI 技術適用における普遍的な倫理的課題として位置づけられる。

Duolingo は 2014 年にアイルランド語、2018 年にハワイ語・ナバホ語のコースを開設し、アイルランド語ではネイティブ話者の 42 倍（約 420 万人超）が学習した。DuoStories（duostories.org）では沖縄語コースも公開されている。坂井らの科研費プロジェクト（24K00074）では九州・沖縄の消滅危機方言を対象に音声対話型生成 AI の開発が進められている。こうしたデジタルツールは言語への関心喚起に有効である一方、真の言語復興にはイマージョン教育や地域学校・家庭内使用などコミュニティ主導の活動への接続が不可欠である。

6. おわりに

本発表では、危機言語の記録のためのデジタルツール・アーカイブ、多言語 AI 技術の開発動向、LLM・RAG の適用可能性と限界、ならびに倫理的課題を国内外の事例に基づいて整理した。RAG 用知識ベースの整備とコミュニティ主導のデータ構築を組み合わせた統合的アプローチが今後の危機言語 NLP の主要方向性となりうる。同時に、奥田（2022）が指摘するように、話者・遺族の権利保障、学習者の機会保障、大言語の影響の認識と統制といった倫理的側面を開発の初期段階から組み込むことが不可欠である。

参考文献

Campbell, L. & Belew, A. (Eds.) (2018) Cataloguing the World's Endangered Languages. Routledge.

Chang, C.-C., Li, C.-F., Lee, C.-H. & Lee, H.-S. (2025) "Enhancing low-resource minority language translation with LLMs and retrieval-augmented generation for cultural nuances." arXiv:2505.10829.

Crystal, D. (2000) Language Death. Cambridge University Press.

Eberhard, D. M., Simons, G. F. & Fennig, C. D. (Eds.) (2025) Ethnologue: Languages of the World, 28th ed. SIL International. https://www.ethnologue.com（2026 年 3 月 8 日閲覧）

Lin, K. K., Chen, H.-Y. & Zhang, H. (2025) "FormosanBench: Benchmarking low-resource Austronesian languages in the era of large language models." Findings of EMNLP 2025, pp. 16527–16539.

Matsuura, K., Ueno, S., Mimura, M., Sakai, S. & Kawahara, T. (2020) "Speech Corpus of Ainu Folklore and End-to-end Speech Recognition for Ainu Language." Proc. of LREC 2020, pp. 2622–2628.

宮川創 (2026a)「LLM および LLM-RAG のコプト語ボハイラ方言ニューラル機械翻訳における性能評価：言語復興運動への応用に向けて」『情報処理学会研究報告』Vol.2026-NL-267(No.20), 1–8.

宮川創 (2026b)「奄美群島与論島方言の機械翻訳への LLM-RAG の応用―『与論のしまがたり』を用いた文節パラレルデータによる検証―」『信学技報』125(366), 19–24.

NLLB Team (2022) "No language left behind: Scaling human-centered machine translation." arXiv:2207.04672.

奥田統己 (2022)「AI によるアイヌ語の自動処理―実現したこと、期待されること、やるべきでないこと―」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』7, 1–8.

Pratap, V. et al. (2024) "Scaling speech technology to 1,000+ languages." JMLR 25, pp. 1–52.

佐藤ななこ・阪井瞭介・中田亘・高道慎之介・中川奈津子・林由華・宮川創・坂井美日 (2026)「記述言語学に基づいた方言音声合成評価枠組みの構築と池間西原方言音声合成の評価」『言語処理学会第 32 回年次大会発表論文集』pp. 122–126.

下地理則 (2025)「危機言語フィールドワーカー向け：ELAN の談話データから例文提示フォーマット形式のアノテーションデータと音声データを自動で切り出す HTML スタンドアロンツール」Note. https://note.com/lingfieldwork/n/nb2eb90735124（2026 年 3 月 8 日閲覧）

Shu, P. et al. (2024) "Transcending language boundaries: Harnessing LLMs for low-resource language translation." arXiv:2411.11295.

Zhang, Y. et al. (2023) "Google USM: Scaling automatic speech recognition beyond 100 languages." arXiv:2303.01037.

日琉諸語・諸方言における音声合成の構築・評価・活用事例

高道 慎之介（たかみちしんのすけ／慶應義塾大学）
佐藤 なな子（さとうななこ／慶應義塾大学）

はじめに

音声合成 (text-to-speech; TTS) とはテキストから音声を人工的に合成する技術であり、平たく言えばコンピュータが喋るための技術である。数年前から比較すれば人工音声は我々の日々に溢れるようになった。東海道新幹線や大阪万博のアナウンスから、テレビの AI アナウンサー、スーパーやコンビニの無人レジまで様々である。

本稿では、この技術を応用して日琉諸語・諸方言の音声合成に関する話題を提供する。方言テキストから方言音声を合成することで、人から人への直接的な方言継承だけでなく、コンピュータを用いて人から人への継承を仲立ちすることが可能になるだろう。本稿では、工学研究者の立場から、(1) 音声合成とはどのような技術なのか、(2) 日琉諸語・諸方言の音声合成をどのように作ればよいのか、(3) それを作ってどのように活用するのかを説明する。

音声合成の基礎知識

本稿の方言音声合成 (方言 TTS) とは、方言テキストから方言音声を合成する技術を指す。東京方言を翻訳して方言音声を作るような翻訳の過程は含まないことに注意されたい。深層学習が普及している現代においては、方言音声合成も基本的に深層学習を用いる。平たく言えば音声 AI と称しても問題ない。

方言音声合成を構築するには、方言音声の特徴をディープニューラルネットワーク’((方言 TTS モデル) が学習する必要がある。これに必要なのが、方言音声とその書き起こしテキスト（テキストー音声データセット）である。「学習する」とは、テキストと音声の対応規則を覚えることと言ってもよい。このテキストを読むときの音素、アクセント、イントネーションはどうなるのか、どう読めば目標の音声に近づくのかを覚える。この規則を一度覚えれば、学習に含まれない方言テキストからも、方言音声を合成することができる。

故に、理想的なデータセットとは、目標とする音声しか入っていない音ファイルと、その正確な書き起こしテキストファイルの対である。前述した AI アナウンサーの例では、用意されたテキストのセリフを忠実に発声できるプロのアナウンサーが、他者の音声や雑音の介入余地がない部屋（例えばスタジオ）で収録した音声を用いているはずである。例えば、JSUT [Sonobe17] というデータセットには、短文 5000 文のテキストと、その読み上げ音声 5000 個を含んでいる。

方言音声合成の実践

方言 TTS モデル構築には、対象方言のテキストー音声データセットが不可欠である。し

かし、方言話者の体力や収録環境構築の難しさといった収録コストの高さから、前述した理想的なデータセットを構築することは難しい。したがって、本稿ではモデル構築用ではない方言録音資料を使用することを考える。この方言録音資料とは、対象方言を人文学の立場から解析するために収集されたもの（例えば、南琉球宮古語池間西原方言 音声例文データベース [仲間 26]）を指す。

方言録音資料をデータセットとして用いるにあたり、録音資料の低音質さと小規模さという 2 つの課題を解決する必要がある。本節はそれぞれに対する解決策を述べる。

まず低音質の要因として、プロ話者ではないことに伴う読み間違えや、一般家屋で収録されていることに伴う背景雑音・マイク歪みが挙げられる。前者については、テキストー音声間の対応が取れていないと言えるので、音素アライメントツールによってテキストと音声の対応度を算出し、下位データをデータセットから除去する [Lee19]。後者については、背景雑音やマイク歪みを除去し音声のみを強調する、普遍的音声強調モデルを用いる。また 1 文の音声は、非発話区間に挟まれてファイルに保存されている。しかしその時間長にばらつきがあると、方言 TTS モデルは非発話区間に対し煩雑な時間長予測を強いられる。そこで発話区間検出を用いて、非発話区間の時間長を一定に揃えることでばらつきをなくし、データセットとしての品質を向上させる。

続いて録音資料が小規模な場合でも方言特徴を再現可能にするため、(1) 東京方言などの大規模データセットで学習したモデルをファインチューニングする、(2) 方言特有の音素に対応させる書記素ー音素変換規則を設ける、(3) 音素の音響特徴を司る調音特徴を音素から計算する、などの方法をとることができる。

方言音声合成を構築できた後は「その方言音声合成が本当に対象方言を話せるのか」を評価する必要がある。そこで、対象方言らしさを司る評価文セットを用意する。この評価文セットとは、直感的に言えば「これを話せれば対象方言を話せるとみなしてよい」とする方言テキストの集まりである。各テキストから音声を合成し、それを対象方言の話者が評価する [Yamauchi24]。データセットの中から無作為にテキストを選択する方法 [Varadhan25] もあるが、後述するような、記述言語学に基づいて対象方言らしさを包括するよう設計することが望ましい。

一般に TTS モデルはデータセットからランダム選択した文を合成し、その合成音声を評価する。しかし方言 TTS モデルの評価文においては、ランダム選択文に方言らしい文が網羅されているとはいえない。したがって本研究では記述言語学を応用して、対象方言の特徴を列挙し、特徴を網羅した評価文を用意することで、モデルの方言らしさを評価する。

方言音声合成の活用事例

上記の手順で構築した方言音声合成について、その研究事例・活用事例を述べる。

佐藤らは、池間西原方言音声合成に取り組んでいる [佐藤 26]。方言録音資料である南琉球宮古語池間西原方言データセットに対して前述した解決策を施し、さらに、記述言語学に

基づいて池間西原方言の特徴を記述した評価文セットを作成している。評価文セットはプロジェクトページ [佐藤 25] から入手可能である。最終的に、評価文から合成した音声を言語学者が評価し、方言音声合成の品質を評価している。

高道らは、同様の解決策を仙台市方言に適用し、仙台市方言音声合成の構築と活用を行っている [高道 26]。仙台市の小学校 2 年生向けに地域の言葉を学ぶ授業を実施し、その授業の中で人工音声による昔話の語り動画を提示した。「その方言音声合成が本当に対象方言を話せるのか」については、仙台市の語り手の協力により確認している。授業の結果、人工音声による方言継承の可能性を提示した。

上記の枠組みは日琉諸語・諸方言に応用可能である。本ワークショップでは鹿児島方言に応用した結果を提供する。

参考文献

[Sonobe17] Ryosuke Sonobe, Shinnosuke Takamichi and Hiroshi Saruwatari. JSUT corpus: free large-scale Japanese speech corpus for end-to-end speech synthesis. arXiv preprint, 1711.00354, 2017.

[仲間 26] 仲間 博之, 田窪 行則, 岩崎 勝一, 五十嵐 陽介, ダニエル・ワイマーク, 中川奈津子, 佐藤なな子, 高道慎之介. 南琉球宮古語池間西原方言 音声例文データベース. 九州大学/国立国語研究所, 2026.

[Lee19] Akinobu Lee and Tatsuya Kawahara. julius-speech/julius: Release 4.5, January 2019.

[Varadhan25] Praveen Varadhan, Sherry Thomas, Miryala Teja, Suvrat Bhooshan, and Mitesh Khapra. The state of TTS: A case study with human fooling rates. In arXiv, pages 2285–2289, 08 2025.

[Yamauchi24] Kazuki Yamauchi, Yuki Saito, and Hiroshi Saruwatari. Cross-dialect text-to- speech in pitch-accent language incorporating multi-dialect phoneme-level bert. In 2024 IEEE Spoken Language Technology Workshop (SLT), pages 750–757, 2024.

[佐藤 26] 佐藤 なな子, 阪井 瞭介, 中田 亘, 高道 慎之介, 中川 奈津子, 林 由華, 宮川 創, and 坂井 美日. 記述言語学に基づいた方言音声合成評価枠組みの構築と池間西原方言音声合成の評価. 言語処理学会 第 32 回年次大会 発表論文集, 122-126, 2026.

[佐藤 25] https://github.com/takamichi-lab/ikema_tts_evaluation

[高道 26] 高道 慎之介, 丹治 尚子, 庄司 潤子, 佐藤 照一, and 田村 文子. 仙台市方言を合成する方言音声合成の構築と小学校 2 年生向け方言学習授業における活用報告. 言語処理学会 第 32 回年次大会 発表論文集, 3297-3300, 2026.

鹿児島市方言におけるアクセント推定

高橋哲朗（たかはしてつろう／鹿児島大学）
村留陵弥（むらどめりょうや／鹿児島大学）

はじめに

標準日本語を対象としたテキスト音声合成（TTS）において、学習および推論に用いる書き起こしテキストに韻律記号を付与することで、出力音声の自然さが有意に向上することが報告されている[1]。他の日流諸語・諸方言においても、任意の入力テキストに対してアクセント情報を推定・付与するシステムを構築できれば、TTS および音声インターフェースを持つ対話システムの実用化に向けた大きな足掛かりとなることが期待できる。

本稿では、鹿児島市方言を対象としたアクセント推定システムを提案する。実装に当たっては、既存の言語学的知見に基づくルールベース処理と機械学習によるリソースの補完を組み合わせることで、方言の持つ低資源性を考慮したアプローチを試みた。

鹿児島市方言のアクセント体系について

鹿児島市方言は二型アクセント体系を有する[2]。すべての自立語が、次に示す A 型、B 型のいずれかのアクセント型に分類される。

(1) A 型：末尾から二番目の音節を高く発音する。
　e.g. ア̄.カ（赤），ト.マ̄.ル（止まる）
(2) B 型：末尾の音節を高く発音する。
　e.g. ア.オ̄（青），ハ.シ.ル̄（走る）

また、当該方言は一般複合法則を有し、複合語においてその先頭形態素のアクセント型が複合語全体の型として継承される。さらに、多くの付属語が独立したアクセント句を形成しないことから、一般複合法則の適用範囲が、多くの場合文節レベルにまで拡張される。

提案手法

前節の内容を踏まえ、文中に含まれる各文節の先頭形態素のアクセント型が定まれば、鹿児島市方言のアクセントを文節・文のレベルである程度推定することができると考えられる。この仮説に基づき、任意の入力テキストに対し形態素解析を行い、各文節の先頭形態素のアクセント型から文節全体のアクセント情報を推定するシステムを提案する。システムの構成図を図 1 に示す。

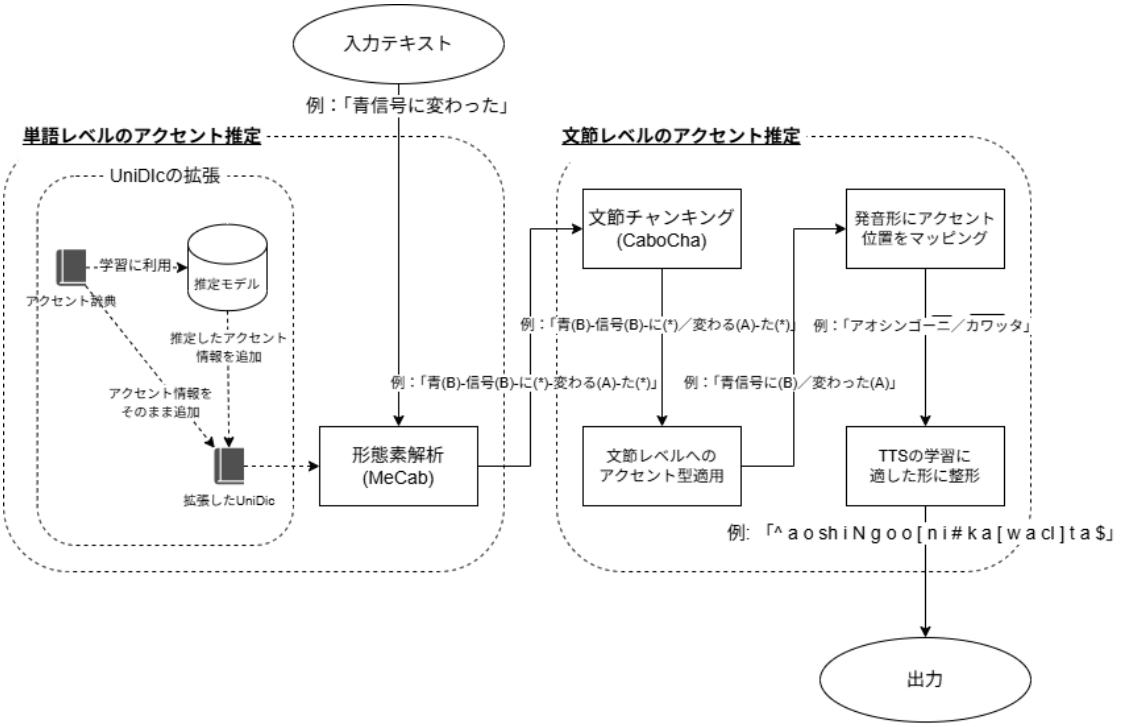


図 1. アクセント推定システムの構成図

本システムを実現するために、入力テキストに含まれる各形態素に対して鹿児島市方言のアクセント型情報を付与する処理が必要となる。そこで、形態素解析辞書 UniDic-CSJ [3]を拡張し、鹿児島市方言式アクセント型の情報を組み込む作業を行った。

まずは標準語語彙の鹿児島市方言式アクセント情報が掲載された全国アクセント辞典[4]を情報源とし、アクセント型情報の収集を行った。UniDic 収録語のうち約 15%にあたる語は同時点にアクセント型情報が掲載されているため、これをそのまま追加した。

UniDic に含まれる項目のうち、全国アクセント辞典収録外のアクセント型が未知である残り約 85%の単語については、先述のアクセント型情報が既知である単語を学習データに用いた機械学習でリソースを補完することにより対応した。具体的には、単語が持つ音節数や品詞、語種、発音の並びなどの情報を元に A/B 型を推定する機械学習モデルを作成し、モデルの出力した推定結果アクセント型情報を辞書に追加した。実験の結果、このモデルは約 90%の単語について正しく型を推定できることを確認した。

システムの有効性を検証するため、標準日本語の音声コーパスである JSUT コーパス [5]の basic5000 から抽出した 100 文（全 531 文節）の書き起こしテキストを対象に、アクセント推定精度の評価を行った。鹿児島市母語話者による当該方言アクセントでの読み上げ音声におけるピッチパターンを正解データとし、文節単位でシステムの出力との完全一致率を算出した。結果として、文節単位でのアクセント位置の正解率は 64.6%、一文内の全文節のアクセント位置が完全一致した文の割合は 5.0%となった。この結果から、単語レベルでの推定は高精度に行えるものの、文節・文レベルに拡張した際に生じる例外的なふるまいへの対応が不十分であることがわかった。

システムの拡張

前節での検証結果を受け、現在二つの方向性で継続的にシステムの拡張を進めている。

第一に、検証において確認された、文節・文レベルに拡張した際に例外的なふるまいを見せる語彙への対応である。具体的には、一部の終助詞などがこれに該当する。

先に述べたように、鹿児島市方言では多くの付属語が独立したアクセント句を形成しない（従属式[2]）。ただし、終助詞などを含む主に文末で使われる一部の付属語は例外として独立したアクセント句を形成する場合がある（独立式）。

提案手法における実装では、付属語を一律に従属式として扱っており、独立式の付属語に対してアクセント句の境界が適切に分割されなかったため、誤った推定がなされる原因となった。これに対処するため、独立式の付属語については文節内においてもアクセント句を切るよう新たにルールベースの処理を追加した。既存の資料において、これらの付属語のふるまいを網羅的に収めたものは管見の限り見当たらなかったため、当該方言母語話者による内省調査を実施し、随時データを更新することで対応を図っている。

第二に、方言テキストへの形態素解析対応に向けた、方言固有語彙の辞書登録である。解析に必要となる生起コストや連接コストなどの素性については、その転訛や音韻変化の元となった標準語の語彙から借用することで、再計算を行わずとも運用できるよう、当該方言の低資源性を考慮したうえで登録を進めていく。

おわりに

本稿では、鹿児島市方言を対象としたアクセント推定システムの構成と、初期検証に基づく今後のシステム拡張の方針について述べた。今後はシステムの更なる推定精度向上を目指しつつ、類似の体系を持つ他の日琉諸方言を対象とした実装についても検討したい。

参考文献

[1] Kiyoshi KURIHARA, Nobumasa SEIYAMA, and Tadashi KUMANO. Prosodic features control by symbols as input of sequence-to-sequence acoustic modeling for neural tts. *IEICE Transactions on Information and Systems*, Vol. E104.D, No. 2, pp. 302–311, 02 2021.

[2] 木部暢子. 西南部九州二型アクセントの研究. 勉誠出版, 2000.

[3] 伝 康晴, 小木曽 智信, 小椋 秀樹, 山田 篤, 峯松 信明, 内元 清貴, 小磯 花絵： 「コーパス日本語学のための言語資源：形態素解析用電子化辞書の開発とその応用」, 日本語科学, Vol.22, pp.101-123 (2007).

[4] 平山輝男. 全国アクセント辞典. 東京堂, 1960.

[5] Ryosuke Sonobe, Shinnosuke Takamichi, and Hiroshi Saruwatari. Jsut corpus: free large-scale japanese speech corpus for end-to-end speech synthesis, 2017.

日本語学会 2026 年度春季大会 ワークショップ

BCCWJ2の構築を通してコーパスの新展開を考える

山崎 誠、呉 寧真、近藤 明日子、落合 哉人、小木曽 智信（国立国語研究所）

はじめに：ワークショップの趣旨

国立国語研究所では、2025 年度から文化庁の委託事業「信頼できる言語資源としての現代日本語の保存・活用のためのデジタル基盤整備事業」を受託し、2011 年に公開した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ1）を拡張する「BCCWJ2」を構築するプロジェクトを推進中である。BCCWJ2 は既公開の BCCWJ1 との連続性を保ちつつ、より効率的な構築を目指している[1]（山崎・髙橋・小木曽 2025）。本発表では、BCCWJ2 を構成するレジスターのうち書籍部分について BCCWJ1 との異同を示し、検索のデモンストレーションを行う。また、新たに追加するレジスターとして教科書、SNS についてその概要を報告する。教科書は教育政策に貢献するコンテンツであり、SNS は現代の書き言葉の一角を占める重要な資料ある。また、BCCWJ2 の構築を踏まえて、既公開の BCCWJ1 についても形態論情報の修正を行い、両者を統合した利用に備えていることを報告する。

このワークショップは以下の 4 つの発表と質疑の時間で構成される。

(1) 出版書籍データの設計方針（山崎 誠・呉 寧真）
(2) 教科書レジスターの設計：複数時期の教科書の比較分析の可能性（近藤 明日子）
(3) SNS データの収集とコーパス化：データの特徴と整備をめぐる論点（落合 哉人）
(4) BCCWJ1 形態論情報の更新（小木曽 智信）
(5) 質疑応答・ディスカッション

BCCWJ2 にいたる背景

BCCWJ1 は現代日本語の書き言葉を対象に 2006～2010 年度にかけて構築され、主に 1976～2005 年のデータを収録している（書籍は図書館書籍が 1986～2005 年、出版書籍が 2001～2005 年）。そのため最新でも今から約 20 年前の資料に限られ、新語や新用法の情報が欠落している。これは日本語研究者のみならず、日本語学習者や産業界にとっても最新の使用実態を把握できないという点で社会的損失となっている。文化審議会国語分科会国語課

[1] 山崎誠、髙橋雄太、小木曽智信（2025）「「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の拡張とその設計」日本語学会 2025 年度春季大会（2025 年 5 月 11 日）

題小委員会（第 60 回、2023 年 7 月 21 日開催）や文化審議会国語分科会（第 85 回、2023 年 9 月 29 日）においても BCCWJ の拡張の必要性が訴えられた。

構築環境の変化

コーパスの構築環境で BCCWJ1 のときと大きく異なっているのは、著作権法の改正による権利制限の緩和である。2018 年の著作権法改正によって、思想や感情の享受を目的としない利用であれば、必要な範囲で許諾なく利用することが可能となった（第 30 条の 4）。ただし、情報解析結果の提供については「軽微利用」とすることとなり、検索結果の文脈の長さが制限された（第 47 条の 5）。しかし、許諾が不要ということはコーパスの構築にとって大きなメリットとなったことは確かであり、BCCWJ2 も比較的円滑な構築体制が取れることになった。

ロードマップ

令和 7 年度に補正予算が付いたことにより、当初の計画より外注部分を前倒しで実施している。

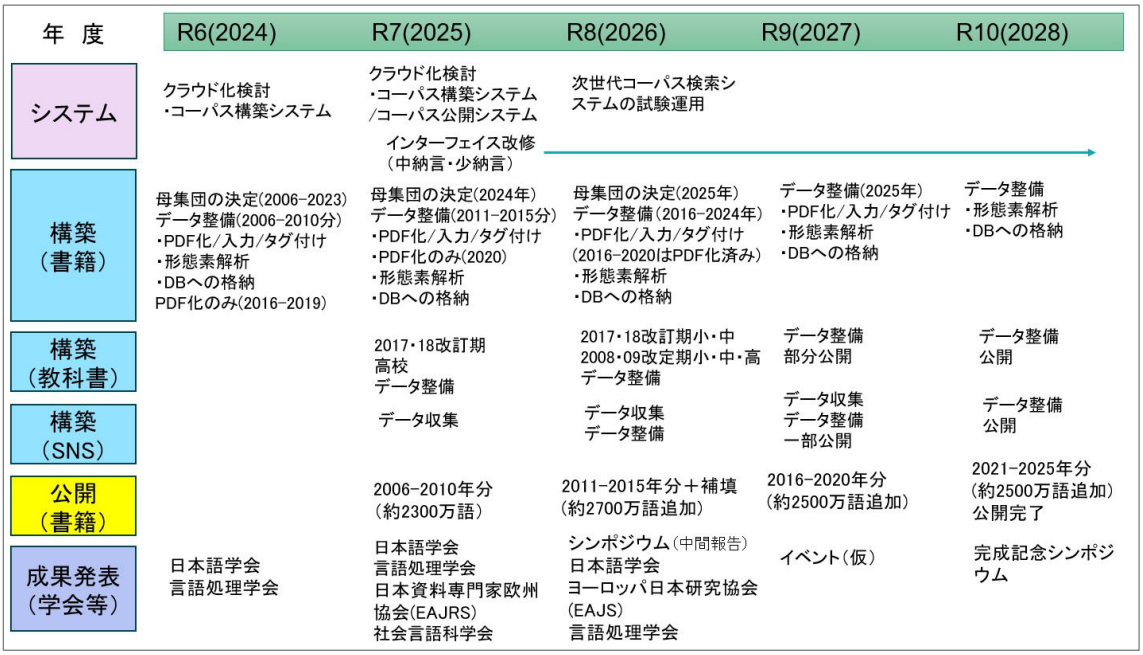


図1：BCCWJ2ロードマップ（2026.4.6現在）

おわりに

BCCWJ2 は 2026 年 3 月 24 日に最初の公開を行った。今後、毎年追加公開を行い、2028 年度末には完成する予定である。また、今後、データ全体の公開（有償）も予定している。

出版書籍データの設計方針

やまざきまこと　ご　ねいしん
山崎 誠 ・呉 寧真（国立国語研究所）

はじめに

本発表では、BCCWJ2 における出版書籍データの設計方針について報告する。BCCWJ2 は、既公開の BCCWJ1 との連続性を保ちつつ、より効率的かつ持続的な構築を可能にすることを目指している。書籍レジスターについては、2006 年から 2025 年までに刊行された出版書籍を対象とし、各年 500 万語を目標として、日本十進分類法（NDC）に基づく層別サンプリングを行っている。年ごとに母集団を設定し、書籍レベルで標本を抽出することにより、刊行年ごとの変化を追跡できる構成としている。また、BCCWJ1 の基本的な利用枠組みを継承しながら、作業コストの軽減と検索実用性の向上を重視して、設計・仕様の簡素化を進めている。形態論情報については、短単位に最新版の UniDic を用い、長単位についても新しい解析環境を導入することで、BCCWJ1 との連続的な活用基盤を整備している。

BCCWJ1 との相違

BCCWJ2 は BCCWJ1 の設計をできるだけ踏襲する方針であるが、都合により設計方針を変えた部分がある。以下、主なものについて説明する。

BCCWJ1 との相違点の 1 つは、サンプリング方法の見直しである。BCCWJ1 の出版書籍では、母集団全体の文字数を推計し、それに基づいて構成比を求め、最終的には文字単位で無作為抽出を行うという方式が採られていた。これに対し BCCWJ2 では、書籍 1 冊を抽出単位とする方式へ改めた。すなわち、各年の書誌データから NDC 別に必要冊数を算出し、その冊数に基づいて標本を選定する。これにより、冊・ページ・文字という複数段階の抽出を経る必要がなくなり、サンプリング手順は大幅に簡素化された。

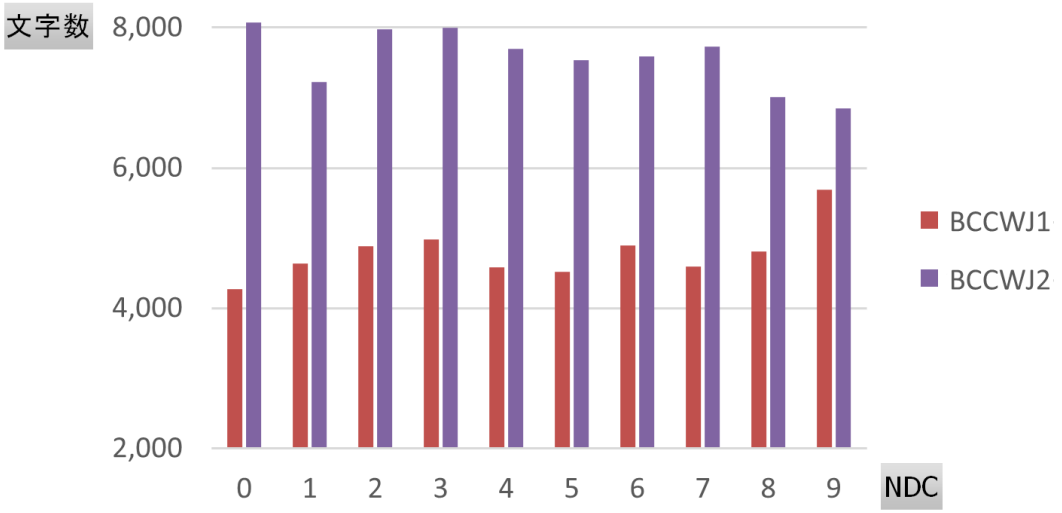


図 1：NDC 別のサンプルの長さのグラフ（BCCWJ1 と BCCWJ2）

あわせて、1 つのサンプルからより多くの語数を効率的に確保するため、ランダムに定めた基準ページの前後 10 ページずつの範囲から可変長サンプルを取得する設計とした。その結果、1 サンプルあたりの長さは BCCWJ1 より大きくなっている（図 1 参照）。

2 つ目の相違点は、タグ設計の簡素化である。BCCWJ1 では、文書構造や表記情報を含めて詳細なタグ体系が設計されていたが、BCCWJ2 では、実際の利用を踏まえてタグの種類を絞り込み、「中納言」での検索・表示に直接関係するものを優先して付与する方針を採った。あまり使われていないタグは採用せず、検索実用性に寄与する情報に重点化することで、構築における負担を抑えつつ利用価値を高めることを目指した。この設計思想は、BCCWJ1 を全面的に置き換えるものではなく、継承すべき枠組みを残しながら、運用上必要な簡素化を施すものである。

3 つ目の相違点は、固定長サンプルと可変長サンプルの関係の明確化である。BCCWJ1 では、1000 字の固定長サンプルを確保するために、本来の可変長サンプルの範囲を超えて文字列を取得する場合があり、その結果、固定長サンプルが可変長サンプルの内部に必ずしも含まれないことがあった。これに対して BCCWJ2 では、この方式を改め、固定長サンプルが必ず可変長サンプルに含まれるよう設計している。これにより、サンプル間の関係がより明確になり、検索対象の整理も簡潔になる。すなわち、BCCWJ1「中納言」の検索対象で指定する「固定長」「可変長」「両方」という区分のうち、「両方」は独立した選択肢としては不要となる。BCCWJ2 では固定長が必ず可変長に包含されるため、両方を対象とした検索は可変長を選択すれば足りるからである。なお、固定長サンプルは来年度の公開を予定している。

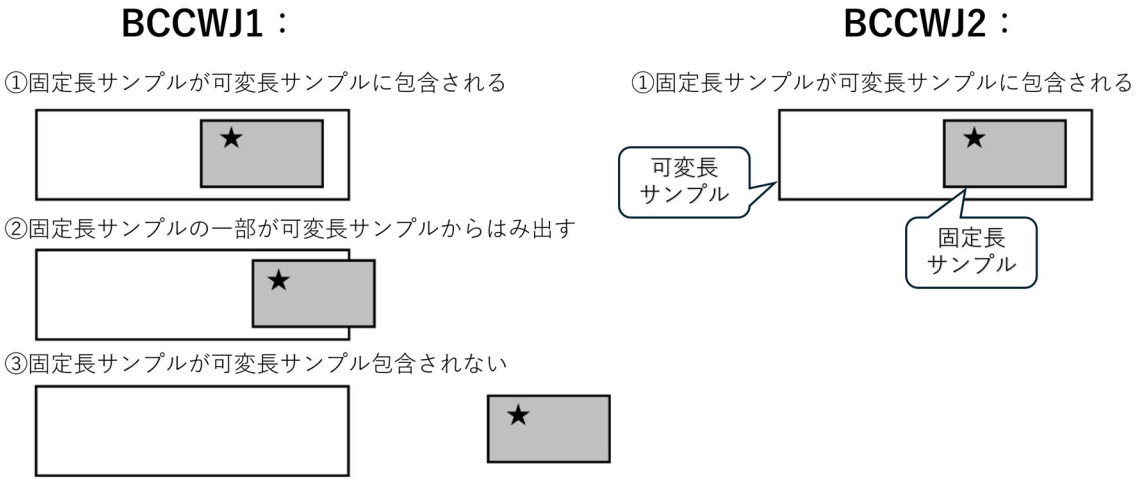


図 2：固定長サンプルと可変長サンプルのパターン（BCCWJ1 と BCCWJ2）

メタ情報の整備

メタ情報の面では、新たに NDLC 分類および ISBN 情報を導入した点が挙げられる。NDLC は国立国会図書館独自の分類であり、NDC と併用することで、より精緻な資料把握が可能になる。また、ISBN は外部書誌情報との連携や資料同定に有効であり、検索結果の活用範囲を広げる。一方で、BCCWJ1 で扱われていた情報のうち、C コード（日本図書コ

ード）や著者性別については見直しを行った。C コードは、提供する団体から、表示は良いがダウンロードは不可という条件が示されたため、収録を断念した。著者性別については、BCCWJ1 のときは著作権処理の過程で著者に性別や生年代を尋ねており、その情報が利用できたが、BCCWJ2 では著作権処理を行わないため、情報が得られなかった。なお、典拠データである国立国会図書館の JAPAN/MARC(A)には性別の情報が含まれていない。

著作権の処理

著作権処理については、2018 年の著作権法改正を前提として構築を行っている。著作権法第 30 条の 4 で規定されている「著作物に表現された思想又は感情の享受を目的としない利用」の規定により、著作権者の承諾なしにコーパス構築のための資料の電子化が一定の条件のもとで可能となる。また、第 47 条の 5「電子計算機による情報処理及びその結果の提供に付随する軽微利用等」の規定により、「中納言」のような検索サービスにおいて、情報処理結果の提供に付随する形で検索結果表示が可能となる。

これらの権利制限規定により、BCCWJ1 構築時に比べて著作権処理のコストは大きく低減し、その分をデータ整備や解析精度向上に振り向けることが可能になった。

ただし、個別の許諾取得を前提としない設計には明確な制約がある。著作権情報センター附属著作権研究所（2020）によると、書籍検索サービスにおける「著作物」は、短歌・俳句・短詩集等の書籍を除き、原則として書籍単位で考察することが適当であると整理されている（P.15）。その一方で、短歌・俳句等の短い作品では、検索結果の表示によって作品の全部またはほとんど全部が示され、閲読・鑑賞の目的を直接達成してしまうおそれがある。また、辞典類についても、見出し語や説明が短く独立性の高い単位から成るため、検索結果表示がそのまま閲読・鑑賞という享受目的を直接満たしてしまうおそれがある（P.18）。こうした点を踏まえ、BCCWJ2 では歌集・句集・辞典類を収録対象外とする。加えて、一般の書籍中に短歌・俳句の引用が含まれる場合には、その引用作品の著作権が存続しているかどうかを基準として処理し、保護期間内、すなわち原則として著作者の死後 70 年以内にある作品については、利用が第 30 条の 4 の範囲を逸脱するおそれがある場合には、当該箇所を削除する方針である。

おわりに

以上の方針のもとで整備を進めてきた BCCWJ2 のうち、2006〜2010 年刊行の書籍サブコーパス約 2300 万語を 2026 年 3 月 24 日に「少納言」および「中納言」で公開した。現段階では可変長サンプルのみの公開であるが、BCCWJ1 と連続した検索環境の中で、より新しい時期の出版書籍データを利用できるようになっている。BCCWJ2 は、BCCWJ1 の基本理念を継承しつつ、サンプリング、タグ設計、メタ情報、著作権処理の各面で現実的な再設計を行った拡張版として、現代日本語書き言葉研究の通時的・多角的な分析基盤としての発展が期待される。

文献

著作権情報センター付属著作権研究所（2020）『書籍検索サービスに係るガイドラインに関する調査研究：報告書』

教科書レジスターの設計：
複数時期の教科書の比較分析の可能性

近藤 明日子（国立国語研究所）

はじめに

本発表では、BCCWJ2 に収録予定の教科書レジスターについて、まずその設計の概要を報告する。次に、その活用例として、中学校教科書を対象に複数の使用年度の語彙を比較し、学習指導要領の改訂と教科書の語彙の変化との関係について考察するとともに、本コーパスの利用可能性について検討する。

教科書レジスターの設計

教科書レジスターに収録する資料は、日本の小学校・中学校・高等学校で使用される検定教科書である。検定教科書は、特に義務教育段階の小学校・中学校において、ほぼすべての国民が接触する資料であり、児童・生徒の言語能力の発達過程において重要な役割を担うと考えられる。

そうした検定教科書の重要性を踏まえ、BCCWJ1 では、特定目的サブコーパス内の教科書レジスターとして小・中・高校の検定教科書が収録された。これは、文部科学省科学研究費特定領域研究「代表性を有する大規模日本語書き言葉コーパスの構築 : 21 世紀の日本語研究の基盤整備」（2006～2010 年度）における研究グループ（言語政策班）で構築された「教科書コーパス」（田中・近藤・平山 2011）からサンプリングしたデータを収録したものである。「教科書コーパス」には、1998～1999 年改訂の学習指導要領のもとで 2005～2007 年度に使用された小・中・高校の教科書から各教科・各学年につき占有率の最も高い 1 種ずつ、計 144 冊の全文が収録された。ただし、「教科書コーパス」全体の公開は、当時の著作権法上困難であったため、公開は上述の BCCWJ1 における一部データおよび語彙表（田中・近藤 2011a, 2011b）に限定された。

しかし、2018 年の著作権法改正により、「教科書コーパス」全体の公開が可能となった。そこで、BCCWJ2 では「教科書コーパス」全体を収録するとともに、その後の 2 回の学習指導要領改訂期に使用された教科書についても、「教科書コーパス」の設計方針にならいコーパス化し[1]、併せて 3 期分を「教科書レジスター」として公開する計画とした。教科書レジスターに収録する教科書の使用年度および冊数を、学習指導要領改訂期ごとに示したものが表 1 である。

このように、教科書レジスターは、小・中・高校の 3 校種における全教科・全学年の教科書 1 種を対象とし、学習指導要領改訂 3 期分を収録するものであり、延べ語数約

[1] なお、2008～2009 年改訂期の中学校教科書については、河内昭浩氏（群馬大学）が作成されたデータ（JSPS 科研費 JP25381226 助成）を利用してコーパス化するご許可をいただいた。ここに記して河内氏に深く感謝申し上げる。

表 1　BCCWJ2 教科書レジスターに収録する教科書の使用年度および冊数

学習指導要領改訂期	使用年度（上段）/ 冊数（下段）		
	小学校	中学校	高等学校
1998～1999年	2006年度 59冊	2005年度 28冊	2006年度 57冊
2008～2009年 （2015年一部改正）	2011，2018年度 63冊	2014，2019年度 29冊	2012～2015年度 55冊
2017～2018年	2025年度 63冊	2025年度 29冊	2025年度 57冊

2000 万語（記号類を含む推計値）の規模となる見込みである。公開は 2028 年度末を予定している。このように複数の校種・教科・時期にわたる検定教科書の全文を収録したコーパスの公開は前例がない。教科書レジスターの公開により、教科書で使用される日本語の特徴や、学習指導要領改訂に伴う教科書の変遷過程の解明が進むとともに、教科教育研究や言語政策の策定等における基盤データの提供が期待される。

複数時期の教科書の語彙の比較

前述のとおり、教科書レジスターの特徴の一つとして、複数時期の教科書の間で比較分析が可能な設計となっている点があげられる。ここではその分析例として、1998～1999 年改訂期と 2008～2009 年改訂期の中学校の教科書の語彙を比較する[2]。

2008～2009 年改訂では、それまでのいわゆる「ゆとり教育」を見直し、授業時数を増加し、基礎的な知識・技能の習得、それらを活用した課題解決能力および主体的に学習に取り組む態度の育成、生徒の言語活動の充実等が目指された（文部科学省 2008）。このような改訂内容が、教科書の語彙にどのように反映されているのか検討する。

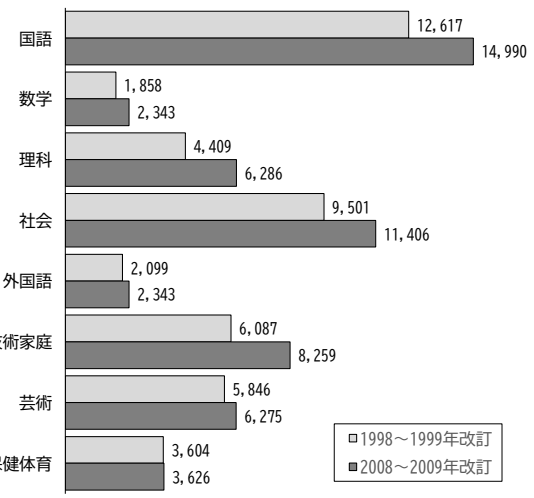


図 1　1998-1999 年改訂期と 2008-2009 年改訂期における中学校教科書の異なり語数の比較

最初に、各教科（道徳を除く）[3]の異なり語数（記号類は除く）を 2 期間で比較する（図 1）。すべての教科において 2008～2009 年改訂期のほうが異なり語数が多い。増加幅は、理

[2] 本分析で使用するコーパスデータは構築中のものであるため、コーパス公開時のデータによる分析とは結果が異なる可能性がある。

[3] ここでいう教科とは「教科書コーパス」で設定する教科分類に基づいており、学習指導要領における教科とは異なる。「教科書コーパス」の教科分類については田中・近藤・平山（2011）を参照のこと。

科（1.43 倍）が最も大きく、技術家庭（1.36 倍）、数学（1.26 倍）がこれに続く。この増加は、学習指導要領改訂による授業時間数の増加に伴い、学習内容が拡充されたことに対応するものと考えられる。

次に、1998～1999 年改訂期の教科書と比較して、2008～2009 年改訂期の教科書で有意に高頻度に出現する語（特徴語）を抽出し、その性質を検討する。特徴語の抽出には対数尤度比を指標として用いた[4]。各教科の特徴語を整理し概観すると、主な分類として以下のものが確認された。

(1) 増加した教科の学習内容に関連する語
調査・度数・標本・分布（数学）、イオン・仕事・塩化・遺伝（理科）、パレスチナ・気温・イスラエル（社会）、育成・技術・飼育・デジタル・地域（技術家庭）、色彩・速度・材料・特徴（芸術）、スポーツ・大会・国際（保健体育）
(2) 学習の見通しをたてたり学習内容を振り返ったりする活動に関連する語
目標・確認・繋げる・効果・整理（国語）、広げる・振り返り（数学）、発展・振り返る（理科）、発展・参考（技術家庭）、学び・狙い（芸術）
(3) 言語活動に関連する語
読み・説明・根拠・読み取る（国語）、話し合う・伝える（数学）、質問・書き取る（外国語）、説明・上げる（保健体育）
(4) 課題解決的な学習や探究活動に関連する語
仮説（社会）、考える・工夫（芸術）、探究（保健体育）

このことから、(1)の教科の学習内容に関連する語だけでなく、(2)～(4)の学習方法・活動に関連する語もまた、学習指導要領の改訂に伴い変化することが確認された。

おわりに

以上、BCCWJ2 教科書レジスターの設計の概要について述べるとともに、本コーパスを利用した複数時期の教科書の比較分析を試みた。暫定的なデータに基づく簡易的な分析ではあるが、本コーパスが日本語研究に加えて教育研究等の他分野にも資する可能性を示す結果が得られた。今後は公開に向けてコーパスデータの整備を進め、さらなる資料性の向上を図りたい。

参考文献

田中牧郎・相澤正夫・斎藤達哉・棚橋尚子・近藤明日子・河内昭浩・鈴木一史・平山允子（2011）『言語政策に役立つ，コーパスを用いた語彙表・漢字表等の作成と活用』国立国語研究所.
田中牧郎・近藤明日子（2011a）「教科書コーパス」田中・相澤・斎藤ほか（2011）pp.55-63.
田中牧郎・近藤明日子（2011b）「学校・社会対照語彙表」田中・相澤・斎藤ほか（2011）pp.69-74.
田中牧郎・近藤明日子・平山允子（2011）「教科書コーパス」田中・相澤・斎藤ほか（2011）, pp.7-54.
文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 総則編』

[4] 対数尤度比による特徴語抽出は「教科書コーパス」語彙表でも利用されている。その方法については、田中・近藤（2011a）を参照のこと。

SNS データの収集とコーパス化：
データの特徴と整備をめぐる論点

落合（おちあい） 哉人（かなと）（国立国語研究所）

はじめに

本発表では、BCCWJ2 における SNS (Social Networking Service) データの取り扱いについて報告する。BCCWJ1 では、「特定目的サブコーパス」の主要データとして、2008 年時点の Yahoo!ブログおよび Yahoo!知恵袋の投稿が収録されている。それらは言語研究において、書きことばでありながら話しことば的な文体を持つテキスト（またはインターネット上に特有の言語使用を示す資料）としてこれまで扱われてきた。一方、直近 15 年あまりにおいてそのようなインターネット上の書きことばは、主にスマートフォンや SNS で産出されるものへと変化している。そこで BCCWJ2 では新たに、Bluesky をはじめとする公開型 SNS の投稿と、LINE における非公開型の発信の収録を行う。本発表では、データ収集の進捗や整備上の課題を述べるとともに、文体的特徴（縮約形）に関する分析を行う。

データの収集

総務省情報通信政策研究所(2025)では、LINE および動画共有サイト YouTube を除くと、2024 年時点の全年代で特に利用者率が高い SNS は Instagram (52.6%)と X (43.3%) であることが報告されている。しかし、Instagram は基本的に画像や動画の投稿を主体とする場であり、また、文字を基調とする X（旧 Twitter）の投稿も、データの再配布に関する制約が現時点で極めて大きい。そこで BCCWJ2 では、X に類似したサービスであり、データ公開の可能性が確保されている Bluesky の投稿を公開型 SNS のデータとして収める。具体的な投稿の集め方としては、日本語による投稿として判定された（lang:ja の属性を持つ）最新の投稿を API (Firehose) を通じて継続的に取得し、10 分刻みで保存することとした。また、比較対象（ないしは第 2 候補）として同じく公開型 SNS である Misskey についても同様のデータ収集の仕組みを構築した。いずれも 2025 年 4 月を起点として継続的に運用を進めており、2026 年 1 月末日時点で約 1.2 億投稿が保存できている。

一方で、LINE のデータは、個人間のやりとりを対象とするため、「首都圏・20 代」「首都圏・30 代」「関西圏・20 代」の 3 つのグループについて提供者を募り、すべての参加者の研究利用・公開の同意を得た上で収集を進めている。具体的なデータの集め方としては、提供者経由で他の参加者を紹介してもらい、個々に同意の取得を行うとともに、提供者からトーク画面のスクリーンショットを送付してもらう方法を採用した。LINE については、2026 年 3 月時点で、3 グループ合わせて計 120 談話、約 5 万発信が収集できており、そのうち「首都圏・20 代」のデータ約 1 万発信の書き起こしデータを先行して整備した（落合 2025b）。BCCWJ2 では、個人を特定可能な情報をマスキングしたスクリーンショットを語彙等の検索結果とあわせて表示できる仕組みを構築する方針である。

SNS データの整備をめぐる論点

上述したデータのうち、特に API を介して取得した公開型 SNS の投稿をコーパスとして整備するにあたっては、データをどのような規模で整理し、どのような情報を付与するかが重要な論点となる。落合(2026)では、BCCWJ1 における Yahoo!ブログおよび Yahoo!知恵袋と同様の規模を想定するにしても、投稿の種類（例：ポスト、リプライ、リポスト）や時間帯、ユーザーのバランスを考慮する必要があることが指摘されている。また、ユーザーの ID や添付された画像・動画に関して、どの程度の情報を公開するか権利上の問題から慎重な判断が求められることが述べられている。

本発表では、それらの論点に加えて、形態素解析における未知語の問題に注目する。SNS データには、現時点で UniDic 等の辞書に登録されていない語や適切に解析できないものが非常に多く含まれており、その扱いはコーパス整備の過程において大きな課題となる。

たとえば、2025 年 4 月に取得した Bluesky の投稿データから 2 ファイル（2025 年 4 月 1 日 22 時 10 分台および 2025 年 4 月 28 日 22 時 0 分台）をランダムに取り上げて解析したところ、未知語である可能性がある文字列はことなりで約 7,500 件抽出された。そのうち半数は絵文字や外国語に由来する文字、記号類のいずれかであったが、もう半数には「ブルスカ」「立ち絵」「スパコミ」「鳴潮」「ポケ通」「ポケ森」「サムネ」「ポケポケ」「ついった」「フォロバ」等の UniDic 未登録語が含まれていた（表 1）。その多くは（固有）名詞が中心であり、短期間で消滅することから、すべてを辞書に登録することが現実的ではない可能性もある。一方、一部では表 1 に含まれる「いいい」（例：一番付き合いながいのにいいい）のように表記に起因して解析できていないものもあり、包括的にバリエーションを把握することが今後の現代語の文字表記を把握する上でも重要であると思われる。

表 1：未知語候補として抽出されたもののうち、頻出する形式上位 9 件

形式	出現数
ブルスカ	14
リヨ	14
スパコミ	13
ですー	11
いいい	10
イファ	9
タオバ	9
フォロバ	9
みこち	9

ケーススタディ

本節では、BCCWJ2 に収めるデータのうち、Bluesky の投稿の一部（2025 年 4 月分）を扱うケーススタディとして、複合動詞縮約形（以下、「縮約形」）の使用実態を観察する。

縮約形の分布については、小磯(2022)が、BCCWJ1（白書・書籍・Yahoo!ブログ・小説会話文）、『日本語話し言葉コーパス（CSJ）』（学会講演・模擬講演）、『日本語日常会話コーパス（CEJC）』（日常会話）を対象として複数の形式の出現傾向を比較している。その結果、書きことばと話しことばの間で縮約形の現れやすさが異なるだけでなく、それぞれの内部でも談話環境によって分布に差があることが報告されている（本発表と関連する項目を表 2 に示す）。また、落合(2025a)は、携帯メール、LINE、X における発信・投稿を対象として、「ている」の形態ごとの割合を観察している。その結果、どの環境でもテルが優勢である一方、X ではテイルが一定程度（約 2 割）用いられることが示されている。

表 2：小磯(2022)で報告される縮約系の平均的な割合（同論，表 1 を改変）

	書きことば			話しことば			
	白書	書籍	ブログ	小説 会話文	学会 講演	模擬 講演	日常 会話
テク（ていく）	0%	1.7%	3.2%	13.5%	6.4%	20.9%	58.7%
テル（ている）	0%	5.9%	37.9%	52.9%	20.2%	53.2%	97.3%
チャウ（てしまう）	0%	6.3%	33.8%	39.3%	12.3%	32.5%	94.7%

本発表では、小磯(2022)の調査対象のうちテク・テル・チャウを取り上げ、元となる「ていく」「ている」「てしまう」の Bluesky における形態ごとの現れ方を観察した（表 3）。その結果、「ていく」については、テクの割合が 20%以下であり、小磯(2022)で報告される模擬講演での出現傾向と同程度であることが確認された。また、「ている」については、落合(2025a)における X の観察と同様、テイルが 2 割程度を占める結果となった。さらに、「てしまう」の現れ方としては、チャウとテシマウがほぼ同程度の割合で観察され、小磯(2022)で対象とされたいずれの談話環境とも一致しない傾向が見られた。これらの結果から、Bluesky における平均的な文体は、（リプライを含むものの）モノローグとしての性質を持ちつつも講演とも異なる特徴を有することが示唆される。

表 3：Bluesky における「ていく」「ている」「てしまう」の形態ごとの出現傾向

	形態	**粗頻度**	**割合**
「ていく」	テイク	156,446	82.8%
	テク	32,610	17.2%
「ている」	テイル	919,154	24.9%
	テル	2,748,492	74.5%
	トル	21,816	0.6%
「てしまう」	テシマウ	245,616	49.7%
	チャウ	239,268	48.4%
	チマウ	9,795	2.0%

おわりに

本発表では、BCCWJ2 における SNS データの収集および整備の状況を示し、あわせて縮約形に着目したケーススタディの結果を示した。今後ともデータの収集を進めるとともに、より良い整備のあり方を検討し、コーパスとしての利用可能性を高めていく必要がある。

文献

落合哉人(2025a)「「打ちことば」の特質：分類と実態の解明」『日本語学』44(2), pp.14-25.
落合哉人(2025b)「『NINJAL-LINE コーパス（仮）』の設計と公開」言語資源活用ワークショップ 2025 発表資料.
落合哉人(2026)「BCCWJ2 における SNS データの収録：何を、どのように扱うべきか」『社会言語科学会第 50 回大会発表論文集』pp.323-326.
小磯花絵(2022)「書き言葉・話し言葉における縮約形の実態：コーパスに基づく分析を通して」窪薗晴夫・朝日祥之(編)『言語コミュニケーションの多様性』pp.61-78. くろしお出版
総務省情報通信政策研究所(2025)「令和 6 年度 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」(https://www.soumu.go.jp/main_content/001017241.pdf)〈2026 年 4 月 2 日閲覧〉

BCCWJ1 形態論情報の更新

小木曽 智信（国立国語研究所）

はじめに

2011 年に公開された BCCWJ1 は限られた時間の中で整備されたものであり、いくつか不十分な点があった。そのため、文境界の修正やジャンル情報・話者情報の充実などさまざまな更新が公開後も加えられてきた。しかし、コーパス利用上とくに重要な形態論情報については更新がなされてこなかった。これは、修正が広範囲に及び容易に行えないこと、過去の研究の再現性を維持するために安易に(また頻繁に)修正することができないこと、等が理由であった。今回、BCCWJ2 を構築・公開するにあたり、BCCWJ1 についても形態論情報の大規模な修正を行うこととした。その目的は、①BCCWJ2 において形態論情報の規定の一部を改めたため、BCCWJ1 についても同じ規定にあわせること、②BCCWJ1 非コアデータに多く含まれている誤りを可能な限り修正して BCCWJ2 と同程度の精度に高めること、である。コアデータについて①の修正を行うとともに、非コアデータについて①と②の修正を行っている。本発表では現時点での修正状況にもとづき、精度向上の見込みについて報告する。

BCCWJ1 の解析精度

既公開の BCCWJ1 の長単位・短単位解析は、「解析精度 98%以上（コアデータについては 99%以上）を目標」としており、それを達成している（小椋・冨士池）。しかし人手による十分な修正を経ていない非コアデータの精度は、形態素解析の性能に左右される。上記の数字はコーパス全体の精度であって、レジスターごとに差があり、サンプル単位で見ればこの精度を下回るものも少なくない。非コアデータの精度は、おおむね当時の形態素解析用辞書 UniDic と MeCab を用いた解析精度に近いと考えられる（表 1）。BCCWJ1 非コアでも限定的な人手修正を加えて精度を高めている一方で、この表の解析精度は未知語が含まれないテキストを対象としており実際の BCCWJ1 テキストの解析精度よりは高い数字となっているからである。

表 1　BCCWJ1 公開時の UniDic の解析精度（※小木曽 2014 の図 6 を改変）

レジスター	OW:白書	PB:書籍（文学）	PB:書籍（文学以外）	PN:新聞	OC:ヤフー知恵袋
境界	0.99923	0.99758	0.99749	0.99635	0.99468
品詞	0.99569	0.98866	0.98960	0.98912	0.98411
語彙素	0.99385	0.98574	0.98645	0.98644	0.98045

たとえば OC の語彙素認定で 98%の解析精度は、OC レジスター全体の約 1,200 万語（記号を含む）のうちに 24 万以上の誤りを含むということであり、大幅な改善の余地がある。

形態論情報規定の変更による修正

BCCWJ2 の構築にあわせて、これまでに報告された短単位規定の疑問点・問題点について、形態論情報をより利用しやすいものとするため、定期的に会議を開いて検証を進めてきた。規定の体系的な変更から個別の語の取り扱いまで問題は多岐にわたるが、ここでは一部の比較的分かりやすい変更について例を挙げる。BCCWJ2 でははじめから新しい規定に基づいて情報を付与している。

⑴ 普通名詞から固有名詞を分出
野球チーム名の「タイガース」「ドラゴンズ」「ドジャース」などは、「タイガー」「ドラゴン」「ドジャー」等の異語形として普通名詞として扱われてきたが、固有名詞として認定した。「アサヒ」「Ｗｉｎｄｏｗｓ」などの企業・ブランド名も同様に扱った。

⑵ 固有名詞として一語認定
「ニンテン｜ドー」「Ｙｏｕ｜Ｔｕｂｅ」「ｉ｜Ｐｈｏｎｅ」など無理に構成要素等に分割していた固有名詞を一語として認定した。

⑶ 接尾的要素の見直し
極めて生産性の高い「～屋」「～側」等の名詞を接尾辞（接尾的要素）として認定し、前接する要素と分割した。これは際限ない見出し語の増殖を避けるためである。

こうした変更にあわせて BCCWJ1 についても既存の語について全面的に修正を行っている。なお、短単位を付与するのに用いる UniDic は Ver.2025.12 よりこの新規定を取り入れたものになっており、今後も修正を継続する予定である（国立国語研究所・小木曽 2025）。

解析エラーの修正と規模

BCCWJ2 の構築と並行して、短単位規定の変更にともなう形態論情報の修正とあわせて、非コアデータの解析エラーについても可能な限り修正を行っている。修正作業は必ずしも体系的に進めているわけではないが、新規の見出し語登録による形態論情報の更新、誤解析パターンの一括修正、既知の解析エラーの個別修正などの形で行っている。

BCCWJ1 に対して現時点までに修正を行った箇所をレジスターごとの語数とともにまとめたのが次ページの表 2 である。これまでに約 98.8 万箇所に何らかの修正を行っている。この中には規定に合わせて変更を行っただけのものなど、精度向上に寄与しないものも含まれている。仮定を重ねることになるが、BCCWJ1 の解析精度が表 1 に示した水準と同等であり、さらに今回の更新のうち半数程度が正解への修正に寄与していたとすれば、計算上 BCCWJ1 全体の精度は 99%を超える可能性がある。より正確な精度は今後ランダムサンプリング調査で確認する予定である。

今後も BCCWJ2 構築と並行して BCCWJ1 の形態論情報の修正を継続し、BCCWJ2 全体の公開時には BCCWJ1+2 全体の形態論情報が、同一の規定にもとづいた同程度の精度となるように整備を進める予定である。

長単位データについて

以上は短単位に関する更新であるが、長単位データについても触れておきたい。長単位は短単位を組み上げて生成されるものであるため、短単位に誤りがあればほぼ長単位も誤りとなる。また、長単位解析器の精度にも限界があり、BCCWJ1 構築時には非コアデータ

の長単位付与は必ずしも十分な精度ではなかった。しかし、現在は新しい長単位解析器 Monaca によってより高い精度での長単位が可能になっており（尾崎ほか 2026）、長単位の精度向上も見込むことができる。

表 2　BCCWJ1 のレジスター別の語数と更新箇所（記号等を含む）

レジスター	公開時語数	現在語数	更新語数	更新割合
LB:　図書館・書籍	35732428	35729139	224570	0.629%
OB:　特定目的・ベストセラー	4430533	4430608	29615	0.668%
OC:　特定目的・知恵袋	12018612	12011912	87274	0.727%
OL:　特定目的・法律	1206077	1206053	30116	2.497%
OM:　特定目的・国会会議録	5596623	5596513	24690	0.441%
OP:　特定目的・広報誌	4620337	4620075	24964	0.540%
OT:　特定目的・教科書	1120114	1120784	27405	2.445%
OV:　特定目的・韻文	233429	233362	3385	1.451%
OW:　特定目的・白書	5640348	5640047	41603	0.738%
OY:　特定目的・ブログ	12984635	12968324	166354	1.283%
PB:　出版・書籍	33579523	33571584	218242	0.650%
PM:　出版・雑誌	5332088	5329722	63097	1.184%
PN:　出版・新聞	1606217	1606080	46442	2.892%
全体	124100964	124064203	987757	0.796%

おわりに

BCCWJ2 の構築では、かつての構築時に十分な修正が行えなかった BCCWJ1 非コアデータについても形態論情報の更新を行い、BCCWJ1+2 全体で、量のみならず質の面でも、今以上に使いやすいコーパスとするよう準備を行っている。今後も更新を継続し、公開に向けて整備を進める予定である。

参考文献

小木曽智信（2014）「形態素解析」『講座日本語コーパス 2 書き言葉 コーパス―設計と構築―』朝倉書店

小椋秀樹・冨士池優美（2013）「4 章 形態論情報」『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引 第 1.0 版』 https://doi.org/10.15084/00003227

尾崎太亮・浅田宗磨・古宮嘉那子・近藤明日子・小木曽智信（2026）「Monaka による BCCWJ2 における長単位情報の付与支援」『言語処理学会第 32 回年次大会発表資料集』 https://www.anlp.jp/proceedings/annual_meeting/2026/pdf_dir/Q2-9.pdf

国立国語研究所（言語資源開発センター/「語彙資源」プロジェクト/「BCCWJ2」プロジェクト）・小木曽智信（2025）「現代書き言葉 UniDic」 https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/download.html#unidic_cwj

日本語学会 2026 年度春季大会シンポジウム

危機言語のデータベース

－日琉諸語におけるデータベースのこれまでとこれから－

パネリスト

狩俣 繁久（琉球大学）

Salvatore CARLINO（大東文化大学）

日高 水穂（関西大学）

指定討論者

三宅 俊浩（愛知学院大学）

企画担当

小川 晋史（熊本県立大学）

久保薗 愛（岡山大学）

趣旨

言語の多様性の重要さについては 2024 年秋のシンポジウムでもテーマとなったところですが、日本国内の消滅危機言語（あるいは方言）について現在その多くが最終局面を迎えていると言って過言ではありません。しばしば言及される 2009 年のユネスコの「消滅危機言語」の発表の時点でも 60 代以上の話者でなければその言語を使っていないといった状況が多々あった中、それから 20 年近くが経過しています。ネイティブの話者がほとんど残っていない、あるいは 70 代、80 代以上でなければという言語ばかりの状況になっています。

そのような中で、近年はオンラインを中心に複数の危機言語のデータベース（辞書・辞典）が発表されています。本シンポジウムではそのようなデータベースの作成者をお招きして、それぞれのデータベースの作成意図、仕様、あるいは作成にあたってのご苦労などをお話しいただき、危機言語のデータベースというものについての理解を深めるとともに、未来に向けて、具体的にはどのような使用が想定されるのか、あるいはデータベースを充実させていくために必要なことは何かなどについて議論を深められればと考えます。

構成

15：10－15：20　趣旨説明・登壇者紹介

15：20－15：45　「危機言語としての琉球諸語の三つのデータベース」　狩俣繁久

15：45－16：10　「『全国方言文法辞典』プロジェクトの取り組みと展開」　日高水穂

16：10－16：35　「日琉諸語オンライン辞書の現状と課題」　Salvatore CARLINO

16：35－16：50　休憩・質問回収

16：50－18：10　全体討論・質疑応答

質問回収

本シンポジウムではフォームで質問を回収します。QR コードを読み込み、シンポジウム中（休憩時間の終了まで）に質問をお寄せください。

質問記入フォーム

危機言語としての琉球諸語の三つのデータベース
－どんなデータを何故集めたのか。どう使ってもらいたいか－

狩俣繁久（琉球大学　博物館（風樹館）特別研究員）

1. はじめに

本報告では報告者ら[1]が作成した次の（A）（B）（C）の三つのデータベースについて、どんなデータを公開しているか、なぜデータを収集したか、誰にどう使ってもらいたいかを述べる。

(A) 「大琉球語辞典」
(B) 「琉球列島の言語の研究」
(C) 「シマジマのしまくとぅば」

2. 「大琉球語辞典」－「百見は一聞に如かず」－

沖縄学の父と称される伊波普猷（1876 年-1947 年）が 1920 年に「琉球語大辞典の構想」を書いている。伊波普猷は、琉球諸語の複数地点の語彙を統合して検索できれば、琉球諸語の歴史を再構するための有力な手掛かりを得ることができるという構想を語っている。伊波普猷の「琉球語大辞典」は構想のままだった。仲宗根政善（1907 年-1995 年）は、伊波普猷の遺志を受け継いで琉球語大辞典のための準備を始めた。その土台となるものとして自らの故郷の今帰仁村与那嶺の方言語彙を収集して『沖縄今帰仁方言辞典』（1983）を刊行したが、琉球語大辞典の仕事は果たせなかった。

1988 年から数年をかけて『沖縄語辞典』（国立国語研究所編、1963）、『沖縄今帰仁方言辞典』、『奄美方言分類辞典』（長田須磨他、1977）の全見出し語と用例の音声を録音した[2]。柴田武先生が 1970 年から 1975 年までの 6 年間に宮古島市平良下里方言を調査して得られた方言語彙（「柴田ノート」）を柴田武先生の許可を得て 1996 年から 1998 年にパソコンに入力して整理し、録音した。2000 年から刊行前の『石垣方言辞典』（宮城信勇、2003）、『与論方言辞典』（菊千代、2004）の草稿の全見出し語と用例の音声を録音した。

報告者は、琉球大学附属図書館から相談を受け、1998 年に全項目、全用例が録音済みだった『沖縄語辞典』、『沖縄今帰仁方言辞典』の音声を文字情報とリンクしてウェブで利用できる音声付デジタル方言辞典「琉球語音声データベース」を辞典の編著者あるいは遺族の許可を得て図書館のホームページ上で公開した。同じく全項目、全用例が録音済みだった『奄美方言分類辞典』と「柴田武宮古方言ノート」を高良富夫（当時琉球大学教授）の発案で音声付デジタル方言辞典として公開した。いずれも消滅に瀕する琉球諸語の記録保存が目的であった。

2017 年から上記 4 つの辞典に、『与那国ことば辞典』（池間苗、1998）、『伊江島方言辞典』（生塩睦子、1999）、『伊是名島方言辞典』（伊是名村、2003）、『伊良部方言辞典』（富浜定吉、2004）、『竹富方言辞典』（前新透、2011）等の方言辞典を加えて、音声付きデジタル方言辞典「大琉球語辞典」（見出し語約 18 万語）を構築し、2024 年 11 月から 7 冊をインターネット上で公開している。データベース化にあたって次のことをした。

---

[1] 「大琉球語辞典」は狩俣繁久と仲間恵子（琉球大学等の非常勤講師）と島袋幸子（琉球大学博物館（風樹館）特別研究員）が、「琉球列島の言語の研究」は狩俣と仲間恵子と島袋幸子が、「シマジマのしまくとぅば」は狩俣と島袋幸子と當山奈那（琉球大学人文社会学部）が主たる従事者である。

[2] 狩俣繁久（2000）を参照。

1. 辞典毎に異なっていた音韻記号と仮名表記を狩俣が作成した共通音韻、共通仮名に統一して全ての辞典の方言語彙を横断検索できるようにした。原著辞典の音韻記号と仮名表記は原著音韻、原著仮名として検索できるようにした。
2. 辞典毎に異なる品詞分類を共通品詞に統一して横断検索できるようにした。原著の品詞分類は原著品詞として検索できるようにした。
3. 『奄美方言分類辞典』の意味分類に合わせて残りの辞典の語彙も意味分類で検索できるようにした。
4. 『与那国ことば辞典』、『伊江島方言辞典』、『伊是名島方言辞典』 の全見出し語と用例の音声を録音した。
5. 『竹富方言辞典』の全見出し語と用例の録音済みの音声を出版社を通して入手した。
6. 音声を文字情報と結びつける作業を行った。
7. 一般の利用者用の一般ページとは別に、研究者用の研究者ページを作り、用例内の語彙のキーワード検索、ダウンロード機能を付けた。

2.1. 想定される利用

8. 比較研究に基づく琉球祖語、日琉祖語の研究
9. 用例を使用した文法研究
10. アクセント研究
11. 琉球諸語の音声認識と合成音声
12. AI を用いた日本語琉球諸語自動翻訳システムの開発

2.2. 今後の予定

① 「大琉球語辞典」には琉和辞典と和琉辞典を設けている。現在の和琉は原著辞典の索引(日本語)を見出し語にしている。原著辞典の索引は見出し語が少なく原著辞典内に存在するにも関わらず検索できない単語が多い。また原著ごとに索引の日本語が不統一なものがあり横断検索できない単語もある。「大琉球語辞典」では和琉辞典の見出し語を増やし横断検索を充実させる。
② 『石垣方言辞典』、『竹富方言辞典』、『伊是名島方言辞典』の音声を公開する。
③ 現在、未公開の『伊是名島方言辞典』『与那国ことば辞典』を音声とともに公開する。
④ 共通音韻、共通仮名になっていない用例を整備する。
⑤ 研究者ページの公開。
⑥ 以下の未公刊の方言辞典をデータベース化して公開する。
『瀬戸内町諸鈍方言辞典』(金久正著、手書き原稿　著者の声の録音有り)。『竜郷町瀬留方言辞典』(石崎公曹著、手書き原稿)、『名護市幸喜方言辞典』(宮城萬勇著、手書き原稿、編集中、著者と同世代話者の録音有り)、『名護市久志方言辞典』(宮里健一郎著、著者の声の録音有り、編集中)、『宮古平良西里方言辞典』(仲宗根浩二著、手書き原稿、編集中、著者の声の録音予定。)

3. 「琉球列島の言語の研究」－単語の記録・保存－

沖縄言語研究センター[3]は、消滅の危機に瀕する琉球諸語の記録保存を目的に「琉球列島の言語の研究」(1981 年～1994 年)を実施した。目的達成のために『琉球列島の言語の研究　第 1 調査票』、『同　第 2 調査票』、『同　第 3 調査票』、『同　第 4 調査票』、『同　全集落調

[3] 1978 年に設立された会員制の民間の団体。初代代表は仲宗根政善、二代目は上村幸雄(1929 年-2017 年、三代目は屋比久浩(1930 年-2025 年)、現代表は狩俣繁久。

査票』を作成した。『その 1』には「国語アクセント類別対応表」にある 1 音節名詞 11 語、2 音節名詞 20 語、3 音節名詞 7 語、その他の名詞 4 語、計 42 語と助詞付の語形を得るための例文が収録されている。『その 2』には身体名詞と動物、植物などの名詞 198 語が収録され、『第 2』には道具、自然、天体、時間に関する名詞と数詞等の 300 語が収録され、『第 3』には親族名詞を中心にした人間関係の名詞と代名詞の 144 語が収録され、『第 4』には形容詞の 135 語、擬声擬態語の 231 語が収録されていて、合計 1008 単語が収録されている。『全集落調査票』は『その１』から『第４』までの項目の中から使用頻度が高く借用語に置き換えにくい基礎語彙を中心に 328 項目（活用語の文法的な形をふくむ）が収録されている。動詞の語彙の調査票も作成する計画があったが実現されなかった。

『その 1』154 地点、『その 2』114 地点、『第 2』82 地点、『第 3』61 地点、『第 4』56 地点の調査票が琉球大学の狩俣の研究室に保管されていた。『全集落調査票』は名前の通り琉球列島の全集落を調査するもので、琉球列島の伝統的な全集落の約 800 地点のうちの 609 地点の調査票が報告者の研究室に保管されていた。鹿児島県、長崎県、熊本県の 5 地点の調査票も含まれる。これらの調査票が報告者の定年退官後に散逸するおそれがあったので、スキャンして PDF にして保存した。その後すべてを以下のように地点の単語ごとに 29 項目の情報を与えて Excel に入力してデータベース化した。

1.調査単語の日本語、2.地点番号、3.辞書 ID、4.原著音韻（調査者の手書きの表記）、5.音韻表記（検索用にアクセント記号や補助記号を除いた表記）、6.対応形・祖型（語形を手がかりにした検索用）、7.意味分野、8.地点 ID、9.調査語 ID、10.緯度、11.経度、12.都道府県名、13.市町村名、14.字名、15.島名、など。

3.1. 想定される利用

13.語形を使用した比較研究

14.語形を使用した言語地理学

15.音韻を指標に用いた集団遺伝学による琉球諸語の系統樹研究

16.語彙を指標に用いた集団遺伝学による琉球諸語の系統樹研究

沖縄島北部地域の資料を使って言語地図を描画して解説をつけて『名護市史 10 言語編』に掲載し、方言語形の歴史と地域の歴史を明らかにした[4]。沖縄島恩納村と周辺地域の資料を使った『恩納村史　言語編　上巻』の言語地理編の刊行を予定している[5]。

2019 年からこの資料を使用して集団遺伝学の手法で琉球諸語の言語系統樹研究を開始した。その成果として狩俣繁久、和智仲是、木村亮介（2021）、狩俣繁久、和智仲是（2025）を発表した。『沖縄県史　言語編』（2028 年 3 月刊行予定）に「9 部 1 章 1 節　集団遺伝学でみる琉球諸語の諸相」を掲載予定である。

3.2. 今後の予定

17.5 冊の調査票のデータ整備を完了させる。

18.5 冊の調査票のデータを統合し大琉球語辞典の研究者ページで公開する。

19.「言語系統樹作成マニュアル」を作成して公開し琉球諸語の系統樹研究を進める。

4. 「シマジマのしまくとぅば」－文の記録・保存－

琉球大学が沖縄県から委託を受けて消滅に瀕するシマクトゥバ（地域語）の記録保存と継承を目的とした「しまくとぅばアーカイブ業務委託」（2022-2026、以下「アーカイブ」）を行っ

---

4 琉球諸語研究における言語地理学的な研究については、かりまた（2009）を参照。

5 下巻は恩納村方言の辞典になる予定である。

ている。「アーカイブ」では(A)文法調査票、(B)小中学校の音楽の教科書に掲載されている楽曲の歌詞の方言訳、(C)小中学校の国語の教科書に掲載されている文学教材の方言訳、(D)自然談話の収録、(E)小中学生用のシマクトゥバ教材の作成の五つを行っている。それらの資料はHP「シマジマのしまくとぅば」で一般公開している。

(A)文法調査票には沖縄県の 44 地点について「動詞活用形調査票」「存在動詞活用形調査票」「動詞活用型調査票」「形容詞活用形調査票」「形容詞語彙調査票」「とりたて・授受表現調査票」の 6 冊(以下「調査票」)を調査するものである[6]。「調査票」には動詞述語文、形容詞述語文、名詞述語文のそれぞれについて叙述文、強調文、推量文、肯否質問文、疑問詞質問文、疑い文、確認要求文、命令文、勧誘文等のモダリティの文が 816 例文がある。(B)では沖縄県内 50 地点で「うみ」「手のひらを太陽に」「ありがとうの花」「野に咲く花のように」「赤とんぼ」の方言訳を調査した。(C)は沖縄県内 50 地点で「はなのみち」「おおきなかぶ」「けんかした山」「イナゴ」「わたしと小鳥とすずと」「木」の方言訳を調査した。(D) 自然談話は沖縄県内 8 地点で調査した。(E)小中学生用のシマクトゥバ教材は沖縄県内 9 地点で 4 冊ずつのテキストを作成する。(B) (C) (E)はシマクトゥバ教育の教材として学校教育に提供しシマクトゥバの普及、継承を目的にしたものである。

「調査票」では、話者の誤解によってターゲットではない活用形が出てくる可能性を減らすために活用形を例文の中に組み込んでいる。また、話者も回答しやすく調査も効率よくできるよう具体的な場面を設定し、対話形式で並べたものもある。

> 「あなたはナスを食べるの？」「ううん、食べない。」「今日の朝ごはんは何を食べたの？」「味噌汁とご飯を食べた。」／「昨日も魚を煮たから、今日は煮なかったんだろう？」「うん、昨日も魚だったから、今日は煮なかったんだよ。」／「姉さんが東京から来る。」「姉さんはいつ来るの？」「明日来る。」「姉さんが来るから、孫も来るだろう。」／「この島に空港はあるの？」「ううん、空港はない。」「何故無いの？」「島が小さいから無いのだよ。」

「動詞活用形調査票」「存在動詞活用形調査票」には、1 つの動詞についてその肯定形と否定形の活用形(終止形(叙述形・推量形・疑い形、肯否質問形、疑問詞質問形、命令形、勧誘形)、連体形、条件形(仮定形、契機形、理由形、譲歩形等)の非過去形と過去形)の 44 個の活用形がある。存在動詞(有る)と不存在動詞(無い[7])は、アスペクト形式、形容詞、述語名詞の文法形式(肯定形と否定形)の基礎をつくる重要な単語なので別に調査票を作成した。「形容詞活用形調査票」には特性形容詞「おいしい(第一形容詞)」、状態形容詞「ひもじい(第一形容詞)」、関係形容詞「年上だ(第二形容詞)」の活用形を調査するものである。第二形容詞は繋詞の活用形を知ることができる。

一つの例文には、動詞、形容詞、述語名詞を作る繋詞の文末の形式だけでなく、主格や対格等の格助詞やとりたて助詞等が複数含まれる。例文によっては条件的複文や連体修飾的複文があり、条件形や連体形や連用形等の複数の活用形も含まれる。活用形を例文と共に示すことは、当該方言の動詞の活用形の形式だけでなく、形態論的な意味、および、活用形の文中での機能、それを含む文の構文論的な意味の調査も可能である。

残さないで　食べて　いたけど　おいしかったの？ (サ行動詞否定中止、　一段動詞肯定第二中止形　補助動詞肯定過去逆接、形容詞・肯否質問過去)

[6] 奄美諸島の地点については文化庁委託事業「消滅の危機にある方言の記録作成及び啓発事業」(2021、2022、2023、2024)によって調査を行った。

[7] 琉球諸語の「無い」は不規則変化動詞である。

こんなに　おいしいのに　何故　残したのかなあ。 （指示副詞、形容詞肯定うらめ条件、疑問詞、サ行動詞肯定過去疑い形）
あなたは　花子から　英語を　教えて　もらったんだろう？ （名詞主題助詞、名詞奪格カラ、対格ヲ、受益動詞肯否過去確認要求）
ううん、　花子は　私に　英語を　教えて　くれなかった。 （応答詞、名詞・主題助詞、名詞・与格ニ、　名詞対格ヲ、動詞第二中止形、授益動詞否定過去形）

収録された例文とそこに含まれる文法形式のそれぞれに調査票 ID と地点 1D、例文番号を付け、(1)品詞（名詞、動詞、形容詞、副詞、繋詞、連体詞、応答詞、感動詞、接続詞等）、(2)文中での機能（主語、述語、直接補語、間接補語、状況語、連用修飾語、独立語等）、(3)名詞の形態論的なカテゴリ（格・とりたて・並列）、(4)格形式（が、の、を、に等）、(5)格の意味（主体、対象、場所、道具、相手等）、(6)とりたての形式（は、も、こそ、だけ等）、(7)とりたての意味（対比、共存、特立、限定等）、(8)動詞活用型（強変化 k 語幹、強変化 s 語幹、弱変化、不規則等）、(9)断続（終止、連体、連用、条件等）、(10)方言語形（共通仮名）、(11)方言語形（簡略音声記号）、(12)方言例文（共通仮名）、(13)方言例文（簡略音声記号）、(14)日本語語形、(15)日本語例文、(16)緯度、(17)経度などの 30 項目でデータベース化している。

「動詞活用形調査票」993 個、「存在動詞活用形調査票」332 個、「動詞活用型調査票」614 個、「形容詞活用形調査票」582 個、「形容詞語彙調査票」528 個、「とりたて・授受表現調査票」465 個の計 3514 個の文法形式がある。これを使って個々の下位方言の簡易記述文法も可能になる。統一した例文を使用することで複数方言の項目ごとの比較研究も他の琉球諸語の下位方言や標準語との比較研究も、当該地域の方言の特徴の解明も可能になる。

地点ごとに緯度、経度も与えているので、語形に記号を与えて従来の言語地図を描くことも集団遺伝学を用いた系統言語地図を描くことも可能になる。

4.1. 想定される利用

20.方言継承のための方言テキストの作成

21.簡易記述文法

22.文法の比較研究

23.文法形式を指標に用いた言語地理学

24.文法形式を指標に用いた集団遺伝学による琉球諸語の系統樹研究

4.2. 今後の予定

25.予算の制約等で調査できなかった重要地点の調査

26.6 冊の調査済みデータの整備とデータベース化

27.集団遺伝学的研究のためのデータ整備

統一的な方法で得られた動詞・形容詞の活用形、テンス・アスペクト、受動・使役等のボイス、複文の述語（連体・条件・連用）の体系、名詞の格、とりたて等々を構成する個々の形式を語源の異なる多形の数毎に 0 と 1 で並べて 10000，01000，00010 のように数列化して解析し系統ネットワーク図や ADMIXTURE を描く。同じく多義的な意味の有無を「有=1、無=0」で表し 1110101 のように数列化して系統ネットワーク図や ADMIXTURE を描く。

集団遺伝学は、子音や母音の種類ごと、語彙の意味分野ごと、文法カテゴリや語形や文法的意味ごとに複数の指標を統合して解析することができる。その解析結果を言語の分岐や言語間距離を示す三次元の系統ネットワーク図に描き、さらにその端点を二次元の地図上にプロットした系統言語地図に描くことも、ADMIXTURE の結果を地点ごとに円グラフにして二次元の地図上にプロットした系統言語地図に描くこともできる。系統言語地図は、系

統ネットワーク図やADMIXTUREの解析結果を地図上にプロットした時間軸の結果を地理的分布に表示して可視化させたもので、これまでの言語史研究とは異なる方法＝方言系統地理学で地域の言語史を研究することが可能になる。

方言系統地理学は、方言の系統関係とその地理的分布を調べることで、琉球諸語の歴史を推定する。大きく進んだコンピュータ解析手法を利用することによって、収集された多量のデータを使った系統分析や系統言語地図化の煩雑な作業から研究者を開放する。

語形や意味の不規則な変化（＝突然変異）に基づいて分岐系統樹を描き系統関係を論じる比較歴史言語学的な研究は、単語の選択に研究者の恣意性が働く。少数の単語を用いて分岐的系統樹を描いても、それは1つの可能性であり、選択される単語が違えば違う系統樹を描く。言語は生物以上に平行変化（言語接触）の影響が大きいが、分岐的な系統樹はその影響を反映しないか、排除する。突然変異を用いた分岐系統樹には課題がある。

琉球諸語には多様な言語現象があり多様な下位方言がある。音韻と語彙と文法は、系統特性が大きく異なり、それぞれに違う歴史がある。したがって、多面的かつ総合的に研究しなければならない。「琉球列島の言語の研究」の音韻と語彙のデータに「アーカイブ」の文法のデータを加えれば、集団遺伝学に欠かせない均質で大量のデータを用いた集団遺伝学的研究が可能になる。集団遺伝学の解析結果をこれまでの琉球諸語の比較歴史言語学の側から検証することで琉球諸語の総合的で体系的な歴史研究が可能になる。

5. まとめ－誰のためのデータベースか－

3つのデータベースのデータは、どれも消滅に瀕する琉球諸語を記録し、保存するという目的に収集されたものであった。長期保存に適さないカセットテープは単なる記録の媒体で、国際音声記号で紙に書くことが最良の記録だと考えていたが、DATやMDが出てきて高音質の記録と長期保存が可能になった。デジタル化された音声をウェブで公開できるようになったことが「大琉球語辞典」を生むきっかけになった。「琉球列島の言語の研究」の「調査票」のデータも保存と公開が可能になった。テクノロジーの進歩は保存と公開の手段を大きく変えるだけでなく、それを用いた新たな研究手法も可能にした。100年前の伊波普猷の構想も仲宗根政善の試みもようやく実現しそうだ。

音声付きの方言資料をウェブで公開できるようになった。地域社会への貢献の仕方も変わらなければならない。それが消滅の危機に瀕している方言であればなおさらである。我々が地域の人の協力によって得たものは、地域の遺産言語である。どんな資料をどう集めてどう公開するか、誰に使ってもらいたいか等々、データベースを設計するとき、誰のためにデータベースをつくるのか、地域の人の顔が見えているか否かは大きい。

参考文献

狩俣繁久(2000)「琉球語音声データベースについて」『琉球語大学図書館報』№127、pp.1-4.

かりまたしげひさ(2009)「琉球方言・言語地理学研究小史－「国頭方言の音韻」から『名護市史本編言語』まで」『琉球アジア社会文化研究』12号、琉球大学琉球アジア文化研究会、pp.55-68.

狩俣繁久・和智仲是(2025)「第15章　琉球諸語研究における集団遺伝学的手法の可能性」『ヤポネシアの考古と言語』藤尾慎一郎・遠藤暁・木部暢子編、朝倉書店、pp.196-209.

狩俣繁久・和智仲是・木村亮介(2021)「琉球諸語研究における方言系統地理学の可能性」『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』木部暢子・林由華・衣畑智秀共編、開拓社、pp.129-163.

『全国方言文法辞典』プロジェクトの取り組みと展開

日高水穂（関西大学）

1　はじめに

この報告では、下記の（A）のプロジェクトの取り組みを紹介したうえで、このプロジェクトとの関連で（B）～（D）のプロジェクトへの展開について述べる。

（A）『全国方言文法辞典』プロジェクト
（B）島根県方言昔話資料整備プロジェクト
（C）みんなで談話整備プロジェクト
（D）『日本国語大辞典』改訂プロジェクト

2　『全国方言文法辞典』プロジェクト

2.1　目的と経緯

報告者らは、2001 年に方言文法研究会[1]を立ち上げ、以下の方針のもとに、既存の方言資料類のデータベース化、要地方言の文法の記述的研究に取り組んできた。

①方言の文法に関する記述をより精密なものにする。
②全国方言の文法形式、文法現象をできる限り網羅する。
③方言研究者だけでなく、言語の対照研究に興味を持つ人全般に向けて情報発信する。

方言文法研究会では、中央語・標準語に限定せず、地理的変異（方言差）および歴史的変異（時代差）を考慮に入れた日本語族（Japonic）諸方言の文法の全体像を把握するために、各地方言の現地調査、方言文献資料調査、歴史的変異調査を行うとともに、調査データを集積するウェブシステムを構築し、研究会のウェブサイト（第 1 サイト、第 2 サイト）で一般公開をはかっている。

2001 年 12 月 8 日に行った最初の打合せでは、既存の方言資料から文法形式の記述、使用例を抜き出して、データベースを作成（第 1 段階）、項目を整理し、文法カテゴリーごとに排列したものをネットで公開（第 2 段階）、実地調査等を踏まえて記述を補充し、ジテン[2]を編む（第 3 段階）という展開を検討した[3]。

---

[1] 立ち上げ当初は 10 名程度の有志の会であったが、その後、科研費の研究課題（稿末の付記に記載）として採択され、現在、科研メンバーに加えて、研究協力者を多数含む 100 名以上が参加している。

[2] 当初は「辞典」なのか「事典」なのかを決めかねて、議事録にも「ジテン」と表記している。

[3] この時期、報告者は、のちに『現代日本語文法』（全 7 巻、2003～2010 年）として結実する日本語記述文法研究会（代表：仁田義雄）のメンバーの一人として、標準語を対象にした網羅的かつ体系的な文法記述に取り組んでいた。また、「秋田の方言」収録事業（後述）に編集委員として携わり、『秋田のことば』（2000 年）を完成させ、『CD-ROM 版 秋田のことば』（2003 年）のための調査・研究に取り組んでいる最中であった。こうした報告者を取り巻く環境と経験が、全国規模の精緻な方言文法記述データベースの作成を構想する契機となった。

当初の構想では、記述する文法項目を以下のように大別し、順次上述の段階を経て進めていく計画であった。

名詞句関係：格、主題、とりたて

接続句関係：原因・理由、条件、逆接

述語句関係：否定、使役、受身、自発、可能、授受、アスペクト・テンス、推量、様態・伝聞、疑問・確認要求、意志・勧誘、希望、説明、命令・禁止、敬語

最初に手がけたのは接続句関係で、共通調査票による要地方言の記述と項目記述に取り組み、『全国方言文法辞典《原因・理由表現編》』（2007 年）を刊行（2010 年に増補改訂版の『全国方言文法辞典資料集(1)　原因・理由表現』（以下『資料集』）を刊行）し、続けて『『全国方言文法辞典』のための条件表現・逆接表現調査ガイドブック』（2010 年）を刊行したものの、接続句および述語句関係の文法項目の記述には活用形の情報が必須であることから、「要地方言の活用体系記述」に取り組むことになり、以来 10 数年にわたり、『資料集(2)　活用体系』（2014 年）、『資料集(3)　活用体系(2)』（2017 年）、『資料集(4)　活用体系(3)』（2018 年）、『資料集(5)　活用体系(4)』（2019 年）、『資料集(7)　活用体系(5)』（2022 年）、『資料集(8)　活用体系(6)』（2024 年）、『資料集(9)　活用体系(7)』（2025 年）を刊行して、要地 56 方言（本土 50 方言、琉球 6 方言）の記述を完成させた。ここで最終的な『全国方言文法辞典』に向けて、この要地 56 方言の活用体系記述から項目（活用形）別に記述を抽出し、改訂を加えたうえで再編集することとし、『資料集(10)　使役・受身・自発・可能』（2026 年）を刊行したのが現段階である。『資料集(10)』には新たに本土 2 方言の活用体系記述を収録したことから、現時点で、要地 58 方言（本土 52 方言、琉球 6 方言）の活用体系記述が完成したことになる[4]。これらは、「全国方言文法辞典資料集 活用体系 統合サイト」で一覧できるようになっている。

また、名詞句関係の記述資料を補充することを目的の一つとして、「基本例文 50 要地方言訳」の記述および音声収録を開始し、2022 年から現在までに、本土 16 方言、琉球 4 方言[5]のデータを得るに至っている。こちらは検索システムを搭載した「基本例文 50 要地方言訳データベース」で公開している。

話が前後するが、活用体系記述を行う「要地方言」の選定基準は、47 都道府県から各最低 1 方言の記述を行うことを条件とし、方言区画上の要地方言を選定している。要地方言の活用体系記述では、原稿の冒頭に都道府県単位の方言区画図を掲載しているが、この都道府県別方言区画図を統合した「日本列島方言区画図」を作成したことも、このプロジェクトの成果の一つと考えている。「日本列島方言区画図」の画像（JPEG・PDF）も研究会のサイト「日本列島方言区画図」で公開している。

---

[4] 執筆者は現時点で 45 名(科研メンバー16 名、研究協力者 29 名)。校閲には科研メンバーの小西いずみ（全域）、竹田晃子（東北）、三井はるみ（関東・中部）、日高水穂（近畿）、平塚雄亮（九州）があたっている。

[5] 執筆者は現時点で 16 名(科研メンバー7 名、研究協力者 9 名)。

2.2　共同構築型データベースの構想

『全国方言文法辞典』プロジェクトでは、現在、科研費基盤研究(A)「共同構築型『全国方言文法辞典』データベースによる時空間変異対照研究の発展的展開」に取り組んでいる。以下は、この科研課題の概要である。

日本語族（Japonic）諸方言（日琉諸語・諸方言）は、地域的な限定はあるが豊富な歴史的文献資料をもち、また多様な地理的変異が観察されることから、「言語的時空間変異」（歴史的言語変種と地域的言語変種に現れる言語変異）の対照研究に適した条件を備えている。

本研究では、これまで日本語族諸方言の文法を総合的に記述する『全国方言文法辞典』プロジェクトに取り組んできた方言文法研究会の研究者ネットワークを基盤に、日本語族諸方言の文法を統一的な枠組みで詳細に記述し、速やかにデータ公開していく共同構築型データベースの拡充と活用により、日本語族諸方言の「言語的時空間変異」の対照研究を発展的に展開する。

ここでのキーワード「共同構築型データベース」の構想が可能になったのは、2020～2024年度に取り組んだ科研課題（20H00015）がコロナ禍の最中に始まり、現地調査や対面での研究交流が制限される一方で、オンラインによる研究者ネットワークが強化されたことが大きな転機になっている。この時期から、方言文法研究会では積極的にオンラインでの研究発表会を開催し、Slack や Discord などのチャットコミュニケーションツールを活用して情報共有をはかってきた。現在、100 名を超えるメンバーの参加が得られ、要地方言の活用体系記述や基本例文 50 要地方言訳の執筆担当を、研究会メンバーに募ることも可能になっている[6]。

3　関連プロジェクトへの展開

3.1　島根県方言昔話資料整備プロジェクト

『全国方言文法辞典』プロジェクトでは、『辞典』の項目記述に活用するために方言用例データベースの構築に取り組んでいるが、その原資料として、方言で語られた昔話資料に着目し、資料収集を進めてきた。その取り組みのなかで、島根大学昔話研究会が 1970 年代か

---

[6]　こうした研究協力体制が構築できるようになったのは、出入りはあるが、下記の歴代科研メンバー（敬称略）との検討のたまものであることをここに銘記しておきたい。

青木博史　井上文子　大西拓一郎　小西いずみ　小柳智一　酒井雅史　下地賀代子　高木千恵
竹田晃子　中川奈津子　仲原穣　中本謙　野間純平　林良雄　平塚雄亮　舩木礼子　前田直子
松丸真大　三井はるみ　森勇太　矢島正浩　山田敏弘　吉田雅子

また、現時点での、科研メンバー以外の要地方言の活用体系記述、基本例文 50 要地方言訳の執筆者（敬称略）も、以下に銘記して感謝の意を表したい。

朝日祥之　新井小枝子　乙武香里　門屋飛央　久保博雅　小畠裕将　坂本薫　佐々木冠　澤村美幸
白岩広行　セリック・ケナン　武田拓　田附敏尚　坪井菜央　陶天龍　友定賢治　西尾純二　野田太暉
野田智子　林由華　逸民誠　原田走一郎　半沢康　東出朋　平子達也　松岡葵　松倉昂平　松田美香
三樹枝里　三樹陽介　宮岡大　目差尚太　山本空　米村雪乃

ら 1990 年代にかけて島根県内各地で調査・収録した昔話・民話集（19 冊、1973～1991 年刊行）を見出した。当時の島根大学教授で当研究会の主宰者である田中瑩一氏と連絡を取り、調査時の録音資料（カセットテープ 160 本）が島根県立大学の岩田英作氏によって保管されていることを確認した。田中氏、岩田氏の許諾を得たうえで、科研費基盤研究(B)「方言昔話資料のデータベース化と言語研究への活用」（研究代表者：三井はるみ）の研究課題の一環として、現在、野間純平氏を中心に、音声とテキストの照合作業を行っている。

1970 年代にテープレコーダーが普及したことにより、方言調査に限らず、方言音声を収録した 1970～1990 年代のテープ音源が、多数非公開のまま私蔵されている現状において、特にこの時期盛んに行われた昔話の語りの収録音源は、当時の地域言語の資料として大きな価値をもつ。高道慎之介氏らが公開している「東北地方民話コーパス」のような取り組みも先行例として参考になろう。地域言語を収録したテープ音源のデジタル化と文字化は、積極的に取り組むべき喫緊の課題だと言える。

3.2　みんなで談話整備プロジェクト

みんなで談話整備プロジェクトは、1977～1985 年度に文化庁が実施した「各地方言収集緊急調査」による収録談話の整備を共同で行うプロジェクトで、それまで個別に依頼する形で行われていたネイティブチェック・アラインメント作業を、広く担当者を募って行うものである。『全国方言文法辞典』プロジェクトでは、方言用例データベースの原資料の一つとしてこの談話データの活用を考えており、方言文法研究会が関わる科研費（20H00015、23K25332、25H00472）を作業担当者への謝金の一部にあてている。

「各地方言収集緊急調査」は、文化庁が各都道府県教育委員会を通じて実施したもので、最終的な調査地点数は 228 地点、1 地点につき約 10 時間の方言談話（自由会話、場面設定の会話、民話）を収録するという大規模なプロジェクトであったが、その報告資料（文字化資料と収録音源（カセットテープ））は、いくつかの教育委員会が資料の一部を用いて報告書を刊行しているものの、大部分が公開されないままとなっていた。この貴重な資料を掘り起こして公開に向けて整備作業にあたってきたのが井上文子氏で、厖大な資料の一部は、『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』として公開された。これに新たな整備データを加え、木部暢子氏の主導のもとに構築されたのが『日本語諸方言コーパス』（COJADS）である。しかしながら、残された未公開の厖大な資料の整備を国立国語研究所内で続けていくには限界があり、作業担当者および研究費のサポートを広く募るしくみとして 2022 年に発足したのが、みんなで談話整備プロジェクトである[7]。ここでネイティブチ

[7] 以下のプロジェクトの共催によって発足した。
国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（プロジェクトリーダー：山田真寛）
科研費基盤研究(A)「日本語諸方言コーパスによる方言音調の比較類型論的研究」（研究代表者：木部暢子）
科研費基盤研究(A)「『全国方言文法辞典』データベースの拡充による日本語時空間変異対照研究の多角的展開」（研究代表者：日高水穂）

ェック・アラインメント作業を終えたデータは、国立国語研究所学術情報リポジトリで公開される段取りとなっている。

ここで強調しておきたいのが、「各地方言収集緊急調査」の老年層話者は調査時において60 歳以上であり、この先、その言葉を聞き取ることのできるネイティブチェック作業担当者も限られてくるということである。調査に協力した話者の声を、有効な形で後世に伝えるために、みんなで談話整備プロジェクトの取り組みもまた、緊急性の高いものと言える。

3.3 『日本国語大辞典』改訂プロジェクト

2024 年 7 月に小学館からプレスリリースされた『日本国語大辞典』の 30 年ぶりの改訂は、日本語研究者のみならず一般社会からも関心をもたれる一大事業である。報告者は編集委員としてこれに携わることになり、2032 年の完成を目指す『日本国語大辞典 第三版』に向けて、現時点で 30 余名のメンバーによる方言部会を組織し、方言項目の改訂作業に取り組んでいる。

『日本国語大辞典』の方言項目は、①一般語の親見出しのもとに設けられた「方言」欄と、②親見出しとして方言語形が立項されているものがあり、その総数は初版で約 4 万語、第二版で約 4 万 5 千語とされている[8]。初版の方言項目の執筆は大岩正仲氏が担当し、第二版では徳川宗賢氏が編集委員として改訂に携わった。第二版の改訂作業がはじまったのは1990 年で、方言項目の改訂は 1989 年に刊行されていた『日本方言大辞典』の情報を組み込む形で行われた。そうした経緯から、第三版の方言項目の改訂作業は、『日本方言大辞典』が扱っていない主に 1970 年代以降の方言資料の情報を増補し、親見出しとして新たに立項する方言語形の選定および記述をすることを中心に進めている。

『全国方言文法辞典』プロジェクトとの関連では、『日本国語大辞典』も『日本方言大辞典』も、文法項目の記述はやや手薄であって、『全国方言文法辞典』プロジェクトの成果を日国第三版の改訂に反映させることができれば、方言項目の記述の充実に寄与することになるだろう。なによりもまず、日国に方言項目を立項し、日本の「国語」の中身が、地理的・歴史的に多様な「日本語族」の総体であることを示せるのは、方言研究者としてこの上ない機会を得たものと考えている。

また、日国第三版は、ジャパンナレッジでデジタル版として公開されることから、デジタル版ならではの機能を搭載することを検討している。方言項目の範囲でいうと、①標準語引き機能、②方言音声（見出し語、用例）へのリンク、③言語地図へのリンク、などである。このうちの②については、報告者が編集委員として関わった『CD-ROM 版 秋田のことば』の「辞書編」（見出し語数：4,853 語）の音声を利用することを検討している。

ここで 1997～2003 年に秋田県教育委員会が実施した「秋田の方言」収録事業について触れておきたい。この事業では、2000 年に書籍『秋田のことば』を刊行し、2003 年に『CD-

[8] 「凡例」に記載されている語数はこのようになっているが、小学館辞書編集室作成のリストによると、第二版の方言項目は①が 29,156 語、②が 11,580 語の合計 40,736 語であることが判明した。

ROM 版 秋田のことば』を刊行した。『CD-ROM 版 秋田のことば』は、書籍版のコンテンツをデジタル化するだけでなく、「辞書編」の見出し語・用例の音声リンク、変異形を含んだ検索が可能な「あいまい検察機能」、言語地図との相互リンク等が搭載され、さらに公募による県内各地の 111 名が 30 項目の質問項目（「朝、近所の人にあったとき」など）に回答した音声を収録した「2001 年秋田のことば」など、県民参加型のコンテンツが盛り込まれている。しかしながら、CD-ROM というメディアの限界もあって、現在はほとんど利用されていない。こうしたコンテンツを未来に継承する方策を検討することも、今行うべき喫緊の課題である。

4　100 年後の「みんな」のために

日本の諸方言の研究は、明治期以来 100 年を超す研究の蓄積のうえに成果を重ねてきた。過去の記述と照合することによって、地域言語の動態を把握できる。逆に言うと、過去の記述のない地域言語の動態は把握が難しい。方言区画上の要地方言をくまなく同じ精度で記述をした資料があれば、100 年後の方言研究はどれだけ豊かで多様なものになるだろう。

1970～1990 年代に収録された各地に眠っている方言談話の音源は、その実態もわからない。文化庁の「緊急方言収録調査」の各地点 10 時間の談話調査のデータも、まだ一部しか公開されていない。これらのデータが整備・公開されれば、100 年後の地域社会にどれだけのインパクトを与えることができるだろう。

「2001 年秋田のことば」を、100 年後の秋田の人々は、どんな思いで聞くのだろう。

これだけの資産を未来に残せることに、私たちが今を生きる意味がある。

付記　この報告は、JSPS 科研費若手研究(B)15720101（2003-2005 年度）、基盤研究(C)16520285（2004-2006 年度）、基盤研究(C)19520403（2007-2009 年度）、基盤研究(B)21320086（2009-2013 年度）、基盤研究(A)26244024(2014-2018 年度)、基盤研究(A)20H00015(2020-2024 年度)、基盤研究(B)23K25332(2023-2027 年度)、基盤研究(A)25H00472（2025-2029 年度）の成果に基づく。

参考文献・サイト

秋田県教育委員会（編）（2000）『秋田のことば』無明舎出版
秋田県教育委員会（編）（2003）『CD-ROM 版 秋田のことば』無明舎出版
国立国語研究所（編）（2001-2008）『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』（全 20 巻）国書刊行会
尚学図書（編）・徳川宗賢（監修）（1989）『日本方言大辞典』（上・下巻、別巻）小学館
日本語記述文法研究会（2003-2010）『現代日本語文法』（全 7 巻）くろしお出版
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（編）（2000-2002）『日本国語大辞典　第二版』（全 13 巻、別巻）小学館
日本大辞典刊行会（編）（1972-1976）『日本国語大辞典』（全 20 巻）小学館
方言文法研究会　第 1 サイト　https://hougen.sakura.ne.jp/
方言文法研究会　第 2 サイト　https://sites.google.com/view/hogenbunpo/home
Tohoku folktale corpus（東北地方民話コーパス）
https://sites.google.com/site/shinnosuketakamichi/research-topics/tohoku-dialect_corpus
みんなで談話整備プロジェクト　https://sites.google.com/view/danwaseibi/home
日本語諸方言コーパス（COJADS）　https://www2.ninjal.ac.jp/cojads/index.html
日本国語大辞典第三版はじめます。　https://www.shogakukan.co.jp/pr/nikkoku3/

日琉諸語オンライン辞書の現状と課題

CARLINO Salvatore（大東文化大学）

1. はじめに

本報告では日琉諸語オンライン辞書(Online Dictionary of the Japonic Languages =ODJL https://odjl.net）の現状と今後の課題について述べる。まず報告者と構築の背景について述べる。その次に辞書の機能、データの構造現状を概観する。最後に構築・運営上の問題、今後の課題について述べる。

2. 「日琉諸語オンライン辞書」を作るに至った経緯

2.1 報告者の背景

報告者はイタリア南部ナポリという街の出身であり、アジア研究で有名なナポリオリエンターレ大学で日本語を学び、2013 年に国費留学生として来日した。一橋大学で研究生から修士を経て、博士号を取得し、その後2年間を九州大学で外国人特別研究員として過ごした。現在は大東文化大学外国語学部日本語学科で助教として務めている。来日したころ、修士までは社会言語学の方に興味があったが、博士課程からフィールド言語学に興味を持ち、現在自分の専門をフィールド言語学・言語ドキュメンテーションにしている。対象としている言語は主に琉球諸語だが、最近本土方言も対象にしている。博士論文として北琉球沖縄語伊平屋方言の記述文法書を執筆し、これはODJL の構築に繋がった。その詳しいいきさつについて次の節で述べる。

2.2 日琉諸語オンラインの背景

日琉諸語オンライン辞書は、報告者が日本学術振興会特別研究員として九州大学に所属していたときに作った、琉球諸語諸方言・日本語諸方言のデータを収録したオンライン電子辞書である。日琉諸語オンライン辞書の構築を始めたきっかけは、まず報告者が記述してきた沖縄語伊平屋方言の辞書を作りたいという点にあった。報告者は博士論文として伊平屋方言の談話資料付きの文法書を作成した。次のステップとして、そのときまで存在しなかった伊平屋方言の辞書を作る必要であり、次のプロジェクトとして設定した。構築のしやすさ、アクセスのしやすさなどという点から、オンライン辞書という形にすることを決めた。この計画で日本学術振興会外国人特別研究員プログラムに応募し、採択された。受け入れ先は九州大学であり、受入れ研究者は下地理則氏に受け入れてもらい、共同研究として ODJL を作ることになった。

こうしてプロジェクトが採択されたが、報告者は自分でオンライン辞書を作る技術を持っていないため、言語資源構築用のウエブアプリの開発の経験がある業者にウエブアプリとサイトの作成を依頼した。初期の計画として個別の方言辞書を作るためのアプリを作り、他の研究者に自分の専門方言で辞書を作れるようにそのアプリを共有しようと考えていた。が、計画が進むにつれて、それよりも、複数の方言のデータを収録したものを作った方が効率いいことがわかった。これは ODJL を

作るいきさつとなった。ODJL へのデータ提供は誰でも可能という形にし、ODJL を公開したときはまず伊平屋方言のデータだけだったが、それ以来拡大しつつある。こうして作った ODJL はどんな辞書なのか、次の節で紹介する。

3. 日琉諸語オンライン辞書の概要と現状

3.1 ODJL の概要

本節では ODJL の機能と構造を簡単に紹介する[1]。検索機能と、辞書項目の情報に着目する。まず、検索画面を見せる。図 1 は検索画面である。方言と標準語両方からも検索可能であり、表記方法や品詞、意味領域、地域、系統などで絞って検索することができる。正規表現を使って検索することもでき、特定の文字列だけではなく、例えば音節構造でも検索可能である。検索結果は csv など、様々な形式で、指定してダウンロード可能である。これはオフラインのときでも閲覧できることを保証する。

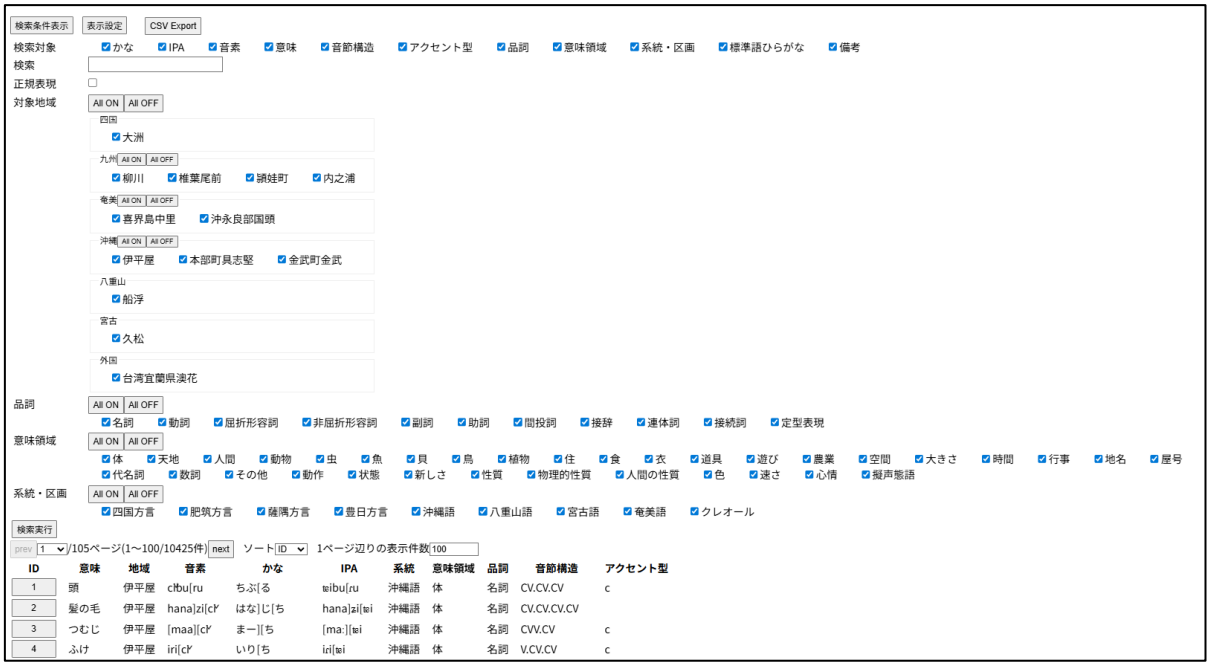


図 1 ODJL の検索画面

[1] 詳細について Carlino (2022、 2024)を参照されたい

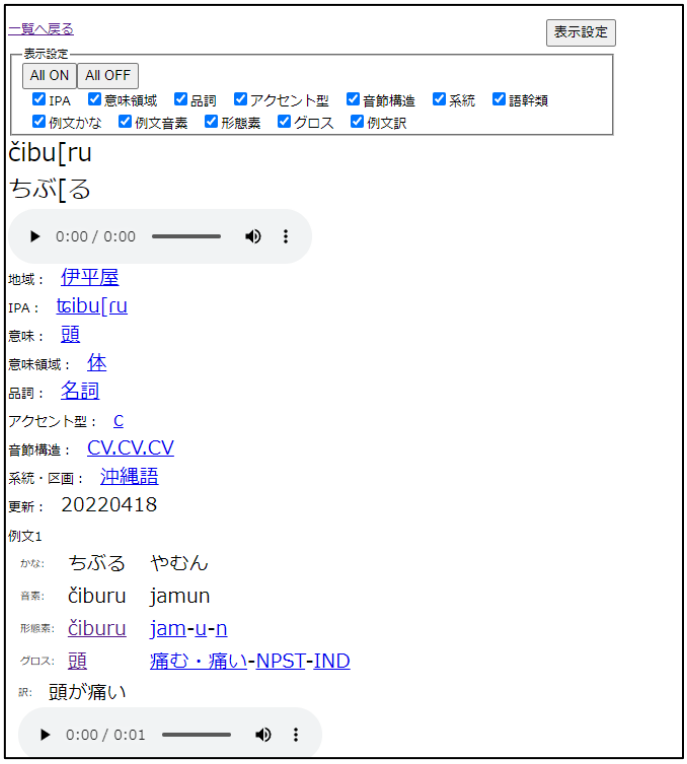


図 2

図 2 は辞書項目の画面である。まず音素表記とカナ表記があり、下には地域、音声表記、標準語訳、品詞、意味領域、アクセント型、音節構造、系統、更新の情報がある。備考欄もあり、補足の説明などを入れることが可能である。表示設定で使用者が不要だと感じる情報を無表示にすることができる。各項目に最大 3 つの例文を載せることができる。例文にはカナ表記、音素表記、グロスが付与されている。グロスをクリックすると、その項目のページに行くことができる。それぞれの辞書項目のページを個別のリンクとしてコピペし、共有できる。語彙、例文に音声を載せることができ、画像や動画の搭載も可能である。

3.2 データの構造と現状

本節ではデータの構造、表記方法などについて説明する。

データを地域、系統・区画、品詞、意味領域で分類する。系統・区画に関しては、琉球諸語を系統分類（ペラール 2013 参照）に基づいて分類しており、本土方言に関しては東條（1954）による方言区画に基づいた分類を採用している。採用している意味領域・品詞は表 1、2 の通りである。

表 1 意味領域一覧

名詞	体	人間	貝	魚	昆虫	動物	時間	地名	宗教
	食	衣服	道具	自然	植物	住居	代名詞	数詞	
	屋号	その他							
動詞	状態	動作							
形容詞	大きさ	新しさ	速さ	人間の性質	物理的性質	他			
副詞	副詞	擬声態語							

表 2 品詞などの一覧

名詞	助詞	接辞
動詞	副詞	接続詞
屈折形容詞	連体詞	定型表現
非屈折形容詞	間投詞	

その他に音節構造、韻律情報、動詞の語幹クラスを登録することができる。表記に関して、音声表記、音素表記、カナ表記で示している。音素表記・カナ表記に関して、データ提供者にできるだけ任せているが、効率よく通言語的検索を行うため、音声表記はある程度の統一を求めている。アクセントを示す記号として、上野(2012)のように、[]を使用してアクセントの上昇・下降を表示している。

その他の情報として、ODJL が収録されているウエブサイトに利用規定、引用の仕方、収録言語・地点に関する情報、データ提供者と連絡先、そして各データ提供者が使用した研究助成情報も載せられている。

ODJL は伊平屋方言のデータで公開されたが、その後多くの研究者に協力いただき、拡大しつつある。最初の段階で報告者が所属していた九州大学の研究者が主なデータ提供者だったが、その後他の機関に所属する研究者や、研究職ではない一般の方にもデータ提供いただいた。執筆の時点の収録地点は 13 であり、収録項目は 10425 語であり、常に拡大中である。

4. 日琉諸語オンライン辞書の今までと今後の課題

本節では今までの、そして今後の課題について述べる。

4.1 誰のため、何のための ODJL

ODJL のようなオンライン資源を作る際、誰を対象にするのか、という問題が出てくる。ODJL は研究者から一般ユーザーまで広い使用者層を想定して構築している。一般使用者には、例えば地元の方言について学びたい人にとって貴重なツールになると願っており、言語の継承に役立てると考えている。研究者には歴史言語学や言語類型論という、複数の方言のデータの比較が必要な

研究にも役に立ちうると考えている。今年で ODJL を公開して 3 年になり、研究者から高く評価されており、そしてメディアで紹介されたことで一般の方からも関心を示された。しかし、一方で、一部の一般ユーザーにとってわかりにくいところがあるという声も聞いているため、解決策について考える必要がある。

4.2 整備に必要な時間と評価の問題

ODJL のような言語資源を作り、運営しようとする際にまず気づくのは、データ整備のために膨大な時間の量が必要であることである。基本的なデータの整備ができたとしても、音声データの整備や、特に例文の整備が特に時間がかかる。そしてこれと関係する問題であるが、時間がかかる割に、研究業績として評価される際、査読を受けた論文ほど評価されないリスクもあり、若手の研究者にとって致命的な問題でもある。

4.3 サーバーと運営者の問題

他のオンラインデータベースと異なり、ODJL の特徴の一つとして、特定の機関のものではなく、現在個人に運営されている点があげられている。サーバーも研究機関ではなく、レンタルサーバーを利用している。このように「自由」である点は、特定の機関の規定に縛られないという強みもあるが、問題もある。まず、レンタルサーバーの料金の問題がある。現在、研究費などを利用し、支払っているが、研究費が使えない状況になったら自腹にならざるを得ない。そして、個人として運営しているということは、運営者が運営できなくなったときの対策を考える必要がある。

4.4 ODJL のこれから

以上で説明したように、これからのことを考える際、課題が多くあるが、対策を考えつつ、今後も ODJL を拡大していく予定であり、データ提供を待っている。眠っているデータを公開したいという方がいれば、いつでもご連絡ください。

謝辞: 日琉諸語オンライン辞書は次の奨励費で開発された:「北琉球沖縄語伊平屋方言の電子辞書の構築」 特別研究員奨励費 20F20003 外国人特別研究員: CARLINO SALVATORE 代表者: 下地理則)。

参考文献

Carlino Salvatore (2022)「「日琉諸語オンライン辞書」の紹介」『日本語の研究』18 巻 3 号、52-59.

Carlino Salvatore (2024)「方言辞書の構築――日琉諸語オンライン辞書作成の経験から――」『方言の研究』10 号、 223-243.

ペラール・トマ（2013）「日本列島の言語の多様性 ： 琉球諸語を中心に 」田窪行則編『琉球列島の言語と文化-その記録と継承』82-92、東京：くろしお出版.

東條操（1954）『国語の方言区画』東京：吉川弘文館.

上野善道（2012）「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16（1）：44-62.

日本語学会2026年度春季大会予稿集
発行日（ウェブ公開日）：2026年4月30日
大会会期：2026年5月23日・24日

大会実行委員

会場校　大田垣仁（大会実行委員長），深澤愛（大会実行副委員長）

大会企画運営委員会　高木千恵（委員長），有田節子（副委員長），矢田勉（副委員長），
大槻知世（委員長補佐），岡田一祐，小川晋史，久保薗愛，小出祥子，佐伯暁子，田村早苗，
堤良一，中﨑崇，中澤光平，永谷直子，森勇太（委員長補佐），山本佐和子，幸松英恵

事務局委員会　川瀬卓（事務局長），富岡宏太，麻子軒

広報委員会　市村太郎，荻野千砂子